
アヴィス・メモリアル

白燕

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アヴィス・メモリアル

【Nコード】

N9409F

【作者名】

白燕

【あらすじ】

ちよつと先の未来。世界で最も人気のあるゲームが存在した。その名は【ヴァルハラ】。参加者全員で戦うバトルロイヤル方式のゲームだ。そこに一人の少年が友人に手を引かれてやって来た事で運命の歯車が動き出した…
そして刻まれ始めた『深淵の記憶』。神影を巡るBUGとツバインの戦いは次第に規模を増し、ネットワークを介して世界中の【ヴァルハラ】へと広まっていく…

第一章 全ての始まり（前書き）

ちよつと先の未来。

世界で最も人気のあるゲームが存在した。その名は【ヴァルハラ】。
参加者全員で戦うバトルロイヤル方式のゲームだ。

そこに一人の少年が友人に手を引かれてやって来た事で運命の歯車
が動き出した…

第一章 全ての始まり

…
沈黙と暗闇。

歓声と陽光。

二つが別れる狭間に、イタ。

揺れる体を持つ、不定形の生物それは現と虚の境目の世界で見ている。『ゲーム世界【ヴァルハラ】』から

そして、ソレは全ての参加者を見つめながら新たな人間を見ていた。…「もの言わぬソレは黙って見つめる。そして、ひっそりと姿を消した…「ふわああ…寝みい」

一人の少年があくびをしている。見た目は16歳程。黒髪に不揃いな短髪でどことなく温和なタイプではないと感じられる

「言うな。第一、辛いのはキャラ登録が終わるまでだぞ」

相棒と思われる、若干茶色がかった髪を持つ少年が笑う。もう一人と比べるとやや目元は柔らかい感じだ

「るっせーよ。俺は人混みと並ぶのが嫌いなんだよ」

「クツクツク、お前は昔からそうだよ」

愉快そうに笑う

「そっさいや、お前は決めたのかよ。この世界的ゲームのキャラクタ―をよ」

皮肉混じりに黒髪は言う

茶髪は、お？と意外そうに目を開く。黒髪は、あー、と唸って頭を掻く

「そっさいや、ランカーなんだよな。お前」

「ああ。ランキングの入賞者はランカーと言うんだ。そして、俺は『上位ランカー』。世界中で10人しか選ばれないんだぜ？クツクツク」

あー。天狗のような鼻へし折りてえ

…と、茶髪は真面目な顔をして向き直る

「しっかしよ、何でまたやりだすんだ？ほら、今までは『興味ないな』一点だったろ？」

黒髪の少年はぼんやりと空を見上げる。空には巨大な影がある。太陽光を反射するとかなんとか…そういう馬鹿げた仕掛けらしい

「…何となくだよ。気分だ気分」

目の前に並ぶ人々がざわめき始める。

時刻は9:00、会場が開いたらしい

「さあ、お前の新しい世界の始まりだな」

クックククと笑いながら茶髪は列に乗って黒髪を連れていく。そして、ガラスと紅い塗料が乱れる建物に消えていった…ガヤガヤ…ザワザワ…

賑やかなざわめきを感じながら黒髪は施設の端っこに案内される。

『エディットルーム』と掲げられた部屋の前に立たされる

「やつほーい」

いきなり部屋から腕が伸びたまま突っ込んでくる。黒髪は寸前で回避して腕を受け止める

「あぶね…何だテメエ」

「よくぞかわしたな、流石はガルトの友人、なかなか強そうだな」
白衣を着た男はヘラヘラと笑いながら悪びれもせずヘラヘラと身をずらす

「『D』。あんまり手出すなよ、こいつすぐ手が出るからな」

黒髪は茶髪の足を蹴る

「黙れ」

「いつだあああ…！」

キツと睨み付ける

「おお怖い」

ヘラヘラと白衣の男は部屋に手招きする

「エア、来てくれ」

ぷしゅうと情けない音と共に扉が左右に開き、中から

「何か呼んだ？」

金髪少女が…ん？

「ん？…見覚えのないわねえ…新人さん？」

見た目は外人なのだが、完璧に日本人だ。かなり違和感がある

「ああ。ゲームの新規参加だな。止めてすまなかつたな。あっはっはっ」

バシバシと背中を叩いてから二人は黒髪たちが来た方角に消えていく。どうもゲームの会場に行つたみたいだ

「クツクツク、災難だつたな」

とりあえずもう一発蹴つておこそう

「ぶぐつ！？」

痛みでうずくまつた相棒を捨てて部屋に入る。ぶしゅうと気の抜ける音と共に扉が左右に開き彼を招き入れる

「さて、目的を果たすか」

部屋へ通じる細い廊下。たった数メートル程度の道を抜ける

その先には円形の部屋。仕切りがされていてわかりにくい空いている場所には椅子のような機械が設置されていた。

暇そうにしていた係員は少年を椅子に案内する。

「こんにちは！君ははじめてかな？」

いかぶしむ目で答える

「…初めてだね。じゃあ椅子に座つて、体を楽にしてね」

「…」

「それじゃ、機械が降りてきたら頭の中に自分の姿を描いてね、服とかは好きなのでいいよ」

ガコン、と機械が降りてきて視界が黒く閉ざされる。少年は言われた通りに自分の姿を描く。

黒髪に不揃いな短髪、黒い眼に荒々しさを映し出す

すう…と意識が遠のいた「…」

塗り潰したような闇の中に自分の体が浮かび上がる。次は服だ。頭の中に服を思い浮かべる…質感や材質を細かに描き出す

黒くて薄いシャツ、そしてその上に蒼碧のコート、ロングだ。襟元に白いラインを一筋入れてアクセントにする。下にはロングの…ジーンズのような形の物を描く。材質は軽く、そして柔らかいものを…

そうこうしていると暗闇に文字が浮かび上がる

『名前は？』

少年は頭の中にくっつかの候補を出す。

「クロア…俺はクロアだ！」

暗闇に一筋の光が差し込む

その一瞬、誰かに見られた気がした

振り返っても誰もいない

勘違いか？とも思い少年…クロアは光に足を向ける。光源に指を乗せると周囲の闇が晴れて意識が戻るのを感じる

イタ

黒く閉ざされる世界の片隅に見つめる不定形の生物がいた。

一人の少年が『この世界に』生まれるのを見て震える。それが何なのかは分からないようだが、揺れる

「…」闇が晴れるのを感じてソレはユラユラとデータの海に身を逃がす。

光に消えていく一人の少年を見つめながら最後に一つ大きく揺れる
それ以後には何も残らなかった

ガコン！と機械が外れる

クロアは照明に思わず目を細める

「お疲れさまでした」

係員は愛想よくカードを差し出してくる。名前の部分に『クロア』と書かれた、蒼碧のコートを着たキャラクターのカードだ

「それはゲームを行なう為に必要なカードです。中に様々なデータが入っていますのでなくさないようにお願いします」

そう注意されて不機嫌に当たり前だと答える

立ち上がり、円形の部屋を横切って短い廊下を抜ける。情けない音の扉を抜けて足早に広めの通路に出る

「おう、早いな」

壁を背もたれにして待っていた相棒が声をかけてくる

クロアは、だろ？と薄く笑ってカードを見せる

「『クロア』…か、女みたいだな」

足を蹴る。

「ぐうっ…またか」

クロアは不機嫌に言う

「少しは黙ってる」

茶髪は仕方ないな、と渋々頷いて黙ることにする。数秒だけだが

「ところで、準備はいいのか？」

クロアは何が？と聞く。まあ当然だ

「記念すべき第一試合。予約したぞ」

はあ？

クロアは啞然として口を開く。そして、いつの間にか試合を登録しているこの相棒にため息を一つ吐き出す

「ったく…めんどくせえ」

クロアは相棒に会場を聞く。とりあえず試合がどんなものかは興味があるので参加する事を告げる

「面白いぞ。一度やればルールなんて覚えるからな」

茶髪の相棒はクッククックと笑いながら歩き始める。広めの通路を抜けて、人々の叫び声のする方へと足を進めていく。時間はほんの数分、あつという間に大歓声が二人を飲み込んだ

「さあっ、選手の入場だああ！」

ヘッドマイクを付けた司会らしき男性が声を張り上げる。…どうやらクロアの出る試合よりも一つ前らしい

「さあ！今宵の戦いを制するのは誰か！？いざ行かん！神々の加護あれ！」

参加者達の背面に位置する巨大なモニターが起動する。最初は薄暗く光りすぐに灰色の都会を映し出す。

画面の右上に『エリア：シテイ』と表示されておりその下に参加者の顔写真のついた矢印が出ている簡易マップ、そして参加者の顔写真とキャラクター名が書かれた一覧表が現れる。それは名前を表示するにしては不自然に大きかった

「おっ、エアリアル参加してるな」

茶髪の相棒はネームプレートを見ながら手で上からの光を遮りながら意外そうに呟く

「エアリアル？誰だ？」

クロアが聞く。その質問に相棒はクツクツと笑って鼻を伸ばしつつ説明する

「『俺と同じ』 上級ランカーの一人で多数の武装を使いこなす女だ。つてかさつき会ったよな」

あの金髪の、と言われてクロアはなるほどと頷く。エアってのは愛称か

ああ、と頷かれてクロアは画面をジッと見つめる。そんな矢先に一人のネームプレートが黒っぽく変化する。

「『レイティア』、ゲームオーバー」

一人の機械が外れて小さな女の子が残念そうに立ち上がる

数百人はいるかと思われる観客から労いの言葉なぐさがかけてられて恥ずかしそうに高くなったステージから裏に入っていく。どうやら退場路になっているらしい

クロアが後ろ姿を眺めていると大歓声が沸き上がった。驚いて見てみるとモニターの映像が切り替わって一人の人物を映していた。ピンクの服にやや薄い色のもここのフリルをくっつけた金髪少女が静かに立っていた。

きゃーきゃーと主に女性陣からの黄色い悲鳴が上がり、その名が叫

ばれる

「エアさまー！」
と。

「クツクツク、相変わらずだな…羨ましいねえ…エア」

相棒が一人ぐちたエアリアルは人気の薄い街中でただ一人佇んでいた。意識を集中すると微かに感じる殺気を感じながら

「出てきたらあ？分かってるわよ？」
そう叫ぶ。

だが彼女を狙う人物：もしくは人物達は動かない。彼女はこのゲーム『ヴァルハラ』において世界中で6位の実力を持つ。不意打ちでもしなければ敵かなわないと思っっているのだろうか？

彼女は自らの胸に小さく吐息を漏らした

「来ないならばこっちから行くわよー」

とりあえず最終警告。敵は動かない

彼女はスツと空を掴むようにして空間からカードを取り出す。

このゲームにおける基本攻撃は二種類ある。一つは武器や素手による打撃攻撃、もう一つは

「炎符『焼け落ちる楼閣』」

呪符と呼ばれるカードによる特殊攻撃だ。大画面モニターを見てクロアが驚きの声を上げる。エアリアルの持ったカードが燃え上がったと思ったら突然周囲の建物が炎を上げて大火災が起こったのだ。

その規模は凄まじく、瞬く間に隣のビルに火を移して行く

「クツクツク、やるな…あぶり出す気か」

「スゲーな。最近のゲームは」

燃え上がるビルから何人もの人が飛び降りてくる。何人かは空中で粒子に変わり、『こちら側』に帰還してくる。

「おおっと！エアリアルの呪符で待ち伏せ部隊は壊滅状態だ！」

黄色い悲鳴と何人かのうめくような落胆の音が交錯する。そして、黄色い悲鳴の集団は次の瞬間に歓声を上げる。

ゲーム世界でエアリアルは自らを襲った剣をひらりとかわして次の

カードを構えていたのだ。素早く名前が叫ばれる
エアリアルは自らの武器を封じたカードを解き放って武装を手にす
る。

「炎剣『フランメリーゼ』」
燃え盛る刀身を持った、豪華な細剣^{レイピア}。柄飾りにはまるで十字のよう
な意匠を凝らしてある。

それを一振りしてから彼女は静かに目の前で剣を振り上げる男に目
を合わせる

「っ…！」
威圧された男は咄嗟に後ろに飛び退いて間合いを開く。エアリアル
はそれを見送ると自分の脇を通して細剣を後ろに突き出す

「ぐっ!?!」

と後ろから羽交い締めにしようとしていた男を貫く。…だが死には
しない。何故ならば細剣には殺傷力は低いから。

痛みにはやや表情を変えながら男は引き下がる。まるで何かに警戒す
るように彼女を見ながら

「うーん。『これ』だとちょっと厳しいなあ」

エアリアルは意地悪な笑みを浮かべて男達を脅かせる。男達はビク
ツと武器を持ち直して、悲鳴に近い叫びを上げる。

彼女は三度空中からカードを抜き出して天へと放る^{ほう}

「貫け」

…一瞬だけこの世界に光が走ったように見えた。そして、その一瞬
後には物陰にいた者達すらも次々と姿を崩して倒れる「…今、なに
が？」

モニターを見ていたクロアが驚きながら次々とリタイアしてきた人
々を見る。エアリアルが何をするにも悲鳴を上げていた人々も一瞬
だけ我を忘れたように立ちすくんでいた。

茶髪さえも驚いたようにしていたが、彼だけはいち早く正気を取り
戻した。

「ありや装具だな。読んで字の如く、武器や防具の類いだ。だが…」

ふむ…と考え込む

「あいつならば瞬殺しなくとも勝てたはずだが…」

その呟きは歓声に掻き消された。ようやく正気を取り戻した人々がエアリアル勝利を歓迎する。

ガコン！と機械から放たれた少女は笑いながら手を振って歓声に答える。やや余裕を浮かべた顔にクロアは僅かな違和感を覚える。

しかし、本当に些細なもので本人もすぐに忘れてしまう。

そんなクロアに茶髪の相棒が声をかける

「次は俺らの番だ。行くぞ」

「ああ。楽しみだな」

クロアは小さく笑って相棒の背中を追う。相棒は舞台の入り口にあたる場所で係員にキラクターカードを見せる。係員はそれを受け取って機械に突き刺して何かのデータを読み取る

「認証しました。【ガルト】さんは8番席にお願いします」

受け取って先に行く相棒に習ってクロアもカードを渡す

「認証しました。【クロア】さんは2番席にお願いします」

薄緑の制服を着た係員はカードを返す

クロアは急いで舞台へ続く暗い階段を登る

「さあ！選手入場だああああ！！」

興奮冷めやらぬ司会がマイクを片手に吠える。クロア達よりも先に入場した人物達は自分の席の前で観客にアピールをしている。クロアが舞台に足をかけると大歓声が襲いかかった。

頑張れよ！、運がないな！、逃げといた方がいい！等非常に多種多様だ

「さあ、座って。」

司会が促して参加者は椅子に座る。全部で10の椅子には二つの空席があった

「いざ行かん！君たちに神の加護あれ！」

椅子に座り、司会が声を張り上げた途端にガチャガチャと椅子の内

部が動き出して頭部を覆うように何か降りてくる。腕も押さえられて重くなる。

暗闇に閉ざされた視界に光が横切る。急激に世界が広がって自分の体を組み換える。服は蒼碧のコートに、名前はクロアに変わる。

彼は期待に胸を膨らませて『この世界』^{ヴァルハラ}に足を踏み出した…

第一章 全ての始まり（後書き）

あとがき

始めまして（の人達ばかりですよね（^^;）白燕です。

あとがきは苦手なのですぐに終わります。むしろ（ページが余ったらある）おまげがメインです。キャラ紹介とか。

よくこの使い方がわからないので今は手探りしながらですからルビなんかがおかしい場合教えてもらえれば対処したいと思います

さて、僕は携帯から書いているわけですが…感情が出やすいので普段から百面相してます。学校でも、家でも、電車のホームでも百面相…

我ながらめっちゃ怪しいなあ…

クロアのセリフなんか書くととき悪顔だもんなあ…

…

•

二話以降はもっとバトルが多くなりますよ〜

では、また次回お会いしましょう（ノシ

第二章 運命の胎動（前書き）

ゲームファンタジー第二話！

ファンタジー好きは入りやす…くない！（ナニ

いよいよ始まる物語、どうぞお楽しみ下さい！

本作品には過剰な作者の混沌が現れています。主に文章とかに。

2 連載機能の使い方がようやくわかりましたので編集しました。
中身は第二話と同じです。

第二章 運命の胎動

全てが構成される。

クロアは世界が完成するのを待つ。それも大した時間にはならなかった。

世界が完成すると同時に画面右上に『エリア：平原』と表示される。周囲には起伏の乏しい草の大地、なるほど『平原』だ。

「…」

どうすりゃいいんだ？

彼は何も知らないことに気が付いてやや衝撃を受ける。武器とか無いのも痛い

「茶髪、出てきな！」

しんと静かな平原に虚しく声だけが響く。

…と、いきなり後ろの草むらが揺れてクロアは振り返る。その人物はそのままクロアを押し倒した。クロアが地面に倒れる寸前に銀色の物体が額を掠める

「いつて！」

ドサリと倒れたクロアは殴りかかろうと自分の上にいる人物を睨み付ける。と

「よう、狙われてんぞ」

灰色のＴシャツにやや色の濃い長いズボンを穿いた茶髪がそこにいた。

「てめえ…」

「ストップ、とりあえず逃げるぞ」

茶髪は中腰で草むらから顔を出さないようにして警戒する。

「なあ相棒、どうしてここにいてわかつたんだ？」

その質問に茶髪の相棒は鼻で笑う

「そりゃ、こんな場所ですつ立ってりゃ丸見えだ。おまけに全員お前を狙ってやがる」

警戒するように周囲を見ながら相棒は虚空に手を伸ばす。

引き出された時、手には一枚のカードが握られていた。彼はその武器の名を囁くように呟いて解き放つ

「『竜の尾』」

大気中の水分が彼の手元に収束して、押し固められて剣に変わる。幅の広い簡素な片刃剣の腹には竜の紋様が刻まれている。

そして彼はクロアに近くに来るように促す

「突破するぞ、それから…」

茶髪は剣を膝下に構える

「俺は『ガルト』だ。茶髪じゃねえ！」

薙払った瞬間、水の波が平原に出現した。

茶髪：もといガルトはその波の後ろを走り出す。波は止まること無く津波のように陸地を濡らして突き進む。

草むらに隠れていた数人が逃げ出して開いた脱出口を身を潜めながら素早く抜ける

「ちっ」

ガルトは草むらから上空を斬り払う。ガガガツと草むらに銀色の金属がついた木の棒が突き刺さる。…どう見ても矢だ

「もう体勢を建て直したか、やるな」

そう相棒は楽しそうに呟く。そして再び虚空からカードを抜いて発動する

「水呪『水蛇』」
みずへび

剣の先端からよろりと細長い水が飛び出して空中をどこかに飛び去る

「引きが悪いな…時間稼ぎしか出来ないな」
ガルトは走り出す。

クロアもぬかるんだ足元で滑らないように気を付けながら後を追う数分間は銀色の軌跡が目に入ったがそれもすぐに見えなくなった。どうやら逃げ切れたらしい

「ふう…訓練には向いてない場所だな…」

ガルトは乾いた岩に腰かけて笑う。クロアもそうだな、と同調して荒くなつた息を整える

そんなのを見ながらガルトはクロアに話しかける。

「お前、武器の出し方はわかるか？」

知らない。と簡潔に答える「だからあんなアホみたいに立ってたのか……」

蹴りをいれる。

見事にスニーカーの角でクリティカルしてガルトはうずくまって唸る

「いつてえええ！」

いい加減にうつとうしいので先程までガルトが座っていた岩に腰かけて蹴り飛ばす。

「てめえ…覚えてるよ？」

「うつとうしい。話進めろ」

かなり高圧的に睨み付ける。ガルトはブツブツと文句を言いながらも話し始めた

「武器はこの『装具』のカードに収まっている」

そう言つて彼は虚空から一枚抜き出して見せる。

「武器には個々に名前があつて手持ちのカードから名前を呼んで解放するんだ」

彼は先ほどの剣を見せつける。じっくりと見れば青竜刀と似た形なのに気が付いた

「そう。武器には持ち主のイメージが反映されて、それに応じて名前が刻まれる。人によつてできる武器は無限にあるわけだな」

うんうんと頷いて途方もない技術に感心しているガルトを現実に戻す

「カードの取り出し方は簡単だ。『空中に置かれた手札に手を伸ばす』ってなイメージで掴めば良い」

クロアはスツと空中に手を伸ばす…。手は確かに何かを掴む

「そんな感じだな。流石は俺の見込んだ奴だ」

ガルトは立ち上がる。草の上から顔を出してクロアに伏せると呟く

ぶおん、と轟音をたてて頭上を巨大な何かが通過する

「囲まれた。何でもいいからカードを使え！」

ガルトは虚空から三枚のカードを取り出して投げる。三枚は水を出して互いを繋ぎ止める

「水術『白蛇の猛進』はくだのもっしん」

三枚の呪符が巨大な蛇の姿に変わる。真っ白な体に赤い目はとても際だって見えた。

「押し潰せ！白蛇！」

シャー、と舌を伸ばして蛇は主人の命令に答える。巨体を身軽に動かしてここからは見えない敵を駆逐していく

「手札：こいつ！」

クロアも虚空に手を伸ばして掴みとる

「装具『長剣』！」

白い光がカードから放たれて手にズシリと重みを感じられる。光が消えたとき、クロアの手には1メートル50センチ強の剣が握られていた。

重力に引かれた瞬間に思わず両手で持ち直す。とても重い！

「クロア、一つだけ言う」

ガルトは白蛇を操りながら声をかける

「このゲームはイメージが最大の武器だ。常に思考を止めるなよ！」

それから死ぬんじゃないかねえ、と言われてクロアは小さく笑う。

「一つじゃねえよ」

そして草むらを走り出す。

敵の場所は白蛇が暴れているので推測出来る。

人は目の前に巨大なものがいたらすぐとなりにいる小さなものは視界から消える。例えば象の隣に犬を座らせたら人は間違いなく象に目を持っていかれる

だから、あとは白蛇よりも目立たないように行動すれば問題ないはずだ

クロアは素早く剣を握り直して奇襲のタイミングを狙う

一瞬だけ攻撃が止んだ。

クロアは剣を背負うようにして立ち上がり一番近くにいた背の高い男に振り下ろす。男は驚いたように目を見開いて手に持った片手剣で攻撃を弾く

「集中攻撃！」

男が叫ぶと草むらから二人が左右からとびかかって来る。二人ともナイフのような武器を逆手に握っている

「水符『海竜の尾』」ガルトの宣言を受けて白蛇がその大きな尻尾でしゃがんだクロアの頭上を薙払う。二人組はどこかにまで飛んでいってしまったが気にしないでおく

クロアは剣を横に構えて一気に距離をつめる。今度は敵も反応してカードを取り出す

「『パライ』」

クロアの長剣と比べるとあまりにも脆弱な剣は触れた途端に剣を跳ね上げる

「斬符『フェドウンラピス』」

重ねられた二枚目の呪符が発動してから空きになったクロアの胴部を狙う

「あぶねっ」

咄嗟に後ろに飛び退いて緊急回避する。若干ぬかるみ始めた地面で滑ったが立て直す

「クロア！避ける！」フツと振り返ると目の前には空を覆うような矢の弾幕が待ち構えていた。

「冗談キツイぜ」

矢が雨霰とクロアの周囲数メートルをビッシリと縫い付けた…ガコン！

「クロア、ゲームオーバー！」

機械が外れるのと同時に意識が現実引き戻される。会場にいる人々の喧騒が耳に痛いくらいに鋭く突き刺さった
クロアは他の椅子を見る。

参加者は残り6名、ガルトはまだ善戦しているようだ…

「5対1じゃ勝ち目はないな」

冷静になって自身を振り返る。物珍しさに興奮していたのかもしれない先程までのテンションに笑う

「ははは…馬鹿だな、俺は」

クロアはキャラクターカードを取り出して自分の姿に呟く

「冷静さ、気を付けるぜ」

小さく呟いた一秒後

ガコガコガコン！と騒々しく機械から人が4人吐き出される。その中にガルトはいない

「流石はガルト！奇跡の大逆転だああ！」

司会の煽りに観客は色めき立つ

ガコン！と最後に吐き出されたガルトは、危なかったと言いつつも余裕そうに手を振っている。あの人数差を覆すなんて化物なのだろうか？

「勝っちゃったぜ、実力があると辛いねえ」

クロアはやや驚きながら余裕な相棒を見つめる。何があったのかモニターを見ていなかったのは失敗だったかもしれない

クロアは自分に呆れてため息をつく

本当に今日の俺はおかしいな…、そう思いながら椅子から立ち上がってガルトの肩を叩く

「お前も初戦にしちやうまかったじゃねえか。次も頑張ろうな」

「…だな、次は勝つぜ」

二人は先に退場した四人組を追うように舞台裏に消えて行った。次の試合のコールがかかり場内がザワザワとしはじめた…

ボコリ…とゲーム世界に黒い泡が現れた

暗い階段を降りる。舞台裏は配線が見えており表側の賑やかさとは別だ。

クロアはそんな所には目もくれずにサクサク進んで再び会場の観覧

部分に到着する

どうやら次の試合はスタートしているようだ。モニターには『エリア：平原』と書かれており10人の矢印が右往左往している

「連続フィールドか、珍しいな」

「そうなのか？」

「ああ、フィールドは大量にあるからな、連続して同じエリアは中々出ないんだ」

ほう…と感心しつつモニターを眺める

誰も見えない。隠れているから当然なのだが…面白くない

「クツクツク、平原が嫌われる理由の一つだな。活躍が見れないもんな」

相棒から愉快そうに笑いが漏れるほう…とクロアは納得して再び画面に見いる。とその時

「待って！」

金髪が真後ろから叫んでいた

「リセットして！早く！」

エアリアル呼びなど誰も聞かない、聞いてない。彼女は次の行動に移ろうと走り出す

「待てよ」

クロアが呼び止める

「何かあるのか？」

彼女は答えない、だが否定もしなかった

「…はやく、しないと」

そう呟いて走り出す。その時、凄まじい雑音が会場を貫いた。

「なんだ？」

振り返るとモニターが黒くなっていた。電源でも落ちているのだからか

ザワザワと皆落ち着かないように囁きあう。ガルトも眉をしかめて何事かと考えている

「あー、配線トラブルです。復旧までお待ちください」

司会が申し訳なさそうに告げる。なるほどと全員納得、していなかった。「また回線だつてさ」

「またかよ、何回目だ?」「最近多いよな」

「噂じゃ変なモンスターが出るらしいよ」

「いや、おぼけだろ」

「いやいや、妖精だつてさ」

「新しい仕様変更じゃない?」

賑やかに憶測が飛び交う

「仕様変更か…」

ガルトはポツリと呟く。どことなく期待した響きがあるやはりベテランは飽きてくるのだろうか?

クロアもちよつとだけ眉をしかめる

「…ん?」

ザワザワとした呟きが変わっているのに気付く。何故かスタッフが集まっている

「砂嵐の影響です。ちよつと通して下さい」

一人が参加者を背負っており、もう一人が道を開けるように叫ぶ。

背負われている参加者はぐったりとしており精気がない

「…」

押し黙った無音が次第に侵食を始め、そしてスタッフが見えなくなつた途端に叫びに変わる

ガガガガガツと同時に吐き出された残りの参加者を舞台裏で控えていたスタッフが支える。観客は叫びとも悲鳴ともつかない声を上げて逃げていく。残つたのはたったの数十人

「…ありえねえ」

クロアの呟きは正常か、はたまた異常かは誰にもわからない。困惑と戦慄が会場を支配する

バタバタと舞台が騒がしくなる。司会がマイクを片手に放送する「只今から緊急サーバーメンテナンスに入ります。試合のご予約の方は受付までお越しください」

虚しく響く

「…行こう、エントランスで店でも見よう」

相棒の言葉に静かに賛同する

二人は閑散とした会場に背を向けて、入り口に向かって歩き始めた

…

第二章 運命の胎動（後書き）

あとがき

変換ミスで「あとがま」になりかけましたシロツバです。お久しぶりです。

こんな形で連載するのかな？毎回いろいろ選択してるけど…うーん

さて、前回はあいさつで終わったので近況を一つ…

まわりからインフルエンザが出始めました！！

みなさんも気を付けて下さいね、今年はタミフル効かないのが多いようですし。

一体どうやって耐性を得るんでしょうね？

そして、あんなミクロ単位の生物は普段何を考えてるんでしょうかと、科学選択者が考えてみる

生命の神秘ですね

では、今回はこのへんで

また次回お会いしましょう！（ ）ノシ

第三章 嫌な奴と黒い泡（前書き）

ゲームファンタジー第三話！

お馴染みの二人と金髪が賑やかにかまします。以上！

…前書きって何書けば良いのかわからないなあ

作者の混沌を大量に含んでおります。ご注意ください（^^）；

第三章 嫌な奴と黒い泡

両開きの扉を押し開ける。その先にはガラス張りの空間、ロビーやエントランスと言われる場所だ。

「人が多いな、ざつと百人以上だな」

ガルトは賑やかなロビーを見てやや驚きの眩きを漏らす。予想に反して会場に残った人は多かったようでクロアは適当に相づちをうちながらぐるりと辺りを見回す

「そっいや、店ってなんだ？」

クロアは聞く。

「店はあそこだ。あの人だかりの場所」

確かにザワザワと人が多い場所がある。なるほど店か…

クロアは店の前まで行き品物を眺める。

「ブランドカード1000¥」

「氷結陣¥300」

「治癒の霊壁¥800」

などと書かれたポップと様々なグッズが置かれている。カードデザイン座布団（¥8000）なんて買う奴はいるのだろうか？

「おう、あれは家に山積みしてあるぜ」

買う奴はすぐそばに居やがった。

「…さようなら」

「まてまてまて！何だよその哀れみの目は！」

「ハッ」

「鼻で笑うな！」

ガヤガヤと騒いでいると、一人の少年がこちらに向かって歩いてくる

「うるさいよ、君たち」

歳は14ほど、クロア達より2つは下の少年はいかにもキザっただしく告げる

「君たちのせいで迷惑しているんだ、黙りたまえ」

髪は白：よりはクリーム色に近い。服は上下ともに白く風貌はどこの御曹司のようだ

「何だ？てめえ」

「やめとけ、クロア」

掴みかかろうとしたとき後ろからガルトが腕を掴んで制止する

「ルイエスか、悪いことをしたな」

ガルトが素直に謝罪する

「ガルトか：わかったのなら構わないよ。それと」

そちらの君、僕を知らないのかい？

ルイエスはあからさまにバカにした顔でクロアに告げる。ムカツとして言い返そうとすると

「僕はルイエス。世界一の王ルイの名を持つものだ」

「処刑されてしまえ」

パリツと空気が凍る

「何だつて？君」

あくまで平静を装ったルイエスは高圧的に告げる。声が動揺してるぞ

「ルイ国王は処刑された者が多い、それに世界一なんて何を基準にしたんだ？」

さあつ…と全員が青くなり耐えきれなかった何人かは建物から逃げ出した。

「ほう…そうか」

声が震えている

「我が名を侮辱した罪、その身で償わせてやる！試合にエントリースる！」

烈火の如く怒り狂ったルイエスにクロアは受けてやる！と叫ぶ

ガルトは、やっぱりか：と言わんばかりに頭を抑えてため息を一つ

「黙りなさい！」

全てを静止させる叱責が貫く

「ルイエス！またあなたなの？」

いつかの金髪が会場入口から叫んでいた。どこことなく疲れているよ

うに見える

「エアリアルか…ふんっ」

ソップを向いて生意気なガキは高慢に呟く

「あいつに感謝したまえよ、君」

「ンだとコラア！」

「だからやめるクロア！」

スタスタと去っていくルイエスを殴ろうと暴れるクロアを茶髪の相棒は羽交い締めにして押さえる。

少し時間をおいて、ガルトは相棒がおとなしくなったのを確認してから放す

「ガルト、なんで殴らせなかった」

小さく聞こえた

「あいつはやめとけ」

「…うん、やめなさあい」

いつの間にか回り込んだエアリアルはクロアの頭を指ではじく

「なにすんだよ！」

「だからっ」

クロアの足元を掬うように足を動かす。それでバランスを崩した彼はその場に倒れてしまう

「やめなさい？ねっ」

殺気。

「…ああ、わかった」

頷いたクロアは自分が冷や汗をかいていたことに気付く

(…まさか、あれだけで？)

体が戦慄するのを感じる。明らかかな差、明確すぎる経験の差、クロアは唾を飲み込んで気を静まらせる

「…なあ」

二人は振り返る

「エアリアル、お前を越えられるほどに俺は強くなれるか？」

二人は沈黙する。そして

「…できるわよ、あなたに覚悟と意思があれば、『ヴァルハラ』は答えてくれる」

「そうだな。俺は強くなると思うぜ、なにせ本人を前に妥当宣言するよな奴だしな」二人は笑う

クスクス、クツクツと愉快そうに…

ひとしきり笑うとエアリアルが会場を見てくると言い出した。なんでもそろそろメンテナンスが終わるらしい

「ほおー、なら一番試合予約しといてくれ。三人分な」

ガルトがひらひらと手を振りながら呟く。三人分だと？

「俺、エア、お前。完璧だろ」

「待てよ」

クロアが反論する

「…俺がいても足を引つ張るだけだろ」

珍しく遠慮している黒髪の相棒にガルトは笑いながら肩を叩く

「ああ。でも俺らだけだと勝っちまうだろ、だから足を引つ張れ。

それくらいスリルがないとつまんねえよ」

クロアはわずかに視線を下げて何かを考える仕草をする。そして、

ククク…と笑って告げる

「ああ、存分にかけてやるよ！相棒！」

ふっ、とガルトが笑った時に会場入口が開いて金髪が顔を出す

「終わったよおー、ってガルトん何笑ってるの？」

「うっせー」

そんな会話をクロアは聞き逃さなかった

「…ガルト…たん？」

二人はハツとする

「…」

「…」

二人で顔を見合わせて何かを考えているらしい

「あれだ」

「あれよ」

『マブダチっ!』

スタスタスタ、ガシッ

「黙れてめえら!」

二人の顔を掴んで廊下に叩きつける。ミシッと音を立てて硬い廊下にひびが入った

「いつてー!」

「痛いよお……」

「うるせえよ」

二人を置いて行くことに決めてクロアはさっさと会場に消える

「……まったく、油断すんなよエア」

「うう……ごめんねガルたん」

気にすんな、とガルトは手をヒラヒラさせる。

「まったく、すぐに愛称つけるクセ、いい加減なおせよ……」

「うん、気をつける……ガルた……けぶん……ガルト」

やれやれ、とガルトは項垂れる

「前途多難だな」

そんな呟きを漏らしながら会場へと入って行った……

『クロア』、認証しました。7番席にお願いします」

スタッフにカードを渡して席を確認する

クロアは薄暗い階段を上がりながら珍しく襲いかかる緊張にさいなまれていた。

(……まったく、俺はどうしちゃったんだ?)

どうにも変だ。第一試合の時から調子がおかしい……、俺ってこんなにガキだったか?

歓声に体が包まれる。始まるのに気付いた数十人の観客が最前列に集結してバタバタしている。そして自分の対戦相手を見て

「なんだ、君か」

愕然とした。

「ルイ……エス」

「おや、君みたいな愚者でも僕の名を覚えていたか……凄すぎる僕の

罪だね」

相変わらずの自己陶醉っぷりにクロアは呆れる

「寝ぼけんじゃねえ。罪はお前の頭の悪さだけだ」

観客が何人か吹き出すような音を立てる

「何だつて？」

明らかに平静では無くなったのを感じる

クロアはさらに挑発する

「訂正だ、悪いのは頭だけじゃ無いようだな。名前のセンスと性格の悪さを追加しておけ」

「…ふふふ、覚悟しなよ？この試合でお前を殺してやる！殺して殺して、無様に這いつくばらせてやる！」

完璧にキレた。

「おい、クロア！」

舞台上に満ちた異様な殺意に気付いた二人は驚いて参加者を見渡す。

クロア以外は…

「全員、ルイエスの部下よね」

エアリアルは驚きを通り越して頭がぐしゃぐしゃになる。この状況はまずい

「さあ！座つて！」

司会が準備を促す。どうやら時間はなさそうだ

「エアリアル、これはちよつとスリルありすぎるな」「クスクス、そうねえ」

そわそわとエアリアルは目を走らせる

「ちよつと危ないかも」

ガルトが、そうだなと頷いて答え、二人は機械に座る

カシヤンと機械が動いて体を固定する。脳内の電気情報を取り出す為だ。両腕も固定されて次いで足も固定される。見た目は箱型の鎧に近い

「君たちに神の加護あれ！」

意識が薄れていく…

世界の中に自分だけが浮かび上がる。

クロアは一人だけで虚空に佇んでいた。世界の部品がが下から上に飛んでいき、上から順に構成されていく

その隙間に何やら黒い泡が浮かんでいるのを見る。何故だかソレと目が合った気がして…

次の瞬間にはクロアは廃墟と化した建物にいた。割れたガラスが散乱しており迂濶に歩くと危ない

「エリア：廃棄施設…か」

クロアは蒼碧のロングコートを軽くはたいて埃を払う。すごく空気が悪いのだ

「ごほっ、早く合流したほうがいいな」

クロアは自身の頭に浮かんでくる画面を操作して空間からカードを取り出す。

「トークカード、か」

連絡する二人を思い浮かべる。カードに二人の顔が浮かび上がり通信が始まる

「どうしたの？」

「どうした？」

走っているようで二人の背景は速く流れている。クロアは今わかるだいたい位置を伝える

「ちっ、反対側だな」

「あっ、私近いよお」

二人は熟知しているのかすぐに理解する。その知識にクロアは驚く「やばっ、ルイエスが先に行った！」

驚きを更なる驚きが上塗りする

走るエアリアルよりも近くにあのガキがいるらしい

「逃げるクロア！時間さえあれば俺も加勢できる」

撤退を指示するガルトを半ば無視してクロアは手札から装具を引く。武装は本当に限られているがイメージ次第では勝つことも出来る

「装具『長剣』」

あんな奴に負けてたまるか、逃げてたまるか。俺は勝つ！
広い部屋に純白の服の人物が飛び込んでくる。クリーム色に近い髪
のガキは素早く黒い武器を抜いて攻撃する。

パンパンパンという破裂音。小さな弾丸は披弾寸前に回避したクロ
アの頬と服を薄く裂く

「おやおや、よけるかい」

「止まって見えるぜ？ガキが」

挑発する。人は理性を失えば失うほどに最短距離の攻撃をするよう
になる。まあ銃相手に意味があるかは疑問なんだが

「ほら、来いよ。処刑してやろうか？」

あー、今キレたな。とてもわかりやすくて実に楽しいな

「撃ち殺せ『レベッカ』」

空間からカードが現れ、銃を解放する。その小ぶりの銃身は黒く
かにも拳銃。といったところだ

「銃弾『炸裂弾』」

金色に輝く銃弾がレベッカの中に飛び込む。あれがこのゲームの弾
丸装填方法なんだろう、とクロアは納得して長い剣を握りなおす。
破裂音と共に飛び出した弾丸の位置を目測で計算する。

あと10メートル、9、8

体勢を低くして微調整する

6、5、4

3、2…

「そこだ！」

「そこだ！」

向かい合う二人の声綺麗に重なる

クロアの剣は弾丸に触れ、弾丸は触れた途端に再度破裂して散弾を
撒き散らす

「っ！」

細かい十程度の散弾から身を守る。せいぜい急所を庇っただけだが…

びびびつ、と体に小さな鉄片が突き刺さる

「痛えな…」

腕や足に刺さったものを気にしながらクロアは不機嫌に唸る

「炸裂したか…間合いが足りないな」

剣を降ろして右腕に刺さったものを抜く。元の数が少なかったからか被害は少なかったのは幸運だった

「まだまだ行くよ」

嫌味に宣言してから奴は引き金を引いた。三発の弾丸の輝きを見てクロアは咄嗟に剣を地面に突き立てて遮蔽物しゃへいぶつにする

再び炸裂した弾丸から三十余りの散弾が吐き出されて剣の反対側で弾かれる小気味良い音が聞こえる

「なんだって？」

すでに散弾への対策を立てたのが意外だったのかルイエスは一瞬だけ引き金を引くのを躊躇し、クロアはその一瞬で反撃に転じた

「くらええええ！」

全力で引き抜いたばかりの剣を振り上げる。ルイエスは我にかえり呪符を使用する

「防壁『フォトンバリア』」

剣が突然現れた黄緑色の半球体に阻まれる。不思議な力場で押し返されそうになるのを力づくで抵抗する

「…っ」

剣ごと飛ばされてしまう。

着地して地面を反動で滑る。あのバリアを突破するのは少々厄介だ、なんとか弱めるだけでも…と思っっていると

「…これは？」

ポコポコとクロアの周囲を黒い泡が漂い始める。まるで空間から沸き出すように次から次へと現れて互にくっついて大きくなる

「君、小賢しい攪乱兵器ですか？」

やれやれ、下らない。ルイエスが呟くがクロアはまったく身に覚え

がない

ポコポコと大きくなる泡は既に一センチ程度から四十センチ程度に成長している。不思議とその物体からクロアに対しての敵意は感じられなかった。

『クロアに対しては』

銃を持ったルイエスに対してのみ異様な殺意を放ち始めた。それはあまりにも突然、そして

「なっ……」

黒い塊がルイエスを撃ち抜くのも突然だった

ザザザザ…と吐き気がしそうな程に画面が荒れて金色の粒子に変わるルイエスがぼやけて見える

ふるふるとルイエスを撃ち抜いた泡は震える。敵を倒した喜びか、はたまた他の何かか、クロアは背筋に冷たいものを感じる

こいつはヤバイ！

何故だか頭が…いや、本能が警告する

「なんなんだ…コイツは」

黒い泡がふるふると揺れる

思わず両手で剣を構える。それがいけなかった

泡はふるふると震えだし、それが限界にまで達した時、

その中から極彩色の光を放った

「ちっ……」

逃げるにはあまりにも近すぎた。

光はクロアを飲み込み、そして意識を踏み倒し、頭の中をグシャグシャに掻き乱して、それで…それで…

ふっ、と意識が途切れた

第三章 嫌な奴と黒い泡（後書き）

あとがき

今回のお話、楽しんで頂けましたか？

本当はもう少し書きたかったんだけどね…ちょっとキリのいい場所
で切りました。でももう少し行けたかな？とか思ったりなんかしち
やったりする…

まっいいか！（え

はいはい、次の話題話題、

先日、アメ横でクッキーを買ったわけですよ、カナダのやつ

それがもう、甘くて…甘くて（甘党）

メイプルシロップの風味が凄いですよねー、流石はカナダ。ナイ

スだぜ（メイプル好き）

皆さんも機会があればおためしあれ。

カエデの葉っぱ型のサンドクッキーです

さて、今回のあとがきはここまで～

また次回お会いしましょう！（ ）（ノシ

第四章 ツバイン（前書き）

ゲームファンタジー第四話！

主人公の役割が少しずつわかってきましたが、彼はまだやる気はありません。

本当に大丈夫なのか…（自問）

この作品にはやっぱりカオスが含まれております。70%くらい

第四章 ツバイン

…前が見えない

ザワザワと周囲がうるさい、

なのにフィルターがかかったようによく聞き取れない。

彼は機械に座ったままぼんやりとした頭で感じていた。俺は、どうなったんだ？と

「君、大丈夫かい？」

暗闇が取り払われ、機械から引き上げられる。その時、緑色を基調としたスーツのような、またはどこかの礼服のような変な服装が目に入る

(スタッフ…か?)

頭が痛くて深く考えられない

「医務室までお運びします。どうぞ背中に」

「いらねえ…歩いて…いつてやる」

スタッフは目を見開いて驚く

そうですか、と呟いて立ち上がったクロアを見る。足元はふらついてるしどこか覇気が無い。だが

「何だよ…あれ」

手は握りしめられて震えていた

「なんなんだよ！あの泡は！なんで俺等しか残ってねえんだよ！ルイエス達はどこ行った！」

スタッフはエアリアルとガルトの近くで待機していた二人と目配せして、頷く

「…こちらへ」スタッフの明らかに先程までとは違う、重苦しいトーンにクロアはやや面食らう

「ああ、いいぜ」

やや元気がない声でクロアは答える

クロアに應對していたスタッフはさっさと舞台裏へと消える…、少

しくらい待てや

舞台裏に入るとスタッフの壁に向かって何かを押し開けた。カチャン、と鍵が外れる音がしてスタッフは金属製の扉を押し開ける

「どうぞ」

そう言われて中に入る

中はやや暗くなっており、単調な色の壁が続いている

歩く度にカンカンと小さく鳴るといのは床が金属製だということ

… だろうとクロアは頭痛にさいなまれながら考えていた

いくつもの扉を抜けていく。この施設のだいぶ奥に来たときに彼は足を止める

「ここです」

一際分厚い扉を抜ける。その先は巨大な空間が広がっており、その中心には巨大な機械が十メートルほどの天井まで聳そびえていた。その下で働く人々の一人をスタッフが呼ぶ

「…おや？」

だらしなく白衣を着た人物がクロアを見て驚き、そして

「ずいぶん早く来たね」

へらへらと笑いかけた

「お、お前は…」

…

誰だったか思い出せない… はて、最近見たような、そうでもないよ
うな気もする

「… やれやれ、自己紹介か」

別に嫌がっていないように見えた

「私は『D』、開発部の主任と… この『ヴァルハラ』のゲームマスターだ。よろしく」

随分と軽い握手をクロアは見つめる

「やれやれ、握手もわからないのかい？」

へらへらとからかう男の手を全力で引つ張る。その反動で男が壁に頭をぶつけたが知ったこつちゃない

「いたた…なかなかやるねえ」

のんきに頭をさするDはスタッフに下がるように伝える

軽くお辞儀して消えていくスタッフを背にしたクロアにDは、ふう

む…と唸る

「至って平常、やはり予想通りだな」

クロアは頭痛も忘れてこのゲームマスターに喰ってかかる

「何だよ、あの泡は…それに…」

あの光は…。そう言った時、クロアの前に紙が突き出される

「これは機密保持契約、君が関わっているのはシステム側の事柄だ。…つても、上がうるさいだけだな」

機密保持契約

私、——はこの事象について他言しないことを誓約します

「なんだ…こりゃ」

「サインと判子、まあ指で構わんだろうな」どっからか出されたボールペンと朱肉を前にクロアは拒絶しようか迷う

「…ふう、仕方ない。」

君がサインをしないのならばキャラクター『クロア』を削除…していいかな？」

本当は嫌なんだがね、と肩をすくめてはいるが…これは脅迫だ。自分の分身を殺したくなければサインしろ…さもなくば…

「…たく…わかったよ、一目でやめさせられるのも癪だからな」嫌々サインと指判を押す。それをさっさと片付けるDにやや不信感をいだきつつもクロアは待つ

「ふむ…こんなもんか」

面倒な手続きが終わってホッとしたのかDは手近な椅子を引き寄せ
て一つをクロアに向けて投げる

それを片手で受け止めてクロアは腰かける

「ふむ…では」

Dは何から話すか躊躇うような仕草をする

「場所を変えようか」

「たった今契約書を書かして椅子まで出したじゃねえか！」

思わず突っ込む。その時頭がズキリと痛んでヨロリとふらつく

「ヘラヘラ、冗談だよ。中々に面白いな」

こいついつかぶん殴る。

「さて、話を戻そうか」

Dは真剣な顔になり、話を切り出した「君が見たものはこのゲーム
のバグだ。だが、普通のバグではなく人間側に対して非常に攻撃的
だ。そして」

手近な席のパソコン端末を起動してカタカタと操作する。そして中
にあるアプリケーションを起動して見せる

「今の医務室の映像だ。見てみなさい」

そこには一人の男が写っていた。だがそれは

「ガルト…？」

よく見知った人物だった。

だが様子がおかしい、目は虚ろでどこかを見つめている。時折何か
を考えているようだがすぐに頭を抑えて首を横に振っている

「彼もまた君とほぼ同時に襲われた。極彩色の光を浴びて…な」

クロアは違いを考える。

自分が平気で、彼が被害を受けた理由…、

経験の差？レベルの違い？…いや、そんなものじゃないだろう

「ヘラヘラ、その通り。君と彼には大きな違いがある」

Dは再び端末を操作する

そして、見せられた画面にはただひたすらに0と1が表示されていた
「これは全てのデータの大元、二進数のデータだ。これは0と1し

かない」

カチリとマウスをクリックしてある部分の色を反転させて強調する
「君には2がある」それは0と1に属ないさあるない、本来ならばバグとし
か言わない異質なデータ

「この2を持つキャラクターを我々は『ツバイン』と呼んでいる。
君は数少ない異端のキャラクター使いだ」

その言葉に理解できない、と答える

「これは俺に手伝わせるために仕込んだんじゃないのか？それに、
そんな特別なキャラクターならば管理者が奪うかコピーするだろう
？」

クロアの言葉にDは頷く

「確かに、普通のバグならばそうするだろう」

Dは先ほどのボールペンの反対側を突きつける。そして

「君はこのゲームが何によって構成されているか知っているかい？」

クロアは答える

「様々な電気信号とプログラムだろ？」

管理者は首を振る

「それだけではない、ここに『人々のイメージ』を加えなくては完
成できない」

彼は続ける

「強くなりたい、誰かを倒したい、剣を振りたい、他人とは違っ
たのを証明したい。このゲームはそれを読み取って人々のイメージを
具現化する

そして、ツバインもまたイメージの産物。ただ模倣しただけでは何
の意味もなさない」

帆のない船のようだな、とDは評する

クロアはその話をかなりいかぶしんだ顔をして彼に質問する

「なあ、なら聞くが：あの泡について知らないか？なんでもいい」

管理者は一瞬クロアを見つめて、答える

「あれはバグ：我々は『BUG』と呼んでいる。奴等の力は『ブレ

イク』と呼び、人に記憶の混乱や錯乱を引き起こす力を持つ」
君にも理解出来るだろう？と彼は投げ掛ける

「ああ…わかつてるさ」

ギリ…と歯を食いしばる

Dはそんな彼に手を差し出して、聞く

「我々の側につかないか？そうすれば他のツバインとも交流できる」
クロアはその手にゆっくりと手を伸ばし、そして、弾いた。

「俺はこんなことを公表しねえお前等と手を組む気はない！公表するんだつたら仲間になつてやるよ」

Dは愉快そうに笑う。まるで予想通りだと言わんばかりにだ

「そうか、ならば止めるわけには行かないな。君が我々の仲間になるならばいつでも来るといい」

クロアは、ねえよと答えて部屋の出口に向かっていく。Dはそれを見ながらヘラヘラと笑いながら見送る

「D、何ヘラヘラしてるんです？」

後ろからDとよく似た白衣を着た、背の高い女性がたしなめるように言葉を飛ばす

「『T』か、何のようだい？」

Dは椅子の前後を入れ換えて背もたれで腕を組む

「何のようだ？じゃないわ。アナタがツバインを見つけたって聞いて来てみれば…」逃げられてるじゃない、と呆れたように肩を落とす。長い髪がパサリと動きに合わせて音を立てる

「いやいや、順調順調。既に王手チェックをかけたようなものだよ」

ヘラヘラと彼は耳元にかけてあったハンズフリーマイクを引き寄せる
「双子はいるかい？…仕事だよ」

その連絡で、小柄な二人組が部屋に入つて来た

「…おっ」

いくつもの扉を抜けて外に出ると、相棒が待ち構えていた

「ガルト！、もう大丈夫なのか？」

クロアは聞き、ガルトは頷く

「ああ、ちよつとノイズに当てられたただけだ。問題ないさ」
クッククック、とこいつは笑う。もう大丈夫そうだ

クロアは、ほつとしつつも疑問が浮かび上がる。何故、こつまで問題なく復活しているのか、と

「あ？そりゃあれだ。俺〓すげえ、うん」

…多少の混乱が残っているのか、どうなのかは知らないがコイツの今の発言は無視しよう

「おお、そつだそつだ」

忘れてた、とガルトはカードを差し出す

「補填用の特別カード、例えば一瞬だけ能力が限界値まで行くぜ」
その特別な呪符を受け取る。どうやら一度使うと無くなるらしい

「さて、今日のラストバトルといくか」

張り切っているガルトはキャラクターカードを見せて意気揚々と舞台へ向かう。BUGに襲われて虚ろになっていたとは思えない姿に苦笑いする

…馬鹿なんだか、凄いんだか

クロアも後に続くことにする何の問題もなく受付が完了してクロアは指定された席に座る。と

「お姉ちゃん、あの人？」

「そつよ、ちゃあんと一緒に遊びましょ」

子供の会話が聞こえた。後ろで会話しているから姿は見えない

「さあ、準備は終わりだああ！」

ワアアアアア、と観客が異様に白熱している

「新人、クロアに神の加護あれ！」

…いつもと掛け声が違つじゃねえか。

そつ思った時、フツリと意識が消えた
ふわり、といつにない高揚感を感じる。

いつものように下から上へ『材料』が運ばれて上から下へと、現実世界とは真逆の順序で世界が作られていく

クロアは異様に空が『長い』事に気付く。まさかとは思つが

高地系か？

ピリツと頭に痛みが走る。まだあの頭痛なのだろうか…
クロアは着地する。

また廃墟のような建物がエリアらしい

「廃ビル…か」

スツと第一歩を踏み出した瞬間

パキツ、と何かを踏む音を聞いて音の方向に振り向く

「…」

「…」

なんか、小さな子供が物陰から見つめてるんだが…

「っ…」

声をかけようとしたら子供は逃げてしまう。頭の三分の二は壁に隠れていたから男か女かさえわからなかった

「…さつきの子供か？」

お姉ちゃん、あの人？

そうよ、ちゃあんと一緒に遊びましょ

ぞわりと先程は気付かなかった、悪意の棘に触れたような気持ち悪さに背中に嫌な鳥肌がたつ

「…距離をとっておくか」

安全策をとっておくでしょう。先程の子供ならば二人組で現れるはずだ…、包囲から逃げようと決めて周囲を見回す

あたりにはひび割れた壁と壊れた木製製品の残骸、そして天井から崩れて落ちたコンクリートの塊…そんなところだ

「階段…はここじゃないか」

キョロキョロと辺りを見回す。剥き出しのコンクリートの壁が死角をうみだしており全部の把握には向かない。だが大まかな把握、階段の位置候補程度ならば絞り込むことは出来る

「装具『長剣』」

他のプレイヤーも準備は出来ているはずだ。油断はしないほうがいいだろう

「…人影は見当たらないな」

左右確認してから先に進む。何故だかガルトからの連絡もなくて淋しいものがある

「くっそ、何してんだ…あいつは」

クロアは悪態をつきながら大きな壁の反対側を伺う。ハズレだ無意味に広いこの建物に少しばかり呆れてしまう

「なんでこんな疲れるエリアに…」

と、足元を見たときキラリと光る物を見た。咄嗟に動きを止めてあたりを見回す。

…天井まで透明な細い紐が続いている。

そこから先の構造はわからなかったが気を付けて一歩踏み出すとしよう。

紐を踏まないように跨いで足を降ろす

プツン

何かが切れた。ピシッと天井にヒビが入り、一気に崩落する

「くっ…死ぬ訳にやいかねえ！」

ブウン、と不思議な力が働いて剣が崩れてくる瓦礫に向き直る。まったく意図していない動きに彼は驚くが…頭に浮かんだ言葉を叫ぶ

「剣技『天剣斬』」

一瞬で瓦礫を切り裂く。そしてなんとか生み出した隙間に体をねじこんで剣を突き立ててかがむ

凄まじい轟音をたてて崩れ、砂ぼこりが建物に蔓延していく

そんな時に壁の裏側からひよこつと小さな男の子が顔を出した

「お姉ちゃん、やりすぎたんじゃない？生きて無いかもよお？」

もう一人、反対位置の壁から向かい合うように顔が出てくる。

「いいじゃない？まあ…やりすぎたかなあ…」もうもうとたちこめる砂ぼこりの中に一つだけ山ができています。その山から小石が二・

三個落ちたかと思うと

「ちっ…やられたぜ」

山の頂点を剣の柄が貫いて瓦礫を崩す。その中からやや傷だらけになつたクロアが顔を出す。

「さて、第二ラウンドだ…ガキ共」振るつた剣が鈍く光り、幼い姉^{きよ}弟^{うたい}は身構えた…

第四章 ツバイン（後書き）

あとがき

皆さんこんにちは、シロツバです
実は最近思いました。

『このあとがき、おまけスペース無いじゃん』（衝撃のトーン）

うーん、第一話のあとがきで書いたのになあ…、このままだとおま
けで一話分書いちゃうよ（書きすぎ）

さりげなく本編に混ぜちゃおうかな？描写を忘れるからなあ…（問
題外）

あとがき2ページ目！とかあれば楽なんだけどね、分割が。

さて、今回のあとがきはここまで！

また次回お会いしましょう！（ ）ノシ

第五章 線符（前書き）

ゲームファンタジー第五話！

もうお馴染みのキャラとそつでもないキャラがやっぱり暴れます

今回はちよつぴりシリアスに進みますよ

この小説には作者の混沌が（以下略）

第五章 繰符

「さて、第二ラウンドだ…行くぜ、ガキ共」

幼い姉弟は身構える。ジャリ…と足元のコンクリート片が音を立てる
「やあっ！」

長剣を大きく薙払う。灰色の刀身が無骨に鈍く光を照り返す

幼い姉弟はまったく同時にカードを引き出す。そのカードの名前を
叫んで束縛から解き放つ

「短剣『銀の煌めき』」

「短剣『銀の煌めき』」

まったく同じ名前の、まったく同じ短剣が二人の手に握られる。銀
色に輝く刃渡り30センチ弱のナイフより大きい、簡素な短剣だ
それでクロアの剣を弟が受け止めて、姉が打ち上げる。

剣が浮いた僅かな時間に姉と弟の役割が入れ替わり、姉は剣の落下
に備えて短剣を横向きにしてまるで柱のような役割を果たす。

その間に弟は距離をつめて、短剣で切り裂く「ぐっ…」

傷口は浅いが、広範囲を薄く斬られたので痛みは酷い。ジリジリと
痛みが脳の思考を邪魔する

「ヨロワ！追撃するよ！」

姉のその言葉に弟は頷いて二人同時に攻撃体制に入る…。低く構え
た姉と高く構えた弟、二人は抜群のコンビネーションで高く、低く
と構えを切り替えながら交互に斬りつけてくる。その速さは僅か0
の世界…クロアは短剣相手にはあまりにも長すぎる剣を必死に使い
こなして受ける傷を減らしていく

「やるわね、クロア」

ふふん、と上機嫌に姉が笑う。クロアは肩で息をしながら隙を窺う
「やめた方がいいですよ」

不意に後ろから声をかけられる。いつの間に関り込んだのか弟…ヨ
ロワと言ったか、そいつが空を掴むようにして無垢な笑みを浮かべ

ていた

インビジブルステイル

「『不可視の紐』を張り巡らせました。抵抗するならばこの糸を引っ張ります」

…動けない。

剣を振ろうとしたのに体が動かない「くそっ…」

先程見たトラップの紐よりも更に小さな煌めきが目に入る。そしてあのトラップの切れたものの正体だと気付く

「それじゃ、ばいばーい」

姉のほうに紐を引くように促す

ヨロワは、くいつと紐を引い…

「水呪『水蛇』」

コンクリートの床から小さな蛇が飛び上がり姉弟の手や足に落下する

「きやつ」

「あわっ」

パツとヨロワが紐を放し、緩んだ紐を水が切り裂く。自由になった手をさすりながら斬戟の発生地点を見る

「よう、探したぜクロア」クッククク、と笑いながら相棒のガルトが『竜の尾』を担いでやってくる

「ガルト…」

姉が悔しそうに呟く。ガルトは平然と青竜刀の先端を向ける

「ノピアか。トラップマスターの異名は伊達じゃねえか」

ちっ…と舌打ちしながらガルトはクロアの前に割り込んで小さく呟く

「…迂濶に動くな、こいつらのメインは罠による攪乱、そしてそれを追撃出来るコンビネーションだ。それさえ気をつければ対等にやりあえる」

ポタポタとクロアの腕から血が垂れているのを見てガルトはやや眉をしかめる

…まずいな、と

（ああは言ったがああ二人の実力は上級ランカーと同等クラス。庇いながらどこまで戦えるか…）

ガルトは相手の様子を見る

「お姉えちゃーん！ぐすつ、蛇がー！」

「ほらっ取ってあげるから泣かないのっ」

ひよい、と蛇をつまんだ姉：ノピアの手は震えていてかなり恐がっているのがわかる。だが彼女はヨロワの蛇をとり、

「くらえっ！」

ガルトに向かって投げつけた

「…解除」

小さな蛇がパチンと弾けて水に変わる。

全ての蛇が同時に水に戻って、ヨロワは驚いて目を見開く。まさか

『解除』してしまうとは思っていなかったのだろう

「あ…ありがとー！」

思わずぺこりと頭を下げたのにクロアは笑ってしまう

「あつ、お姉ちゃん？」

ゾワツとクロアは悪意を感じてノピアを見る。「…は」

よく聞き取れない

「ヨロワのありがとうは私のなのにい！！！」

キー！と地団駄を踏んでイライラと感情を爆発させてノピアが叫ぶ。きょとんとヨロワが姉を見つめて首をかしげている。

自分が原因なのに気付いていないらしい

「畏符『落とし穴』」

二人は咄嗟に前後に飛び退く。ガルトは前に、クロアは後ろに、だ。ボコリ、と地面に空洞が出来て遙か下層まで続いている。落ちたらまっさかさまだろう

「丁度いい！下へ行くぞ！」

そんな穴にガルトが飛び込む。そして一つ下の階で飛び降りるよう
に手招きしている

「っ…行ってやらあ！」

跳ぶ。体が奈落に通じる穴に入った瞬間

ガザザザ！

激しいノイズが世界を震えさせた

「これ…は…」

BUGが出現した時と同じ…いや、前回よりも遥かに激しいのだ。

「ガルト、逃げる!!」

空間が震えているのが見えた。何かはわからないが明らかに普通ではない気配を感じてクロアは身震いする

床に着地して剣を構えて突撃する。歪みは広がり、そのフチは徐々に黒くなっていた

「なんだよ、クロア…」

ガルトも背後の異変に気付く

「水符『さざなみ』」

キンツとガルトが剣を振るった先から空間が波のようになって揺れる。その波は歪みに触れた部分だけが消えてしまっていた

「コイツ…無効系の能力か?!」

ぞぶり、と歪みが波打って中から不思議なものが現れる縦円と横円を組み合わせたような、不思議な物体がふわふわと現れる。

二つの円の中心には黄色い球体があり赤と青の円によってかなり目に映える

「BUGか…」

クロアは剣と共に低く構える。さながら忍者かなにかのようにも見えた。

「こいつ…ぐっ」

ガルトは突然頭をかかえて痛みにつめきはじめる。駆け寄ろうとしたクロアを片手で制して自分の頬を叩いて気合いを入れる

「はっ…忘れたことを思い出しそうだったぜ」青竜刀を構えて彼は
叫ぶ

「行くぜクロア!遅れんなよ!」

「ああ、お前もな!」二つの武器が振るわれる音を聞きながら、一つ上の階にいた双子はトークカードを使用していた。

「…うん、見たこともないやつだよ?うん、うん。そうするね」

ヨロワがカードに向かつてうなずいている。相手は黒髪の青年だった。

「ノピア、ヨロワ。今俺の方にも『ヤツラ』が来ている。一般プレイヤーが多いから少しばかり時間がかかる。

俺がそちらへ向かうまで時間を稼いでくれ」男はそう言つと、ノピアの承諾を待ってから連絡を絶つ。

ノピアはヨロワを呼び寄せて、下の階に叫んだ…剣が止まり、弾かれる。

もう四回も突撃を繰り返し、もう四回もこうして剣と一緒に吹き飛ばされている。クロアは切った唇を舐めて苛立ちながら呟く

「あたらない…なんでだ？」

ガルトは、その服で太刀筋を隠しながら五回目の攻撃を試みる

「ちっ…」

ぐいん、と不自然に青竜刀が止まり、左側に弾かれてしまう。何度も見ている光景にクロアは思わず呆れてしまう

「バリアかよ…ふざけやがって」そう不平を口にしたとき、上から叫びが降り注ぐ。

「縛符インビジブルステール『不可視の紐』」

ヨロワが呪符の使用を宣言する。

不可視の糸はクロアとガルトの間を抜けてBUGを縛り付けた。

「聞いて！私たちが抑える…だから！」

ノピアの言葉を遮り、クロアは笑う

「俺らが弱らせる…でいいな！」

ザザツとノイズが走る。

何故だか悪い感じがしなかった。

クロアはまた浮かんで来た言葉を呟く。軽やかに、重く、夕刻の渓谷のような澄んだ声で

「剣技『影閃斬』」一瞬でBUGの反対側に移動する。

「ジジジ…」

BUGの球体が揺れて音をたてたかと思うと金色の粒子に変わって

姿を崩していく

「…何だ？今は」

ガルトが不思議そうに呟く。クロアの二枚目の呪符の力に驚き、BUGの消滅に疑問を感じたのだ
ブウン、とクロアの四方が歪む。

「やべえ！逃げ…」

「呪符『静電気』」

呪符を発動しながらクロアは歪みの一つに腕ごと呪符を叩き込む。
水のような感触の歪みは波紋のように大きく揺れて呪符の発動と共に収縮した

閉じきる直前にクロアは腕を引き抜いて一つだけできた退路に身を踊らせる。「やるわねえ…」

「クロアお兄ちゃん、がんばれー！」

二階から思い思いの言葉が降り注いでくる。お前等も手伝えよ。と
思いを込めながら剣を叩きつけるように歪みに叩きつける

BUGを攻撃した時のように剣が動きを止めて、弾かれてしまう

「直接内部を叩かないと駄目か…」

畜生め、とクロアは悪態をつけて地面スレスレの低い構えをとる。

剣を歪みに突き立てようという試みだった

「やるわねー。ん？」ノピアの袖をヨロワが引く。そして、通話状態になったトークカードを見せる

「こっちは終わった。そっちの状態はどうだ？」

先程、二人が連絡をとった青年がカード越しに聞いてくる。彼の目は黒く、短めの髪のせいがかどこか鋭い印象を受ける

「…どうした？」

ノピアはなんでもないと首を振って答える

「クロアが一体倒したわよ、うん、死んだよ」

10歳にも満たないであろう少女は愛らしく笑う

「…そうか。ならお前達も手伝ってやれ。どうせなんもしてないだろ？」

ぶくつとノピアは頬を膨らませて否定する。そして青年は問答無用で通話を切った

「うー…しよーがない！やるよ！ヨロワ」

「うん！お姉ちゃん」とうっ！とクロアの前に二人の子供が飛び降りてくる。その二人はうまく前転して衝撃を和らげると立ち上がりざまにカードを引いて、叫ぶ

「繰符そつぷ」

「『大平原への片道キップ』」

カードが力を解放する。

「繰符、だと？」

突如吹き始めた突風に窓ガラスが割られていき、廃墟の中身を風が吹き抜けて埃を舞い上げていく

そして、強くなり続ける風に足を掬われて飛ばされる

「ぐっ！」

窓から飛び出す前に手を伸ばすが空を掻く

遙か彼方に地面が見えた。

完全に空中に飛び出してしまった。カクンと体が重力に引かれて落下を始める

「くっそ…」

もう手が届かない。剣を伸ばしても壁にかすりもしない…遙か下に見えた黒いアスファルトの地面が急速に広がっていく

ビルの周囲しかない高さだけのエリアが軋むような音を立てる

BUGか？…とクロアは奴らが出たとしても何もできない現状を笑うだが、実際は違った。

アスファルトに緑のものが見える。それらは建物にもまたたくまに広がりビルを緑色に染め上げる

唐突に建物が垂直に崩れていく

凄まじい勢いでビルはペシャンコになり代わりに平面が肥大化していく。

「ぐはっ」

地面に墜落する。地面はそれほど固くなくて人がたに穴が空いただけである

「くそっ…古典漫画か…」

穴のフチを掴んでクロアは立ち上がる。やっぱりお約束である

「黙れ…シロツバ」

イライラとクロアはいもしない人物に悪態をつく。ひひひ

「あつ、クロアお兄ちゃんはっけーん」

パタパタと少年が駆け寄ってくる。そういえば今までよく服装を見ていなかったのに我ながら驚く(二つの意味で)

ヨロワは黒髪を短いショートカットにしており、丸く大きな黒い目を輝かせている。

服装は半袖に短パン。暗めの紺色に赤い波のようなラインが入った、身軽な服装をしている

「ありやりや、ずいぶん飛ばされたわね」

ノピアはヨロワと同じ色の髪を長めに伸ばしてそれを高く二つにまとめている。

ヨロワとは対照的にやや尖った目付きをしておりどこことなく気丈な姉のような雰囲気纏っている。実際そうなのだが。

服装はヨロワと同じ記事を長袖のシャツにして、やや青みがかつたフリルのミニスカートとあわせている。

おそらくフリルのせいでも色が淡く見えているのだろう

「うっわ…派手にやったわね」

「アニメみたい！すごい！…個性豊かな感想どうも。」

クロアは一面に広がる腰くらいの高さの草原を見渡す。いつの間にかエリア表示が『平原』に変わっていて驚く

「ねっ、すごいでしょ？」

何が？

クロアは冷静にツッコミをいれておく

「馬鹿。私たちの『繰符』…つまりい…」

幼い少女はうーんと頭をひねり、言葉を捻出する

「す…すごいやつよ」

「答えになってないぞ」

クロアの呟きは空から降り注いだ光線に遮られてしまった

「ちっ…、上を取られたか」

クロアは地面に埋まった『長剣』を抜く

やや黒ずんでいるが使用には問題ないだろう

「下がってる」

クロアは空へと跳び上がる。

…

いや、無理だった

「流石にジャンプは…」

「無理があるようー」

うっせーか

低く構えなおす。距離は5メートル強、投げても届く気がしねえ

ビビビ…と上空にいるBUGが攻撃体勢に入るのを見てクロアは諦める

「届かねえな…チクショウ」剣を降ろす

その時、双子が同時に呟く

「届けばいいの？」

スツと二人が一緒に…背中合わせのように一枚のカードを解放する

「繰符」

「『重力の増加』」

ズツ…と足が地面にめり込む。そして徐々に頭が重くなっていき剣を杖がわりにして耐える

「なんだ…これは」

クロアの呟きに、左右の眼を互いに一つずつ蒼白く輝かせている姉弟が答える

「『世界の『重力』を加算してる。ほら、倍に』」

その言葉の後にクロアは凄まじい力を頭の上から浴びせられる

「『ね？』」

姉弟はニコリともせずに笑う

それにクロアは言い知れない恐怖と苛立ちを覚える。もはや剣だけでは耐えきれない重力を跳ね退けながら掴みかかる

「おい…やめろ。」

二人はまだ加算を続ける

「やめ…ろ」

愉快そうに倍と唱える

「や…め」

二乗と唱えて、クロアは地面に倒れる

BUGも堕ちて、潰れるような音をたてている。草もまるで押し花のようになってい

もはや指先を動かすだけで精一杯の重力の中クロアは必死に動こうとする

カチリ、と何か硬いものに指があたりクロアはそれを引きずり出す

「…」

何かを唱え、引きずり出した白き剣を薙ぐ

ブツン、と何かが切れる音がした

第五章 繰符（後書き）

あとがき

こんにちは。シロツバです

今回のお話、楽しんでいただけましたか？ようやく始まった感がありませんねっ！（え

シロツバ自身が飽きやすい性格なので一話丸々戦闘なんて無理だと前回思っていたんですが…意外といけましたね（^^；
気付けば上限に届きそうデビツクリ

さてさて、今回は今までよりも深みが増したかな？（聞くな）
なんだか今まで足りなかった物が見えてきた気がします。それがスライスになってくれると…いいなあ…

あっ、そうそう

そろそろバレンタインですね、実質男子校なんで無縁ですが女性の方、チョコ頑張ってくださいね

『去年逆バレしたので』あの気持ち分かります。『去年（略）』
怖いよねー、あれ。うまくいったとき嬉しいんだよねー、あれ。

…畜生め（ぼそっ）

さて、今回のあとがきはここまで！

また次回お会いしましょう！（ ）ノシ

第六章 巡る光暗（前書き）

ゲームファンタジー第六話！

もうワンパターン化してきましたね、前書き！

前書きではあんまし本編ネタは入れられないんで書くことないんですよねえ…

書くといったら

この作品には作者の（ry
程度ですからねえ…

では、あとがきでまた会いましょう

第六章 巡る光暗

少し前

クロアは必死に指先を動かす。

もはや立っていることも不可能な、倒れていても地面にめり込むような重力に抗いながら指で体を動かそうと、悪魔のような符を使う双子を止めようと、一秒前よりも強くなる重力の中で指に力を込めるカチリ、と指先が白くて四角と円の中間のような形のものに触れる。クロアは何故か取らないといけないような気がして、必死に握るザワツと全身が総毛立ち、頭の中で自分が問いかけてくる

暗い空間。キャラクターエディットの時のような暗い空間に『クロア』がいた。

「お前は何を望む？」

ふわり、と普段の服装に戻った自分の前に二組の剣が現れる

「『破壊』か『創世』か。選ぶのはお前だ」

自分は困惑する。彼には質問が理解できなかつた

「選べ。この世界での役割を。お前の力を。ツバインとしての在り方を」

彼はわからない、と答える。

役割？在り方？知ったこつちやない。

俺はただ友達の遊びに興味を持っただけだ

『クロア』は首を振る

「俺が望むのはそんな半端な答えじゃない。この世界を変える、これ以上無い強い意思だ。

それは、このヴァルハラを支配するだろう…さあ、答えを」

ビシリ、と暗い空間に白い亀裂が走る。破片が白く輝いて落ちて粒子になって消えていく

「さあ、答えを」『クロア』はそれだけ言って静かに彼を見つめる。

批難も、催促も、期待も、絶望も、何も無い静かな両眼に彼は思わずたじろぐ

バキツと空間に更なる亀裂が走る。

空間自体がもう限界だと言わんばかりに震えはじめて『クロア』は静かに天に左手を掲げてそれを制する。あくまでも沈黙を守りたいらしい

くっそ

何にも答えが出やしない。

彼は自分の甘さに気付いて頭を抱えて悶える。どうやっても答えが出せない 違うじゃねえか

答えは考えるだけじゃないはずだ

思い描くんだよな

自分自身を描き出す。無色の、自分自身を

自分を。

願いを浮かべていく。何をしたいか、何が必要か、何をするのか

願いを。

答えは解へと近づいていく

全てを。

解はとかれた。×Ⅱのように簡単な答えじゃない。自分にしか読めない、自分だけの解

俺は

『クロア』はそれを聞いて頷く

「ククク、『全てを知りたい』か。いいぜ、選択は…」『クロア』

は左の一組の剣を持って投げつける。世界が崩れるようにして消えていき、最後に一つの言葉だけが耳に残った

「忘れるな…『破壊』と『創世』は常にコインの裏表。力をミスればどんなものでも『破壊』を得る」

パキン、と世界の最後のカケラが砕けて彼は光に飲み込まれる

クロアは地面に伏したまま白き剣を見る。

手にあるのは白い『長剣』と黒い『長剣』…。そして、頭の中にそ

これらの名前が刻みつけられている！

「巡れ」

既に数十倍を超えた重力の中を鋭い力が駆け抜ける。クロアは両手の剣の名を叫ぶ

「光剣『白陰』、闇剣『黒陽』！」

白き剣を一閃する。

バツン、と重力が突然切れてクロアは圧力の変化で激しくむせかえる

「いま…」

「なにが…」

双子は理解できないと突然効力を失った繰符を見つめる

「ククク…効いたぜ、重力とはな」

ゲホゲホとむせかえりながらクロアは新しい武器、双剣を構える

「だが、ガキども。終わりだ」

剣を振り下ろす。

呆然とした二人の頭上を対色の剣が落ちてくる…ノピアはヨロワを、ヨロワはノピアを見つめて怯えた目で剣を見る

「おい」

剣が宙を舞う。

ザザツ、と地面に突き刺さる音と共に首元に淡い蒼色が飛び込んでくる。

「ガキ相手に本気すぎんじゃねえか？」

クロアは後ろに飛び退く

「遅えよ」

背中を鋭く切り上げられる。綺麗に一直線に切り裂かれた背面から血が溢れ出して死すらも超越した恐怖を感じる

「ろ…楼騎お兄ちゃあああん」

ヨロワが泣き付く相手は黒い髪を持ち、やや切れ長の目をもつ、和装に身を包んだ剣士だった

「楼騎…遅いよお」

楼騎は悪いと一言謝り、二本持つ紅と蒼の刀から蒼いものだけを構える

「双…剣…？」クロアはかすれていく視界の中で振り上げられる刀を見つめる

「クロア、お前は弱い。お前は足手まといになりかねない」

カシャン、と刀の金具が音を立てる

振り下ろされた刀にクロアは絶望する

こんなに…簡単に…死にしまうのか…俺は

クロアは唇を噛み締める

新しい武器も、何も役に立たないのか？

スツと目の前を何かが揺れる「な…なんだ…お前は」

ふわり、とクロアの目の前で布が揺れる

目の前に幼い、白髪の少女が立ちほだかっていた。体をまるで十字のようにして空中で静止した刀を見つめている

「…この力、BUGか?!」

楼騎と呼ばれた、蒼緑の上衣と藍色袴の剣士は間合いを離して少女に敵対する

「クロア…」

少女は振り返り、笑いかける

全身を光が包んで傷を癒していく…

「時間切れ、かあ」

少女は笑いながら足元からぼろぼろと崩れていく。崩れた部分は徐々に透明度を増していき、見えなくなっていく

「ばいばいつ、それから…」

…手を出したら容赦しない。振り返り様に残忍に笑いながら幼い少女は姿を消してしまう

「くっ」

クロアは一度手から弾かれた剣を取り、楼騎に向かって突進する。

楼騎は一瞬だけ驚いたように眉を動かしたが冷静に刀を構えて迎え

撃つ

金属がぶつかる耳障りな音が響き渡る。

「お前、BUGの仲間なのか?!」

「あんな奴知らねえよ!」

剣で弾き飛ばす。楼騎は空中で一度後転してから地面にへばりつくように萎びた草の上に着地する

一度楼騎は刀を見て、空を雑払う。

「不穏分子は排除するに越したことはない。悪いが、退場願おう」
楼騎は刀を地面と水平に構えて、名を呟く。

「揺らめけ『幽月』」

淡い蒼色の刀身が一瞬だけおぼろげに輝く。見た目こそ変わらないがその存在感はその場に『有る』だけで切り裂かれているような、恐ろしく鋭利なものだった。

「この剣の能力は『一撃断殺』。耐えようとしても無駄だ。」

静かに剣を頭の横に構える。近付けば刺し貫き、待てば一瞬で距離を詰めて断ち切るつもりだろう

…チャンスは一瞬、クロアは長い双剣を構えるフツと楼騎の姿が消える。あまりの速さに目のピントが合わせられない…

「つ…らあつ!」

白い剣を振り上げる。カキンと軽い手応えを感じてクロアは笑う

「…なんだ?切り落とせない?」

『一撃断殺』の刀を白陰は受け止める。それも、片手だけでだ
「能力だ」

クロアは静かに疑問の解を与える

「『能力を封印する能力』…それが白陰の能力。先に手の内を晒したのが敗因だ」

クロアの踏み込みに反応して素早く間合いが開かれる。楼騎の瞳には微かな驚き、そして僅かな異怖を感じる「聞いているか?『D』、

『T』コイツは相手に回すのは危険すぎる!今ここで殺す^{デリット}しかない!
!」

空中にややブレながら四角が描かれる

『…俺はすすめないぞ』

『貴方がやりたいのなら、まかせるわ』

DとT、二人がゲームに割り込んで楼騎に自分の考えを伝える。楼騎は静かに刀を握る

「…お前達は近寄るな。危険だ」

カシャン、と刀を再び握る。楼騎は一度だけ瞼を閉じながら小さく息を吐いて心を落ち着かせる

「剣技『眉月』」

刹那の斬撃が前髪を数本切り落とす。頭を引くタイミングがもう少し遅ければ今ので頭が吹き飛ばされていただろう

「返し剣」

ヒュッ、と踏み込みと共に下から上へ切り上げられた刀が逆に下に落とされる

蒼碧のコートに一筋の切れ込みが入り、クロアはバックステップでやや滑りながら怒濤の追撃を黒陽で受け止めて白陰で弾き返す

「くっ…」

白陰の能力を受けて楼騎は思わず刀を引いてしまう。クロアはさすがに叫ぶ

「『能力を付加する能力』」

楼騎の刀がイビツに歪んで彼の頬を切り裂く

たたり、と垂れた紅い血が彼の上衣を染めていく

「なんだ…その能力は…」

武器にはだいたい特殊な能力が宿っている。例えば『竜の尾』、あれには『水を操る能力』が宿っている。だが、

「能力に対する能力なんて見たことも聞いたことも無いな…」

楼騎は手で血を拭う。垂れる生暖かい血液は集中を掻き乱してしま
うからだ

「すげえな…黒陽」

自分の武器に驚いているクロアに楼騎は手加減をやめる事にする

「クロア…お前の力は異能過ぎる。悪いが、消える」

空中からカードを抜く…だが、そのカードは二枚あり片方は半透明だった

「滅符『世界の拒絶』、奥義『流浪の月』」

半透明のカードが幽月に宿って能力を付加する。世界を超えた、敵を抹消する特異すぎる呪符がクロアを拒絶する

「じゃあな、クロア」

世界が闇に閉ざされる。闇の中で雷光のような光が煌めいて刀が振るわれる 禁符

「『リミティ・プラスティカ』」

補填のカードを発動する。一瞬だけ全ての能力を無限に変える呪符で遙か彼方にまで飛び退く

「リミティ・プラスティカ…誤算だ」

楼騎はもはや届かない間合いを前に刀を下ろす。カチン、と世界から意識が解かれる。

時間切れ…、一試合が終わってしまったのだ

「やるな…」

一言、感想を漏らす

近々また出会うことになるだろうが…その時にまた手合わせをしようとして楼騎は思うガコン！と機械が外れる。

クロア、ノピア、ヨロワ、楼騎は一斉に機械から吐き出されて現実で互いを認識する

「あつクロアお兄ちゃんだ！」

「あたりまえでしょ？つてガルトは？」

幼い姉弟が賑やかにしている。明暗のはっきりした服装からかゲム中よりも幼く見える

「クロアさん…管理室をお願いします」

緑色の制服が話しかけてくる。どうやら管理者にも目をつけられたらしい

クロアは仕方なく承諾を伝える

配線がむき出しの舞台裏から扉を抜けてスタッフエリアに入る。いくつもの扉をくぐり最奥の部屋に入る

「やあ、元気そうだな」

ヘラヘラと笑う男が現れた。クロアはイラツとしつつも中央に巨大な機械が聳える部屋を奥へ進む

「君が、クロアか」

上から声が降ってくる。上を見上げると薄暗いなかに白衣が見える。手すりを飛び越えて落ちてきたのは若い…少し若いに訂正する。

「中々に見所ある若造だな」

女だった。

口調は老人、風格は雄々しく、見た目は麗しい…というところか
若干口元にシワが目立つぞ

「黙れっ！D！」

「ありや、バレましたか」

ヘラヘラとDが全く反省していない笑いを浮かべて平謝りをする。

こいつ、何とかした方がいいな

「ああ。それには同意するぞ若造」

相変わらず見た目とのギャップに馴染めない…、というか暫くは馴染める気もしない

クロアは一息入れてから何の用かと聞く

「うむ。若造よ、お主の行動は常軌を逸しておる。だから今一度問う。我々の元に来るかどうかを」

女は品定めするようにクロアの目を見つめる。俺にはお前のような趣味はない

「ちえつくめーいっ」

ぼずん、と椅子に座りながらDが呟いている。相変わらず理解に苦しむな…

クロアは静かに周囲を観察する。

小じわは相変わらず見つめている。Dはヘラヘラと小じわにちょっ

かを出しており何かを求めているように思えない…

「一つ聞かせる。俺がお前らと組んだ時のメリットは何だ？」

小じわの目がキラリと光る。しまった、これが本命だったか！

「よくぞ聞いた！我々と組んだときの若造のメリットはだな…」

白衣の意外と物が入るポケットから折り置まれた用紙を取り出して、小じわは読み上げる

「一つ、給料が出る。

一つ、週休半日」

休み…少ねえな

「一つ、衣食住のうち住だけ保証」

全部保証しろよ

「一つ、管理者権限を与える。

一つ、BUG特別対策班に任命」

小じわはふふん、と得意気に読み終える。クロアはやや目を泳がせていたが話が終わるのを見て元に戻す

「条件悪いな」

「なに?!」

明らかに狼狽する小じわ。まさか本当に条件が良いと思っていたのだろうか？

「D、一体どこが悪い！最近の若者の感覚がわからん！」

ヘラヘラと、奴は答える

「今はもつと即物的じゃないと動かないんだなあ…いい加減わかれよ」G「」

どうやら小じわはGと言うらしい。

「くっ…若い頃は実力を認められることが最大の誉れだった筈なのに…時代が儂をいじめるのか！」

「さて、クロア。俺達と手を組むなら世界の半分…いや、げふん。

お前の知りたい事を教えてやる」

Gを完全無視してDはクロアに取引を申し込む。どうやらこちらの条件ならば多少はマシのようだ

クロアは承諾の返答をする

「いやー、丸く収まってよかったよかった。ね？Gさん？」

「じーさん言うな。そして儂を（仮名）みたいに呼ぶな。コワッパが」

∴ 案外仲がいいのかもしれない

クロアはやれやれと頭を垂れる。何気にまだ始めて初日だ。外は既に日が落ちていているだろう∴我ながら随分と疲れる1日だった

「うむ、そうだろうな。今日は帰ってしっかり休め」

∴ 口に出した覚えがないのに回答が帰って来た。偶然か？

「そうだクロア」

Dが天井を指差す

「来るぞ」

カン、と鉄を蹴る音が聞こえて後ろに下がる。上を見ると金髪が風になびいているのが見える∴ん？風？

「やつほー！」

「踏みつけっ?!」

何故か空中で進路補正した金髪がクロアの上に着地した。

白衣を着た二人組は

「あーあ」とでも言うように顔を見合わせている

「新入りクン、一緒に頑張ろうね！」

「うるせー！てか重めえー！」コシャツ「最近新入りが少なくてつまんなかったのよ！歓迎するわ！クロア！」

へんじがない、ただの死体のようだ

DとGはやれやれと、クロアを一日早く部屋につれていく方針を固める。今の状態だと帰るのも難しいだろうからな∴

第六章 巡る光暗（後書き）

あとがき

こんにちは、シロツバです

昨日（投稿日時点）で自転車の鍵落としましたー。生まれてはじめてでビックリですよ

あ、ちなみに鍵は駐輪場の人から工具借りて壊しましたよ。付け替えに1365円かかりましたが…
お金無いよ…うう…

さて、今回の小説はネタ満載ですね

そしてまさかの時間感覚…シロツバ自身途中忘れかけてました。危ない危ない

まあ、ようやくクロアの所属が決まりましたね。長かった…

では、今回はこのへんでー

また次回お会いしましょう（ ）ノシ

ガルト「なあ、俺どこ行っただ？」

シロツバ「重力に負けて画面外で退場してもらったよ」

ガルト「扱いに不満があるんだが…」

シロツバ「堪えてくれ…」（肩を叩く）

ガルト「イラッ、暴れる『白蛇の進軍』」

シロツバ「痛い！噛むな！踏むなああ！」

第七章 『現実世界』（前書き）

ゲームファンタジー第七話っ！

何気にSF入った世界はどうなるのか、皆さん気まぐれにご覧ください

ちなみに、大体シロツバの妄想です

第七章 『現実世界』

光。眩しくて、目を細く開けて周囲を窺う

狭めの部屋…ざつと六畳程度だろう。そんな手狭な部屋を陽光が一閃するかのように光の道となってカーテンの隙間からクロアの目に届いている

どこだ？ここは

むくり、と身体を起こして

「あだっ！」

頭をぶつける

どうやら二段ベッドのような構造物の下で寝ていたらしい…。異様にグキグキ鳴る首を回しつつクロアは頭をぶつけないように立ち上がる

「…上は棚か」

てっきり先客がいるものと思っていたが…たまにはこんな意外な造りがあるのだなと少しばかり驚く

上の棚には小さな本棚があり、『ヴァルハラ』に関する本が数冊納められていた。

『基本ルール』や『基礎技法』などのレクチャーものや、『ヴァルハラ』の歴史、『有名選手の発想のモチーフ』などのややマニアックな本まで多岐にわたっていた

「よく数冊でこんなバリエーションが出せたな」

素直に感想を漏らすコンコン、と木製なのか良い音を響かせた扉を見る

「新人くん、いいかな？」

女の声がある。まあこんな呼び方するのは一人くらいだろう…中に入っても構わないと返事する

「おはよ、ゲームマスター初日だね」黒い、ややモコモコとした素材のハイネックの服に茶色にミニスカート…ノピアのよりもさらに

数センチ短いのでかなり目のやり場に困る服装をしたエアリアルが
あはは、と笑いかける。つていうか首が痛てえ

「やっぱり君もツバインだったんだ…どうりで強いと思った」

もじもじと、前に戦った時とは別人のようにしおらしい。何か食っ
たか？…首痛てえ

「うん、トースト食べたよ…」

「そうか」

気まずい沈黙…どうも話が繋がらない。クロアはやれやれと小さめ
のベッドに腰かけるその時、クロアは扉から少しだけ頭を出して部
屋を見ている存在に気付いた。

「見ててじれつたいな」

紺色の和装に身を包んだ青年…いや、楼騎意外にそんな人物はいな
いだろう。楼騎が部屋の中に入って来る

「さつさと言つちまえよ、エア」

「うう……やつぱ言いにくい…」

やつぱ様子が変だ。例えるならば食べたら発酵していたグレープフ
ルーツのような違和感だ。スゲーわかりにくいな

「えっと…その…」

エアリアルは意を決したようにくるくるともてあそんでいた指をグ
ーの形に握りしめて、言う

「昨日、首折つてごめんね」

首が痛い原因はお前か！なんか『コシヤッ』って音がして記憶が無
いと思つたら！

「だからごめんねつて謝つたでしょ?!」

「知るかボケ！首の骨リアルで折る奴がいるか!!」

「いるわよ！私が！」ふっ、と楼騎は壁に寄りかかりながら呆れ半
分、投げやりにもう半分を費やしたようなため息を漏らす。こいつ
ら賑やかだな、と

「こつして謝つてるじゃない！新入りクン！」

「^{えせ}黙れ似非外人！」

ギヤスギヤスギャーギャーと二人は噛みつかんばかりに言い合つ。まったく…

「クロアお兄ちゃんおこつてる?」

怖がつてる子供を合わせるわけにはいかないじゃないか。楼騎は三口ワの頭に手を置く

「大丈夫だ。俺にまかせな」

「うん!」

期待と尊望のまなざしに楼騎は失敗できないな、と苦笑する

「お前ら」

バツ、と二人は勢いよく楼騎に振り返る

「ガキが怖がるじゃねえか。」

あつ、とエアリアルが察する。遅れてクロアも

ひよこつ、とはえてきた頭にやや驚きつつも大人気ない自分達の行動に反省する

「ほら、エアリアル。こいつに朝食食わせんぞ。…お前らも来るか?」

ひよっこり出ていた頭が目を輝かせて、頷く

「おし、服を着替えてきな。ノピアにも声をかけるよ。後で拗ねると面倒だからな」

「うん!すぐ来る!」

ぱたぱたと廊下を足音が駆けていく。ボタン、という音が小さく聞こえて楼騎は着替えを放り投げる

白と黒の縦ストライプ。上下セットでかなり…いや。とてつもなくダサイ

「着ろ。」

「着ろ」

だが、回避は無理らしい。動物的に感じる身の危険がそれを証明している

どうやら、前途多難になりそうだ着替えて、廊下に出る。

「…俺は囚人か?」

思わず鬱になる縦縞を指差す

「ふっ…似合ってるな」

今笑つたる、畜生め。

クロアは不機嫌に鼻をならして楼騎を睨み付ける。当人は澄ました顔で何事もなかったかのように廊下を見つめている

そのまま数分、廊下の先からはたばたと足音が駆けてくる

「おまたせしました！」

意外と普通な、まるで幼稚園のような服でない服でヨロワが笑っている。そして

「ねむい…ろうきのばあか」

目をこすりこすりノピアがゆっくり歩いて来る。それをヨロワは無邪気に急かしてノピアは若干歩みを早める

「しゅーごーかんりようです！」

「ああ、お疲れ」

楼騎はヨロワの頭を軽くたたく。もちろん攻撃の意味はないえへへ、と笑うヨロワを見てノピアは恨めしそうに楼騎を睨む。

「さっ、食べに行こうよ」

一行は比較的だらだらと歩き始める。一人は意気揚々と一行を引っ張り、別段そうでもないのはゆつくりと、カタツムリのような緩やかな速度で薄暗い金属質らしき廊下を蹴る

無駄にわかりにくい廊下を何度も横断して一行は『食堂』と書かれた扉の前にたどり着く

キイイ…と手入れの行き届いていない蝶番ぢやっぴがの音を聞きながら食堂へと足を踏み入れる食堂の中は、特別なにもない。

普通に券売機と座席、そして食堂のおばちゃんが立っているだけだった。強いて言えば全ての席に携帯端末の『ウェブネットケーブル』というコードがのびているだけだ。

ちなみに、ウェブネットケーブルとは2010年末に実用化された、当時『ケータイ』と呼ばれていた端末の機能強化として作られた、高速有線ネットワークの進化版だ。

当時はあまり見向きもされていなかったが、回線の高速化と安定性から『Agg』という会社を取り上げ、それによって爆発的に普及した。

ちなみに、最近はネットワーク以外にも充電機能も追加されてより利便性が増した

エアリアルはそこにピンク色の、なんかキラキラと輝く装飾を施したやや薄い端末を繋げる

「さつて、私は甘いものにしょー」

「ヨロワ…まかせる…ぐう」

「お姉ちゃん…また寝ちゃった…」

本当にうるさいくらい賑やかな奴らだな、とクロアはため息をつく。朝は静かに過ごしたいのだ。

「だな。だが退屈はしまい」

楼騎は静かに水差しを置く。さりげなくクロアの分のコップにも水が注がれていた

「まっ、俺はお前を認めてはいないが食事時くらい停戦するのも悪くはないな」

楼騎は冷たく、結露を始めたコップから水を少しだけ口に含む。少し時間をいれてもう一口。3口に別けて水を飲みほす

「通常メニュー以外は別料金だ。考えて買ってこい」

親指でおばちゃんが番をしているカウンターを指差す。一瞬だけおばちゃんの眼が光ったような気がした。

「…遠慮する」

「そつか、無理強いはしない」

楼騎は静かに席を立つ。どうやら食事を取りに行くようだ

「あれ？新入りクン行かないの？」

あれっ、と薄いオレンジの板に白いケーキをのせて帰ってきたエアリアルが驚いている。むしろ朝からケーキかとクロアは驚く

「マジ死ぬよ？」

そう言っただけ同意を求めるように楼騎を睨む

「無理強いはしない」

先程聞いたセリフを呟いて楼騎はカウンターまで行ってしまい彼女
は不機嫌に頬をふくらませる「むう…朝食べないと体に悪いぞう」
シャキーンとフォークが掲げられ、突き立て

「エ、ア、お、ね、え、ち、ゃ、ん」

「怖っ！！」

全ての語に濁点をつけながらヨロワがエアリアルに飛びつく。その
反動で華奢な机が倒れて上にあつたものがバラバラになって床に散
乱する

「ああー！ケーキがああ！」

がつくりと力尽きる。コイツは放っておいてエアリアルに泣きつい
ているヨロワに話しかける

「何があつた？」

答えは嗚咽と鼻をすする音だけ、だが

「うるさいガキですねえ」

嫌味を含んだ、どこかで聞いた声が聞こえた。クロアはかなり憎々
しげにそいつを呼ぶ

「ルイエス…」

「クロ…だつたか？君が保護者かい？」

カチン、と来る。奴がなんでここにいるかとか関係無しに殴ろうと
腕を上げる

「ブロウ」

ルイエスが小さく命じる。太い腕がクロアと生意気なガキとの間に
割り込んできてクロアの腕の三倍はあるつかというほどの巨腕が拳
を止める

「野蛮だね、キミは」

「うるせえよ、ガキが」

互いに挑発し互いに相手への怒りを引き上げている二人は睨み合い、
険悪な雰囲気を作り上げる「やれやれ、やっぱ仲悪そうだねえ…G
さん」

「D、飯が不味くなる。行くぞ」

二人の白衣が立ち上がったとき、食堂内には人垣のアーリーナが組みあげられていた。何人かは野次をいれ、何人かは金をかける新設された賭博場の中央ではクロアとブロウが睨みあっていた

「どけ」

「…」

冷徹に見下ろす相手にクロアはイラツと青筋をたてる

「どけて」

「言っただろ！」

背後から明らかに吐き捨てるような怒号が貫く。ゆらりと幽鬼の如く現れたエアリアルはキャラクターカードを掲げて叫ぶ

「ルイエス…勝負を申し込むわ。『非公開の第一試合』…どうせそれ目当てで忍び込んだんでしよう？」ルイエスは頷く

「察しがいいじゃないか。確かにその通り…非公開の動作テスト…その時だけテストステージが出るらしいじゃないか」

是非とも見てみたい、と生意気なガキは呟いてブロウに合図を送る
「…」

小さく頷いてクロアの腕を放す。尋常でない握力で痛む拳を引き寄せて立ち去る巨漢を見つめる…。こいつがルイエスの部下なのだろうが、普通の人間とは違う感じがした

「なんなんだ…あいつ」

苛立つエアリアルが答える

「ルイエスの部下よ。アイツは無口なの」

彼女は立ち上がり、黒いハイネックの服についた埃を払う

「ついていこう、お前らだけじゃ不安だ」

楼騎が薄いオレンジの板を隣の机に置いて呟く。湯気たつ味噌汁なんかを全て泣きじゃくる子供に渡す今渡しても食べれないとは思うが、気にするまい。三人は横一列に並んで歩き始める

見ていた、白衣とかの集団がひそひそと何かを話している。とても気にはなっただが

「新入りと古参が組んでるんだ。奴らにとって珍しいんだろ」

楼騎の静かな声に小さく、なるほどなと答える

エアリアルはイライラと髪を指で遊んでいる。癖なのだとしたら奇異な癖だコイツが将来巻き毛になるとしたら原因はこれだろう

クロアは静かに笑う

「なによ！」

「なんでもないさ」

そして、会場にたどり着く。

中には誰も居ず、必要最低限の照明とスタッフがいるだけだ

「クロア、エアリアル、楼騎を認証しました」

手続きは簡略的に終わった。

三人は狭い階段を登って広い、8台の機械が鎮座する空間には既に4人が座っておりクロア達も椅子に座る。

ガシャガシャと機械が動き出し、体の神経反応を読み取る機械が腕や足を固める。頭にも機械の圧迫を感じて意識が薄れていくのを感じる

「神々の加護あれ」

小さな咳きがどこからか聞こえた気がした

第七章 『現実世界』（後書き）

あとがき（なんか味気ないよね）

こんにちは、シロツバです

今回、ゲーム出てない！凄い！

はい。驚き終わり、今回は中で出てくる機械について

だいたい僕、シロツバの妄言ですが、一応発明可能なものを出しています。以下説明

『ウェブネットケーブル』

とりあえず、パソコンのように共通規格の回線が開ければ簡単です。
楽勝

あと、何気に『ヴァルハラ』の端末』

現在『頭で考えたものを表示する機械』が開発されています。つー
かあります。

まだ精度は低いけど、単純な模様ならば出きるらしいですよ、はや
く実用化しないかなあ…

考えただけで絵がかけるようになれば僕のような画力ゼロ人間でも
挿絵が書けるようになる！のかっ？！

死ぬまでには使いたいですね…漫画家なんかは重宝しそうですし、
普及は早いだろうしね

つて…これだけで終わりそうだ（^^）；

最後に一つお知らせです

『なんかコーナー作らね？』ってクロアが言うので、何か作るうか
と思います。

なので、皆さんコメントの時に何か投下して下さい。『何をするか』

は必須ですよー

案が揃えば10話くらいのおとがきで発表しますね
それではまた次回お会いしましょうー

（ ）ノシ

第八章 三人の難敵（前書き）

ゲームファンタジー！

もう毎回この始まりだから変化がほしいシロツバです。

遂に動き出したルイエス！（別段ラスボスでもないけど）

出番が減る主人公！

そして、あとがきは…

第八章 三人の難敵

暗い世界。もう慣れたヴァルハラの世界の構成のシーンだ。下から上へ世界のパーツが送られて上から下へと組み上がっていく。目の前を飛び抜けた白いパーツに驚いてクロアは身を引く。

組み上がっていく世界は今までとは違う、異質なもののなに気付いて思わず小さな声を出す

足場が出来て、体が自由に動くようになる

空を見上げられる世界は青空が広がり、目が痛くなるほどに陽気な太陽が容赦なく照りつけている

『エリア：00』、表示されたエリア名は初めて見るものだった
ふっ、とトークカードが震えるのを感じる。クロアは金髪がのぞきこんでいるカードに話しかける

「クロア、合流地点は滝の前よ」

とりあえず、川すらない状況なんだが…

「なら、転送装置を探して。このエリアにはあちこちにあるから頑張るよ」

プツン、とあまりにもあつけない通信が切れる。まったく、どうしろって言うんだ

クロアは憤慨しながらもあたりを見回す…

草原、隣接する砂地、さらに草原の北側に接している溶岩地帯…

とりあえず、普通のエリアじゃないのだけはよく分かった。面倒すぎる場所なのだ。

「まったく…転送装置の形くらい言えよ…」

クロアは何となく頭を下げる

ピッ、と何かが切れるような危険信号を感じてそのまま動きを止める。
その一瞬後、頭の上を轟風が抜けた

「なんだ？」

振り返ると、逆光をうける巨大な木がたっていた。高さは2mほど、

高さはそれほどでもないが何故だか威圧されるような力を感じた

「…」

そういえばなんか見覚えあるな…

木は右腕を持ち上げる。

ああそうか、あの時の巨漢だったか

クロアの頭上に手がかざされて、アルミ缶を潰すように地面に押し付けられたパラパラ…と大男は押し潰した地面から手を引き抜く。

あまりにも現実離れした力こそ彼の最大の武器、一撃受ければ只ではすまない

「…ぶねえな」

不意打ちを間一髪で回避したクロアを静かに見下ろす

「こつちもいくぜ…。巡れ！光剣『白陰』、闇剣『黒陽』！」

空間から抜いたカードが二振りの剣に姿を変えて、一回転しながら両手に収まる。

「…」

グオウ、と巨大な腕が振るわれて、黒髪の蒼碧のコートを着た少年は飛んで回避する

「振りがでけえ！」

剣を交差させるようにして彼は巨漢のブロウに斬戟をたたきこむ。

白と黒の見事なクロスを前にブロウは後ろに逃げようとして体重を後ろにかける

「雷符『静電気』」

ぴん、と指で弾かれたカードがブロウの体にあたり強烈な電撃を流す。一瞬だけが流れた電撃にブロウは身を強ばらせる

二色の斬戟が同化してブロウを貫いた

「…っ、効いたろ」

クロアはジンジンと痛む腕を庇いながら舞い上がる砂ぼこりを見透かすようにして男に呟く。クロアの未熟な力ではまだ今の攻撃は早かったのだ

「…」

だから、腕が延びてきたときは『終わった』と思った。

「ぐがっ！」

腕はクロアの首を掴み、地面から浮き上がらせた。今、体を支えているのは首を締め付けている男の右腕だけだ。自身の体は非情な重力によって首を引き千切らんばかりに重くなる

「…掴まえた。主の敵」

コイツの声…初めて聞いたな…って

「それどころじゃ…」

クロアは弱まっていく力を全て白陰に集める。特性を使ってこの窮地を脱しないと…死ぬ！

白い光が一閃する。

全力の素早い雑払い、完璧に捉えたはずの一撃は

「展開せよ『パワフルリング』」

その一言で展開された緑色の壁に阻まれて、手からこぼれ落ちてしまふ

「…蚊が」

「ちく…しよ…」視野が暗く、狭くなる

力が抜けて…意識が消えていく…

しっかりしてよ

何か…幻聴が…きこえ…

「雲切れ間から姿を表せ。幽技『朧月』」

クロアの体が宙を舞う。

突如現れた光の閃光がブロウの腕を弾き、クロアが反動で飛ばされたのだ。無様に砂地まで転がった彼の側に紅いフリルが広がる。クロアは咳き込みながら見上げる

「まったく…派手な砂ぼこりが見えたと思えば何死にかけてるのよお、新人クン」

につこりと笑いながら、ギリギリと耳を引っ張る。痛い。

クロアはその手を払いのけて大男を見る

アイツと対峙しているのは楼騎。蒼い刀を構えていて数枚の呪符を既に手にしている。短期決戦か、警戒しているのか楼騎は動かない
「『パワフルリング』：厄介ね」

エアリアルという言葉にクロアは首をかしげる

「あれはね、力場系っていうのよう…あれは『武器の有効範囲内ならば自由に力に干渉』することができると。ようは最強の盾ね」
重要なことをサラッと説明する。最強の盾とかないだろう…

楼騎を見る彼は静かに呪符を使う。三枚の『月』と名のつく呪符は鮮やかな閃光を放ちブロウの腕を捕らえる。

三枚の符はそれぞれ『眉月』『下弦の月』『幽月』の名を持っていて楼騎の幽月によって放たれた。

「…効かぬ」

そう呟いた時、紅いフリルが大男の目に映る。そこから白い足が伸びて

「ごめんねっ」

顔を踏みつけた。

不意打ちにして非道。エアリアルはちょっとだけ反省しながら楼騎の隣に着地する

「他のが来る前に終わらせるぞ」

二人はそれぞれ一枚のカードを抜く。そして、楼騎は左の頬のそばで、エアリアルはカードに口付けて、叫ぶ

「薙払え『朧月夜』」

「貫け！『必中の神の槍』」

幽月は闇を纏い、エアリアルは長い槍を手にする。銀色の穂先に簡単な飾り布が結ばれただけの素槍に近い形状だ。だが

槍投げの構えをしたエアリアルからは、一片のおとなしさも感じられなかった。呼吸が止まるかのような威圧と絶対勝利の意思、それらが激しく強大に渦巻いている

「…塵も残すな」

二つの、莫大な力の奔流が襲いかかる。扇型の特大範囲を覆った『朧月夜』、そして神威を得た最強の槍『グングニル』。

面と線の力の塊に大男が吸い込まれて……いや、変なものが飛び込み男を宙に打ち上げた。

「グリダ・アルビナ」

そんな名が聞こえた。

白亜の大斧：形はシンプルな薪割り斧だ。そこに紅い紋様が描かれており奇妙な瞬きを見せる。振り上げられ振り下ろされる一瞬はクロアの両眼にコマ送りで映し出された。

『必中』の槍は狙いを外すまいと空に浮いたブロウを貫き、貫通してエアリアルの手に戻る。そして、残された『朧月夜』へと、薪割り用の実に三倍はあろうかと思われる巨大なる兵器が打ち据える。儂げな音を立てて『朧月夜』は砕け散った

「…主の道を塞ぐのは許されない」

緑色の髪をもつ、細身の男は地面に食い込んだ斧を引き抜いて三人を睨み付ける

「…ゾルア」

ブロウは貫通した傷口を押さえながら、虫の息にもかかわらず呟いた
「黙れ。お前は存在する価値もない」

細い腕一つで掲げられた斧は鈍い音をたてて地面に穴を開ける。巨体が金色の粒子になって消え去るのを待たずに斧は引き抜かれて振り下ろされたエアリアルはその光景を『信じられない』とばかりに見つめていた。手には舞い戻ったグングニルが握られている。

「仲間じゃないの?!」

ゾルアと呼ばれた男は冷たく笑う。

「…主の期待に添えなければ、存在する価値などない」斧から土がパラパラと落ちて唯一疲弊しているクロアに向けられる

「ラムダ」

ポコッ、と空間に気泡が現れる。白いような水色のような不思議な泡は穴となって広がる

「濡らせ、ルージユ・アン」
冷徹な目をした女がまるで弓を引くようにしているのが穴越しに見えた。

無意識に手を前に出して、盾にする。

とすつ、小さな音と大きな痛みが駆け抜けた！痛みは腕を抜けて胸に届く。

「ぐつああつ」

思わずその場に倒れる。紅い、レイピアのような物が貫いた手から赤が一つ滴となって落ちていく

「新人クン！」

神威の槍が構えられる

「エア！こつちも来るぞ！」

クロアに突き刺さった武器を拾い上げる、白い服を着た女を見て、迫り来る白亜の大斧を見る

やばい

ただ、それしか思い浮かばなかった「仕方無い」

楼騎が小さく呟いて「紅い刀」に手をかける。普段は抜かない、宝刀を

「水面に映せ鏡像の月」
みなも

解き放った

「『水映月』」

紅い刀身が姿を見せる。幽月とは対照的な色使いの刀は抜かれた瞬間に光の爆発を見せた。

幾筋もの光の軌跡、月が扇が白亜の斧を打ち、削り、砕いた。

ゾルアは啞然として幅広の鉄塊を見つめる

「まさか、上級ランカー以外に抜くことになるとはな」

紅い刀が血飛沫を作り上げたすぐ目の前で血が滴る。

クロアは引き抜かれた剣から垂れる自分の血を憎々しげに見つめる
「主に害なす者、この世界にいること叶わず。また、許さず。」

刀が突き出される。

「一つの紅になりなさい」
ルージュ・アン

クロアは迫ってきた剣を避けて、呪符で反撃する。初級の火炎符は容易く回避されて腕を踏みつけられる

「ぐっ…」

「逃げられると思いましたが？」

グイツと腕に力が加わる

「今頃、ゾルアがあの人を消しているでしょう」

その時、猛烈な光が二人を包んだ。

眩しくて思わず目を閉じる

「なっ」

小さな声が聞こえて腕にあった圧迫感が消える。そしてクロアの体が後ろへと引きずられる

そして、仄かな温もりを背中に感じたエアリアルは楼騎が刀を解放した瞬間に走り出した。

「水面に映せ、鏡像の月」

後ろから聞こえた言葉に少しだけ身を竦める。直後に起きた光にエアリアルは姿を紛れさせる

白い服を着た女がクロアの腕を踏んでいた。だから彼女はその人物に肘の一撃をいれてクロアを退避させる

「新人クン！大丈夫？」

半ば抱きつくようにして引き寄せたために端から見たら後ろから襲ったようにも見えた

「っ…傷口触んじゃねえ」黒髪の少年が腕を払い除ける。

エアリアルは少しだけ傷つきながらクロアの前へと立ち上がる

「…エアリアルね」

「ラムダ、だつたわね。私に勝てると思う？」

かなり挑発する。対する女は首を横に振る

「無理。コレじゃ勝てない」

エアリアルは優しく笑いかける。そうでしょ？と

「だから、破棄」

紅い細剣を投げる。カシャン、と砕けた武器をよそにラムダはカードを解放したスツと上げられた細く白い腕の先には箱が描かれたカードが握られていた。女はその名を叫ぶ

「開け『宝石箱』」

紫色の箱が現れて、開く。中からいくつもの宝石が現れてラムダの周りを浮遊する

「『アンバー・アクセス
琥珀の大斧』」

黄色い宝石が手に収まり、琥珀色の透明な斧に変わる。形は攻撃部分が大いバトルアクセス。『グリダ・アルビナ』とは逆位置にあたる威力よりも命中に重点を置いた形だ。

…もつとも、威力は申し分無いのだが

「さあ、宝石に血の化粧を。」

第八章 三人の難敵（後書き）

あとが『占拠中！』

クロア「…マイク入ったな」

エア「後書き占拠完了ねっ！新人クン」

楼騎「いいから、始めるぞ」

クロア& amp; エア「何を？」

『…』

楼騎「…白燕からの伝言は？」

ヨロワ「『つかれました、さがさないでください』だよっ！」

『…』

楼騎「ちよつと斬ってくる」

エア「ストップ！楼騎！」

エア「これってチャンスよう」

クロア「チャンス？」

エア「そう！私たちが全てを無視していられる場所…」

エア「って訳でゲストかもーん！」

クロア& amp; 楼騎（こいつ…！）

ブロウ「めんどくせー」

三人（…？）

ブロウ「なんだよ主って、アルジなんか言わねえよめんどくせー」

…
三人

ブロウ「つたくよ、ゾルアなんか死ねよ」

エア「やさぐれてるうー」

楼騎「…時間ねえな」

ブロウ「おい、出番無い奴」

クロア「うつせえ」

ブロウ「呑もう。今夜はコーラで酔おう」

クロア「んなつ、おい！放せー！」

楼騎「amp・エア」…」

楼騎「次回の後書きはマシにしようぜ」

エア「ぐだぐだだったからね…」

第九章 宝玉と犠牲（前書き）

ゲームファンタジー！

前書きこれだけでもいいよね！（駄目だろ）

今回はちよこつと悲しめ？愛する女の苦悩とは！

崖の上で犯人は何を思う？

ご期待ください

第九章 宝玉と犠牲

グンツ、と琥珀の大斧が天へと掲げられる。目で追う二人は直感的に『ヤバイ』と思った。

「『千年の化石』」

静かに告げられた技に二人は後方退避を試みる。まあ、案の定逃げ切れはしなかったが：

打ち据えられる琥珀は地面を割りその亀裂から衝撃波を放出する。

エアリアルはステップで直撃を避けるがクロアは足を掬い上げられてしまう

「対空斧技『アングレス・スカイ』」

斧を低く構えたラムダは、ゆっくりと、そして力強く手にした巨大な寶石を投げた。

「くっ…：そ！『パリイ』」

咄嗟に引いた回避の呪符。

斧を受け流して直撃を免れる

「貫け」

地上から射抜くように鋭い、金髪の武器の解放宣言が聞こえた

「『グンツニル必中の神の槍』」

鋭い光と共に『必中』の槍が投げられる。神の槍は寸分違わずラムダの心臓を狙いそして

「『クオーツシールド水晶結界』」

弾かれた。

「なんでえ?!」

半分絶叫に近い声の隣に蒼碧の少年が落下する。鈍い音がして少しばかり身悶えしてはいるが問題なさそうだ

「大丈夫か？」

「お返しするわよう」

帰ってきた槍をクロアの眼前で受け止める。槍は一瞬で光をはせて

その役目は終わったばかりに金の粒子になって霧散する

「時間切れね。私の勝ち。」

ラムダが宝石を引き連れてやって来る。浮いているのはあと六つ。全てが先程の水準ならば勝ち目は薄い

「ちっ…」

白陰、黒陽はここから30mほど離れた砂地に突き刺さっている。パッチワークのように様々な大地が繋がるテストステージに勝ち目がありそうな場所を探す。

岩山のような凹凸や、ビル群のようなirikunda場所…、なんでもいい。時間が取れそうな場所は…！無かった。

そんな場所も、エアリアルも、全ては遠く離れていた。

「ちっ…」

二度目の舌打ちをする。

エアリアルも逆転のチャンスを探っているが、見つからないようにで歯噛みしている。

「終わりよ。『紫』」

「炎剣『フランメリーゼ』」

素早く解放されたレイピアが宣言途中のラムダを貫く。不意打ちの、禁じ手だった。

「ぐうっ」

一撃の威力は低いレイピアを再び突き立てる。

「きっ！」

白い、華奢な二人の体がぶつかり、エアリアルが突然叫ぶ。痛みと、苦痛に絶叫するエアリアルを五つの宝石が貫いていた。紫色の、水晶がだ。

「『アメジスト・クロウズ
紫水晶の爪』」

ズツ…と引き抜かれて華奢な体が粒子に変わっていく。髪と同じ、綺麗な金色に…

「ごめんね…新人くん…負けたわあ…」

最後に笑って、エアリアルはこの世界から退場した。リアルで機械

の作動音を聞いたような気がした。

「…まず、一人」

傷口を庇いながら、鉤爪のような鋭い爪の武器を構えて女がやって来る

「…二人目」

苦しそくに腕を引いて、クロアめがけて突き出す。全身が震えた。自らの死を理解した瞬間、何がただか分からなくなって分からなくなったらわからなくてワカラナクナ…

「ガアアアアアアアアア！」

吼えた。

無限に続く自身の思考を断ち切るように吼えて、狂ったように迫り来る爪を受け止める。血が目に入ってもまばたきすらせずに

「ラアッ！」

狂える猛獣の如くラムダを弾き飛ばす。彼女は軽く5mは飛ばされて、白い床の上に転がる

獣となったクロアは自身の武器を指で招く。すると双剣は30mの距離を飛んで手に収まる

「『混沌幻影』」

二つの剣は形を失い、一つの大剣に変成される。酷く禍々しい、ギザギザとした刀身に漆黒の爪跡のような紋が刻まれた剣を片手で握る

「ガアアアアアア！」

吼えて振り下ろす。ほら、これでお前もおしまいだタンツ、と容易く銃弾が胸を撃ち抜く

「ぐっ…」

振り返ると、白い、嫌なガキが銃を片手にこちらを見つめていた。銃口からは白い煙がたなびいていた。

「主！」

「伏せていなさい！」

次弾装填。鈍い機械音が響く

「伏せる！クロア！」

和装の楼騎が間に割り込み、クロアを突き飛ばす。その拍子で剣が手から離れてカランカランと地面に落ちて回る

パタツ、と目の前を汚した血にクロアはハツとする

「俺は…何を…」

カチャン、と金属が触れ合う音がしてクロアは地面に転がる双剣を見る剣は『何故か』身をよじったように捻れていて、苦しみを体現したようになっていた。剣は数秒の間をあけて姿を金の粒子に変えてしまう

「…っ、ルイエスめ…腕を上げたな」

クロアを守るように立ちはだかっていた楼騎が半歩後退して呟く。腕と、額から血が流れていた。

「クロア、動けるか？」

「ああ。動くだけならな」

それを聞いて楼騎はかすかに目を閉じる。そして告げる

「逆転する気はあるか？」

クロアはグシャグシャに塗り潰された紙のような思考の中でその問いにイエスと答えた

「よし。唯一の逆転の策を教えてやる」「ゴニョゴニョとしている二人を前に、ルイエスは銃を構える。

「主…申し訳ございません」

「気にしなくていい。他が使えなかったただだよ」

ラムダは、少しだけ目を伏せる。

主と呼ぶルイエスの側にいられるのは彼の部下の上位三人だけ…。

そして今、ラムダの順位が上下が消えてしまい彼女自身傷を受けている。

完全勝利は絶望的

彼女はほんの僅かでも勝率を上げられるように周囲を観察する…。

と、ある物に気がついた

「あれは…」

小さな呟きに、ルイエスは顔を上げた

「…というわけだ」

楼騎は作戦を伝え終える。クロアはそんなのありかよと言わんばかりに唇を尖らせている

「逆転だぞ。ほら立て」

蒼紅の刀を持つ楼騎の秘策になんか納得いかないなど無言の抗議を行いつつクロアは立ち上がり、姿勢を低く構える

「三十六計」

楼騎の小さな言葉につられたのか緩やかな風がふわりと砂を舞いあげる。楼騎は瞳を閉じてゆっくりと深呼吸する…そして

「「戦略的撤退っ！！」」

二人同時に脱兎の如くルイエス達と反対方向に走り出す！

それを見たルイエスとラムダは一瞬だけ呆気にとられて、ラムダの方が早く正気に戻った。

「待て」

紫の爪を重そうに引きずりながらラムダが立ち上がる。走り始めるまでにかなり時間がかかったが走れば追いつくのは容易い。

『追いつける』事をイメージすればいいのだから…。

一方の二人組は全力で草原を突き抜けて、隣の無意味な石畳のエリアを抜けて岩が転がる場所に逃げ込んだ。

「こっちだ。」

ちよい、と楼騎が手招きした場所に行く。そこは人の丈ほどもある岩が二つ重なって小さな空洞を作った場所で内部からはゴウンゴウンという機械音が響いていた。

「転送装置だ。これで跳ぶぞ」「跳ぶって…どこへだ？」

楼騎は一瞬考えてから答える

「滝さ」

そう言っただけで彼は装置に入る。踏み込めば体が消えて別の場所に転送される

楼騎の体は消えて、その後に行く

「見つけた」

岩の上から上下逆さまになったラムダが現れた。クロアはひっ搔かれないように気を付けて転送装置に飛び込んだヒュンというありきたりな効果音を聞いて景色が見えなくなる。一瞬で相当な距離を進んで再び景色が見えてくる

「…っ」

蒼い空に荒涼とした地面、そして後方で重力に引かれて轟音をたてている瀑布…クロアはあまりの変化に戸惑う

ゴウンゴウンという音が聞こえないほどの音に少しだけ顔をしかめる
「どうだ？感想は」割と最悪だ…、と答える。慣れない感覚に吐き気を覚えた

「さて、おでした」

ヒュンと一人の少女が転送されてくる。一瞬戸惑いを見せたがすぐにアメジストクロウズを構え直して戦闘体勢になる

「主の敵…。消えなさい！」

「悪いな、新人の前で負けるわけにゃ行かねえ！」

キン！という音と共に小さな火花が二人の間に散る。刀と爪が高速テンポで無機質な音楽を奏で、二人の武器捌きは一層鋭くなる

「くっ…攻めきれない！」

「足！」

一瞬だけうまれた隙に楼騎は叫ぶ。慌てて庇おうとしたラムダの爪は防ぐにはあまりにも遠すぎて…

「…」

時間が止まった。

極限まで張り詰めた空気が心臓を圧迫する…そして、時が止まったのではなく全員が身動きできないのだとクロアは悟る

「…何故」彼女の爪の下をくぐった刀が足の上数ミリの場所で完全に動きを止めていた。本当に、時間が止まったように…

「…おい」

「動くな！二人とも！」

緊迫した声にいかぶしむ二人は怯む

「あの野郎…！」

楼騎がガラにもなく悪態をついて罵る

「こいつの体にトラップを仕掛けやがった！」遠く離れた場所でルイエスは一枚の呪符を使用した。

「畏符『贅の乙女』」

砂が舞い上がり、彼の服にあたって地面に落ちていく

「ククク、最後の終わりに相応しいじゃないか」

一人笑って、呪符が消えないのに眉をしかめる。どうやら奴らは気付いたようだ…。舌打ちしてさらなる畏を使う

「畏符『光の導火線』」

トラップに反応して、触れるだけで爆発させる補助型の呪符だ。今頃、捨て駒の周囲を覆っているころだろう…

ルイエスはゆっくりと使えない部下が走り去った方角を見て呟く
「僕が出るのもいいかな」

ふふふ、と笑って彼はゆっくりと歩き始めたクロアは戸惑っていた。目の前に淡黄色の光がたなびいていて、それらが渦を巻くようにグルグルとゆるく円形の形をとっていた。そして、それに触れるなど言われているのだ

「何だよ…これは」クロアが呟く。ラムダが酷く小さな声で答える

「『光の導火線』…そんな」

口調こそいつも通りだったが、目には落胆と絶望が浮かんでいた。

彼女は何を思っているのか…クロアには知ることが出来ない

「…もう、用無しですか？」彼女の言葉はその場にいた者にとても鋭く響いた。二人の男は何も答えられなかった

「…ルイエスは、そういう奴だ」

楼騎は苦々しそうに呟く。ひよっとしたら、こいつはルイエスの行動を予想していたのではないかとクロアは思った。

理由なんて無い。ただの勘だ。

だからこそ逆に気になった

「くそっ、これはどうすれば消える…！」

ガチャン、と誰も気付かない機械音が響く。クロア達のいる滝の上を微妙に上回る位置に巨大な三脚が鎮座していた。

比較的大きな岩が転がる山のような場所でルイエスは片目で狙いを修正する

「まずは…クロアだ」

カチリ、と巨大な三脚のトリガーを引く

轟音と共に金色のベルトが三脚に飲まれていき、そして…光の導火線に触れないようにしながらクロアは移動していた。とりあえず二人に近付けば何らかの解決法があるかもしれない…そう考えたのだ
「じれつたいな…」

頭の横を光が撫でるように通り過ぎる。割と動く範囲が大きいので足を止めてタイミングを計る

ブオン！と耳元を豪速球が掠める

咄嗟に振り返ると

金色の壁が迫って来ていた。

広範囲にばらまかれたかなり大きな銃弾が一秒の数十分の一の時間差でクロアの体を貫く！

「あがつ！」

思わず叫びが漏れる。クロアは次々に狙いを変えてくる銃弾を全てその身に受けて血の霞を作りながらかなりの距離を押しされる

「クロア！」

楼騎は轟音で異変を感じとって名を叫ぶ…、返事はない。

身動きできない状態でも、可能な範囲を目視する。…何も見えない。何も！

「クロア！答える！」

地面を穿つような音が終わる。

シンと静まった静寂に楼騎は最悪の結末を思い描く。新人の、リタ

イアを

「…一つ忠告」

楼騎は顔をあげる。ラムダが少しだけ笑っていた。

「導火線」

キイン、と光が物凄い勢いで焼失を始めていた。先程の銃弾で切れたのだ

「…くそっ」

周囲を取り巻く導火線が消え始める。精々十秒でラムダが爆発して…
トンツ、と楼騎は押されるのを感じる

「主の非礼をお許しください」

最後に笑って、彼女は消えた。

金色の粒子と紅い煙に変わって、この世界から消えた

第九章 宝玉と犠牲（後書き）

脱落者の宴

エア「あとがきすたーとお！」

ブロウ「…めんどくせー」

エア「今回は脱落者の宴つてわけでゲストかもーん！」

ゾルア & amp; ラムダ「どうも」

エア「行も無いので本題！」

「ルイエスとはどういう関係？」

ブロウ「…バイト主」

ゾルア「…の だから」

ラムダ「ごによごによ…だから」

エア「わ…わかんないよう。次！」

「好きなものは？」

ブロウ「…土佐犬」

ゾルア「鋭い物、それとダーツ」

ラムダ「小動物…あとは…ルイエ」

エア「もういいっ！」

『脱落者の一言』

エア「ラストー」

ブロウ「めんどくせー」

ゾルア「…撃死とか無いぞ」

ラムダ「爆死は嫌だ」

エア「爽やかに死ねるかバカモノー！」

シロツバ「打ち上げ行った彼らに代わり、一言…」

『質問受け付けます』

彼らに聞いてみたい事があればなんでも書いてください。
（たぶん）
答えてくれます

シロツバ「では、またお会いしましょう」

第十章 決着、そして歯車が噛み合った（前書き）

ゲームファンタジー！

最近小説を読む度に自分の力不足を実感しています…やっぱり皆さんには勝てませんm(_____)m
もっと頑張らなければ…（クロア達がね

最近あとがき占拠されたんで前書きと言う名の作者コメントとなりますね。うん

夜中に書くもんじゃないな…ワケわからん…（^^；
では、皆さんをこれ以上に混沌とカオスの世界へ引きずり込みませよう！

「異門『ヴァルハラ』の通行手形」！

第十章 決着、そして歯車が噛み合った

重く、低い音が轟いた。

目の前には、炎と赤黒い煙が渦巻くようにして空に伸びていた

「嘘だろ…何で庇った」

黒髪の青年が煙に向かって叫ぶ。ほんの数秒前まで人だった煙は当然何も答えない

楼騎はルイエスを探す。

近くにはいない。あいつの武器を考えたら狙撃と考えるのが妥当だろう…

幽月と水映月を構えて楼騎は神経を研ぎ澄ます…小さな音も聞き漏らすまいと静かに目を閉じるルイエスは砂煙と爆煙を見ていた。ユラユラと空へと伸びていく煙は彼の武器からも立ち昇っていた

巨大な三脚の上に設置された黒い機関銃に一度息を吹き掛けて煙を掻き乱す

「さて、次だね」

『弾丸装填』と書かれた繰符を使って弾切れの銃に黄金のベルトが装弾される

カチリ、とゲーム終了の引き金を引いたピクリ、と楼騎は反応する。風の流れが僅かに歪むのを感じて咄嗟にバックステップを踏んでその場から離れる

一瞬前にいた場所に金色の弾丸が突き刺さって砂ぼこりを上げる

「大口径…しかも機関銃か」

タンタンタン、と軽快なステップで着弾地点を紙一重で回避しながら滝へと逃げていく。

後一步で崖から飛び降りる、そんな場所で

「いつてえ…」

楼騎は左側に体を倒して金色の雨をやり過ごして声が出た場所を確認する

「ククク…お前もズタズタだな」

全身血まみれの傷だらけの新人が生意気な事を言っただけでやがった

「生きてたか。死んだかと思っていたが」

ほんの僅かに安堵する。が、じっとしているわけにもいかない。再び金色の弾丸が襲いかかって来ていた

「新人、飛ぶぞ」

「はっ…跳んだあとは飛ぶのかよ…好きにしゃがれコンチクショウ」
楼騎はクロアの手を取って引く。そしてそのまま、背負うような体勢にして落差10m以上ある滝を飛び降りた

身を切るような高揚感と、中身が浮き上がる気持ち悪い感覚。そして耳元で鳴る風の心地よさに両手に握った刀を強く握りしめる

水面が迫る

二人はまばたきもせず水面を見つめている。何故だか恐怖は微塵もなかった

水面に触れた

ザブン、と体が水を貫いて気泡を無数に生産した。そして二人の姿は見えなくなったルイエスは思わず岩山から下を覗き込む。元からこの銃は高低差に弱いのだ。なんとしても逃げた先を見つけなくては…

「滝の周囲にはいないようだね。となると…」

崖に空いた空洞を見つめる

少しばかり遊ぶのもいいかもしれないな

「大丈夫か？クロア」

暗い場所で楼騎は小さなランタンの光を受けながら呟いた。ランタンは周囲に散乱していたものから状態の良いものを選んで拝借したものだ

「なんとかかな…痛てえが少しばかり目が覚めたぜ」

ククク…と横たわったままクロアは笑う。二人の足元には水溜まりが出来ていた

「奴が嗅ぎ付けるのは時間の問題だ。クロア、動けるか？」
片手が上がって振られる。どっちだよ

「あんまし動けねえ…な」

クロアは一人だけ赤黒い水溜まりに触れる。少しばかり意識が遠退きそうになったが無理矢理引き戻す

「…そうか」

楼騎は考え込む。果たして逆転の策はまだ使えるのかを…

「やれるぜ」

立ち上がったクロアに気付いて奇策を思考していた楼騎は驚く

「勝てるんだろ…やれるぜ」

新人の言葉に、小さく笑う

「わかった。ならば次に移ろう」

そう前置きして楼騎は第二部分を伝える

「奴は必ず…」ガシャン！と金属の設置音が響く。二台の大型バルカン砲：その間に立ってルイエスは親指一つで使用できるスイッチに手をかける

「そこにいるんでしょう？ほら、出てきなよクロア！」

沈黙…ルイエスは小さく笑う

「ほら、出てきなよ。怖いのかい？」

ははは、と笑ってルイエスは『10』と叫ぶ。一拍置いて『9』、小さくなつていく数字を聞きながら洞窟の岩影から二人は様子をつかがっていた

「本当だな。まさか来るとは」

「だろ？バカなんだよ」

二人は手に持った武器を握る。クロアの手には紅い刀が、楼騎の手には蒼い刀が握られていた

「行くぞ」

『1』と叫んだとき、ルイエスは現れた二人を見て嘲笑する

「やっと出てきたね、待ちくたびれたよ」

「黙れ。繰符『月明かりの結界』」

世界が夜になる。暗い、星が瞬く世界が空を支配する世界にはただ、静かな静寂と、誘惑する満月が存在しているだけになった

「なんだ？これは」

ルイエスは空を見て、照らされる土の地面を見る。その瞬間に紅と蒼の軌跡が走った。

「しまっ……」

一瞬の差で二つの刀が二つの銃を切り裂いた。クロアはその時点で再び意識が遠退いたのを感じて軽く頭を振って引き戻す

「へっ……形勢逆転だな……」

金色の粒子の合間からルイエスの手に挟まれたカードを見つける。

クロアは刀を振り上げて叩き下ろす「双銃『リスプ・メイス』」

目の前に灰色の銃口が現れて回避する。直後にタン！という発砲音が頭を打つ

クロアは体勢を下げて背後に回り込もうと移動するがルイエスの左手はピタリと照準を合わせていた

タン！と発砲と軽い衝撃、クロアは右手が動かなくなったのを即座に感じて刀を左手で受け取って切り上げる

それを左手の銃で受けて後方へと受け流す。そのまま反転してルイエスは右手に握った銃を突きつける

「もういいや、死になよ」

強い衝撃が胸を撃つ。

心臓をほんの僅かそらした一発は二発となって再び逆位置に撃ち込まれる

「しぶといね。死を否定しているんだ」

ルイエスは薄く笑う。そして、三発目が……

蒼い一閃が鮮やかに見えた。

「水映月を棄てる。もうお前は休め」

ズズスキと痛む腕を押さえているクロアは再びグニャグニャとした思考の海に沈んでいた。痛みと、憤怒と、憎しみと、そして、哀れみ。全てを叫ぶ自分がいて、全てを否定する自分がある。

生と死、二つの境界すらあやふやな世界で彼は何かの解を求めた。
全てを壊せ

解は二つ

全てを知れ

選べるのは一つ、

結末は世界と共にある

無意識の意識の隙間に落ちた意識は完全なる二択に挟まれて動きを止めた。彼の心臓を弾丸が貫いても彼の意識は埋没したままだった。白い部屋にいた。

無限に続くような、広大な世界の中にはクロアと輪郭がはつきりしない人々が立っていた

クロア

高い声に呼ばれた気がした。

ずっと一緒にいようね

勝手なことを言っている声に小さく反発する

一瞬だけ沈黙があつて世界がボロボロと崩れていく。その崩壊はともはやくてクロアはあつという間に奈落へと落ちていった

クロア

低めの、だが幼い子供の声が聞こえる

クロア

最初に聞いた声と良く似た声が奈落に響いた。声はそれ以降パタリと途絶えて、クロアの体は一瞬にして金色の粒子へと変化したハツと眼を覚ます。

真っ白な空を見てまだここは『ヴァルハラ』かと驚く、が

「クロア！起きたあ！！起きたよう！！」

なんか騒いでるのがいるから違ったのだと気付く。だとしたらここは何処だ？クロアは周囲をうかがう

完璧に統一された白。

やや薄暗い独特な明かり

鼻を突く薬品臭

医務室だと理解した。

「あら、ようやくお目覚め？」

白衣を着た女性がカーテンをずらして一言呟く。その後ろでは金髪が楼騎を揺さぶっていた。顔が青くなっているのは無視するとしよう
「俺は…なんでこんなところに…」

ぼんやりとした頭では考え事に向かない…軽く頭を振って立ち込めるモヤを取り払おうとする

「アナタは気を失ったのよ。たまにゲームをプレイした後に気を失うのがあるから心配しなくていいわ」

『T』はそう言ってエアリアルを呼び寄せる。そして、何かを耳打ちしてカーテンの外へ出ていった

「心配したよ、まさかあんなになるなんて…」

…ん？なんかこの雰囲気じゃある

まさかとは思うが…

「また首の骨を折る気だったのか？」

彼女はぶんぶんと手と頭を振って全力否定する。ゲームの時とは別人としか思えないな

「こんな口調はこいつが心配してる証拠だ。少しくらい多めに見てやれよ」

カーテンを押し開けて楼騎が入って来る。どうやら生きてたようだ
楼騎は椅子を引き寄せて腰掛け、エアリアルもベッドに腰掛ける

「俺なんか何も言われないな」愚痴ったな。

「う…」

エアリアルは気まずそうにソップを向いて話が終わるのを窺っている

「まあ、元気そうだな。まあ三日三晩寝れば当然か」

「何だつて？」

クロアは一瞬自分の耳を疑う。何日だつて？

「三日三晩だ。こいつなんて昼間はずっと」

「わーわーわー！言わないでよお！」

アップパーが炸裂する。鮮やかに決まった一撃に青年の体が飛翔する

…そして、カーテンの外へと鈍い音と共に落着する…

ついてないな、クロアは同情する

「エアリアル：またやったの？」

至極冷静な声が聞こえて、減給だと脅す。彼女は驚いて謝りに行く
「やめて欲しくばこの資料を書いてある先に配って来てね」

「え…これ、百部以上あるよ…」

「走って！」

「はあああい！」

バタバタと足音が遠退いて。鮮やかに決まった一撃に青年の体が飛翔する…そして、カーテンの外へと鈍い音と共に落着する…

ついてないな、クロアは同情する

「エアリアル：またやったの？」

至極冷静な声が聞こえて、減給だと脅す。彼女は驚いて謝りに行く
「やめて欲しくばこの資料を書いてある先に配って来てね」

「え…これ、百部以上あるよ…」

「走って！」

「はあああい！」

バタバタと足音が遠退いていく。もうクロアには見えていないのだが不思議と泣きそうなエアリアルと意地悪なTの顔が浮かんできた

全てを壊せ

全てを知れ

同時に聞こえた言葉を振り払う

「俺は、知りたい」

シャツと開いたカーテンに少しだけ顔を上げる。Tが仁王立ちで待っていた

「聞くわ。アナタは何処にいたの？」クロアは思わず聞き返す。そしたらTはまったく同じことをやや強めに聞いてきた

「ゲームをプレイして気を失うのは稀にあるわ…。でも、それは数分程度、三日三晩、アナタのキャラクターは『死亡』していなかった。それに、反応も無かった。

「アナタは、何処にいたの？」

クロアは何の事かと聞く。Tはアナタの試合のことよ、と答える。彼は少しだけ考えてから何も覚えていないと答えた。実際は自分にも良く分からないのだ

「そもそも、俺がやられても『死んで』いなかったのはシステムのバグじゃねえのか？」

そもそも、只のプレイヤーである俺がシステム側の人間に分からないような事を知っているはず無いじゃないか、馬鹿馬鹿しい

「証拠でもあんのかよ」

Tは小さくうなづく

「一応…ね」

証拠不足だとわかっているのか彼女は控えめに口を開く

「今より一時間前、『クロア』の死亡を確認。そしてそれより16分後にプレイヤー『クロア』の意識回復。偶然は考えられないですよ？」

クロアは小さく唸る。確かに何かあったようだがどうにも釈然としない…なんなのだろうかこのモヤは…

「聞いてるの？」

クロアはハツとする

「BUGか？あいつらは」

いやだがしかし確証は無い上に何故そう思ったのかすらわからないが…

「クロア！」

Tの激しい一声に一瞬全ての思考にブレーキがかかる。彼女はまた仁王立ちしていた

「何か知ってるわね？」

彼は観念して白い空間と輪郭がはつきりしない人々のことを話す。もちろん、最後に夢だろうと付け加えて

「…白い空間に、人か…わかんないわね」

管理者もわからないらしい。どうにも納得いかないものがあるが…

嘘をついてるふうでもないので追求はしない

「なあ、俺はいつまでここにいたりゃいいんだ？」

クロアは狭い、カーテンで仕切られた個室を指差す。長い間いると居心地どころか気分まで悪くなってくる…

そう思った瞬間、頭に激痛が走った。そうまるで殴られたような…

そんないた…み

ドサリとベッドから落ちて鈍い音をたてる。後頭部に手刀をかましたTは小さく謝る

「ごめんね、場所を知られるわけには行かないのよ…」

彼女が立ち去った後には誰も残っていなかった。クロアの荷物がほんの少しだけ減っていたのを、数分後に戻ってきた二人は見抜けなかった二人は、何処に行ったのかと議論を始めた

第十章 決着、そして歯車が噛み合った（後書き）

脱落者コーナー P S . 『人生の』

クロア「…看板変えたやつ誰だよ」

クロア「しかも俺だけかよ…何すりゃいいんだよ…なあ、白燕よお
カンペ『繋いで！』」

クロア「もういいや、カギ括弧俺な」

「さて、俺の周囲の人間の話でもするか」

「ガルト。出番無いが俺の相棒だな。昔からの馴染みでな、小中一貫の制度のせいで軽く10年は続いてんな。うん。」

「エアリアルか…あいつはぶつちやけるとよくわからん。関わりと死ぬタイプだな」

「楼騎は…信用はできるな。ただ、苦手なタイプだな」

「双子？ああ、ノピアとヨロワか…どこ行ったんだらうな？子供は手加減を知らないから嫌いだ」

「ルイエス？死ぬよ」

「Dか…信用できないな。なんかわかんねえし」

「T？…なんだろうな、頭がいてえ…俺、なにがどうし…むがっ」

シロツバ「今回はお開きです。また次回お会いしましょう」

シロツバ「危ない危ない…」

第十一章 悪転の歯車（前書き）

ゲームファンタジー！以下略！

少し時間があきましたが、ようやく動き出す運命！（前も言った気がするけど）

物語は、加速する！（といいなあ

まえがきと称して煽り文でも書きちゃおうかな？これから

連れ去られたクロアの運命は！？とか

この力は一体：！？とか、たまにつけると面白い？かな？

ではでは、余興と書いてまえがきと読ませる部分は終わらせて、本編へどうぞー！

第十一章 悪転の齒車

暗い部屋にいた。照明がほとんど無い部屋に黒髪の少年がうつ伏せで倒れていた。

クロアだ

彼はズキズキとした痛みを感じながら細く目を開ける…

「いつてえ…」

小さくうめく。そして疼く後頭部を押さえながら立ち上がる…普通ならば数秒とかならない動作に数十秒かける。全身が気だるいのだ立ち上がり、フラフラと二・三步後退した時に部屋を囲むように白い光が点灯した。それらは縦に一筋の灰色の線を持っており、全てがクロアから等間隔で5メートル程の位置に存在していた。数を数えると26個あった。

「クロア…君は様々な規則違反の疑いがある」

男の声が響く。いかにも規則に忠実そうな声だった。

「罪状を、S」

別の人物が返事して告げる

「ゲームバランスを崩しかねない悪質なチート行為、及びツバインとしての能力の誇示、及び不良データとの接触行為。それに付随した数件の違反行為です」

うむ、とどこかで聞いた声が聞こえた

「何のことだ！」

とりあえず、無条件でムカついた。

「黙れ。君に発言権はない！」

「よせ」、少しくらい反論がないとつまらないだろ？ヘラヘラ」

…何だか聞いた声でした。というか悪寒がした。

「D、お前のは私情じゃないのか？」

「儂は違うと思うぞ」

何故だか険悪な雰囲気になっている…俺、なんもしてないよな

「本題が進んでないですよ。ほら、S」

先程勝手なことを抜かした奴が咳払いしてから再び口を開く。簡単に趣旨の確認をしてからまた『違反』を並べる。言いがかりだ。

「さて、異論はあるか？」

大層な口ぶりにクロアは呆れる。

「ありまくりだな…馬鹿共が」

何人かが、ほうと感心するように小さな声をあげた。

「…いいだろう。奴を処刑台に連れていけ。話す気にもなるだろう」

「Y！それは横暴すぎる！」

「はい、Tの意見に賛成します」

「なら、私を含めて反対三票だねへラへラ」

コホン、と小さな咳払いの後に会場が静まりかえる。

その後に採決が行われて反対は押しきられた

「では、クロアをログインさせる」

ガシャン、という機械の作動音と共にすぐとなりの床が円形に割れて左右にスライドする。そして中からやや古ぼけた機械が姿をあらわす

ヴァルハラにアクセスするときの機械なのに、なぜだか禍禍しい雰囲気を感じる

「はっ…管理者と殺り合うのか…おもしれえな」

彼は椅子に体を埋めさせる

機械が手足を押さえて頭を軽く締め付ける。黒いヘルメットのような端末が視界を覆い、意識が薄れていく

やっと来てくれた

かんだかい声が聞こえた気がした黒い世界に世界の構成物が現れる。下から上へ、そして上から下へと世界が組まれていく…

クロアは世界が完成した瞬間に白陰と黒陽を両手に握る。世界はどんなよりとした曇り空で赤茶けた土の丘を薄暗く照らしていた

「さつさと来いよ。俺はそう簡単には死なないぜ？」
フォン、と普段は見慣れないエフェクトで26人もキャラクター
がクロアの立つ丘の麓に出現する

「言うな たった一人のプレイヤーが」

白い羽織に萌木色の和装を着た人物が余裕そうに叫ぶ。先程聞いた
声だから…『J』だろうか。比較的知り合いが少ないので彼らの把
握は難しい。

「ヘラヘラ、クロアも災難だな」

「笑つてないで助ける方法を考えなさい」

そんな声は蒼碧の双剣士には届かず、Jの解放によって開戦の火蓋
が切られた「貫け！『三叉槍』」

タンツ、という軽い跳躍と共にJが十数メートルも飛び上がり丘の
上に立つクロアが見上げなくてはならない程の高所で一瞬動きを止
める。

逆光…と言うほどでもないが夕陽がJの姿を見にくくしてクロアは
一瞬考える時間を作ってしまう

判別したのはJが一メートルほど降下した時だった。

距離はクロアの頭上三メートル、だが、槍を下に突き出していたの
で実際には五十センチもない…！

「くっ！」

黒陽でクロアの顔が映る穂先を弾いて、自然落下してきたJを左腕
で受けて、振り落とす

少しばかり無理な回避をしたせいか、受け止めたあたりがズキリと
痛んだ。

「やるじゃねえか、良い反応だ」

そうか？と答えて左手を前にして構える。痛みを気付かせないため
の演技…と言いたいが、勝つにはこの構えが良いことを彼は気付い
ていた

(奴の武器特性はわからないが…白陰ならば勝機はある！)

白陰の『特性付加』で何らかのデメリットを与えれば、相手も攻撃できまい。そう考えて相手の攻撃に対してのカウンターとして使おうと作戦をたてる

「止める、J！クロアも止まれ！」

「私達はあなたを消すつもりは無いの！」

二人分の叫びがJの機嫌を損ねたのか穂先は丘の麓に向けられる。

「うるせえよ！コイツが口を割ると？こんなチートプレイヤーに…」
「うるせえよ」

Jは、いつの間にか脇に移動してきたクロアの裏拳を受けて吹っ飛ばされる。地面を滑って止まった顔には二筋の紅い線が増えていた
「…てめえ！」
ヒュンヒュンと槍を回して構え直したJは鋭い、トライデントを思わせる槍を真横に水平に構えて走り出す
どこか虚ろな眼をしたクロアはそれを見て

「ククク…」

笑った。どこか壊れたような声で、壊れたような笑いを浮かべて…穂先を受け流した。

そのまま少しだけ体位を低くして、両手に持った剣で同時に一閃した時は戻り、クロアが連れ去られた直後の病室に二人の人影があった。

和装の青年と黒いハイネックとミニスカートの金髪の少女が部屋にいるはずの人物が何処に行ったのかと議論していた。

「ねえ、クロア出てくの見た？」

二人は一旦Jの指示で部屋を出ており内部の様子は知らない…。よって、二人には空白時間が存在しておりクロアがいなくなったのはその時間だと結論づける

「…中央管理室か？」 楼騎の仮説にエアリアルは小さく頷く。明らかな人払いと消えたクロア…平時ではないのは明白だ

「急ぐわよう！」

「ああ。行くぞ」

二人は病室を飛び出し、金属質の廊下にかん高い足音を響かせながら施設の奥へと走っていった。

その途中、すれ違った人々は何事かと口々に聞いていた数分後、二人は最後の扉を開けてやや緑がかかった照明を受けている廊下で息を切らしていた

目の前には、他の部屋の扉よりも大きい、防火扉のようなサイズのドアが立ちはだかっていた

「くっそ…何で俺達のカードを認証しない…」

楼騎が壁を殴り付ける。近くにあるカードを差し込むタイプの施錠装置は『入室不可』と赤い文字を浮かび上がらせていた。

「もう一度…こんどは…私のでやるわ」

『エアリアル』のカードを端末に挿入する。本来ならば中に保存されたデータで『入室許可』と緑色の文字で開錠されるのだが…もう何度目かの無機質な電子音と共に『入室不可』と表示が現れる

「うう…やつぱ駄目かあ…」

「くそっ！何かが進んでるんだ。俺たちの知らない間に…」

楼騎は珍しく声を荒げて叫ぶ

「管理者！ここを開ける！クロアはどこだ！」

何も返事はなく、楼騎は自分の無意味な行動に呆れる。自分達に知られないように二人の管理室への入室制限をかけているのだ…、無視するか、答えたとしてもまともな答えがあるはずもない

ガチャッ

「誰だ。今は取り込み中だ」

そう言って開いた後ろのドアを振り返る

…いや、ドアは閉じていた。

通路と管理室の間にあるような擬似的な部屋で二人は顔を見合わせ、扉を見る

『入室許可』と表示された端末の隣で扉が奥へと開いていく…管理室への扉が開いたのだ。「嘘だろ？」

楼騎は思わず呟いた。先程まで閉じていた扉が、突然開いた…。そ

んな上手すぎる話はおかしいだろう

「畏…かなあ？」

エアリアルが疑うのももつともだ。いくら疑似世界の死闘とはいえ、二人はこんな畏は質が悪いことをよく知っていた。

「…だが、今は入るしか選択肢はないな」

それには彼女も同意の頷きを返す。二人は左右に気を張り巡らせながら部屋に飛び込んだ！部屋は、沈黙していた。

いつもはなんだかんだと怒号や愚痴が聞こえる部屋には人影がなかった。

「おいおい…冗談だよな」

部屋を中心に聳える巨大なコンピューター以外には何の動きもない。目の前に見える塔のようなコンピューターは画面に揺らめきをみせつつ何かを表示する

クロアの放った双剣の一閃は鋭くJの体に食い込んで、血しぶきを撒き散らした。

「Jさん！」

「クロア！止める！」

SとDが叫んでいるが、クロアは少しだけ口元に笑みを浮かべているだけで聞いているのか分からない…。そんな彼を見て数人の管理者は武器を抜く！

「クロア、お前をデリートする！」

「おとなしく武器を捨てろ！」

双剣を見つめていたクロアは少しだけ躊躇って、剣を左右に軽く放る。管理者はその時に一斉に走り出して6メートル近い少し急な丘を剣が落ちる前に駆け上がり、そして

二人は、地面すれすれに落ちかけていた剣を一瞬で掴んで駆け上がった。管理者全員を切り裂いた瞬間をモニターで見ていて背筋に冷たいものが降りていく感じを味わっていた。

「いま、なにがあったの？ ねえ、楼騎。新しいPVプロモーションビデオだよね？ これ！ クロアの撮影かな？ ねっ！」

「ははは…と楼騎はひきつった笑みを浮かべる

「目が笑ってないぞ…お前もわかってるだろ」

これが、今おきてる戦闘だ。と言わずとも二人はもう一度モニターを見る。

どこか、夢を願うように。知っている友人に戻っているように…

「D、T、主らはどう思う？」

管理者達の戦闘にいたGが二人の『反対派』に問いかける。まるで、決断を迫るように

「…っ！」

Tが助けを求めるようにDを見る。彼もまた困っているようだったが…頷く

「クロアを…危険分子と認定許可します」

Gは、全員に武器を構えるようにと伝える。そして、Dも、Tも自身の武器を抜く…

「嘘！！危険分子扱い！？クロアがなにをしたの！ ねえ！」

エアリアルが柵から身を乗り出して叫ぶ。こんな場所からは聞こえないという常識さえも忘れていたようだ

楼騎が柵を握りしめているとき、モニターが白い画面に変わって黒い、やや輪郭がぼやけた文字が現れる

『ワタシはクロアを助けたい。』

楼騎は眉をひそめる。

文字が消えて次の文章が現れてくる

『手伝って…。まだ間に合う』

「お前は何者だ！」

その叫びに、うつむいていたエアリアルも顔を上げてモニターの文字に気付く

そして、次の文が現れる

『ワタシは、　、力を貸して』

文字化けしたのか途中の文字が読めなかったが…楼騎は承諾を伝える

『部屋の奥へ、そこから15m程の場所に黒い扉がある。そこを開けて、そして端末に『OpenLock』と入力して』

二人は頷いて、左右に走り出す。楼騎は左、エアリアルは右の扉を探す

扉は、直ぐにエアリアルが見つけた「Open!Lock!」

エアリアルが扉を開いた後、楼騎が手近な端末でパスワードを入力

する。

ガコン！と音がして扉の奥にあった通路の先の扉が開く。

二人は急いでその扉を目指して走り出す

一斉に攻めてきた管理者と言う名のアルファベットの群れに、クロアは赤黒く汚れた双剣を向ける。足元では痛みにつめく文字が憎々しげに見上げていた

「ククク…」

小さく笑った時、世界にノイズが走った。

「何だ？接触不良か？」

一人が呟くが、Gを含んだ突撃隊はその原因と対峙していた。

「駄目！クロアには触らせない」

一人の若い少女が全員の武器を不思議な力で受け止めていた。

「：BUGか！？」

一人が叫び、少女は精巧な人形のような顔で小さく笑う

「なら、どうする？おばかさんたち」

小さく手を振ると斬りかかった全員の武器の柄が持ち主の体に突き刺さり、貫通した。

「ぐっ！？」

かろうじて柄を受け止めたGだけは貫通を免れたが、目の前の少女は興味無さげに後ろを向く

「クロア、いこっ、もうこわくないから」

少女はクロアの頭を抱くと、周囲に波紋を生み出して消えてしまう後には、管理者だけが残されていた

第十一章 悪転の歯車（後書き）

脱落者の宴

J「ここは…なんだ？」

管理者A「あとがきと言う名のgggdコーナーです」

管理者B「ちなみに、本編の文字とは関係ありませんよー」

管理者C「まだ通行人程度の扱いです」

A& amp; B& amp; C「はあ…」

J「…」

J「気を取りなおして、行こうか」

A「先輩、なんでクロアを処刑するんです？」

B「超展開でわかりませーん」

C「解説をー！」

J「…いいだろう。」

J「クロアには前回のV S ルイエス戦で体力が残っていないにも関わらず生存し続けたチートの件がある」

C「証拠は？」

J「…ない。」

B「バグの可能性は？」

J「あいつはツバインだ。」

A「いえ…BUGじゃなくて…」

J「ああ…『ヴァルハラ』に不具合はない。全ては只のNPCデータに過ぎん」

A& amp; B& amp; C「ほんと？」

J「ああ。完璧なゲームだ。ああ」

A「でも、ユーザーからは軍用とかいう噂がムグツ?!」

シロツバ「ちょっとこっちへ来ようねー」

J「ふん、所詮噂だろう。」

B「でも、噂が本当なのは王ど…ムゲツ！」

シロツバ「はいはい、次は消すよー」

J「…、この作者はかなりのひねくれ者だぞ？1+1は『大差ない』
って言うよつな」

C「ですよねー、ってムゲツ!？」

シロツバ「さーて、静かにねー」

C「むぐぐぐぐー！（なにもしてないのにー!）」

シロツバ「さて、『皆様』地獄までご案内ー」

第十二章 模倣世界（前書き）

ゲームファンタジー！

今回は今までとちょっと違うお話です。そして、一つばかり警告文

『今回の舞台、再現しちゃ駄目だよ！』

はい、理由は読めばなんとなくわかるので省略。そして…

みんな、あの人を忘れてないよね？

白い子だけどさ。

影薄かったかな？とか反省…くそう

では、軽くネタバレしちゃったんで本編へどうぞー！）

（

第十二章 模倣世界

トクン、と、少女がこのゲーム空間に割り込んできたときに体が反応した。何かを求めるように、否定するように、期待するように、失望するように。何故なのか彼にはよく分からなかったが…ほんの少しだけ体が震えた。

「駄目！クロアには触らせない」

そう言った彼女はクロアの前面に障壁を展開して管理者達の武器の動きを止めていた。

誰かがBUGかと叫び、

「ならどうする？おばかさんたち」

少女は一度手を払うような仕草をして、全員の体を彼らの武器の柄で貫いた。

化物じみた一瞬、クロアは剣を握りしめて少女に斬りかかろうかと淡い思考の中で考える。

それを見透かしたのか、少女は振り返って、笑った。

「いこつ、クロア、怖くないから」

そう笑って、彼女はクロアの頭を抱いた。ふわりと柔らかい指が頬を撫でる…

何故だかその瞬間に争う気が無くなり、ひどい倦怠感にみまわれた…まるで、深い眠りに落ちるような…そんな…な…

クロアはゆっくりと目を閉じる。なんだか、世界が波打っているように歪んでいた…ふと、意識が覚醒する。

目を開くと…、何も見えない。目を開けてないのか？と思わず疑ってしまう。少しするとこの暗い部屋に差し込む薄明かりに気付いた。どうやら、目は開いていたらしい

クロアは至って普通な丸いノブの扉に手をかける…、比較的堅かったがそれ以外に特長もない扉の先には部屋があった。

およそ、六畳程度の板張りの部屋。部屋には中心に大きな机…テー

ブルか何かだろう、それと中型の棚と部屋の右側に暖炉、今の位置から丁度向かいにもう一つ似た扉があった。

「どこだ…ここは…」

そう呟いたとき、突然沸き上がった寒気でクロアはクシャミをする。そして、体にコートを巻き付けて、気付く

「…ヴァルハラなのか？ここは」

キャラクター『クロア』は現実世界にいないことに愕然とする。そして、自分の記憶をたどって…途中が不鮮明なのにさらに驚く

「俺は…管理者と戦って…？いや、戦ったのか？」

頭にかすかな痛みが走ってクロアは片手で押さえる

「うん、たたかった。そして、たたかわなかった」

幼い子供の声にクロアは驚いて顔を上げる。部屋の反対側のドアの前には幼い少女がいた。

身長は幼稚園児より少し上くらい、小学校低学年くらいだろう。そして、それくらいの幼いが整った少女を前にクロアは怪訝に眉をひそめる

「クロア、目、さめたんだ」

ニコリとした少女はクロアの元へ、テトテトとやって来て抱きつく「ずっと一緒！ねっ！」

いや、意味が分からん。とクロアは少女を引き剥がして目線に合わせる

「お前は誰だ。そしてどこだ。」

少女はちよつとだけ恨めしそうにクロアを見て、一旦目を閉じてから笑顔になる

「アレイア、ワタシはずっと待ってた」

やっぱり抱きついてくる少女を再度引き剥がす。少しばかり面倒だ「うう…」

ちよつと泣きそうにうるんだ瞳を前にしてクロアは罪悪感に襲われる…。今まで生きてきた中でも数年に一度しかないというのに、

「ううっ…」

クロアは口元をやや吊り上げる。

「ぴっ、ごめんね！お兄ちゃん！」クロアはズキリと心が痛む…はずだが

「…それはもうヨロワの専売特許だ」

「くっ…さきをこされてたか…」

小さく、何か聞こえた気がした。

目の前にいる少女に対して深いため息を吐く…。どうにもガキは扱いに困る。

クロアはここはどこかと聞く。

知らないエリアに放り込まれていて、ガキの子守りをしながら戦う

には少し…

「ぐっ…?!」

鈍い痛みが頭を走る

少女はスツとその場所に手を伸ばして、唄う

「ほら、わらおうよ。せかいにわたしがいるからね。ほら、わらおうよ。せかいはきみとわたしのせかいだけ」

痛みが薄らいでいき、やがて消えたクロアは意味の分からない唄を

歌った少女に驚きと、疑念の目を向ける

「何だ？それ」

「おまじない」

そう言った少女は無邪気に笑う。クロアにはわからなくとも彼女にはわかるものがあるのだろう、と無理矢理納得しておいて質問を続ける

「ここはドコなんだ？」いい加減、それくらい知らなければいけないだろう…。とりあえず普通の場所じゃないのはわかったが…

「『ミッドガルド』…エミュレートサーバー。」

…何だつて？

「エミュレートサーバー、模倣世界」

クロアは理解に相当苦しむ。何だよ、エミューだかなんだか知らないが日本語に直してくれ

少女はプクツとふくれてからちよつと考えて、日本語として変換する
「わかりやすくするとね、違法個人サーバー『ミッドガルド』。あ
なたのともだちとはかんけないよ」

ほうー、と頷いてから気付く。

今、コイツは何て言った？違法個人サーバー？いや、それよりも

「お前：ガルトを知ってるのか？」

その質問に、少女はビクツとしてから繕うように笑いを浮かべる…。
だが、どこか薄い笑い方だった

「知ってるんだな？」

少女は首を振る。

「ち、ちがうよ。その…上級…ってやつだから」

そうか、とやや疑いの込められた顔を返してからクロアは部屋の
外へと通じる扉を見てから、不思議そうに頭をかしげる

「この部屋は何だ？エリアなのか？」

少女が首を横に振る感触が伝わってくる。またくつついてやがる…
少し嫌気の指したクロアは引き剥がした後彼女を一步分間合いを開
けた場所まで持ち上げて、放した

「…少し、見てみるか」

クロアが一步進むと、少女が手を勝手に握って、ぱあっと笑顔になる

「なら、あんないするね」

「おい、いいって！俺一人で…」

先行した少女がまるで雷にうたれたような驚きを見せ、クロアは
「…いや、走ると危ないからな」

渋々折れる。

「うん！じゃいこうよ！」

元気な掛け声に、クロアは小さくため息をついた円形のノブを回す
と、キィ…という錆びた蝶番の音が聞こえて外に世界が広がる。

どんよりとした曇天に、どことなく廃れた町の雰囲気をかもしだす。
まるで

「ゴーストタウンだな」

クロアは独り言を呟く

扉を閉めてから二人は町の中を歩いてみる。廃棄寸前のような町には意外にも人がいたことに驚く。まあ、『ヴァルハラ』で見かけたような人々とは雰囲気違ったが…エミュレートサーバーとかいうのならば日常茶飯事らしい

体の一部が透けているもの、どう見ても獣人のキャラクター。そして「んぎゃあだろうえあ!？」

…アレイアがぶつかっただけでなんか絡んでくる奴…、現実とあまりにも変わらなさすぎる行為に思わず苦笑する

「んだろおうえあ!？」

「日本語喋れ、つの」空間からカードを抜き出し、無骨な大剣をその手に握る。久々に手にした『灰色の長剣』にクロアは懐かしさを感じる

「やるんぎゃあゴリア!？」

「…」

静かに構えて、両眼を見据える

そのまま互いに身動きせずに見合う…すると

「…何してる」

何故だか、聞き覚えのある声が背後から聞こえた。

「ぶ…ブロウの兄貴!すいやせん!」

お、日本語話せんじゃねえか

…じゃないな

「まさか…な」

振り返って、ブロウが凄まじい表情でこちらを見ているのに気付く

「クロア…!!」

貴様の、せいで…と腕が天の方向へ昇っていく

…あーこりゃヤバいな

そう感じてクロアは少女を抱き寄せてから後ろへと跳躍して距離をあける

少しばかり厄介な事になったものだ「…」

なんだか複雑な表情で見上げている少女に小さな声で聞く

「悪かったな、怖かったろ？」

ふるふると否定されるが、クロアは離れてる、と警告してからアレイアを放して剣を握る。

半回転するようにして立ち上がったクロアはブrouに対峙する

「…こいつに手を出すなよ」

何故だか、その呟きは祈るように聞こえた

「…」

返事は無音、だが、必要ないと目が言っている。

「行くぜ」

タンツ、とその場から素早く距離を詰める。始めは十メートル、今の距離はたったの二メートルだ。

半身をひねりながら速度と遠心力、ついでに体重を乗せた一撃を叩き込む

鋭く空を掻いた剣先は地面を砕いてたいした舗装もされてない道を削る

「…」

剣戟をユラリと後ろに下がって回避した巨腕の大男はクロアの開いた掌よりも大きい拳で横尻ぎに払う

クロアは回避しようとして、予想以上に深く地面を抉った剣を呪う。ほんの僅かな差でクロアは掌の一撃をまともに受ける

「かつは…」

宙に浮いたクロアをブrouは左手をやや下に傾けて、叩き落とす！ベキツ、という音と共に地面に亀裂が入り彼は小さく痛みにつめく

「…」

無言で掲げられた両手を睨む。どうせヤラレル…なら、最後まで抗うべきだろう…

「っ…」

感覚がばやけている右腕は諦めて左手で虚空からカードを抜く

「炎符『火の粉降る夜に』」

ボウツと輝いた呪符の力で世界に僅かな火の気の群れが変成されて、降り注ぐ

ブロウは自身に対して脅威になりえない、と判断する

「合成符」

一瞬だけ火の粉に気を取られた際にクロアは次のカードを引いて、叫ぶ

「『火炎弾』！」

ズドン、と放たれた呪符の力にブロウは跳ね飛ばされて一メートル程度後退する。たいした距離ではないが今のクロアにはそれが精一杯だった。『彼』はいつものように暗い町を歩いていた。

いつものように暇な、それでいて全員が何かしら共有しているような：そんな奇妙な感覚を持つサーバーでふと気付く

人々が何故か一カ所に固まっているのだ。まるで、円のようにな：

「まったく：人を呼び寄せておいて：どこですか？ねえ」

と、まあどのあたりにいるかの見当はついているのだが形式的な愚痴をこぼしておく。

彼はワイワイと賑やかな人の柵を掻き分けて内側へと入っていく

「通して下さい」とか

「通ります」とか言いながら来るあたり、彼の根の優しさが見え隠れしている本当に人が多い：と彼は呟く

いつも以上に多いらしい。はて、なにがあつたのだろうと彼は頭の中にある予定で黒く染まったカレンダーを思い浮かべて、頷く

「ああ：今日はブロウ達の集まりでしたか」

穏やかそうな、知的な声で目の前が開けた場所で呟く。

「：若草」

目の前に、呼び出した張本人が座っていた。幼い、白い肌に白い髪、さらには白い小さな服を着ていて、雪原にいたら気付かないと思う少女だ。「あれあれ：彼は誰です？」

若草色の和装：を若干アレンジして上掛けをベストのように、そしてところどころに菊や飛んでいる鳥の刺繍が施されている。目はキ

ツネのような糸目、髪は金毛

彼は丁寧な物腰でアレイアに接している

「ああー、あの人ですね。この間聞いた人は」
少女はコクンと頷く

「でも死んじやいますよ？助けなくても？」

少女はフルフルと首を振る。

ちよつとだけ躊躇ってから

「はなれてる…って」

彼：名は若草という人物はカラカラと笑う

「ならば私が手助けしましょうかねえ？」

若草の目の前に火の粉が舞い落ちる。どうやら、あの人もまだ戦う
気らしいですね。

彼はヒュウン、という奇怪な音と共に空中に、まるで画面が割れた
ようなモザイクを生み出す。内部では武器がゲームのロットのよ
うに高速で変化していた。

「開け」

彼の目の前で『火炎弾』が大男を吹き飛ばす。一メートル程度だっ
たが、彼には嬉しい修正だった。

「『パンドラ』『ズダン！』と目の前のブロウが吹き飛ばされて、ク
ロアは目を見開く…」

金色の粒子に変化していく大男が姿を消したときによくやく自体の
半分を飲み込む。

後ろを振り返り、一人、巨大な回^{リボルバー}転式弾倉銃を手にした人物を見つ
ける。

銃全体で一メートル近い、もはや大砲。それを手にした人物はクロ
アに笑いかける

「はじめまして、あなたを強くしに参りました」

何かを値踏みするような目に、クロアは少しだけ敵意を覚えた…

第十二章 模倣世界（後書き）

脱落者の宴

ブラウ「…またここか。」

「…」

「…」

と、ここでスタジオに波紋が現れる

アレイア「しゃべりなさいよ」

ブラウ「…無い」

アレイア「やれやれ。全然駄目ね」

ブラウ「お前…？」

アレイア「あははっ、ばあーか」

アレイア「油断しすぎよ。そんなだからやられてるの。おわかりい？」

ブラウ「…！」

アレイア「ふふっ」

激しいノイズのため確認不可能。

以降はバックアップを復元したものだ

アレイア「あっはっは！死んだ部屋で死んじゃ意味無いわねえ！あっはっはっは！」

アレイア「さて、戻ってあげますか」

アレイア「『この子』のクロアの為に。ね」

これ以降は復元できなかつた。

部屋に残されたのは金色の飛末と

『神影八我二有り』

と鋭利な何かで刻まれた文字だけだった…

第十三章 それぞれの決意（前書き）

ゲーム（略）

前書きです。

とりあえず叫びたい。

「久々に5000文字オーバーしなかったよ!!」

うん、最近文字数やばくって…よかった（〇―）（〇）

毎回毎回長い文章を書き続けられるのは皆さんのお陰です* 〇（

ノ祝PV9000

もう少しでPV10000…きゃっほい（〇）（〇

さてさて、それでは本編に行きましょう！

第十三章 それぞれの決意

「はじめまして、あなたを強くしに参りました」

そんな言葉に素直に頷く馬鹿がしようか。蒼い、やや碧を含ませた色の…瑠璃色と微妙な差を持つコートを着た少年は鼻で笑う

「はっ…俺を強くしに？馬鹿か？」

声をかけた糸目の…どことなくハッキリしないが男性と思われる人物は

「はい」と笑う

「弱い人は生きてる事はできません。それは道理とは関係無く、生物学的に説明されます。

弱肉強食…ってものですね」

ひよこっ、としゃがんでクロアに手を伸ばす。見た目の年齢は…やはりハッキリしないのだが、クロアより上…20歳程度なのか？

そんな人物の幼い仕草にクロアは警戒する

「ふふふ、警戒されちゃいましたか？」

ゾワツ、と強調された一文字に寒気を感じる。何故だか…怖い？！

「ぐっ…」

伸ばされた手を握る。未だに地面に倒れている身としてはそろそろ立ちたいのだが…

「クロア…」

ひしっ、と抱きついた少女が折れた腕の痛みを再発させる。小さくうめいて無事な左手で払いのける…

…？

確かに少女を払ったはずなのだが…すり抜けた？アレイアは一ミリも動かずに傷を掴むようにして抱きついていた。

「なおれ」

彼女の眩きには必ず力が込められていた。今までも、アレイアの言葉の通りに世界が動いていた。

そしてまた今回も、痛みが消えて、傷口がみるみる癒えていく。こいつ…本当に何者だ？ザワザワ…とクロアは初めて人が集まってきたのに気付く。人通りはあまり多くなかった通りに結構な人数が円形に展開して眺めていた。

「二人とも、まずは私のエリアに行きましょう。邪魔されずにお話しできますよ」

金髪糸目の『若草』という人物が立ち上がる。クロアを引き上げ、立たせる。

「道を開けてください」

ニコリ、と笑いかけると人垣がサアツと割れて三人が並んで通れるくらいに道が出来る。

アレイアは嬉しそうにその道に入っていく、二人はその後ろに無言で続く。互いに何かを狙うようにしているような雰囲気なのを見ていた人々は敏感に感じていた。三人はいくつかの通りを抜けて、小さな広場のような場所に入った。

小屋と、ちよつとした露天のような天幕のある場所。そしてそこからクロア達に向けて5メートル程進んだあたりにコンクリートなんかよくわからない紐で段差が作られていた。

雰囲気としては小さなゲートボール場、と言った感じか。

「ようこそ、私のエリアへ」

彼は、笑った。三人は手近な物を引き寄せて座る。

アレイアはコンクリートの段差に、クロアは落ちていた布を敷いた上に、若草は手頃な椅子をどこからか持ってきて座る。

「では、私が説明しますね」

ちらりとアレイアを見たのをクロアは見逃さなかった。

「私は彼女、アレイアちゃんと呼ばれて来ました。あつ、彼女とは少し前に知り合っただんですよ

えつと、そして

「クロアを強くして」という内容の依頼を受けていたのであなたをここに連れてきました。

私の言うことを聞くならば二週間で強くしてあげましょう」

どうです？と聞かれて、困る

「迷惑だ。…と言いたいが」

先程ボロ負けしたので悔しいが断る理由がない。今まで見よう見まねでやってきたのだ。そろそろ技術面での補強も悪くはない。

「二週間だな？」

若草は

「はい」と頷く。

「なら、頼む」

クロアの返事に満足そうに頷いた。

そして、アレイアに聞く

「だそうですね？」

何故だか嬉しそうだ。

アレイアは少しだけクロアを見て、答える

「すきにやっついていい」

ありがとうございますと笑って若草はいきなり宣言する「時間は無駄にできません。早速…」

開け、と先程ブローに向けて使っていたモザイクのような長方形の箱を呼び出す。

内部では武器がスロットのように姿を変えていて、かなり異質だ。

「ミッショーン1です。私の攻撃を全て避けてください…。反撃は駄目ですよ」

彼は箱を開く。名前と言う鍵で箱の中身を解き放つ。

「『パンドラ』」

キーン、と鋭い穂先が右頬を掠める。出てきたのは恐ろしく鋭利な…反射光でさえ斬られそうなほどに鋭い槍だった。

濃いオレンジ色の柄にシンプルな構造の細身の先端部は中央に『ユリ』の紋章が浮かして装飾とされていた。

「避けてくださいよ？死にますから。」

クロアは首を落とそうと動いた先端を伏せてかわす。そしてそのま

ま敵の背後に…

ドスッ、と石突きが鳩尾にめり込む！

「駄目ですよ、長物にとつては前後は攻撃範囲。『真後ろは死角』なんてくだらない固定観念は捨ててくださいね」

パン！と石突きで叩かれ、クロアは倒れるそんなクロアと同時時間の話。

ザワザワとうるさい場所に二人の人物がいた。紺色の和装に黒髪の青年…楼騎と、黒いハイネックの金髪の少女、エアリアルだ。

二人は以前何者かの指示を受けて中央管理室の奥に隠されていた部屋を開けた。

内部は茶色い壁で円形の部屋。部屋に存在していたのは一台のアクセス端末と、内部を照明で照らされた磨りガラスの四角い柱のようなものが二十六…

そんな場所で二人は異様な光景を見ていた。

「お前、BUGか!？」

どこかの柱から声が聞こえた。そして、数人の絶叫。

「何だ?…おい!」

様子をうかがっていた楼騎が指差す。その先には…探していた人物が端末に座っていた。

黒髪に、縞模様の服を着たままのクロアに二人は一瞬だけ安堵する

(あんなの着てるのは間違いない!)

余り物が予想外に役立つた。二人は駆けよって確認しようとする…と、

「おやおや、乱入かい?」

白衣を着た男がヘラヘラと笑っていた。思わず二人は身構える!

「ふん、若造二人に構っている暇があったらさっさと追わんか、穀潰しが!」

バシン!と女性がDの尻を蹴り飛ばして、二人を見つめる。他の管理者に比べたら比較的年齢は上なのだが、言葉のせいで余計に老けて考えられるGが最近生まれた小じわをひくつかせる

「痛いなあー」

へらへらと笑うDにそれなりに辛辣な文句を吐いてGは聞く。

「この扉と、防壁を解除したのはお前達か？」

二人は少しだけ目を合わせる。確かに扉は開けたが：

「防壁？ファイヤーウォールみたいなやつ？」

左様。とGは頷く。

「そつちを外したのは誰か知らない。俺らは指示されただけだ。」
誰に？、という至極当然な質問を受ける。

確かに考えてみれば妙な話だ。入室不可を解除し、内部プロテクトの防壁を解除し、部屋へのパスワードを解いた人物：余程の腕前を持つハッカーだろうか？

「…奴、じゃな」

Gは一人確信し、内部では何が起きていたかを説明する。クロアの暴走から、BUGの少女まで、全てを

そして、二人はその後管理室に幽閉されるように身動きを制限された。

別段、手錠とかをかけられたわけではない。ただ管理室から出られなくなったのだから行動を制限されたと言う方が適切だろう。

ザワザワとうるさい部屋でエアリアルは楼騎に話しかける。

「ねえ…Gはあんな風に言ってたけど…楼騎はどう思う？…その…クロアが裏切ったわけじゃない、って事」

…肯定内容が先に来たっていうのはそつちが望みか、と楼騎は感じて少しだけ思案して答える。

「裏切った…か。可能性は高いな」

彼女はしゅんと頂垂れる。体育座りで両足を抱えるようにして足の隙間を見ているように

「だが、可能性がない訳じゃない。」

ぴよこつ、と彼女は顔を上げる

「探すぞ。ここならば必ず情報が入る。情報を精査し、篩落として、

必ず見つけ出す。」

エアリアルは結構驚いたように目を見開く。何だよ

「意外：楼騎がクロアに積極的なんて…」

楼騎はふん、とそっぽを向く。

「馬鹿な後輩はほっとけないだけだ。」

ふん。と彼は立ち上がり紺の袴を揺らす。

エアリアルも釣られるように立ち上がって楼騎に何かを伝えようと手をばたばたさせる

「うん！だねっ！」

楼騎は少し焚き付けすぎたかと内心笑ってはいたが、顔には出さないで行動を始める。

「必ず助け出す。行くぞ。」

「もちろん！」

二人は威風堂々と管理室に歩を響かせた

第十三章 それぞれの決意（後書き）

PV9000記念

クロア「…よう。ケータイのちっこい画面の前のお前、PV9000を超えたぞ」

エア「パソコンのでっかい画面の君っ！見てくれてありがとうっ！」

楼騎「珍しいな。こんな事してるなんて」

エア「特別だからねー、ほらっ！お祝い！」
『ドスン！』

男性陣「…」

エア「私特製のロウソク9000本ケーキっ！」

クロア「…火だるまじゃねえか」

エア「わーっ！わーっ！」

ガルト「俺抜きに楽しんでるのは…」

クロア（！？）

アレイア「クロアのしりあい？あのからだがすけてるの」

ガルト「だれだああああ!!」

クロア「あー。またいつか話してやるよ。なっ!」

ガルト「爽やかに殺してえ」

クロア「まあそういうな。画面越しのお前ら、また合おうぜ!」

エア「クロアー!消化手伝ってえええ!」

アレイア(クスクス…)

アレイア「あははっ!」

楼騎「フランメリーゼを使えばいいんだが…言わなくてもいいか。」

エア「ろうきー、燃えてるよ?」

楼騎「…ちよつと全員伏せる」

楼騎「切り裂け『幽月』」

…

エア「っ!机が真つ二つに!?!」

クロア「ガルトも!?!」

アレイア(楼騎の袴も…ね)

クロア「…色々やばいな」

エア「みんなまたねっ！ほらっ！楼騎も！」

楼騎「字数…か。それじゃあな。また次回会おう」

第十四章 歯車は回って、外れて、（前書き）

ゲームファンタジー！

はい、今回も前書きと言うなのシロツバの独り言コーナーです。えっと、毎回新規を立ち上げる前にPV確認しているのですが…

10000突破しました（^^；

どうやら前回書いてる途中に行ってたみたいです。凄く嬉しい誤算、そして見てくださる皆さんに感謝！（ ） /

今回は10000突破なのでクロア達にもコメントをもらいましたよ
うか…

クロア「ふん、俺は別に嬉しくなんか…おい、なんだその顔は…殴るぞ」

エア「え…前回の後の祭りじゃない？…違っ？」

楼騎「ほお…。いいことだ。」

シロツバ「それだけ？」

楼騎「前回言い尽くしたからな。贅辞は苦手だ…」

ノピア「一万？へえー、そんなに行ったの？」

ヨロワ「すごいね！お姉ちゃん！」

ノピア「…でもね、ヨロワ。私たちはほとんど出てないのよ」

ヨロワ「…！！！！！！」

シロツバ「…ごめんなさい」

アレイア「すごい…おめでとうございます」

若草「凄いじゃないですか。お祝いですね」

シロツバ「後で打ち上げだって」

若草「『ヴァルハラ』ですか？…また洒落てますね」

D「ヘラヘラ、おめでとさん。」

と、以上喜び（以外の方が多い）の声でした。
みなさん、ありがとうございます！

第十四章 齒車は回って、外れて、

数週間が過ぎた。始めは避けるだけだった訓練も段階的に変化していき、今では若草とクロアは対等に打ち合っていた。

「腕を上げましたね、予想以上で驚きですよ」

若草は嬉しそうに話しかける。

彼の笑いに裏はなさそうだった。

「だろ？ククク…」

クロアは黒陽で足元を雑払う。それを若草は跳んで避けて、長い杖のような武器で頭を狙う。

クロアは軌道を鋭敏に察知して頭だけで避ける…。最低限の動きで、最大限の効果を。この訓練で学んだことだ。

短い気合いを出して素早く白陰の柄を押し出して鳩尾寸前で止める。

「…そつちでしたか」

着地した若草は少しだけ油断したと笑う。

「昔ならば迷わず剣で切り返してましたね」

まあ、そうだろう。

昔は『力』に頼りすぎていた部分もあるからな…とクロアは苦笑いする

「その…感謝してるぜ」

小さすぎた声は誰にも聞き取られることはなかった。呟いた本人は聞こえなくてよかった、と安堵する

「では、少し休憩しましょう。一旦離席しますよ」

若草はその場に座って、動かなくなった遠くから見ていたアレイアは二人が休憩したことに気付くと、とととと歩いて来てクロアに抱きつく

「ああ…お前か」

クロアは『あそぼうよ』という視線から目をそらして引き離す。少女はプクツと膨れる

「はあ…俺はどうなってんだ？」
始めは『ヴァルハラ』の機能のままかと思っていた。だが、数時間して気付いた。

身体に何の変化も起きないことに。

怪我や状態異常ではない。『空腹』も『喉の乾き』も、ましてや『トイレに行きたい』という感覚も無いのだ。

アレイアに聞いたところ

「クロアは『ここ』にいるよ」

とだけ答えられた。

さっぱりワカラン。

だが、やはりどうにかなるものでもなく…時折若草が調理や飲み物を取りに行く間、ぼう…と立っているしかなかった。

「くっそ…」

苛立った声を出したときには、いつもアレイアが慰めてくれた

「おこっちゃだめ！」

まあそれだけだったが、たまには子供のほうが心理を突く。

…いや、本当は心理そのものなのかもしれない。

と、珍しく難しい哲学じみた事をするアレイアはいつも抱きついてきた

どうもこの数週間でコイツにも慣れてきた。…たまには遊んでやるか膨れたままの少女に笑いかける

「何して遊ぶ？暇だし付き合ってやるよ」

少女は顔を輝かせて叫ぶ

「おにごっこしよ！」数分後、もっきゅもっきゅと手作りのレタスサンドを食べながら若草は立ち上がる。

「おやおや、どうしました？」

挫折しかけている人物に声をかけて、最後の一口を口に入れる

「んー」

身悶えしてる変人をクロアは白い目で見る

「ああ、私ベジタリアンなんですよ」

レタスサンドの事じゃねえよ。

…って、そんな場面じゃないな

「アレイアが見つかんねえ…」

ほう…と彼は首をかしげる「とびすぎたかな？」

彼女はクロアのいる場所からざつと五十メートル、そして丁度死角となる横道にいた。

「…まだかな？」

いきなり波紋を生み出して空間転移を行ったのだ。やはり追って来ていない。

彼女はそこらへんに落ちていた石を拾って、投げた。

投げた石は綺麗な放物線を描いて意外と遠くまで飛んで…飛んで…で

ガツン、いてえ！

アレイアは全身からさあつ…と血の気が薄れる。

アレ…マサカ…

丁度石が落下したあたりから何人かの、『いかにも』といった感じのゴロツキが現れてくる…

「え…あ…」

それも、アレイアが怯えてる間に増えて五人になったゴロツキ達が正面の道を塞ぐように立ちはだかる

「るくあらばルアア!？」

「通訳頼む」

「おいおい…」

「人害の言葉は理解できねえよ」

「慰謝料もらおうか? ヒツヒツ」

…

五人の自己紹介にも似た叫びを無視して、アレイアは頭の中から響いてきた声に耳を傾ける

「うん…」

すう…と息を吸って
逃げ出した。

「……待ちやがれ!」「……」
だれもまぢません!

アレイアは必死に逃げる…数秒で捕まった。
やはり、歩幅と経験の差か…

アレイアは肩を乱暴に引いた男の手を握る

さあ、時間よ

先程の頭の中から響いてきた声が嬉しそうに告げる。すう…と意識
が薄れていき、まるでうたた寝するようなまどろみが訪れる…

瞬間的に身体が弛緩し、すぐに物凄い…感じたことの無いような力
が体を勝手に動かす。

「私に、触るな!」「」

頭の中の声が彼女と同時に叫ぶ…。いや、彼女が頭の声に合わせて
いるのか判別できない。

彼女はワタシ、ワタシは彼女。彼女ってダレ?ワタシって誰?

ごちゃごちゃぐにやぐにやした頭の中でほんの一言だけハッキリ聞
こえた。

ワタシはワタシ。さあ、子供は終わり。

口から、今まで出したことも無いような絶叫が飛び出した凄まじい
絶叫が響き渡った。

アレイアを探そうと動き出した二人をひき止める程に、凄まじかった
「ぐっ…う?」

クロアは耳を押さえながら時折現れるノイズに眼を瞬かせる。畜生、
目が痛い!

クロアは少しノイズと音の嵐がおさまるのを待ってから走り出す。
まだ大音量で叫びが聞こえているが…耳がおかしくなったのかたい
して苦痛ではなくなった。

「アレイア!!」

叫んで、ふとわき道を見る。

下手したら気付かないかもしれないかもなかった、小さな路地だ。そこには…「あつははははは！！！」

極彩色の光を放ち、次々とゴロツキをほふる少女がいた。最初は別人だと思った。

鋭い眼、狂った笑い声、猟奇的な笑み。

どれをとってもアレイアではなかった。だが、同時に白い服が、幼い体が、血に染まっていたとしても彼女だという事実という剣となつてクロアを切り裂く。

「…くそっ！」

おかしいと思つていた。

一番最初…楼騎の刀を止めたときも、管理者達の武器を阻んだのも、クロアを常に見ていたことも、全てだ

「BUGだったのか…アレイアあああ！！」『彼女』が力を使う。

今まで使わないようにしてた『力』を彼女は使っていた。

口が勝手に笑う、勝手に声が出る。必死に押さえつけようとしても、無理だった。

たすけて

叫ぶ。

彼女の漆黒に塗り潰された心の中で無惨に残響を残しただけの叫びに、彼女は膝をつく

「なんで…たすけてよ…」

「ダメ、まだ…足りない」

『彼女』はアレイアの肩に手を置いて、固まる。

「そんな…」

小さく呟いて、『彼女』は消えた。

体に自由が戻つて、アレイアはがっくりと膝をつく。始まりのように弛緩しただけだ。そして今度は自分の力が流れ込んでくる…

アレイアは、自分を睨むクロアと目が合う。

そして、自分がどんな状況にいるかを認識して愕然とする

「ちがう…ちがうよ…ワタシじゃない！」

クロアは無言で一步踏み出す。その時の砂を踏む音が何よりも残酷に聞こえて彼女は身を縮める

足元で粒子化していく『死体』に足をとられて彼女は倒れる

「ワタシは…ちがう…ちがうよ…」

さらなる一步に、彼女の中で何かが弾ける。それは撃鉄に似ていて、爆弾のようでもあった。

「ちがうの！クロア！！」

三筋の光が放たれる。赤と、青と、緑の光がクロアめがけて寄り集まって純白の光に変わる。

「…」

それを、クロアは最低限の動きで避ける。

頬を掠めた光に意識を乱されてもアレイアを見続けていた。

「あ…」

アレイアは小さく呟いて、クロアに背を向けて逃げ出した。それを、クロアは無言で見送る。少しだけ冷静さを取り戻して自分の感情任せの行動を恥じる…。アイツは、あんなにも怯えていたじゃないか！クロアは髪をクシャリと握る

「何がありましたか？」

若草が優雅に惨状を見渡して聞く。もつとも、彼は全てを知った上で言っているのだろうか…

「…探すぞ。俺は向こう。お前はあっちを探せ」

自分はアレイアが逃げた方角を、若草には彼が今来た道を探させる。そんな指示に彼は小さく笑う

「なんだよ？」

若草はいえいえと否定してからまた笑う

「いえ…あなたにも可愛らしげがあるじゃないですか。少し驚きませんでしたよ。」

「うつせえ！」

自分でも照れ隠しにしか聞こえない発言に呆れる。彼は本当に男なのか疑うソプラノで笑う

「では、鬼ごっこの続き…としましょうか。消えた彼らも暫くすれば復活しますしね」

クスリ、と笑う。本当にこいつはどっちなんだと呆れつつ二人は散開した… 何処にもいない

すれちがう人や、横道や路地やさらには猫が心地良さそうにしているゴミ箱の蓋を外して見てみるが…何処にもいない

「はあ…はあ…」

だいぶ走って荒くなった息を整えながら彼はだいぶ薄茶けてしまった壁にもたれる。もとは白い壁だったのだろう、今では見る影もないがとどこどころ剥がれた場所から白い塗料が顔を覗かせている。

クロアは今まで走ったルートをもう一度頭の中で走り直す。どこかに探し漏れはないか、どこか行っていない場所はないか、出来立ての地図を頭に描き出して確認する

…あった。

町の大半を走ったが、人通りの多い中央通りだけは後回しにしていたのだ。

わざわざ人が多い場所に行くのかわからないが、確認するのには外すことができないだろう。もう一度立ち上がって少しだけ落ち着いた息をゆっくりと吐き出して、走り出した。ぜいぜい…といよいよ辛くなってきた息を吐きながら人通りの多い場所にやって来た。

…中央通り、本当にそう言うかは知らないが特訓中に若草から頼まれ事をしたときにはそう呼んでいた。

買い物、とは言っても回復薬や新しいカードの補充くらいだ。ここでは店数が豊富でほしいの物は揃っているように思えた

「探し人…は置いてねえよな」

自虐的に嘲笑する。

市場と呼んでもおかしくない露店の通りをクロアは走り抜ける…意外と早く抜けた市場を後ろに眺めて、クロアは暇そうにしていた少年に声をかける

「小さい女の子を知らねえか？ 白いカツコしてる、目立つ奴だ」

白いコートに、不思議な紋様を刻んだ少年は首をかしげる。そして
「あー、あれだ。あっちに橋があるでしょ、あの下に小さい子が走
つてくのを見たよ」

サンキュー、と言つて走り出す。

「でも御傷心つぽかったよ…つて聞いてないな」少年はボンヤリと
空を眺める。

「…また夕焼けか」

ポツリと呟いた橋は典型的な石造りのものだった。白かつただろう
石は年月と共に灰色になつていったが、白さだけは失わなかつたよ
うで未だに薄暗い空の元明るさを放っていた。

クロアは橋の上に彼女がいないのを確認すると町中を流れる小さな
川の流れを制御している一メートル程度の土手を降る。

町並みよりも数十センチ低くなっている土手はおそらく自然な川を
舗装したものなのだろう。

クロアは橋の下で落ち込んでいる少女を見つけた…

アレイアは空に手を掲げてただやることもなく頭の中でいろいろな
データを書き換えていた…。

夕焼け、星空、曇天、夕焼け…

この薄暗い『ミッドガルド』にふさわしいのは何か、と考えて泣き
たいのを堪えている

「ワタシ、やっぱりだめなんだ…」

小さく呟く

「クロアにきらわれた。もう…」

頭の中で否定する

嫌われてない、だから…

うるさい！と叫ぶ。

「あなたのせい…あなたが『ちから』をつかわなければ！クロアも！だれも！きずつけなかったのに！」

少女の内面に存在する人物は何も言わない。言い返せない。

「…」

アレイアも塞ぎこむ。膝を抱くようにして泣きたくなるのを我慢する。

ねえ

「やだ」

声を速攻で切り捨てる。

そう…だよ、ごめん…

自分の内側は謝り、アレイアは思わず許しそうになるのを抑える。だって、クロアは…。少女はあの眼を思い出して震える。

怒り、憎しみ、拒絶…それらの力は容易く彼女を傷つけた。

「…隣、いいか？」

ああ…今そう言っただけ。と彼女は心の中で呟く。もはや祈りに近い願望…それをクロアは叶える。

…もっとも、彼はまったく意図してないのだが…

「星空…か。現実世界で最後に見たのはいつだったかな」

クロアは小さく笑い、少女は隣の人物が本物なのに気付いた

「…お前、なんで黙ってた」

少女はうつむいて、しばらく黙りこくる

やがて、きらわれたくなかった。そんな胸中を露吐する

「変な気を使うなよ…。始めは、まあ驚いたが…お前はお前、嫌う要素なんてない。」

彼女は小さく震える。

何故だか…待ち望んでいたような気がする…

トクン、と小さく何かが高鳴った。

第十四章 齒車は回って、外れて、（後書き）

あとがき

エア「やつほー！最近出番が少ないエアリアルだよ」

クロア「…」

楼騎「変なものでも食ったか？」

エア「違うよー！私たちの出番が無いから…」

黒エア「みんなからの圧力で…ね」

クロア「やめろ」

エア「いたっ！」

クロア「何もしてねえよ」

楼騎「やれやれ。」

アレイア「クロアはわるくない」

黒エア「…クロア、こんな幼い子をどうしたの！誘拐？拉致？監禁?!」

クロア「…拾われた？（注：命拾いの意味で）」

黒エア「ひろっ…」

楼騎「ときに。何も進展しないな」

アレイア「10000回、おめでとっございます」

楼騎「ああ、そうだな。」

アレイア「おはなしはまだまだつづきます。これからもみんなが
んばるのでおうえんしてください。っつかいてある」

楼騎「…カンペの事は言わなくてもいいぞ」

アレイア「うん」

クロア「さて、それじゃ次の話で会おうぜ」

アレイア「つぎはめざせ15000だね」

楼騎「ああ。またこんな風に開きたいな」

クロア「それじゃあな！」

アレイア「またね！ばいばい！」

第十五章 成長するBUG（前書き）

ゲームファンタジー！

さて、前書きと言う名の駄文コーナーです。

そっちなあ…書くことと言えば…

高三にして初めてカラオケに行っただけ、とか、昔虹色の雲を見た、とかじゃ駄目ですよねぇ…むう…

ああ、ならあれだ。ちよつと不思議な話。

中学時代に夕立がきたんですよ、土砂降りです。傘持っていないよコンチクショウみたいな雰囲気になったときふと教室の反対側の窓を見ました。

あれ？

窓を開けると、雨が降っていない…

急いで振り返ると、先程の方向は土砂降り…。

そう、丁度自分達のいる校舎の真上で夕立と夕方の境界が出来てたんですよ。

え？たいして珍しくない？

いいじゃん、たまにはこんな昔話も…ね

第十五章 成長するBUG

「…柄にも無いな」

そう言つてクロアは笑う。

本当にガキは苦手だ…。いつの間にか向こうのペースに乗せられて昔の自分に帰つてしまつて…

彼は昔が嫌いだった。

「…ねえクロア」

少女は後ろから覆い被さるようにして抱きついてくる。あまり重さを感じさせない重量の彼女は耳元で囁く

「ワタシ、こどもじゃないよ」

ほんの少しだけ重心が動く

「ずっと、『私』も待つてた…つて」

少し、重くなる

「クロア」

いや、重い。

彼女が何かを話す度に重量が増していく。もつとも、最初と比べたら…なのだが

「大好き」クロアの周囲を光が包む…。いくつもの大粒の光がまるで蛍か何かのように優雅に宙を舞う。

これで

アレイアの声が聞こえた

私の役目はおしまい

声だけが同じで、まるで別人のような口ぶりだった

この子をよろしくね、クロア

光が消えて、背後の少女が崩れ落ちるようにクロアの横に倒れる。

白い肌、そしてうつすらと金色が入った白髪。アレイアとひどく似ていて、まったく違う無衣の…ん？

「おい、お前！」

頬をぺちぺちと叩いてみる。

「うう〜ん…」

なんだこいつとりあえずこの状況はただの犯罪者だ。クロアはいつも着ているコートを脱いで、薄い長袖姿になる。

「…」

とにかく眠っているのか、一向に動く気配の無い少女にコートをのせて、それだけだと駄目な事に気付くのに意外と時間を要した…

「なんで俺が…」

手早くコートを後ろ向きでボタンを留め紐に通して必要以上の露出が無いようにする。そしてコートを半回転させて前後ろを無理矢理正す。袖に腕を入れて…よし、なんとか大丈夫だろう。と判断する
「むにゅ…」

その間少女は幸せそうな声を出して唇を波形に揺らしたただけだった
「運ぶか…アレイアっぽいしな」

いくらBUGだとしてもこんな急成長はあるのだろうか…とかの疑問を全て頭の隅に追いやる。それは若草にでも聞いてみよう…

少女を背負って、立ち上がる。

ふにつ、という柔らかい感覚がどうにもやり難かった…意外と目立つ。

市場を抜ける間中、クロアと背中少女は奇異と好奇とついでに尊望らしき視線にさらされ続けていた。

まあ、薄着でコートの少女を背負い、さらになまめかしい艶やかな足が覗いていけば…流石に目立つのは仕方ない。クロアはやや心労となりつつある少女を横目で見やる

「幸せそうだな…ったく」

そろそろ、中央通りを抜けるだろう。そこからは人も少ない…もうこんな苦勞もしなくてすむだろう…横道にそれ、少し歩く。あまり長くはないが人を背負って歩くにはやはり…辛い。

まるで古いゲートボール場、そんな広場が若草の領地…いや、部屋だった。

最初は気付かなかったがアレイアの『家』も若草の『領地』も実際は大差無いのだった

「おやおや、噂のカップルご帰還ですね。ひゅーひゅー」

睨したてるな…めんどくさい。とクロアは優雅に茶をすすっていた若草を払い除ける

「…アレイアさん。ご気分は？」

笑いかけた先が、ぴくりと動く

「さいっこー！、クロアったらね、赤くなりながらこのコートを手を放す。」

どてつと少女…アレイアは地面で尻餅をついて痛みと抗議の声を上げる

「うるせえ！てめえ起きてたなら自分でやれ！」

「ぶうー！いやだよう！クロア以外この体はさわらせないんだから！」

「てめえは例外だろうがああ！！」クロアはこの得体の知れない大きなアレイアへのストレス全てを込めて叫ぶ。少しだけ気も楽になった気も楽になったことだし、若草に色々と聞いておくでしょう…まずは…

「あいつは…アレイアなのか？」

とりあえずここがハッキリしなければ質問も何も無い。返ってきた答えは

「はい、そうですよ」

客観的にも間違いないらしい…。ならば何故大きくなったか聞いてみてもいいかもしれない、と判断して聞いてみる

「…」

彼は一瞬アレイアを見た。そしてクロアを見た。

「ならば私たちの関係をお教えしなくてはなりませんね、少し長いですよ」

そう前置きして彼は二人の出会いから話し始めた「私たちはこのサバーで出会いました。最初…彼女は普通の…円と球で構成された

BUGでしたが、私の目の前で人の姿に変わったのです。

最初は理解できませんでしたが、彼女と二・三会話すると次第に彼女が何のためにいるのかが分かってきました…」

句切られた事に気付いてクロアはハツとする。まずい、ついていけない…

「まず、彼女はやはりBUGであること。私はその時はじめて本物を見たのであまり実感が沸きませんでしたよ…」。

そして、違和感に気付きます。聞いた噂だとBUGは無差別に人を襲っているそうです。

ですが、彼女には戦う意思すら感じない…。そこで仮説を立てました。

彼女には、戦う以外に目的があるのではないかと。そして、その姿から目的は『生長』ではないかと。そして、何かのきっかけを待っているのではないかと。

予想は当たっていたようですな」

若草は、無邪気にくるくると回って微妙に余った袖を弄んで遊んでいるアレイアに笑いかける

「つまり…なんだ？」

既に頭の容量キャパシティが限界に近かったクロアは音をあげる。どうにも複雑過ぎて追いつけない…

「彼女は特別。というわけです。

ですが理由の無い特別はありません。無意味なようでも必ず意味があります…。彼女にもまた、理由があるんでしょうね」

そう言つて、彼は話しは終わりです。と笑って両手を広げてみせたクロアはふむ…と小さく呟く。

理由のない特別はない…か、彼は考えたことはなかったが心理なのだろう。

特別…とはやはり何かしらの理由がなければ存在しない、ある意味では幻想なのかもしれない。

特別と名のついた道具が店頭でしか光を放たないのもそんな幻想の

力か…

クロアは頭に沸いた馬鹿な理論を頭を振って廃棄する。そんなことはどうでもいい。今は、全てを知らなくては…。思考など後でいくらでもできるのだから…

「では、もう一度手合わせしますか？彼女を守る力のために」

茶化して笑う若草にクロアは額を弾く

「いいぜ？…次は負けねえよ」

若草は優雅に微笑んだ…

「巡れ！」

「開け」

二人の解放宣言が古びたゲートボール場に響いた。二人がいた場所が吹き飛ぶ…。

ジャキツ、という金属部品がいくつも揺れて音をたてる。若草の手に握られたのは超大口径の回転式弾倉拳銃^{リボルバー}…。最初にパンドラが発動した時に彼が手にしていた武器だ。

それが地面を抉るように強大な力を放った。そして、クロアは姿を消した。

「だいぶ反応がよくなりましたね」

ジャキン。と銃口が天空を捉える

「ちっ…やっぱりあれくらいじゃ油断しねえか…」

跳躍強化の呪符を使ってかなりの高さまで一瞬で跳んだクロアは白と黒の双剣を構える…。

砂煙と紅い火柱が地上で起こる

大気を乖離させんと物凄い風圧と回転をもって巨大な弾丸が攻撃圏にいるクロアに襲いかかる。

「あめえ！」

白陰で『風圧』を消し、切り裂く。体を捻りつつ黒陽で『自壊』を付加する

クロアの背後でボロボロと崩れた弾丸は地面に落ちるまでに原子レベルにまで崩壊して目に見えなくなる

今頃になって聞こえる銃声というよりは爆発音と言うのが近い轟音が聞こえる。

重力に引かれて落ちていくクロアめがけて三連射するのが火柱で確認される。先程と同じ能力で一発目を白陰で切り裂き、二発目を黒陽で切り捨て、三発目を同時に振り降ろした剣で切り払う。

クロアは黙って撃たれるのも癪なので白陰をくわえて左手で虚空からカードを引き出す

「土塊符『天地落爆』」

若草の足元の岩盤が小さく砕けて天へと舞い上がる…。どことなく『ヴァルハラ』のエリア作成シーンを思い出す動き、

若草は次は攻撃として使用される石と土の塊から逃れる。退避の僅かな時間にクロアは着地し、距離を詰める。

「デカイ遠距離武器は不便だな！」

くっ…と若草が苦し紛れに引き金を引く。だがそんな適当な射撃が当たる筈がない。クロアが銃を破壊して、終わりだ

「なんて、ね」

若草は反動で跳ね上がった銃を放す。巨大な銃はその反作用もまた巨大。それを利用して彼は邪魔な巨体を廃棄する手間を省く

「時符『逆巻き時計』」

一瞬。本当に一瞬で飛び抜けた筈の銃が彼の手に握られていた。何がどうして…

カチン！

引き金が引かれた。弾は切れていたようだ…彼はわざとそうしたのだろう

「時符まで使わせたのは評価します。が、もう少しバックアップとなる策が欲しいですね」

どうやら本当に彼の手のひらで踊らされていたらしい。まったく、腹立たしい事だ不思議と、不快ではないのだった

なんだかな…

クロアは双剣を放す。

剣はゆっくりと透明になっていき、地面に落ちる直前に見えなくなつた。

若草も同様に武装解除する

「勝てねえな」

それでもクロアは愉快そうに笑う

「たまにはそんな奴がいても悪くない」

そんな呟きに若草も同意する

「人は、何か目標がないと生きられませんからね」

ふふふ、と笑ってクロアの額を叩く。先程の仕返しのもりなのか
もしれない

穏やかな空気、

なぜだかその時はそれだけで満ち足りたような気がしたのは錯覚だ
ろう

「クロア」

アレイアがかなり乱暴に振り返らせたのだから、もう穏やかな空気
は消しとんだ

もう少し、消えない空気はないのかな

そんな風に思つたのは錯覚だろう「必中の」

微かに聞こえた解放宣言をクロアは空耳だろうと聞き流す。だが、
どうやらそれはミスだったようで

「クロア！伏せて！」

目の前にアレイアが立ちはだかり、右手を前に突き出す。

一瞬、激しい光が現れたかと思うと、アレイアを覆うように存在す
る半球状の隔壁に槍が阻まれる

「く……」

激しい衝撃の余波で風が吹き荒れる。アレイアも隔壁だけでは受け
きれずに両手を重ねて突き出す

片手だけで数人分の攻撃を止めた人物が受けきれない槍…その持ち

主をクロアは一人しか知らない。

何だっ
てんだ、
ったくよ

心の中の自分が呟いた

第十五章 成長するBUG（後書き）

あとがき

アレイア「私、参上！」

クロア「…（冷たい目）」

アレイア「クロアあ！乗ってよ！ほら」

クロア「…わかった」

アレイア「やった それじゃあ…」

クロア「…長年育ててきた娘がグレた父親の気分…か…あんなにかわいかったのに…」

アレイア「クロア…ひよつとしてロリ…」

クロア「『空間転移』」

アレイア「…どっかいつちやった」

内面アレイア（以下、黒アレ）「まったく」

アレイア「ぷう…あんたのせいだからね！こんな体にした…むきー！」

黒アレ「ふん。知らないわよ。私は引き金を引かれただけ、私が引くはずだったものを奪ったんだから…チャラよ」

アレイア「知らない！」

黒アレ「…まあ、そこはいずれ。」

アレイア「また嫌われた…クロアあ」

黒アレ「…いい？心に留めなさい。アナタはアナタ。もう、その体はアナタのもの。だから…」

アレイア「？」

黒アレ「…。なんでもないわ。クロアと仲良くしなさい。これは、

私個人の忠告」

アレイア「個人？」

黒アレ「…次は、お母様からの警告」

アレイア「!？」

黒アレ「これ以上、人間との仲を取るようなら、世界の全てが敵となる。注意なさい？」

アレイア「待つて!それって…」

クロア「おい！」

アレイア「むにゅ？」

クロア「寝てんな、起きろ」

アレイア「夢…?」

クロア「字数だ。みんなまたな！」

アレイア「また…ね…?」

第十六章 コインの裏表（前書き）

ゲームファンタジー！

はい、まえがきです。

ようやくここまで来ました…

長かった…

ついに、彼らが動き出します。言えるのはそれだけ…。
動き出した彼らの運命はいかに！

コインの裏表が出会うとき、何があるんでしょうね？

では…本編へどうぞ！

注：まえがきの最初の方が最終回っぽいですが、全然違います（笑）
でも、いつ最終回になるか…（・・・）

第十六章 コインの裏表

カタカタ、カタカタ…カタ。

もう、大分聞き慣れたキーボードの操作音。中央に巨大な機械が聳える部屋の中心付近で楼騎はキーを叩いていた。

「どう？見つかりそう…じゃないね、その顔は」

隣で小さなお盆を手にした少女が、あはは…と小さく笑う。盆の上のマグカップがカタカタと揺れる

「ああ。流石に頑丈なプロテクトだ。キツいな」

楼騎はクロアの消えた先のアドレス先を調べていた。いくつかの数字が断続的に続くIPという端末同士のアドレスだ。

HTTPで始まるのが住所だとしたら…電話番号とでも思えばいい。個性に乏しいアドレスからは相手の何も知れない…

「くそっ…」

楼騎はキーボードを殴り付ける。もう4日、ぶっ通しでこの違法サーバーと戦っているのだ

「パスワードは何だ？ノーヒントはキツいな」

パスワードの解析は他にも数人が分担している。

だが、彼は自分の手で突破したかった

「手のかかる新人だな。」

エアリアルが差し出したマグカップを受け取り、中に満たされた黒い液体を流し込む…

「よし。やるか。」

彼はもう一度キーボードを叩く数時間の格闘の後、楼騎は疲れと眠気の為一度休憩する。やはり…というかほぼ完璧なセキュリティを前にして楼騎はあきれないようにため息を落とす

エアリアルが励ますが、流石の彼も疲労の色は隠しきれない…。仮眠する、と言って席を立つ

「諦めるか？」

聳える機械に半分隠れた状態で、Dが聞いてきた

「もう諦めるのか？まあ、構わないがね…ヘラヘラ」
ムツとした楼騎に代わりエアリアルが答える。

「諦めないわよ。ちよつと休憩するだけ」

Dが意地悪そうに笑っていると、後ろからパソコンと板で殴られる

「D。何をしておる。若造で遊ぶ暇があれば辞表でも書いとれ」

Dは殴られた部分をさすりながら笑う

「やめてくださいよ、Gさん」

「ジーサン言っな！」

小じわがもう一度殴る

そして、一枚の紙を渡す

「何も物事の解決法は一つではない。もっと精進せよ」

紙には、住所が書いてあった。東京都内の住所…ただそれだけだが、理解する

「サーバーの設置場所。だな」

「すごい！さすがGさん！」

パソコン！あいたっ！

「ジーサン言っな！」

ふん、最近の若者は…とぶつぶつ言いながらGは去っていく。二人は、少しだけ頭を下げて

「行くぞ。エア」

「もちろん、行くわよう」

二人は並んで部屋を出る。そういえば、最後に外に出たのはいつだったかという無駄な考えを浮かべながら…ガラス張りのエントランス部分に出てくる。既に参加者で賑わっていたのが、水をうったように静まりかえる…。どことなく波のない湖にも似た静けさ。乱すことが禁忌と錯覚するような、そんな沈黙

「楼騎だ…」

そんな呟きでギリギリ保たれていた均衡が崩れて消え去る。

「エアリアルさまぁー！！」

「邪魔よ！楼騎様ー！」

押し合いへし合いの大乱闘。二人の世界クラスのプレイヤーがいきなり登場したのだから分らないでもない。

「悪い。通してくれ」

「ごめんね…また遊ぼっ！」

二人は適当にあしらいながら人混みをかき分けて進む。ようやく出入口を押し開けたときには

「疲れたあ…」

エアリアルのコメントが全てを物語っていた。二人は多少余計な疲労感にうんざりしながら外に停めてあったタクシーに乗り込む。

「ここへ。」

楼騎が紙を差し出して、運転手の男性は行き先を再確認して車を走らせた…

目の前のタクシーが走りだし、すぐ後ろに待機していたタクシーの中で会話が生まれる

「行き先は…」

「追って」

愛想のよさそうな中年の運転手に後部座席に乗った少年が告げる。

「今、なんて？」

そんな当然の質問に少年は笑う

「前のタクシーを追って。だよ」

運転手は言い知れぬ殺意を感じて、車を走らせる

「さあて、仕事しますか。」

少年は余裕を浮かべて、笑う。

それはその車内にだけ響いた…楼騎は、窓の微妙なでっぱりで頼杖をつく。

そして、生まれたときからでは考えられない世界の進歩に呆れと畏

敬のため息を漏らす

生まれた時は世間の九割以上が化石燃料のガソリンで走る車だったのだが、政府の補助金とエコロジーブームで一気に普及した。

…下手したら、今の子供はガソリンすら知らないかもな、そう思うと自然と笑いが浮かぶ。若い者への失笑か、古い時代となった自分達への嘲笑か、水素で走る車に小さな笑いが起こる

「楼騎？どうしたの？」

エアリアル不思議そうな顔に、何でもない。と答える

やれやれ。俺もこの歳で老人か

Gの事も笑ってられないな

楼騎はだいぶ近づいてきた目的地と、それに比例して増えていく料金を見やる

「…ねえ、楼騎」

エアリアルが話しかけてきた目の前のタクシーが路地に入ると二台目のタクシーを停止させる

「ふうん…ここか」

少年は小銭と紙幣を運転手に握らせる…。その額は料金よりも多かつた。

「僕の事は秘密ね」

少年はそう言って笑うと車を降りて路地に消える。タクシーの死角に入ると耳につけた送受信可能なハンズフリーイヤホンに話しかける

「タクシーを降りたよ。うん、…了解。二人には気付かれてない、たぶん」

たぶんって何よ！と少女の声が叱責すると少年は苦笑いしながら一旦イヤホンを外す。

さて、仕事しますか。

少年は楼騎とエアリアルが乗っているタクシーを覗き見る…。警戒するようにして降りてきた二人がずいぶんとボロい雑居ビルに消えるのを見て前進する

へえ…。

ずいぶん古ぼけた外観だが、ビルにかけられた看板は意外と新しい。

1 F ネットワーク管理室

2 F ネットワーク管理室

3 F ネットワーク管理室

4 F ネットワーク管理室

5 F ネットワーク管理室

6 F ネットワーク管理室

多少は表現を変えろよ、と笑う。

少年は自動ドアをくぐって1Fの通路に足を踏み入れるコクン、とエアリアルが頷いて二人同時に自動ドア脇の観葉植物の影から飛び出す。

「おっと！」

やや茶色い、短めの頭髪の少年は不意打ちを後方に下がって回避する。

楼騎は続けて右手を握って殴り付ける

少年は今度は避けずに右手で受け止めて左手で楼騎の腕を捻る

「やあっ！」

エアリアルが上段蹴りで少年を攻撃するが、彼は楼騎を自分の後ろに隠すように動きながら回避、そして連続した下段足払いを右足で止めてその足を左足で蹴り飛ばす

「あー、びっくりした」

少年は楼騎を放して笑う

「気付かれてたか…やれやれ」

ぱりぱりと頭を搔く。油断しているでも、警戒してるわけでもない、二人とそう歳も変わらないと思われる少年は

「とりあえず…」と前置きしてから名乗る

「依頼されてきました、ふうよくれい風翼嶺です。よろしく」

二人は啞然とするしかなかった。「ほんとは言わない約束なんです
が、構わないでしょうか」

とか言った少年…嶺の説明をかいつまむとこんな感じだった。

最初に依頼を受けたこと。

最初の依頼は違法サーバーの位置を特定すること。

「それはもう、暇で死ぬかと…」

「はあ…とため息をついた嶺は続けた

ついに場所を特定して依頼主に知らせたこと。

そして、次の依頼を受けたこと。

次は、『楼騎とエアリアルの護衛』だということ。

「本来ならば危険時以外気付かれないように…って言われてました
が…」

「あはは…、と彼は笑う。」

人柄は悪くなさそうなのだが、流石に胡散臭い…。二人の顔に不信
感が出ていたのか嶺は敵じゃないとアピールする

「なら、依頼主くらい言ってみろ。」

「そだそだー！」

二人の正当な追求に嫌そうに顔をしかめる

「依頼主を明かしたとなれば僕らの名が落ちます。ので、我慢して
ください」

あからさまに不審が増した。だが、彼は決して口を割らない。

楼騎も流石に時間の無駄だと判断して繰り返される問答を終わらせ
る。どうせ変わらないのだから、仕方ない。

「エア。こいつは置いて行く。」

「だよねえ…うん！ばいばい！」

二人はビルの奥へと歩いていき、廊下には嶺だけが取り残された…

「…さて、三つ目の依頼は…」と

嶺は小さく笑って歩き出したカツコツ…と廊下に足音が反響する。

それはエアリアルのブーツが原因なのでどこかで緩衝材でも見
つけたら靴底に貼り付けよう。と楼騎は思った。

「ずいぶん素直に残ったねえ…嶺って人」

「さあな。どうにも裏がありそうだ。」

カツコツ…と廊下に足音が反響する。2F、特に異常なし。

部屋には何もなく、何かがあった気配すら稀薄だ。どうやら、前に使った業者がいなくなっただ後誰も使っていないらしい…。

「馬鹿馬鹿しいな。このビルを無駄に使って何してるんだ。」

楼騎は振り返りざまに呟いて、階段に足をかける…。コンクリートむき出しの、古い造り。窓は薄汚れていて蛍光灯も光量が足りないつまり、暗いだけの階段だ。

特になにかあるわけでもなく、上の階に到着する。3Fも調べるが、2Fと代わり映えない埃にまみれたフロアが広がっているだけだった。

「まるで廃墟の探検みたいだね…」

エアリアルが苦笑いする。確かに、入り口のプレートが新しくなければ誰もがそう思うだろう…。だが、嶺と名乗る人物が違法サーバーの場所をここだと言い、Gもここだと言った。

間違いはないだろう。

「上へ行こう。こういうのは最上階だと相場が決まってる」

「ゲームの法則だねっ」

二人は上へと続く階段へと行き、上へ行く。

4F、異常なし

5F、異常なし

もう既に予想はしていたので二人とも対して驚かない。…むしろ何かあった方が驚いていたかもしれない

「次が最上階…」

「だな。」

二人は階段を登り、6Fに立つ。

下の階と大差無い造りだったが、この階だけはやはり違った。

ブウウウ…という機械音が廊下に響いていたのだ。それは、冷却ファン音のようだった。

二人は顔を見合わせてから、一番近い扉を開く！扉の先は、今までとはまったく違う空間だった。

何台もの人と同じくらいの高さの紺と黒の長方形の機械が何列も並

んでいた。一列につき五台並んでいて、入り口から一番遠い…窓側の列だけは四台で構成されている。

理由は、一台のパソコン端末。それとそれを載せる机が丁度長方形の機械と同じ大きさだった。

「見たこともない型だな…。自作か？」

楼騎はパソコンを調べて、メモが置かれていることに気付く。

「何？それ」

エアリアルが、ひよこつと覗き込む。

よくぞいらつしゃいました。

お二人ともカードはお持ちでしょうから、この机の引き出しに入っている端末を使ってログインしてください。

『ミッドガルド』管理人

楼騎が引き出しを開けると、中からヘルメット型の端末と大型のカードリーダーが出てきた。

どちらもあまり馴染みがないものだが、『ヴァルハラ』に使用される機械と同じ系統のものだ。

頭部部分は頭の中から神経信号を読み取る端末、大型のカードリーダーはデッキとなるカードを読み込むのだろう。二人はメモの主な意図を読み取る

「挑戦、か。」

幸い、二人とも機械には弱くない。配線を難なくこなしてパソコン端末の電源を入れる。ブーン…という音と馴染みのある独特なロゴを見て、画面に『ミッドガルド』と表示される。

そして、ログインOKと表示されて、二人は端末を装着する。二人はその場にへたりこむように崩れ、薄れていく意識に集中した…世

界の中に二人が現れる。

薄緑を含んだ不思議な色合いの和装の楼騎、対照的な赤いフリルを多用したミニスカートのエアリアル。

二人はそれなりに大きそうな道の先にいる蒼碧のコートを見る。

「あれだな。」

「うん。」

エアリアルは小さく息を吸って、叫ぶ

「『必中ケンケンの神の槍』！」

放たれた素朴な槍は土を舞い上げながら薄い金髪の少女を捉える。

「止めた…！？」

『必中』を止めた驚きを隠せないエアリアルの横を楼騎は猛然と駆け抜け、蒼い刀を抜く。そして、コートを着ていないクロアのそばにいる若草色の人物に振り下ろす。

糸目に金髪のその人物は片手で刃を掴んで止める。

「危ないですね…」

「悪いが、こいつは返してもらおう。」

それと同時に金髪の槍使いと、神の槍を止めた少女がにらみ合う

「迎えに来たわよ！クロア！」

「…馬鹿ね、私には勝てないわよ」

四人は一斉に距離を開けた。

相手を叩き潰すために。

第十六章 コインの裏表（後書き）

あとがき

エア「やつほー！暇してる活字中毒のみんな！元気かな？」

クロア「…」

アレイア「クスクス…」

エア「ちよつと！何よその反応！」

クロア「拾い食いはやめろ、なっ」

エア「ちよ！違っ！」

アレイア「馬鹿な人…クスクス…」

エア「むっかつくうー！」

アレイア「愚かで、滑稽。」

エア「あーもう！グングニル止められるし散々！何なの？この人！」

クロア「…さあ？」

エア「むうー」

クロア「俺も分かりかねてるからな…」

アレイア「グングニル…ね」

エア「何よう」

アレイア「…別に。それよりも」

クロア「何故こつちを見る？」

アレイア「どつかいこつ！ねっ！」

エア「あんた一体なんなのよ！」

アレイア「（ニヤリ）…無衣の姿を見せた仲…よ」

エア「な…ん…」

クロア「ちよつとまで！あれはお前が…」

エア「ふうん…へえ…そーなんだ…」

クロア（ゾクッ）

エア「そーなんだあ…」

クロア「逃げるっ！アレイア！誤解解け！」

アレイア「私はいまもハイテナイ…」

エア「『必中の』」

クロア「やめるー！！」

若草「賑やかですね」

楼騎「だな。」

若草「それではみなさん、さようなら」

楼騎「また逢おう。じゃあな」

クロア「うあああああ！止めるっ！あぶなっ！」

楼騎「むっ。断末魔…」

若草「風流ですねえ…」

第十七章 循環景色（前書き）

ゲーム略

どうも、この前書きを書いている時はテスト日です。初日は終了して
るけど…（・ー・）

まっいいか？（クロア注：よくねえよ）

さてさて、今回はバトルメイン。ネタバレしないように言っと…

楼騎がズバーン！エアリアルがドカーン。みたいなの？

わからない？シロツバもわかんない（- - ;）

あー、そうそう

最近、某携帯戦略ゲームに参戦しました。

最大25vs25の大戦争…、と言えば分かる人もいるかな？

青の国でアーチャーやってます。

名前は秘密（^^ゞ

昔書いたキャラの流用だけど…こっちでも出ると思うので、その時
はお知らせしますね

まえがき、あとがきが面白い人は尊敬しますよ…毎回話題がなくな
るシロツバにコツをこっそり教えてください（T T）

第十七章 循環景色

一斉に間合いがあけられ、周囲の穏やかな空気は戦場の殺気に満ちた物に一転する。

吹き飛ばない空気は無い…か。

クロアは少し前に考えたことを繰り返す。だが、この空気は嫌いではない。殺気、狂気、歓喜。いくつもの感情が互いに干渉しあい新しい感情を生み出す。

知らない事への探求心、好奇心、それらが掻き立てられるような気がするのだ。

「行くぞ。」

「行くわよ！」

再び先手は楼騎・エアリアルの方。二人は地面を蹴って敵に突っ込む。

「ふふふ」

「見ててね〜クロアあ〜」

余裕の二人はそれを通常回避。返した武器による攻撃も難なく避けて呪符による一撃を放つ

「開け！『パンドラ』」

「数値操作、武器コード」

二人とも同時に武器を手にする。若草は六角形を刀身に刻んだ大型の太刀。

エアリアルは…

「そんな」

「『クンクニル必中の神の槍』」

エアリアルと全く同じ、装飾がほとんどない槍を手にした。

「行くわよ、おバカさん」

スツ…と槍を構えたエアリアルにエアリアルも対峙する。そして、叫ぶ
「『縫い付ける百万余の軌跡』」

「『縫い付ける百万余の軌跡』」

双つの神槍がぶつかり、轟音と閃光と衝撃波を生み出した。互いの槍はすれ違いざまに切り合い、すぐに向きを反転させてまたぶつかり合う。

それは、まさに神の域の戦いだったキーン！と金属の小気味良い音が響き渡る。死んだ町の鼓動に聞こえたのは気のせいか、二人の剣士が獲物を手に、相手を斬り伏せようと暴れまわる

「やはり…大太刀では戦いにくいですね」

身の丈はありそうな刀を振るって楼騎の斬撃を払いながらにしては随分と弱気な呟きに楼騎は眉をしかめる

「ふん。なら別の武器にしたらどうだ？」

若草は、

「少しだけ待ってもらえますか？」

と言って笑う。楼騎も元より待つ気など無い。すぐに叩き潰す！

「剣技『眉月』」

若草の耳元を鋭利な刃が掠める…。ほんの少し避けたからこそその風圧を感じながら彼は巨大な太刀を払う

「くっ…」

楼騎は自分とは比べるまでもないリーチを持つ攻撃を刀で受け流して素早く再突入を試みる。長物にとって懐は絶対の死角。入られれば余程の策がない限り無傷では済まない！

「終わりだ！」

振り上げた刀を悠然と見つめる若草はニコリと笑う。余裕を含んだ笑いに楼騎は間合いを開く。

「知っていますか？『パンドラの箱』のお話」

唐突に、楼騎は答えに詰まる

「あるお話で『あらゆる災厄を封じた箱』、と呼ばれます。開けてはいけない箱を、愚かな人間は開けてしまい、世界に九十九の災いが飛び出してしまいました」

楼騎はそれが？と言おうとして、口を閉じる。何か引つ掛かる

「ですが、開いた人間は慌てて箱を閉じ、箱の中にはたった一つ残りました。

そこからの伝承は分岐します。ある時は絶望、またある時は希望。さて、貴方はどちらだと思えますか？」

若草の笑みに楼騎は理解する。彼の、言葉の意味を…

「再び開け。『パンドラ』！」

若草を中心に土煙が舞い上がる。まるで、煙幕のように彼の周囲を覆ったのは、無色の力の爆発の被害だと楼騎は気付いていた。

彼が再び武器の名を叫んだとき、まるで地面を喰らわんばかりに力が放たれて、砕けた地面が土ぼこりとして舞っているのだ…。

「こいつといい、あのコートの女といい、本当に人間か？」

楼騎は、『幽月』を握りしめる…

こんな奴ら相手に、どうやって戦えばいいんだ…。

楼騎は心で呟やいて、刀を大きく振るって迷いを斬り払った土煙が視界を奪い、二人の槍使いは手元にグングニルを呼び戻して、槍同士ではなく持ち主めがけて槍を投げる。

砂煙を突き抜けた槍は二人とも上手く回避。反転して再度襲いかかる槍に向かって叫ぶ

「『リミダ・ブレイカ』！」

「『障壁』！」

瞬間的に強化されたエアリアルは槍を蹴りあげ、炎を纏った細剣を呼び出して破壊する。

完全なる防御を纏ったアレイアは槍を受け止めて、極彩色の光を放って破壊する。

そして、相手が倒れたかと出方をうかがう二人の間に流れる土煙が消える…。

「くっ…強え」

「そうでもありませんよ」

二人の男が、一人は吹き飛ばされて、もう一人は余裕の表情で、女

同士の戦いの中心に現れる

「楼騎！」

「邪魔しないでよ」

そんな声が聞こえたが、それに答えられたのは若草だけだった。

「すみません、ですが、あのままやらせていてはアレイア。あなたがエアリアルを『ブレイク』しかねませんでしたから」

極彩色の光…、やっぱそうかと思いつながらエアリアルは『フランメリーゼ』を手にして構える

「やる気、ですか？」

若草の言葉に、エアリアルは笑う

「そんな武器を手にした人とやるのは嫌だけどねえ…。

でも、クロアは返してもらわないといけないから」

若草は、放射状に刃を伸ばし、まるで骨だけの扇子かと言いたくなるような武器を揺らす。根元には黒い六角紋様が刻まれていて、まるで雄鶏のトサカのような形の、灰色から黄色に変わっていくグラデーションが幻想的に魅せる。

「正式に名乗りましょう、私は若草。このサーバー、『ミッドガルド』の管理人です」

エアリアルは一瞬驚いて、名乗り返す

「私はエアリアル。『ヴァルハラ』の上級ランカー。よろしくね」

二人が近接武器を手にぶつかった

「若草！そいつ私の相手！」

アレイアがパタパタとアピールするが、もう既に嬉々と戦っている人物には聞こえない。しかたないので今日の前にいる人物の相手をしてもらう…

「BUG、アレイア」

「上級ランカー。楼騎だ」

アレイアは

「あっ」と呟く

「前に会ったね、私達」

「さあな。お前にはあつた記憶がないな。」

「ふふふ、若草あ。あんたやっぱいい人。クロアの次に好きよ」
アレイアはクスクス…と笑う

「クロアに刃を向けた奴なら、壊すわ」

「なんだ。あの時のBUGか」

こちらの二人にも、殺意が蔓延し始めた。キーン！とエアリアルが吹っ飛ばされる。七枚に増えた太刀の刃がフランメリーゼの攻撃を阻み、そして打ち返す。相性が悪すぎる…

「こんなことになるならグングニル温存しとけばよかつたあゝ」

泣き言を言つても仕方ない。エアリアルは自分の頬をパチンと叩いて気合いを入れる。赤いフリルの服のスカートが広がらないように押さえながら後ろに宙返りする。

ガシャン！という岩盤を砕くような音がして、実際先ほどまでいた場所が砕かれていた。

「面白い回避ですね！可憐な踊りみたいですよ」

「ありがと！お代は手加減でいいわ！」

「ならタダ見になりますね、今度お茶を奢るのでキャラ…ってのはどうです？」

「ごめんね、今すぐ死ぬかもしれないからパスするわ」

「残念…」

そんな会話中に建物が破壊された。道の脇に置かれていた木箱が破壊された。地面に新しい穴が作られた。

変な太刀の威力は並みの武器を遥かに超えていて、流石は災いの箱バンドラと言うべき力となってエアリアルを翻弄する。

彼女は彼女で持ち前の運動神経をフル活用して、さらに言うと自分の動きを頭に描いてそれを実行しながらやや大振りな攻撃を回避する。

ステップ、宙返り、ジャンプにパリィ。あらゆる回避法を使いながら反撃のタイミングを探る…蒼い軌跡が煌めく。

楼騎とアレイアの戦いは両者の手にした武器のせいで混迷を極めよ

うとしていた。

「あれっ？もう息切れ？」

「黙れ。まだだ」

二つの蒼い軌跡が煌めく。

楼騎の『幽月』とアレイアの『幽月』が弾かれるように距離を開け、逆再生かと思うほどの正確さで先程の軌跡をなぞるように攻撃が行なわれる

「やり難いな…。」

自分の知っている武器が、自分の知らない人物によって振るわれる。何故だか猛烈な嫌悪を感じる…。

「『水面に映せ鏡像の月』」

詠うように、楼騎が二本目の刀の名を呟く。いつの間にか密着体勢になっていたアレイアは小さく舌打ちする

「『水映月』」

幽月に使われた呪符の力が同時に解放される。全ての法則を無視した攻撃はアレイアを襲い、紅い軌跡を刻みつけるゆらり…と一度だけ揺れてアレイアは倒れるかと思われたが、しっかりと足をついて耐える

「痛い…痛い！」

ヒュン、と一度何かが煌めく

「お前なんか！死んじゃえ！」

煌めきは巨大化し、まるで極彩色の鞭のようになり、アレイアの叫びと共に突き出された手の動きに合わせて暴れ狂う

タンタン、と楼騎は軽いステップで回避すると共に攻撃を分析する…。

鞭が触れた場所がまるで何かに食べられたかのように欠損しているのを見て彼は攻撃が『ブレイク』に類すると判断する。

…触れれば、危険だ。

「剣技『半月』」

カクン、と曲がってきた鞭を半月状の軌跡を描く技で弾く。

極彩色の鞭は近くの建物の壁に穴を開けると、少し速度を上げて建物から飛び出してくる楼騎は驚いたが、巧みに回避。二・三步後退して襲い来る鞭を弾き返す。今は何とか凌いでいるが…すぐに追いつめられることを彼は悟っていた。

「はっ。この化物が…。」

キツ、と睨む鋭い眼の少女が殺意を込めた鞭を打ち据える。

「ちっ。」

もう何度目かの回避、それを見越した少女は新しい動きを見せる

『『ブレイクバインド』』

鞭が無数に細分化し、一斉に天へとその先端を向けて伸びる。天空を覆う網となった鞭は、楼騎めがけて降り注いだ…。

第十七章 循環景色（後書き）

あとがき

クロア「後書きだな」

エア「うん。私たちの活躍をバツチリ伝えようね！」

クロア「それは他の奴に頼め。白燕とかな」

エア「ええ、そんなあ……」

若草「おやおや、楽しそうですね」

クロア「割と、そうでもないぞ」

若草「まあ、そう言わず……お菓子でも？」

クロア「いや、いらな」

エア「食べるっ！」

クロア「……そんな眼を輝かすな、まぶしい」

エア「（キラキラ……）」

若草「はいはい、カステラでもお持ちしましょう」

エア「ありがとー！」

クロア「……俺にもくれよな？」

アレイア「……！！」

クロア「おっ、いたのか？」

アレイア「か……かかかか」

クロア「ブラクラでも踏んだか？」

エア「カステラきたようー」

アレイア「わわわ、私のあげる！ついでに私も！」

クロア「むくむく……美味しいな」

アレイア「……くすん」

エア「いい気味ね」

アレイア「あら、ちよつと食べ過ぎじゃない？運動しに外に行かない？」

エア「私、食べても太らないから気にしないでいいわあ？」

アレイア「適度な運動は体にいいらしいわ」

エア「あら、ならば貴女の方が必要ね」

クロア「…なんだ？この殺気は…」

若草「やれやれ、ですね」

アレイア「なら、手伝ってアゲル」

エア「挑むところよ？」

若草「お二人とも、ちよつと廊下へ。」

二人「なに！？」

クロア「？」

「ちよ、なに！？」

「ごめんなさい！」

若草「ニコリ」

第十八章 ノヴァルハラ ミッドガルドノ（前書き）

ゲーム略！

そろそろ新しい宣言が欲しいシロツバメです。こんにちは
さて、毎度ネタバレ出来ない自分のページに悩まされます…ネタが
ああああ…（；；）

と、言うわけで雑学コーナー！

（注クローア：何だそりゃ？）

5月のメインイベント、『ゴールデンウィーク』。実は、この名称
は映画業界で作られました。

「黄金の一週間」…、なんとなく意味は分かりますね（；；；）

さて、実は日本放送協会（NHK）はそれが「映画業界の宣伝にな
る」という方針らしく、『ゴールデンウィーク』ではなく、『大型連
休』というらしいです

小ネタもたまにはいいんじゃない？

（ネタ切れだろ？どうせ）

…違う…うん、違うよ…違うんだよ

何も無いだけなんだよ…！！

（そうか。さて、本編が始まるぜ？）

第十八章 ノヴァルハラ ミッドガルドノ

極彩色の天網が楼騎を狙い、まるで何かの意思があるように旋回しながら身動きを封じるように絡みついて…

「はい、そこまで」

柔らかい声がして、全員が一斉に声の主を探す…。

…いない？

「こつちこつち！屋上！」

ダンダン！と建物の上で一人踊っているような仕草をしている少年を見る…。クロアには馴染みがないが

「おや？」

「あ…え?!」

「ほえ？」

「冗談だろ？」

他の四人には馴染み深いようだ

「僕は嶺…風翼の」

「ストーリーだ！」

名乗りの途中でエアリアルがすつとんきような声を上げて屋上の不審人物を指差す

「違うわっ！っていかお前らが先に攻撃してきたんだろ？」

「エアリアル…って言ったかしら？」

協力するわよ？女の敵なんてくだらないからストーリー

何故か誕生した共闘関係に、風翼嶺はかなり困惑する

「冗談キツイよ…」

クロアはその言葉を鼻で笑って、告げる「お前は、誰だ？」

嶺はクロアに親指を立てて嬉しそうに笑う

「ゴミ拾いから要心警護まで、なんでもそつなくこなす『何でも屋』（社名募集中）の嶺です。よろしく」

とっつ、と屋根から飛び降りてきたので少年の姿がよく確認できる

ようになった。

髪はやや茶色みがかった黒髪、乱雑な波形を描いた後ろ髪は肩よりも数センチ上で切られている…。目は黒く、半分楽しむような光を放ち、それと同じくらいに殺気も持ち合わせている

服装は半分開いたままの白いコートに茶色い薄手のベスト、その下に灰色のロングシャツを着込んでいる

「…嶺、説明が違いますよ」

「そうね。何でも屋なんて情報の扱いは歩いてる蟻よりも下よ」
若草とアレイアは鋭い視線を投げかける

やれやれ、と彼は首を振って、別のプロフィールを語る。

「昔の『ヴァルハラ』の最高ランカー、ついでに『天界の守護者』の称号と『死神』の異名で呼ばれたね…。もう引退したけど」

引退？と聞いたクロアに彼は笑いかける

「そんなことはもういいんだよ。今は『依頼を受けた何でも屋』。それも、三つも依頼されててねえ…。人使い荒いよまったく」

なんか愚痴が始まったのだが、そんなのを無視するように若草が問いかける

「…嶺、どうやってログインしたんです？あちらの二人の近くにはいませんね」

楼騎とエアリアルは何で知っているのかと聞くが嶺が簡単だと答えを叫ぶ

「『ミッドガルド』の管理人はその若草…いや、切風刀夜さんきりかぜや」

若草は驚き、どこで知りました？と聞く。だが、嶺は

「秘密」と言っただけ

「切風家のご令嬢が何を考えてサーバーの管理人をしてるか分からないけど、風翼にとっちら邪魔なんだよね…。ほら、御家の事情、つてやつ」

「ふふふ、私が女なのもお見通しですか。残念ですね…。この生活が好きでしたが」

「まっ、うちも似たようなもんだからね。こんな依頼がなければ…」

僕も遊んでられたのに」

嶺が姿勢を低く下げて、指の間に隠していたカードを解き放つ。宣言は鋭利な刃物のように全員の上に名前を刻みつける

「風遊べ『疾風大鷲』！」名を呼ばれたカードは風を収束して双振りの長剣に姿を変える…。まるで鳥の翼のような柄の装飾が目を引き、ブロンズの輝きをもつ双剣、

その刀身は根本から剣先近くまで内側に向けて弧を描いていて、先端はひし形のような形になっていた。

クロアは、福神漬けにこんなやつが入ってたな、とか思う

「少しだけけど、遊ぼうか。二人まとめて相手するよ」

サーバー管理人とBUGを相手にした余裕の宣言。アレイアは不愉快そうに、若草は逆に愉快そうにする

「いいですよ。こちらとしてもあなたみたいなのとやりあうのは楽しいですよ…ね、アレイア？」

「こいつ嫌い…。なんか嫌」

彼女は武器をグングニルに持ちかえる。やはり、よく知らない相手には遠距離から様子を見るのが無難だろう…

「『グングニル必中の神の槍』」

キイン…と名を呼ばれた槍が呼応するように高い音を出す。

アレイアは武器を水平に構えて、嫌いな敵に投げつける。必中の槍は彼女の予想通りの軌跡を描いて予想通りの位置に突き刺さる

「遅いよ！」

嶺が一回転したかと思うと…槍が斬り刻まれて崩壊するのが見えた

「なんで？」

そんな呟きを漏らしたアレイアの隣で、若草は変則太刀を片手に刹那の速度で踏み込みを行い、猛烈な勢いで距離を詰めてその速度を乗せた大斬撃を嶺に向けて放つ

「おっと」

嶺は上体を直角に反らしてそれを回避、太刀を返した攻撃を剣で受

け止めて鏢ぜり合いになる

「…やるねえ」

「ふふふ、あなたもです」

グググツ…、と力が込められていくのを見て、今まで状況把握に努めていた二人がようやく事態を理解する

「おい、嶺。」

楼騎の言葉に、何？、という、割と余裕がない声が返事をする

「お前は『依頼』だって言ったな。」

「言ったよ、何回も」

「『誰か』は聞かない。『何の』依頼だ？」

ピタリ、と嶺が動きを止めて呟いた。

「そう来たか…」

楼騎は、答える。と言葉をぶつける

「…いいよ。はあっ！」

気合いと共に剣を振り払い、若草を弾き飛ばした嶺は双剣を地面に突き刺してカードを手にする。

一度、まるで何かを待つように目を閉じてから言葉を紡ぎ始める

「『空は暗く、大地は土色。』

世界は塞がり、流れは停滞す。』

アレイアが何かに気付き、叫ぶ

「開くわ！若草っ！」

「『ありとあらゆる混沌を、我は切り裂き』

破壊し、

全てを壊し、創造する！

再生し、

若草もそこで何かに気付く。

エアリアルは何か漠然と、

楼騎は普段とは違う異様な雰囲気、

クロアは…知らない事象への突き動かすような好奇心を感じる

「『さあ、閉じたる門を開け！ミッドガルド！！』」

ピキツ！と世界に亀裂が走る。建物を、地面を、破壊された木箱を、空中を、状態などを完全に無視した亀裂は漆黒の虚空を開く。

虚空の奥深くから青白い光が溢れ出して徐々に内部に光が満ちてくる。光の中に、数人の人影が見えた。二人は小さく、三人はそれよりも大きい。合計五人が光が臨海にまで満ちた亀裂から飛び出すと、

「ふん、汚い町だな」

「本当に…」

「我々に全てお任せください」

「わーい！みたことないばしょだ！」

「はしゃぐと転ぶわよ…」

何故だか、クロアの良く見知った顔達だった。

「ルイエス？ラムダ？ゾルア？ヨロワ？ノピア？」

「煩いね、全員分名前を言わないと理解できないのかい？」

ルイエスが、白い洋装と髪を揺らして笑う。

「クロアお兄ちゃん！あそびにきたよ！」

「『助けに』よ、ヨロワ」

他のキャラクターとは一線を引く、どこか制服のような格好の幼子達がワイワイとざわめく

「ルイエス様、私たちが前面に」

「足を引く張るなよ？、ラムダ」

既に臨戦態勢の二人の従者は武器のカードを手にして食いつかンばかりの殺気を放っている。

「ふう、お疲れさん、『黒須』」

嶺が空に向けて呟く。答えは、どこからか聞こえてきた。

「ふん！アンタがもう少し仕事ができればもっと早く聞けたセリフね？」

嶺は笑う。

「あはは、天井裏から配線を調べてセキュリティの甘い部分を調べてたんだよ…見逃して」

「まあ…、セキュリティティーが固いからね。そうしないと『ヴァルハラ』から直接繋ぐ、なんてできなかったし」

プツン、という音がしてそれ以降会話が聞こえなくなった。

五人を呼び出した少年は若草とアレイアに向き直る

「『クロア』。返してもらいますよ」

にこり、と笑って武器を握りなおす。それを合図にしたかのように一斉に武器が解放される。

「『レベツカ』」

「『ルージュ・アン』」

「『グリダ・アルビナ』」

「『銀の煌めき』」

「『銀の煌めき』」

綺麗に重なった声が死んだような町に精気を吹き込む。凜とした佇まいの五人は堂々と武器を構えて違法な存在に告げる。

「『行くぞ、心せよ！』」「『』」「『』」

「せよつ！」

なんか一人だけ遅れたが、堂々とした姿勢は崩れなかった

「…なんで」

「おやおや、随分とやられてますね。エアリアル」

小さく呟いた言葉を茶化すようにルイエスが笑う。何故だか、悪意は感じられず彼女は首をかしげる

「おい。」

「黙っていなさい、邪魔です」

あちこちを細かい切り傷で線取りされた青年剣士と白亜の巨大な斧を手にした青年が互いに威嚇し合う。何故だか、悪い気はしなかった

「君は…ラムダだね。どう？またルイエスの側に戻った気分は」

「第二の主と呼んであげます」

二人の剣士が笑い合う。まるで親友のような笑いは戦場で異彩を放つ魔石のように目立っていたが、誰も咎めようとしなかった

「くっ…若草、数が多いわ」

「ですね…。残念ですが…」
シヤキン、と鋭い音と共に建物が斜めに斬られて轟音と共に崩れ落ちる

「相討ち覚悟でお相手しましょう…。敵は七人、我々は二人…、4…
3でどうでしょう?」

「わかった。私が四人相手する!」

前線に飛び出したアレイアの後ろで、

「四人取られちゃいましたね、仕方ありません。三人で我慢しまし
よう」

ふう…、とかため息をつきながら目の前で再度組み合わせをし直し
た三人組 ゾルア・ラムダ・ルイエスに対峙する。

「では、参ります」

柔らかく伝えてから、鬼神の如き一線が煌めいた「わるいひとだ」

「そう、近寄っちゃダメだよ」

アレイアが近寄るなり、いきなり幼い双子がそれなりに傷付くセリ
フを呟いた。アレイアは否定を込めて違うと答える。

「悪い人はみんなそう言うの、わかった?」

「うん、お姉ちゃん」

どうやら逆効果だったらしい。

いや、そんなことはいいとアレイアは武器コード操作を行なってそ
の手に蒼い刀、『幽月』を握る

「待て。」

既に疲労困憊に近い楼騎が後ろから声をかけてくる。何?と振り向
きもせずにアレイアは応対する

「そいつらに、手を出すな」

ふうん…、とつまらなさそうに呟いてから彼女は手を動かした。

彼女の手にあつたはずの刀は既になく、ソレは超高速で空間を切り
裂いて飛来する

つまり、投げたのだ。

不意打ちに近い攻撃に対処が遅れて楼騎のガードが間に合わない位置にまで刀が迫る…

キン！と軽い、金属がぶつかると

「私たちはガンチューにない？」

「あぶないのはだめです！」

そんな事を叫ぶ二人のだいぶ後ろに刀が落下して地面に垂直に突き刺さる…

アレイアは、この子供も敵として認めることにした

第十八章 ノヴァルハラ ミッドガルドノ（後書き）

あとがき

若草「ただいま」

クロア「…廊下で何があった？」

「あうううう」

「ヒビヒビヒ！」

若草「ちよつとだけ、です」

クロア「…」

ガチャ！

嶺「ちよつと！廊下で二人倒れてるけど…」

若草「お気になさらず」

嶺「切風…まさか…」

若草「ちよつとだけ、です」

クロア「二回目だな」

嶺「あれか、二人のアレにコレしてソレしたろ」

若草「流石は風翼、良くご存じで」

クロア「おい、説明しろ」

二人『ハレンチな』

クロア「…何したんだよ」

第十九章 成長の痛み（前書き）

どもつ、最近重大なことに気付いた白燕です。こんにちは。

今回はいつもの定型文は無し。それよりお知らせ！

『字数制限勘違いしてた（ ; ）！！』

うん。5000だと思ってたよ…

短いと思いつつ書いてたけど…なんだよ、書けるじゃん。

これで文章を削らなくてすむ…

やりたいことがやれる！例えば

こと

んこと

な　か

こ　ん　な　こ　と　や

こ

ん

な

こ

と

も

出来ちゃいますね〜（*´、´*）

今回は書くのは終わってるので、次からいろいろ考えてみようと思います

それでは、ゆるりと本編へ…

第十九章 成長の痛み

暗い世界、荒廃した町。クロアは今のサーバーをまるで古戦場だと思った。

そして銀色の光が煌めいて、自分の考えを訂正する。やはり、戦場でしかないのだ、と

今、町では二つの陣営が武器を手にしており六つの思考が交錯している。クロアを取り戻そうとする、楼騎とエアリアル。

『ヴァルハラ』からの意思を同じくした援軍、ノピアとヨロワ。

二人に続いて『ヴァルハラ』から派遣された、ゾルアとラムダとルイエス。

『ヴァルハラ』と『ミッドガルド』を繋いだ自称何でも屋、風翼嶺。

『ミッドガルド』でクロアに戦闘技術を教えた、若草

クロアを取り戻させたくない、アレイア。楼騎、エアリアル、ノピア、ヨロワ、ゾルア、ラムダ、ルイエスの『ヴァルハラ』勢と

若草、アレイアの『ミッドガルド』勢、そして

嶺、クロアの『中立』。三者で武器を手に殺意を剥き出したのは『ヴァルハラ』と『ミッドガルド』だ。

「俺は、どちら側だ？」

クロアは立場を決めかねていた。馴染みのある世界、仲間と共に戦うべきか、不馴れな世界、大切な時間を得たほうと共に戦うべきか…究極の二択だった。

「考えなよ、それが選択さ」

「考えなよ、それが選択だよ」

嶺と、頭の中の声が呟く。

クロアは立場を決めかねていた。

「やあっ！」

短い気合いと共に『銀の煌めき』が空間に鋭利な照り返しを生み出す。

フォン、と短い音とまるで受け止められるような感触がする。銀に輝く小型の剣がアレイアのからだの上数ミリの位置で完全停止する。「なんで？」

逆手で斬りつけたヨロワは驚きで目を丸くする。アレイアは自身の周囲を防御する隔壁を一部反転させて受け止めた攻撃を逆にヨロワにぶつける

「くうっ！」

ポーン！と見事に飛ばされたヨロワを楼騎が空中で受け止めて、聞く「まだいけるか？」

「うん！」

短いやり取りを終えて、二人は少しだけ笑う。そして空中で楼騎は体勢を変えて…

「いつけえええ！！！」

全力で投擲した。

とてつもなく大きい風圧を感じながらヨロワは短剣を胸の前でしっかりと構える。そして、アレイアを直線上に捉えて目を閉じる

「そんな！？」

回避しようとして、クンツと何かが引つ掛かるのを感じる

「畏符『インビジブルステイル』」。

残念ねカンネンしなさい」

ノピアの指には無数に展開された無色の糸の先端が結ばれていて、ヨロワの短剣が貫くのと同時にその糸が全て引かれる…「かはっ…」首に絡んだ糸が喉を締め付け引き上げられた頭が体内の空気を無理矢理押し出す。キリキリ…と締め上げる力は弱いハズなのに、隔壁の内側に入り込んだせいで弾けない！

「人間のくせに…はくっ！？」

キツ、と締め上げられた糸が全身に薄く食い込む。パタタツと血が垂れて紅い模様を描く

グサリ、と力の供給が不安定になった隔壁を貫いて銀の短剣の鈍い衝撃が体を貫く

「…痛い」

アレイアは呟く

「！、お姉ちゃん！」

ヨロワが何かに気付いて自分の姉へと叫ぶ

「何！？」

キリキリキリキリ…と後ろ向きで糸を引いているノピアが聞く。かなり力を使っているのですでに顔が赤くなっている

「おかしいよ！」

「だから何！？」

「このひと、わらってる…」

ヨロワの声に怯えが混ざり、ノピアはようやく事態を把握する。全身を切られて、さらに短剣で刺されて

「痛い」の一言で済むはずがない。

「痛いよ」

ふっ、と耳打ちされるように聞こえてノピアは振り返る

アレイアはまだ糸で拘束されており、足元の模様は水溜まりに変化しつつあった。なのに

「ヒビヒビ」

壊れた、狂喜が響くのは、なんで！？「『アンバーアクス』」

琥珀色の斧が打ち据えられ、

「『グリダ・アルビナ』」

白亜の斧が追撃した。

変則太刀を巧みに操って直撃を回避し続ける若草は後方から狙うルイエスを見て、笑う

三つの銃口をもつ、黒光りする兵器が光と爆音と鉛玉を連続的に、そして容赦なく放ちまくる

金髪和装の剣士はタンタン！と軽いステップでその攻撃圏から逃れて放射状に広がった太刀を振るう

ルイエスはそれを自身の服を用いて絡みとる。

「おろ？」

意外だと驚いた若草の後ろから

「もらいます！」

「くらいなさい！」

野獣のように目を輝かせた斧使いが襲いかかる…

若草が何かを呟いたが、二人の大斧が岩盤を叩き壊した音の方が数十倍大きく、半径二十メートル程の地形を変形させる迫力にも負けていた。

「やったか？」

もうもうと立ち込める土煙の中からは何の物音もしなかった

「…おい」

少し離れた位置で 破壊に巻き込まれて瓦礫に変化した建物に腰掛けながら 嶺が呟いた。

「何ですか？」

至つて平然と、一瞬で空間を飛び越えた変な和装の人物が首をかしげる

「はあ…死んでやれよ…可哀想だろ」

「死ぬのは嫌です」

そう、平然と笑う若草の表情はどこか少女らしかった。

「『私』はワタシ。死ぬなんて御免です」

パンパン、と袴についた砂を払って彼 彼女はクロアと嶺を交互に見やる

「…似てないですが、どこか似ていますよね？お二人とも」

「そう？」

「無いな」

返ってきた返事に若草は

「似てます」と頷く。二人は互いに見合い、首をかしげる

「さて、このままではサーバーが壊れてしまいますね…。後でもう一度マップを作るのも面倒なので退却します」

ぺこり、と頭を下げた若草にクロアが掴みかかる。

「おい、アレイアはどうなるー！！」

「それは」
ビクッ、と三人が同時に反応する。まるで…そう、皿が割れた時のような感覚だ。

「ヒビヒビヒ！」

少し先で糸が張り巡らされていて、その中から奇声が漏れ出している…。最初に反応したのはクロア

「アレイア!？」

走り出したのを嶺が手を掴んで引き戻す。

「待った、様子がおかしい」

ただ一人、若草だけが理解したように唸る

「おい、若草。何か知ってるのか？」

若草は細い目をさらに細くしてから数秒あけて口を開く。

「『成長』してしまいましたね…」

嶺がぴくりと反応して眉をひそめる

「彼女、アレイアは人ではありません。BUGの…それも『成長するBUG』です。」

そして、その成長は人と酷似しています。「若草の説明は続く。

「人は成長に『痛み』を伴います。」

苦痛や、努力の苦痛。外物的な痛みでも人は成長出来ます。

例えば、武術の稽古なんかはそれにあたるでしょうね…。実践の経

験は人を成長させますから」

彼は少し反れました、と謝る

「彼女もまた、同様です。」

戦場での戦いを見、愛しき人への心の痛みで成長を遂げた…」

クロアに笑いかけてから話を続ける

「…ですが今回は愛しき人のために戦い、彼女は『痛み』をたくさん受けました。『痛み』は狂気へと変質しやすいものです。痛んだ果物のように外見的には同じでも内面的には全く違います。

ですから…」

ザザザザザザザザザザザザザザザザザザザザザザザザザザザザ

「見るな！下がれ！」

嶺に突き飛ばされた時、見えてしまった

血にまみれた、若草の残骸を

「くっ…」嶺はスツと身を引いて攻撃を回避する。目の前を疾風が駆け抜けて

全身が切り裂かれた。

「ぐっ…あ」

なんとか死なずにすんだ傷は深すぎて動くことも、傷口を押さえることすら許さない

「逃…げろ…。こい…っ…半端じゃ…ない」

嶺が最期に告げて、目の前で消し飛ばされる。

地面が砕けて、ようやく攻撃があったのだと理解する。理解する。

理解する。理解する。理解する。

理解はした。体が動かない。

「おい…嘘…だろ？」

カードを引くことも、構えることも、指を動かすことすらも出来ない。恐怖。

「…」

ニコッ、と目の前にいる少女が笑う。

その笑顔は今まで見たこともないような明るさで、とても愛らしかった。

手に持った、一分以内に二人のキャラクターを殺した大剣さえなければ…だ。

「おい…やめる…」

ニコニコと笑いながら少女は剣を振り上げて両手で握る。先ほどの

威力から察するに、攻撃されれば岩盤破壊など比ではないだろう…

「やめる…」

まるで何がおこるかな？と

「やめる…」

スイカ割りを楽しむように

「やめるよ…」

少女は

「やめてくれっ！」

剣を振り下ろした「っ…！！」

痛みがない。

クロアは怯えて頭をかばいながら来るであろう一撃を耐える

「…」

いつまでも、こない

目を開けると、そこは白い部屋。

ただ広い空間にポツンと後ろ向きに椅子が置かれている。椅子は後ろから座っている人物が確認できないような背もたれが長いタイプ。中世のヨーロッパあたりで使われたような形だと思った。

クロアはあたりを窺いながら椅子に一步近付く。目の前に白い光が現れて、空間を『跳んだ』。

「クロアっ！」

目の前にアレイアがいた。

「うおっ！」

身を引くと、スツと何かを通り抜ける

『アレイアか』

ソイツは青碧のコートを着ていて、髪は茶色、ソイツはアレイアに親しげに話しかける

『今日も可愛いな』

その一言に、かあつと赤くなる

「それは…」

ゴニョゴニョと口ごもるアレイアをソイツは撫でる。薄い色の金髪

を、優しく、いとおしく、何度も

「これは……」

クロアが狼狽する。青碧のコートを着た人物は、自分だった。「俺
…か？コイツが？」

クロアは手を伸ばして、自分に触れる。指は何の感触もなく突き抜
けて丁度もう一人の自分の胸を貫通した感じになる。

「見てて気持ちいいもんじゃねえな……」

引き抜いて、ふと気付く。

誰かが呟いている。

小さく、何度も、何度も呟いている。

クロアは耳を澄まして方向を定めて

「行くか」

歩き始めた。声は次第に大きくなり、何故だかもう一人の自分とア
レイアはそのままの体勢で会話しながら滑るように後ろについてき
ていた。

「なんなんだよ……ったく……」

悪態をつきながら、だいぶはつきりしてきた声の主を探す。

……

……

…

いた。

まるで何かを見ているように

まるで何も見ていないように

彼女、アレイアは膝を抱えて座っていた。時折何かを呟いているの
だが、クロアは背後を振り返る。

遠くに先ほどの椅子が見えて、近くに会話を続ける自分とアレイア
がいる

どちらも、本物ではない。

その二人を見て、ゆっくりと目を閉じる。そして本物のアレイアへと視線を移動させてから閉じたときと同じように目を開ける

「…痛いよう」

弱々しく彼女はつぶやく。目の前にいる本物のクロアが見えていないのか、どこか虚空を見るような目で偽物の二人を見ている

「いいなあ…私も、こんなふうに、いたかった」

偽物のクロアが冗談を言っつて、偽物のアレイアが笑う。本物は膝を抱えて動きを止める

「私には…クロアしかないのに…なんで助けしてくれないの？私、頑張ったよね？見てくれてたかな？」

ポツリポツリと途切れ途切れに呟かれたのはそんな言葉。クロアは手を伸ばしかけて、下ろす。

「痛いよう…手が、足が、みんなみんな痛いよ…」

クロアは聞くに堪えない言葉に顔を背けて、向き直る。聞かないといけない。そんな気がした

「もう、壊れちゃえ。私も、世界も、何もかも」

後ろからクシャリ、と何かが潰れる音がした

「もう、クロアにも嫌われちゃったし…いいや。死ぬのは怖くないから」

一瞬だけ、沈黙が訪れた。

まるで『選択肢』を与えられたような感覚。創るか、壊すか。そんな二択。

「アレイア…」

クロアは言葉が見つからないながらも懸命に単語を繋いで文章を紡ぐ

「…俺が、悪かった…と思う。…俺は、何も分かって…なかったよな、『決めかねてる』なんて…選択から逃げて…ただだしな」

「嘘。」

小さく呟かれたのは明確なる否定

「クロアはここにはいない。だから、嘘。私がワタシについた嘘。」

だから、嘘。」

クロアは否定しかけて…首を振るだけにとどめる。

「悪かった…。」

「嘘。」

否定される。

それどころか

「クロアは『イ』ない。『世界には存在しない』。だから『イ』ない。」

クロアの存在そのものを否定されて全身に風のような拒絶の力を受ける。

「クロアは『イ』なかった。それで…いいでしょ?」

泣きながら咳かれた言葉を

「『い』るよ!」

どこかで聞いた声が反論する。

「クロアはいるよ! わすれたの?」

幼い、白い少女が鋭い目付きでアレイアに叫ぶ。クロア的位置から丁度反対側だ。

「なら、ワタシがそのからだにもどる」

伸ばされた手を隔壁が阻む

「嫌…またクロアから離れるのは、嫌!」

幼いアレイアがクロアに向かって手を広げる。まるで

「どうぞ」という仕草に見えた。

「アレイア」

手を伸ばして、頭に載せる。柔らかい髪をできるだけ優しく撫でる…

「やっぱし、偽物の方がこういうのは巧いか」

苦笑いしながらクロアはもう一度撫でる

「悪かった。」

素直に、浮かんだ言葉を口にする

「クロ…ア?」

顔を上げたアレイアの目に、光が灯る。虚ろから満たされた目に変

わる

「悪かった」

クロアは生まれてはじめて頭を下げる。アレイアは一瞬目を丸くして、笑って、頷く

「うん！」

拒絶の力が無くなり、クロアの体は光に包まれて白い部屋から飛び出していく

ふん

誰かの声が聞こえたような気がした。クロアは、暗い世界の血溜まりの中で見上げていた。地形が変形し、どこか荒廃した雰囲気だった町は『完全に』荒廃していた。

そして、

「むにゃ…」

何故だかアレイアがクロアの上で寝ていた。大剣はクロアの頭すれすれに縦に地面に刺さっていて、あと一センチもずれていたら頭部損壊とかいうのではすまなかっただろう…

「ったく…幸せそうに寝やがって」

つつつくとちよつとだけ笑いながらもぞりと動く少女に怒る気力まで奪われてしまいクロアは苦笑する

「幸せそうですね？」

金髪糸目のぞきこむようにして現れる

「うお!？」

「まったく、ハレンチな」

やれやれ、と嶺も現れる

「お前ら…死んだんじゃ…」

二人は笑う

「「うん」「」

平然と言いやがった

「いやね、僕は死んだ後にもう一度繋ぎ直したんだよ」

「私もです。やはり戻ってきてよかったですね」

二人はハハハとか笑う。正直、理解できない

「おっ、あちらさんも来たね」

タタタタタ、タンツ。

「クロアお兄ちゃん！」

「こらっヨロワ！」

飛び乗ろうとしたヨロワをノピアが引き戻す。

「クロア菌がついちやうから触っちゃダメ。いい？」

そんな説明をしているガキにクロアは

「俺は病原体か？」

イラツとしつつ聞く

ノピアが何か言おうとしたとき、

タタタタタ、タンツ。

「このっ浮気者！！！」

天空からヒールの一撃が降り注いだ。「やめとけ、殺す気か？」

楼騎が聞くと

「むー！女の敵よっ！ふんだ！」

猛烈に怒り狂ったエアリアルがクロアの頭一センチの場所に食い込

んだ自分の足を引き抜く

「皆のもの、お疲れじゃな」

談笑していた全員の視線が声の人物に注がれた

「やれやれ、最近の若者は不埒じゃの」

独特な言い回しの女性が歩いてくる。見覚えのないキャラクターだ

が、声と口調は良く知る人物だった

「G、来たのか？」

「うむ」

楼騎の問いに女性が答える。

紅いコートを着ている女性：Gは嶺に目を止めた

「万事解決かな？」

「はい、貴女から頂いた依頼、全て」

嶺がスツと頭を下げ礼をする

楼騎とエアリアルは彼が誰の依頼で動いていたのかがようやくわかり、少しだけ嬉しそうにした。

「ふむ、ルイエス達も無事にいるようじゃの。あやつらはかわり合いにはなりたくないよじゃが…、まあよい」

仰向けで倒れているクロアを除き込み、

フッ

と笑う

「アレイアを始末せよ。…と言いに来たんじゃないの…。幸せそうに寝ておるわ」

むにやむにや…とクロアの上で寝言を呟いた少女を優しい目で見つめてからGは命令する

「最後の依頼じゃ。全員を『ヴァルハラ』へ転送せよ」

「了解。では、お役御免というわけで」

パチンと指が弾かれて世界に亀裂が入る。世界の亀裂は光を失いながら黒く変色していく…

「またお逢いしましょう。もう逢うこともないでしょうが」

「どうかの？若い者がいなくなったら雇うかも知れぬぞ？」

お断りします。そう否定した嶺は一人だけ亀裂の外にいた。

「ゴミ拾いから要人警護まで、何でも屋をよろしくお願いします。

社名未定ですが」

彼は笑って、亀裂が閉じた。

何も見えなくなつた。

第十九章 成長の痛み（後書き）

あとがき

ノピア「かんぱーい」

ヨロワ「かんぱーい」

クロア「うおう？」

楼騎「いきなりどうした？」

ノピア「私たちの復活記念、まだやってなかったから」

ヨロワ「またでれてうれしいよ」

クロア「そうだよな…お前らさういぶん見てなかったな…最近まで」

ノピア「気安く触らないで」

クロア「…」

ヨロワ「お姉ちゃんは…なんだっけ？」

ノピア「？」

ヨロワ「つんどら？」

ノピア「違うわっ！！」

クロア「むしろツンツンだな」

楼騎「いや、違うだろ。」

エア「た…ただいま…」

クロア「あとがき二話ぶりの登場だな」

エア「もう…お嫁にいけない…」

アレイア「若草の奴…今度あつたら…」

クロア（一体何が…？）

エア「で、何のお話？」

クロア「ノピアがどんな…」

ノピア「わー！わー！」

エア&アレイア「把握。」

楼騎「よく理解できるな……」
エア「ちよつとノピアちゃん」
アレイア「こつちへ」
ノピア「ちよつ、やあっ」
エア「可愛いじゃない！」
アレイア「ヒヒヒヒヒ……」
クロア「おいおい、R18かかるぞ」
楼騎「白い花が咲き乱れ……。か」
ノピア「っ……くっ……」
エア「ふふふ……ようやくおとなしくなつたわね……」
アレイア「……あれ？私何を……」
ヨロワ「お姉ちゃん！」
エア「……で、なにしてたんだっけ？」
ノピア「……うにゅ？」
エア「ああっ！ノピアちゃんの属性！」
アレイア「字数がもうない」

第二十章 たまにはふつうに(前書き)

PV18049人達成しました!

皆さん、読んでくれて本当にありがとうございますm)——(m嬉
しいです。本当に!

18049人つてあれですよ?日本の人口一割よりも遥かに多いん
ですよ!? (クロア注:おちつけシロツバ)

…うん、おちつく

(18049:めんどいから一万八千の画面の向こうのお前、よく
ついてきてるな)

本当に…こんな、わかりにくい作品を…(感涙)

(だな…。さて、そういうわけだ。謝辞は昔やったから終りだ)

そんなつ (;)!!

(さつさと本編書きやがれ、ススメが)

白燕だああああ!

(書けない鳥はただの鳥だ)

それ以外あんのかよ

(…)

…

(本編、長くないか?)

気合い入れて休みなしの20000over書いてみました)・
)

(…本編、いくか)

では、お楽しみください)

やっぱ長かったかなあ?

(知るか!)

第二十章 たまにはふつうに

塗り潰されたような闇の中に暫し漂う。全員指一つ動かさないで数秒：ひよつとしたら数分かもしれない時間を過ごす…

暗闇の中に次第にポウツと光が現れはじめて何も見えなかった世界が照らし出される。全員の顔が見えてきて数秒程待つと空間の、閉じたのとは反対側の亀裂が口を開ける

「もうちよつとまちます」

一番ちまい少年が一向に伝える。そういえばコイツは一度これを経験してたな、と未だにアレイアの下敷きになっているクロアは思った。

光は徐々に内部に満ちていき、やや眩しさを感じてきたとき、ヨロワが言う

「できます」

「そのクロア拾っておいてね」

やや生意気な姉がそう付け加えて、ぴょん、と亀裂から飛び出す

「あらあら、仕方ないですね」

「運ぶか。起きれるか？クロア」

「悪い、無理だ。どかしてくれ」

「女の敵…」

ギリツ…と爪を噛む音が聞こえたような気がする。

だが、エアリアルと若草がアレイアを持ち上げて楼騎がクロアを立ち上がらせる。軽く服の埃を払ってからアレイアを背負った若草を見る

「…お気になさらず。私を『ヴァルハラ』に連れてきたのですからそれなりに叱られるでしょうが、ひどくはないと思いますよ」

「…そうか」

どうぞ、と亀裂を指差されてクロアは先頭に立つ。次いで楼騎とエアリアル。最後に若草。

「行くぞ」

「ああ。」

「おかえり！」

「久々ですね」

「すぴー」

五人は光が漏れ出す穴に飛び込んだ。光が消えて、世界が色付いて見える。青い空、白い雲、赤茶けた大地は様相を変えてクロア達を迎えた。

「おそいよー」

「まったく、遅いと嫌われるわよ」

何にだよ。そうツツコミを入れたいところだが

「ヘラヘラ、生きて帰ってきたよ」

「ちよつとD！たまには笑わないで話せないの？」

「ふん、帰って来やがったか」

D、T、Jの三人と

「本部の者も良く働いた。今日は休むと良い」

亀裂から現れたGが声を揃える

「ヘラヘラ、おかえり」

「おかえりなさい！」

「ふん。」

「よくぞ帰った」

…割と揃っていなかった

だが、今帰って来たクロア、エアリアル、楼騎、ノピア、ヨロワの面々は小さく笑う。

そして

「ただいまっ！」

「ただいま」

「帰ったぞ」

「たっただいま〜」

後ろから順に叫び、視線が何も言わないクロアに集中する。

「…つたく、ガキかよ」

そんな事を言ったあと、自分を見つめるキラキラとした目が訴えているのを感じる。

ただいまは？

クロアは思わず後ずさる。なんでこうにも子供は直球で目で語るのだろうか…。

クロアは自身の中で葛藤しながらも少しだけ、優しすぎる人格が勝つ「た…ただい…ま」

ニヤツ、と全員が笑う

「おかえりなさい」

「おかえり！」

「フツ…素直だな。」

「おかえりなさい！」

「おかえり…だな。ヘラヘラ」

「おかえり！クロア！みんなも！」

「帰って来なければよかつたんだがな」

「無事帰還、後で一杯やるかの」

七人七色の歓迎が帰って来た。

たまにはこんなことも悪くないか、クロアは心の片隅でそう思った。いつの間にか閉じた亀裂の前で若干の雑談が生じたところで職員と思われるキャラクターが現れて、Gに耳打ちする

「…承知した。」

軽く一礼してログアウトしたキャラクターを一同は不審に見つめる

「準備が終わったようじゃ。皆、ログアウトするのじゃ」

その言葉にうなずいてから、幼い双子、エアリアルの順で世界から離脱していく。

「先に行く。またな」

簡単にそう言ってから楼騎もまたログアウトする。

クロアはログアウトしようとして、今はイリーガルな存在となった若草とアレイアを見る

「心配ありません。いざとなれば逃げおおせますから」

ニコリ、と微笑んだ若草はただでさえ細い目をさらに細くして

「行きなさい」、とメッセージを送る

「安心せい。僕とて優秀な人材を消すような愚行はせんよ。そして、あんなに幸せそうな女子にも…な」

クロアは少しだけ言葉の真意を探ったが、確かにそれ以上の意味はないと判断して、久々に自分の体に帰るとする。自分の体から離れてから色々なことがあったな…と思いつつ、すうつ…と遠退く意識に全てを委ねたガコン！という聞き慣れた音と共に光が視界を満たす。人工的な証明に照らされた部屋の中に設置された椅子のような端末に、何人もの人が座っていた。

ガコガコガコン！というやや耳障りな音を聞きながら全員がログアウトするのを待つ

「ふう…つ。疲れたあ〜」

「それより、俺らの体はどうしてこんなところにあるんだ？」

黒いハイネックのニットシャツを着た少女と、紺色の 現実世界でも大差ない 和装を纏った青年が目を覚まして呟く

「うむ。嶺が届けてくれたそうじゃ。あやつは稀に見るお人好しじやな」

クツクツクと笑う、最近小じわが目立つGはピョコン、と飛び出した双子に話しかける

「気分はどうじゃ？」

幼い双子は無邪気に笑いながら元気なのをアピールする。

「ふわあ〜う」

「…」

大きなあくびを、目に涙を溜めながら終えたエアリアルは隣で驚いている楼騎に時間を訪ねる。

彼は質素な腕時計で既に真夜中なのを知らせる

「うう…どつりで眠いわけだあ…」

また出そうになるあくびを噛み殺しながらエアリアルはもう寝る、

と伝える

それにGも同調したのでここは一時解散となる。子供を遅くまで起こしておくのも問題なので誰も異論は挟まない。

「今夜は休むといいよ。あと、変な服のクロア」

「んだとコラ！」

「君の自宅に行つて着替えを拝借しましたよ。あと、探しに行つた職員がベッドの下のある本を…」

「そんな本はねえよ」

へらへらとそうだね、と頷いたDを一発殴ろうかと思つたが…やめておく

「いやあ、元気だねえ」

ああ…。殴つておくか

ゴスツ、あいたつ。と聞こえて

「では、解散。」

Gの号令で各自、自分の部屋を指してあまり広くない部屋を後にする…カツコツと足音が響く金属質の廊下を歩きながら、未だに横縞模様の服のままのクロアは小さくあくびする。

時間はすでに深夜、眠気はあまりないのだが体内時計が無理矢理にでも寝かせようと睡魔を呼び出している。クロアは二回目のあくびを噛み殺しながら一緒に部屋を出てきた楼騎に話しかける

「…どうしてお前が助けに来たんだ？最初はあんま…というより完全に敵対してたよな？」

楼騎はそうだな、と頷く

「確かに、お前の力は異端だ。能力を打ち消す、能力に対する能力なんて見たことないが…」

少しだけ躊躇うように言葉を切つた楼騎は、少しだけ諭すように、少しだけ決意したように、少しだけ恥ずかしそうに言う

「『力の使い方は使い手次第』だからな。お前は、世界を壊そうとするほどバカじゃなさそうだからな」

フツ…、と小さく笑い、柄でもないなと楼騎は自嘲する

「まあ、今日は寝る。何なら明日手合わせしてやる」
そう言つて彼は一見すると壁と大差ない色合いの扉を開き、中に消える。

そこ、お前の部屋だったのか

考えてもいなかったクロアは少しだけ驚いて、蛍光灯が照らす廊下に足音を再び響かせ始める。部屋はもうすぐ。今夜はゆっくり寝るとしよう…彼は自分の部屋の前でそう思った 朝

ちゅんちゅん、チチチチチ…とどこか平和で、やや耳障りな小鳥の声で目を醒ます。

薄暗い部屋の中に明るい太陽の日差しが一筋の線となつてあまり大きくない窓からの明かりを目立たせる

クロアはいつの間にか寝入ってしまったベッドの布団を剥ぎ取りあくびを噛み殺しながら小さな洋箏を開く

「たたく、どうやつて調べたんだ？」

クロア自前の服がぎつしりと詰め込まれた箏笥にやや不審な目を向けながら適当に見繕つて羽織る。

白と黒と灰色のワイシャツに、似たような色のシャツを着込む。黒いジーンズのような形の、やや肌触りのいい生地を用いたパンツを履き、ベルトにチェーンでアクセントを添える。

小さな鏡を見て、箏笥の小物入れを探すとやはり自前のブレスレットを取り出してはめる

「こんなもんか」

少し過激すぎる気がするが、まあ横縞の服を着させられた腹いせとして若干攻撃的な格好でいよう、と小さく思う。

コンコン、とノックされた扉を開きクロアは部屋を出た廊下に出ると、今日も変わらない服装のエアリアルに行くわす。おはよー、と言われてクロアは手を上げて答える

「早いね、びっくり」

「お前とは違うからな」

「あ、ひどいよう」

スタスタとクロアは歩き始める。それを追いかけるようにエアリアルはやや小走りでついてくる

「私服、黒いねー、ダーク系？」

「さあな、好みだ」

「でも『クロア』は青いよね？なんで？」

「さあな、気分だ」

「むう…冷たい」

「さあな、性格だ」

静かな廊下に、それなりに響く音量で二人は会話しながら進む。時折笑いながら、時折冷たくあしらいながら二人は食堂前まで朝から元気に会話していたキィ…、と小さく鳴る金属の扉を開けて食堂へと足を踏み入れる

「早いな。意外と」

既に机と椅子を確保していた楼騎が挨拶がわりに茶化している

「でしょー？ちゃんと早起きました。」

「まあ、俺に朝部屋をノックするように電話したのはどこの誰か…、つてのは不問にしといてやろうか」

ギクリ、としたエアリアルを前に楼騎は二人に先に朝食をとってくださるように促す

「今日のメニューは『焼き魚のモーニング』と『フレンチトースト』の二種類だ」

「了解」

楼騎の親切な事前情報のお陰で二人はさほど悩まずにカウンターに並ぶ目の前に並んでいた白衣の研究員と、少し物足りなかったのかサイドメニューの追加に来た緑と白の制服の職員がいなくなるとクロア達の順番が回ってきた。

「…フレンチトースト」

クロアは少しだけ焼き魚が気になったが、消化しやすいフレンチトーストを選ぶ

「私もフレンチ。…それから…」

うーん…と悩むエアリアルに何かあるのかと聞く

「バナラアイス…いや、チョコアイス…それともストロベリーアイス…でもカロリーが…」

「すいません。コイツ後回しに。」

親指で自分のよこに在る悩める乙女を指差してクロアは自分の食事だけを先に受け取り、席に戻る。

黄色に、柔らかく浸された食パンが食欲をそそる朝の料理。皿の脇に少しだけ生クリームが添えてあるあたり、ここの料理人は心得ている。

さらに、小さなコーヒークリーム用の器には茶褐色のメープルシロップが満たされておりクロアは小さく喜びの声を上げる

「ご機嫌だな」

ニヤニヤと笑う楼騎にうるさいと言いつつナイフで器用に生クリームを掬ってフレンチトーストにのせる。熱でほんの少し溶けたときにメープルシロップをかける…

「ねー、クロアー」

遠くから呼ばれてやや不機嫌に振り返る

「のせるアイス何がいいと思う？」

「何もいらない。」

スッパリと言い切つてクロアはフレンチトーストにフォークを突き刺して口の中に放り込むじんわりとメープルの風味が口の中に広がり、少しばかり幸せな気分になる

甘味はいいな…とか思いつつ、いつの間にか『焼き魚のモーニング』を手に入れた楼騎がニヤニヤとこちらを見つめている

「何だよ」

「いや、あんまりにも幸せそうにしてるから…な」

「幸せじゃないもん」

ガタン。と乱暴に椅子を引いてエアリアルが着席する。その手にはフレンチトーストの器と、クロアにはなかった底が深めの椀型の器が乗っていた。

「クロア…そんなんじゃアレイアにも嫌われちゃうよ?」

「いや、そんな関係じゃないんだが…」

「じゃあ何よ」

「…世話のやける、妹?つてどこか」

ピシャアアアン、と雷にでも打たれたかのような表情でエアリアルは固まる。なんだ?

「妹萌えかあ…」

「寝惚けんな」

やはり、ニヤニヤと楼騎は眺めていたが、もはや何も言う気にはなれずクロアは次のトーストを口にする

「なら、私も」

深い器から三色のアイスをスプーンで掬ってフレンチトーストにのせる。結局、迷ったもの全てを持ってきたらしい。

本当に女は良く分からない、とクロアは思った。カチャリカチャリとナイフが皿に触れて、フォークが皿に刺さる二つの音が賑やかに食堂に溢れる…。音から察するに大半がフレンチトーストを食べているようで、目の前の焼き魚のモーニング 焼きジャケと海苔と味噌汁と白米の超典型的ともいえる和食スタイル は少数派らしい。

そんな少ないうちの一人、楼騎はオレンジのような色の魚の骨を回避しつつ丁寧に食べていく

「上手いな…俺はその骨が嫌いなんだが」

「なに。何年も食べ続ければ嫌でも上手くなる。」

ぱくり、と食べたシャケを飲み込んで楼騎は今日の簡単な予定を説明する

「これから模擬戦を行い、その後に第三試合に全員エントリーする。たまには友達と遊んでこい」ズズズ…と湯気の立つ緑茶を飲んで楼騎は、どうだ?と見回す

「私は構わないわよー、たまには気分転換にいいしね」

クロアも小さく頷く

「わかった。また後で会おう」

既に食べ終えた二人はゆっくりと白米を食べている楼騎を置いて席を立つ

「相席、いいですか？」

クロアの知らない女性職員が聞いてきて、エアリアルが代わりに返答する

「いいですよ」

「エアリアルさん……」

なんだかジーンとしている職員の後ろにももう一人いて、何も言わずに見つめてくる

「どうぞ」

素っ気ない言葉に、

「……どうも」

素っ気ない言葉が返される

「さてっ、準備しないと。また後でね！」

「ああ……わかった」

スタスタと歩き去るエアリアルを男女問わず沢山の視線が追いかけるのに気付いき、出ていった後には、じとりとその視線が恨みがましくクロアに注がれる

むっ……としたがここは大人しく食堂を後にする

何故か恨みがましい視線が増えた気がするが……。そのまま振り返らずに微妙に開きにくく錆びている扉を開き、廊下へと移動したさてと廊下で簡単な予定を頭に描き出す。少しだけ時間が早いが入トランス付近にいるのが効率的だと判断し、のんびりと歩き始める最初のバグチエックを兼ねた模擬戦の開始まで三十分とかなりの余裕があるのでゆっくり歩く

それでもエントランスまで十分かからなかった

やれやれ、と思いつつ暇なので準備中の売店を覗いてみる

シールド100円

無銘『短剣』50円

再録パック150円

等のポップが並び、その後ろでは

限定版！在庫限り！

期間限定セール中

センター限定パック抽選券配布中

などのポップが追加されようとしていた。クロアは苦笑いしながら日本人の限定への弱さを嘆く

「邪魔ですよ」

「悪い」

後ろから台車を押ししてきた職員に道を譲り、クロアはガラスで覆われた天井を見上げる最初に見上げたのはいつだったか…

クロアはほとんど『ヴァルハラ』にはいなかった。通常のキャラクタ―とは違う『2』を持つツバインとしてもそれはどうかと思う

「まだほとんどやったことないんだな…『ヴァルハラ』」

そんなふうには呟いてクロアは広いエントランスを一瞥して試合場に向かう。今いる場所から直結しているので時間などかからない

クロアは部屋を仕切る扉を開き、今は観客のいない部屋に入る部屋はまだ完全に目覚めてはいない。何割かしか点灯していない照明を見ながらクロアはステージへと歩いていく

「もう少しで模擬戦です。どうぞ、席について下さい」

気弱そうな職員が声をかけてきてクロアはおとなしく、別段することもないので彼に『クロア』のカードを渡して認証させる

「『クロア』、認証しました」

返されたカードを手にしてクロアは配線がむき出しの舞台裏を抜けて華やかなステージに立つ。

眺めは遠く、また清々しい。高所にいるのはまるで全てを見通すような気持ちにさせられる

クロアは端末に座り、時間になるのを待つ…。

他のメンバーは数分程度で揃い、定刻で模擬戦が開始されたそして、定刻で終わった。

前回のルイエスのようなイリーガルではなく正常業務ならばさした

る時間もかからないらしい

中でやったのと言うと、パネル移動や若干特殊な行動、同時に実行した場合、などの動作チエックや呪符・操符・装符の動作やバグチエックだ。

それらじたいは日々繰り返し返されているので驚くほど短時間で終了するガコン！と現実世界に帰還したクロアは

「つまらないな」

そう感想をもらした

「ねー、ルイエスも物好きだよな」

同じく『ヴァルハラ』から帰還したエアリアルも相づちを打つ

「さてっ、本番への準備しますかあ〜」

「本番への…ってなんだ？」

「ふふふ、秘密」

「なんなんだよ」

一回伸びをしてからエアリアルは階段を降りていく。クロアも一拍おいてから降りようとして、今度は自分に視線が集まるのを感じる

「何だよ」

ざわっ、とたいして多くもない職員がざわめいて何人かはヒソヒソと話し合っている

「みんな、気にしてるんだよ」

よう、と相変わらずの笑いを浮かべながらDが扉から入ってくる。

何人かは挨拶をして、何人かはさらにお辞儀もする

「エアリアルは最近まであんな風じゃなかった。もつと冷たい、かつては『氷炎』の称号を獲たほどに無感情な奴だった」

そこで一旦言葉を切り、あちこちで同意の頷きが見受けられたのを把握してからDはさらに続ける

「なあクロア『女子は変わる』って言葉を知ってるかい？」

「さあな。興味ない」

そう言ったら、何人かは

「ふっ…」と笑った。女性職員が多い気がした。

「知らないか：なら、考えるといいよ」

ヘラヘラと笑いながら後ろ手に手を振って彼は試合場から出ていく。まさか、あれを言うために出てきたのか？と考えるが答えは知ることができない

なんなんだ：と思いつつも本来の目的である移動を再開する階下へ降り、試合場からエントランスへと出る。開館時間まで15分、クロアは館内放送にしたがって撤収する職員達と共にスタッフエリアへと引き揚げた15分後、きっちり計ったように施設内に活気が巻き起こる。

「さあ、本日の第一試合！エントリーはこちら！」

アナウンス兼司会は今日は女性のようだ。クロアは試合場から漏れ聞こえる声にとことなく懐かしさを感じる

思えば、つい最近あの場所で進んだ技術を見せつけられ、感動したのだが：

「もう当たり前、か」

小さく、呟いて彼はエントランスへと出る。第三試合までにアイツに話をつけないと面倒な事になりそうだ：案外、早く見つかった。

「おっと！ガルトの反撃が決まったー！」

司会の叫びに観衆が白熱する。いつもの、いつも通りの光景にクロアは少しだけ気分が高揚する

「おっと、危ない！ジェイミーの罠だ」

「やっちまえガルト！」

「負けんなジェイミー！」

わいわいと会場を二分して盛り上がる両陣営は賑やかに叫ぶ

「本当に…」

：すげえな。そう言ったはずなのだがその声は大歓声に掻き消されてしまった

ガコン！と最後に残ったプレイヤーが機械から解放たれて天へと拳を掲げる

「四十連勝っ！」

ああ、まだ連勝してたのか。なんて思ったがまわりはかなりの大音量で歓声を上げる

ガルトの名が連呼されたりしていたが…

「ふん」

一瞬、人混みの中に白い服が見えた気がした。

「…ルイエスか？」

まさかな、と見回そうとしたのをやめて壇上を見上げる。調子に乗ったガルトが盛り上がっている観客を煽って遊んでいる

「ガルト！」

「ガルたん！」

…なんか同時に避けんだ奴がいた「次の試合、始まらないでしょ？降りなさい！」

エアリアルが威風堂々と、なんとなく威厳に満ち溢れたオーラを纏って階段を上がってくる

「おっ、エアリアルか。久々だな」

「ガル！降りなさい」

「いや、もうちょい…」

「降りなさい？」

スツ…とエアリアルの全てが殺意に変わるのがわかり、会場が静まりかえる…

誰も声を出さず、出せない。

これも上級ランカーの実力だろうか？

「あー、悪い。」

「いいえ、許さない！」

ふと、エアリアルがこちらをむいて片目を閉じる。人混みの中にいたのにそう見えたのは…偶然か？

「…第三試合、チーム限定バトルで勝負を挑むわ。最低二人で来なさい」

金髪を振り乱して肩から払うと彼女はまた威圧のオーラを放ちながら階下へと降りていく

その姿に男女問わず嘆息が漏れる

「カッコイイ…」とか

「マジヤベエ…」とかも聞き取れた「…怖いな。」

「うお!？」

何故か、いつの間にか隣にいた楼騎が感想を漏らしあまりにも唐突な登場にクロアは心臓に悪い程度に驚く

「何でここにいる…? っていうか、何時いつからここにいる」

「少し前だ。なに、気にするな」

スタスタと去っていく背中を追おうとしたとき、周囲の観客が楼騎に気付いて揉みくちやに殺到したので断念せざるをえなかった…。

どうせ、あいつはあの中にはいないのだから

「ちっ…なんなんだよ」

クロアは悪態をつきながら部屋外に逃げ延びて親友の姿を探すエントランスは試合が終わり、会場から出ていく観客と今から入ろうとする観客達で混沌としていた。

「ちっ…多いな」

舌打ちしながら周囲を見回すと、柱と柱のスキマで携帯端末を操作している親友を見つける。何やら何回かため息をついていた

「よう、相棒」

クロアが声をかけると、ガルトは非常に驚いた風に顔を上げる

「なっ…クロア! お前最近どうしてたんだよ!」

「あー、色々あってな」

流石のガルトにもツバインやBUG、『ミッドガルド』の一件は言えないだろう

「まっ気にすんな」

「気になるんだかな? すごく」

倒置法を用いられてもさすがに言えないので無理矢理にでも話を進めることにする

「さっきエアリアルから宣戦布告されてたな、受けるんだろ?」

ガルトは、うっ…とうめいて少しだけ悩む表情を浮かべる

「悪い、お前じゃ手におえない」

「参加してやるよ」

ガルトの話を無視してクロアは受付に歩き出す

「ちよつと待て！なに即決してんだ」

まあ、当然の反論を受けてクロアは足を止める。

「俺も強くなつたんだ。いいだろ？」

「いや、なんで決定してんだよ…」ガルトはクロアの肩を掴んで引き戻す。

無理矢理振り向かされて肩に痛みが走る

「お前じゃ無理だ！」

クロアは少しだけ目を背ける

「なあ…ガルト…」

小さく呟く。まるで、落胆したような演技でだ

「寝言は寝て言え！」

全力で殴り付ける。不意打ちがまともに入ったのかガルトはその勢いでふつとぶ

「ウジウジうつせえな！俺は、アイツとやりあえる！

…アイツは、俺を見たんだ。だから」

「寝言はテメエだ！」

ガルトが全体重を乗せた一撃を見舞う。クロアも吹っ飛ばされて壁にぶつかる

「戦場でお前を守れるほどアイツは緩くない！奴は、氷炎だ！」

「黙れっ！俺は守られない。ダメなら見捨てる！ついでに、アイツは氷炎なんかじゃない！エアリアルだ！」

二人の叫びに多くの人が反応し、中には職員を呼ぶものが現れた。

…どうやら、相棒も気付いたらしい。

「どうしました？」

「喧嘩です！喧嘩！」

予想以上に早く来た…。こうなれば…

「喧嘩ですか？」

冷静な緑の制服を着た職員の質問に

「違う！」

「違うな」

全く同時に否定した二人に職員は当然の質問をする。

「じゃあ何です？」

「「演劇」」

同時に言って、同時に思う。

いくらなんでもそりやないだろう

だが言ってしまった言葉は戻せない。覆水盆にかえらずとは言いが言葉は口に戻らずと言ったところだろう

「…、そうですか」

職員は少し疑いながらもそれ以上は追求しなかった。どうやら騒ぎを大きくしたくないらしい

よくあるパターンだ。クロアは安堵する

職員はジツと二人を見てから少し人混みが落ち着いた受け付け側へと歩き去る職員が見えなくなると

「ヤベエ、しよっぴかれるかと思っただぜ」

「ヤバかったな」

二人は脱力して感想を漏らす

「クツソ…もうすぐ時間じゃねえか…」

時計を見て、ガルトは第三試合の受け付け終了が間近なのに気付いて悪態をつく。

「メンバーがいないと不戦敗だな」

クロアの追い討ちで、相棒は屈する

「わかった。お前も参加しろ。でも守るのは保証出来ない。いいか？」

「いいぜ、元よりその気だ」

ニヤリ、と笑ったクロアは受付へと向かい既に秒読みになっていた第三試合の受付を済ませます。

1stガルト

2ndクロア

他のチームは何人組だろうかと苦笑しながら、クロアは相棒を呼びエントリー完了を知らせる

「よし。試合場に行くか」

受付をした方が頷いて、二人は歓声の響く大きな部屋に移動する隣の部屋では、前の試合が終わったところだった。大歓声は敵全てを切り伏せた人物への賛辞として贈られる

「さあっ！次は注目の第三試合！上級ランカー、エアリアルと同じく上級ランカー、ガルトのチーム戦だあっ！

二人のチームメンバーも注目だぞ」

おお、とどよめく会場に二人は入場する

ステージ下の職員に自分のカードを提示する

「『ガルト』、『クロア』チーム認証しました。神々の加護のあらんことを」

職員からカードを受け取り、二人は既に退場の終わっているステージに上がる

「『エアリアル』、『メリアル』、『マリア・フィオーレ』チーム認証しました。戦乙女に加護のあらんことを」

階下からもう一つのチームの受付が聞こえる。エアリアルのチームも準備は万端のようだ。クロアは少しだけ緊張して拳を握りしめる

「怖いのか？」

クッククック、とガルトは笑うが

「武者震いだ」

クロアは淡々と返して席の前に立つ。「さあっ！みんな座って！」

司会に促されて五人は椅子のような端末に座る。機械は頭を軽く締め付け、意識を『ヴァルハラ』へと移行させる世界が下から上へと形成されていく。なにもない空間にただ浮かんで青碧のコートを風に遊ばせながらクロアは世界創世を見つめる

生まれた世界は、『遺跡』タンツ、と二人分の足音がして着地する

「『エリア：遺跡』か…隠れやすいな」

「さて、やるか」

二人は周囲を観察する…。

場所は『開けた森』といったところ。少し草の背丈が高いが隠れるのには最適だろう…。

そして、開けた森の中心部に白い巨大な石造物体が存在した。これが恐らく『遺跡』だろう。近付いて観察すると大理石で外壁が作られているのがわかった。

「外壁が大理石か…、中もそうだといいな」

クッククク、と笑いながらガルトは一度背後を確認して一番近くにある石の壁に移動する。

遺跡の一部がかけていることから遺跡から剥離したものと推測、同時に一応崩れてこなさそうなのも確認できた。

「作戦会議といくか、クローア」

小さく頷きを返してクローアはガルトの隣に腰を下ろしたガルトは適当に落ちている木の枝を拾って巨大な四角を描く。そして、中に小さな四角を書きさらにそれよりも小さい四角を描く。

間隔はバラバラだがおおよその見当がついた

「地図か？」

「マップって言え」

どっちも同じだろ…と思いつつもクローアは先を促す

「大きな四角がエリア領域…、取りあえず先に進める範囲だ。次の四角は森の終端。大きな四角との幅が森の広さだ」

そう言つて意外と狭いスキマをグリグリと塗り潰す

「そして、最後の四角が遺跡の大まかな図だ。実際は他に地下遺跡もあるがこっちは複雑すぎて迷う。だから、地上を戦闘の中心にする」

「わかった」

クローアは大理石の壁から顔を出して周囲を確認する…。どうやらまだエアリアル達は来ていないらしい

「少し周囲を見たいんだが、いいか？」

「見つかるなよ？」

わかってるさ、と答えてクロアは空間からカードを一枚引く。カードは無銘『長剣』。灰色のナイトソードで特にこれと言った装飾や能力はない

代わりに何のデメリットも無いのが唯一のメリットなのだろう

クロアは低く剣を構えながら用心深く茂みに姿を同化させる…

ゆっくりと、だが歩くよりも早く、猫のように足音をさせないように慎重に偵察をするさらに少し歩いていたとき、話し声が微かに聞こえた。

聞き耳を立てるが…距離が遠すぎて詳しくは聞き取れない

イントネーションの高い音が途切れ途切れに聞こえているような感じだ。

クロアは近寄るかどうかを迷い…一時戻ることに決める。もしここで見つかったりしようものならば…

なぶり殺しもいいとこだ

ゆっくりと、間違っても小枝を踏んでバレるなんてことをしないように後退する。ゆっくりと、ゆっくりと

「ふうーん、じゃあマリアさんは久々なんだ」

「はい…、半年ぶりに参戦です」

…声が近づいてきている

クロアは進路を変えようかと迷ったが、見つければやはり勝ち目はない。少し速度をあげる

「私は一年半くらいかしら？最後に戦った相手は…嶺かしらね？」

「わたしは…よくわかんないモンスターをあいてにしてみました」

「イベントのあれね、懐かしいわねえ…」

着実に近付いてきている。なのに姿が確認できない

どこにいる？

クロアは茂みから抜けて振り返る。近くにいます。そう伝えようとして「あ、クロアだ」

「エアがご執心の彼？」

「はじめまして」

赤いフリルまみれの服を着た金髪のエアリアルと、白いワンピースの滑らかな長い黒髪をもつ少女と、まだ小学生かと思われる上等な生地動きやすい半袖に半ズボン、その上にややサイズの大きいベストを羽織った短い黒髪の少女がにこやかに挨拶して

「離脱する！走れ！」

大理石の壁に隠れていたガルトが叫んだのはほぼ同時だったガサリ、と足下の草を踏みしめてガルトはクロアの方へと走り出す。一瞬呆気にとられたがすぐに後に続いて包囲を脱する。

「逃げた！」

エアリアル的叫びに黒髪長髪の少女が、わかった！と返事する。

「『水晶』」

使用を宣言されたカードから綺麗な六方水晶体が飛び出し、それを手に収める。パキリと音がして彼女の手に突然武器が出現する

「『水晶の大鎌』」

名前の通り、水晶のように透けている鎌は美しく太陽光を集約して拡散させるようにして輝く

鎌には純白の飾り布が刃と反対側に穴を開けて結ばれており、希薄な存在感の鎌に圧倒的な存在感を与えている
むしろ飾り布に目が行ってしまふ。

「『水壁』！」

地面から分厚い水流が横に広く展開される。水の壁は鎌を弾きクロアを守る。

「退くぞ作戦変更だ！」

「…わかった」

二人は少し薄くなった壁を見る。どうやらあまり時間はなさそうだ。クロアは反対側から壁をつつく少女を見て、後ろへと走り出した
「逃げちゃったね」

鎌を手にした少女が残念そうに呟く

「いいわよ、メリアル。そんなに早まらなくても」

「なんだか嬉しそうですね…エア」

くすりと笑って短髪の少女が笑う。柔らかな髪が揺れた

「マリア、人生楽しんだ方が勝ちよ」

「悪役のセリフですね」

にこやかに言い放った少女は笑い、大分弱まった水壁に手をのせて
二言三言呟やいた。

すると光がふわりと舞い上がり、水壁が消え去る

「リスベル 解呪完了です…」

どことなく誇らしげに胸を張ったマリアに二人分の賛辞が届く

「さてとっ、いきますよぉ〜」

「はいはい」

「クマちゃん出すまで待つてください…」

マリアがぼいとカードを投げて空中にクマのぬいぐるみを出現させる。

重力に引かれてポスンとマリアの腕の中に収まり小柄な見た目以上の幼さを際立たせる。茶色い体毛のクマは手をパタパタと動かされてはしゃいでいるように見える

「本気なんだ…」

「なにがですか？」

くすりと、とマリアが笑ってクマの手を二人が逃げた方向に向けて呟く

「『てきがあつちです』」

器用に頭まで動かしたマリアはサクサクと草のなかを進みはじめて

「相変わらずねえ…マリアは」

「変わらないわね…」

二人は短い会話をしてからそのあとに続いたガサガサと草を掻き分けて二人の人影が遺跡の外壁沿いに新しい道をうみ出していた。

「ちっ…リスベルしゃがったか…」

ガルトが舌打ちして、最初に見た遺跡よりも一回り小さい遺跡の前

で立ち止まる。

「今から奴らを正面から倒すのは正直無理だ。だから、一旦体勢を建て直す」

あの中でな、と指差してガルトは長さにしたら四メートル程度の石段を登る。その先にはぽっかりと遺跡が口を開けて待ち構えている

「中は複雑なんだろう？大丈夫か？」

「こつちの遺跡は地下ほど複雑じゃない…ついでに道幅も鎌を振るうのには狭すぎる」

良いことづくめだ。と言って、やや小さな遺跡の中に逃げ込んだ暗い。第一印象はそれだ。

内部は光などなく、薄暗い通路が分岐しながら続いている…

壁には電線が後から取り付けられておりスイッチさえつければ奥まで明かりが点灯する仕掛けらしい

「スイッチ押すなよ…。ここらへんか」

ガルトは髪の毛を数本抜き取り、床にはらまく

「何やってんだ」

聞くとガルトは簡潔に

「畏だ」と答える。

「まあ見てな…奥へ行くぞ」

クロアは長い剣を背負うようにして移動しやすくすると走り始める

「壁を傷つけるなよ、しばらく気をつけな」

たつたかと複雑に分岐を繰り返す通路を迷いなく選択しながら奥へ奥へと突き進む。暗い遺跡はさらに光を失い、より深い濃密な闇に包まれる

「さて、ここらへんか」

ガルトはカードを引き抜いて、武器を解放した。

「『青竜刀』」

パチン！と電気が一瞬だけ点灯してすぐに消える。空豆のような不思議な剣を手にしたガルトは

「来たな…」

と笑った入口にいた三人はまず最初に落ちていた毛髪に気付いていた。

「ねえ、エア。これ二人のだよね？」

しゃがんだメリアルの隣でエアリアルもしゃがみ、観察する

「暗くて見にくいわね…」

「…えいつ」

パチツと何かの音がした。

エアリアルは突然明るくなった手元で落ちていた毛髪を調べる…

「ってマリアストップ！スイッチ切って！」

「…暗いと目が悪くなりますよ？」

「違うわ！来たのがバレた！」

あっ…と納得したマリアの横にある妙に安っぽいON/OFFスイッチを切る。

電気が消えて遺跡を再び闇が包み込む

一度光に慣れた目は闇をより深く見せ、エアリアルは一步だけ後退る
「さて、行くわよ」

三人は武器（一人だけクマ）を握りしめて暗闇が支配する迷宮へと
乗り込んだ一方、闇の中でたたずんでいた二人は

「よし、罨なると二号…完成！」

「只の鳴子なるとだな」

ジャラジャラと鳴る木の罨を仕掛けたガルトは耳を澄ませて敵との
距離をはかる…

遠いな

小さく呟く。

いくら規模は小さめとは言っても中は迷路のようにいりくんだ迷宮、
完全にマッピングできているものは少ない…

だから迷ったならばこちらから出向かなければならないのだが…ど
うすっかな…

うむう…と考え込む相棒を見ながら、この逃げ一方の試合にクロア
は苛立っていた。ただでさえエアリアルがセッティングした試合だ。

何があっても逃げるのは許さない…

「…」

二人して黙りこみ、沈黙が訪れる

暗いだけの迷宮にカランコロンと音が響き、少女のような高い声が反響しながらクロアの耳に届いた。

「嘘だろ？早えな！」

「ガルト…しつかりしろよ」

二人は並んで武器を構える「やっぱり、ツバインは存在感が違うわねー」

暗闇からエアリアルの声が聞こえる。

「本当に？でもツバインって誰？」

メリアルの声が続く

「いいじゃないですか…ほら」

紅い光が闇を切り裂いた。

「狩りの時間です」

マリアの声が一際冷たく響いた。

ガルトは静かに構えを変えてクロアの前に飛び出す。

キーン…と残響を残して竜の紋が描かれた剣と透明な何かがぶつかり、刺すような緊迫した空気が流れる

「くっ！」

苦し紛れに突き出した長剣を

「させない！」

突如暗闇に燃え上がった炎が向きを変えさせる。ジャリツと砂を踏む音、返される一閃。髪の毛をすこし斬られながらもクロアは半歩下がって攻撃を回避する唯一の光源であるレイピアが静かに心臓の高さに合わせられ、エアリアルが構えたまま話しかける

「さあクロア、どれだけ強くなつたか見せてよおっ！」

突き出された剣をクロアは左手を柄から手を放して腋を潜らせるようにして避け、エアリアルの手を掴む

「幻影『ミラージュ』」

パリン…と砕けたエアリアルルの姿を探し、後ろへの接近に気付くのが遅れた

「鎌符『決死の大鎌』」

石造りの壁を削りながら鎌がしゃがんだクロアの頭上を通り過ぎる。砂と変わった石が頭や服を汚す

「あつぶねえな！」

足をなく。鎌を手にした少女はそれを跳躍でかわすと落下の勢いを乗せた石突きで腕に一撃する

「危ないのはどっちよ…もう」

剣を落とす寸前で持ちこたえたクロアの右腕を彼女は踏む。

「マリア！終わらせよー」

「はい」

小さな少女がにこりと笑うのが見えた。

少女はポケットから小さな小瓶を取り出した。中には液体が満たされており、蓋を外して中身を飲み込んだ少女は

「ぐっ…うっ！」

苦しげに壁に手を打ち付けて悲鳴に近いうめきを抑え込む

「なんだ…毒？か？」

「違うわよ。私たちにとっては、ね」

メリアルはそう言ってクロアの腕を一度強く踏みつけてから退却した。

何から？

もちろん、巨大すぎる力から。

「あー、っ。もう少し素直に体を渡しなさい。マリア」

クマのぬいぐるみを抱いた少女はその体つきからは想像できないような冷徹な声で呟いた。先程聞いた声とは違うもはや別人の声だ。

「ん？驚いているのか？まあ無理もない」

少女はクマのぬいぐるみを天井ギリギリまで投げる。

「そのまま死ね」

右手を突き上げ、クマのぬいぐるみが呼応する。ほんの少し姿が揺らいだかと思うとその姿からは想像もつかない突起が腹部から突き出した。

灰色のグリップ。紅い紐が巻かれた『柄』としか思えないそれを掴んだマリアは一気に引き抜いた！まるで綿が抜かれるように中からズルリと姿を現したのは、巨大な剣。

刀身からグルリと一周する金属部品が気になるが、少女とは不釣り合いな武器なのには依然変わりがない

「『サディステイツクプリンセス』」

それが彼女の武器の名前。

高圧的に告げられた解放宣言はどこか死刑の宣告にも似ていた。

「それじゃあね、少年」

めんどくさそうに別れを告げたマリアは手にした獲物を振り下ろした

「幻影『ミラージユ』」

クロアの攻撃を回避したエアリアルは目の前に落ちてきた蛇を見て凍り付いていた。

「初心者相手に二対一は卑怯じゃねえか？」

青竜刀をパシパシと左手に叩きつけながらガルトがエアリアルとの距離を詰めていく…。今は歩数にして四歩の位置、今すぐ斬りかければ負けない

「『炎壁』」

ゴウと燃え上がった壁が二人の間を別かつ。

「お返しよっ」

フランメリーゼを壁越しに突きつけながらエアリアルが笑う。ガルトも少しだけ笑い、素早く壁を殴り付けた蒸発するあの独特な音がして少女が真横に流した剣が弾かれる。

やや厚みのある剣はどうにか耐えたが何度も打たれば折れてしまっただろう…。ガルトはもちろんへし折ろうと両手で剣を振るっていた。

「ちよつとおく容赦なし？」

「新人がいるんだ、見逃せ！」

ガルトが狭い通路で唯一の空間、上空を一閃して頭上から重い一撃を加える。エアリアルは苦しげにそれを払い、払い終わった体勢から突きを出す

炎の細剣と水の青竜刀がぶつかり合い、互いの属性を否定して白い蒸気を生み出す

「キリが無いわねえ」

ヒュンヒュン、と素早く二閃したエアリアルはカードを抜き出す。そしてそれをフランメリーゼで貫く

「亜式解放。業炎『フランメリーゼ』」クロアは宙を舞っていた。

「がっは…」

壁に叩きつけられて痛みでうずくまり、衝撃で息ができない

「防いだか…やるわね」

一撃で粉碎された剣は既に金色の粒子となって世界の藻屑へと変化していた。今彼が目の前の少女の武器を止める手だてはない。

「くっそ…」

カードを引こうとするクロアに

「させないわよ？」

巨大な武器が足元から振り上げられる

形状が馬鹿でかい剣、それしかわからないのだから避けただけ上々か…そう思っただけ第二撃に備えていると天井がミシリと嫌な音をたてる

「カード…」

「させない」

ゴウと唸りをあげて巨大な武器が横に振るわれる。武器は壁を砕いて隣の通路と直結させる

「狙いはこっちなね？」

「当たり前だ」

急いで隣の通路に逃げ込み、クロアは走りながらカードを取り出す。

「巡れ！『白陰』『黒陽』！」二色の剣が巨大な武器を受け止める。

軋むような音が聞こえたがそれすらもねじ伏せるように『能力に対する武器』を振るっ

「やるな。流石はエアが見込んだ者だ」

「マリアは武器にそつと触れる。」

そして、一度撫でるような仕草をして呟く

「起きなさい。」

ドルン…と武器が震えた。火花が数回散り、大気を伝ってその爆音を遺跡中に轟かせる。

「マリアの武器、サディスティックプリンセスは剣ではなかった。」

「チエーンソーかよ」

「悪いかしら？」

「凜猛な唸りをあげる武器を愛でるようになでながらマリアは笑う。」

「聖母のような笑みで悪魔のように笑う。普通の人にはできないだろう芸当…」

「ていつ」

「気の抜けた気合いと共に振り下ろされたチエーンソーを黒陽で受け止める…いや、止めきれない！剣がチエーンによって上へと流されてチエーンソーから放れる」

「完全に無防備になった腹部めがけて爆音を響かせる巨体が落ちる」

「あちゃ…あれは死んだかな？」

「暗い遺跡の中でただ一人猛烈に暇している少女が暇そうに呟く」

「ねえ…どうしょ」

「鎌に話しかけてみるが返事はない。あたりまえだが。」

「うーん、しょうがない。エアはクロアとやりたがってたから代わってあげますか」

「ん、と伸ばしてから少女は鎌を担ぎなおす。鎌を振るうのには狭すぎるので歩きたびに先端が壁を引っ搔いてカリリと音をたてている」

「クロアがもちこたえてればいいけど…」

ポツリと呟いて少女は水蒸気が立ち込める通路に入っていった…ガルトの目の前で炎がはぜた。鋭い一突きが直前まで背中に位置していた壁に当たりその部分がまるで爆発したように猛火に飲み込まれていた

「避けないでよう」

「避けるだる普通…な！」

不意を狙った攻撃は軽くかわされてしまいエアリアルは少しずつ熱量を増してきたフランメリーゼを体と水平に構える

「火符『炎刺赫染』」

呪符を解き放ち更なる炎を呼び出す。追加された炎は鋭く収束してより長い刃となる。

フランメリーゼの本来の刀身は130cm、レイピアとしては普通の長さだ。だが今の刀身は180cm程：二メートル近くあるレイピアを彼女は扱おうとしていた

「ちっ…使いたくはなかったんだがな…」

ガルトは舌打ちしながら虚空からカードを抜き出して解き放つ。

「西見る青竜、水流隔てし朱雀を睨む。水と炎、相容れない力の一端を我が武器に！」

ガルトの周囲の水が更なる収束を見せる。力はより強大に、そして宿る竜もまた力を得る。

「第二解放『水冷青竜』」

水が遺跡の床を壊して噴き上げる。その水は止まる事を知らないかのようにあつという間に床を水浸しにする

「っ…まだ上位解放を残してたのねえ」

エアリアルは強化されたフランメリーゼが水に触れないように気を付けながらまだ噴き出し続ける水流の中心を見る

「でも、動かないならばこの私が貫く！」

「馬鹿。動くに決まってるんだろ」

手甲で水の噴出を切り裂いたガルトは先程とは形を変えた武器を手にしていた。竜の紋が描かれているのは変わらずに刀身が薄く、やや反り返った形に変わっていた

「さあ、暴れる！『吉兆白蛇』！」

手にした水冷青竜からズルリと現れたのは巨大な白蛇

体長は十数メートルにもなり、胴回りはこの遺跡の通路の大半を塞

くほどに大きい…

「久々だな、白蛇」

「シユ〜…」

嬉しそうに返事をした蛇はエアリアルを睨み付ける

「なあるほど… ちょっと大きくなるんだ」

エアリアルが少しひきつった笑みを浮かべて笑う。あはは…と乾いた笑いは白蛇の鳴き声で掻き消されてしまった

「うう… 爬虫類はニガテなよう」

「なら良かった。遊んでやれ、白蛇」

ズルリと這いずる巨体が構えるエアリアルへと進んでいく。速度は非常にゆっくりと…戦意を削ぐのに最も適した速度で向かってくる「や…ややや、やってあげるわよう！か、かかってきなさい！爬虫類！」

「キシャー！」

白蛇は大きくいなないてエアリアルへと襲いかかった！クロアはかなり危ない状況にいた。

黒陽を弾かれてしまい、通常のチェーンソーとは逆向きに回転しているチェーンを白陰でどうにか凌いでいた。

「消す能力がわかんねえ…」

ガリリ…と削られていく白陰を床に突き刺して自分とチェーンソーとの壁に使っている。白陰は既に三分の一程度の深い溝が刻まれてしまっている

持ちこたえるのも厳しいだろう…

「いいわね、その顔。まだ勝とうとしてる」

マリアは嗜虐的な目付きで見下ろす。

「屈伏なさい」

「嫌だね」

望んだ回答なのか、少女は何とも言えない顔で震える。

どうせロクでも無いことだろう

クロアはほんの少しだけ緩んだチェーンソーの圧力を白陰に全て押

しつける。自由に動かせる部分が出来たので自分の上にいる少女を蹴り上げようとして、遺跡の奥から轟音が聞こえてきた

「何？」

「何だ？」

二人が同時に遺跡を見つめると

「逃げて！マリア！」

メリアルが全速力で走りながら、ついでに遺跡を削りながら叫ぶ

「水が…！」

それを聞いた途端、少女はチェンソーを片手に跳び上がり、天井に武器を突き刺して無理矢理静止する

「何だ？」

「うるさい！」

必死にチェンソーにしがみついたマリアを見ていたら足に冷たいものが触れて驚く。

水…か？

クロアは天井からぶら下がる少女を見上げる

「水がダメなのか？」

「は、はん！べ、別にこんな平気よ！この愚民が！」

試しに水を蹴りあげてみる

「ちよつと、何を！」

「いや、気になってな」

もう一度水飛沫を上げる

「うう…メリアル！なんとかしなさい！」

叫ぶと、廊下の端っこで傍観していた少女は

「うんうん、水はダメか。なら豆もダメかな？」

「それが我がフィオーレに対する礼儀か！？」

何やら喧嘩が始まった。

クロアは思いがけない事態に戸惑ったがこの隙に呪符の下準備をし
ておく…

「あははっ、ほらっ水よ」

「あつ、くうつ！」

チエーンソーを軸に物凄い身体能力で水を回避していたマリアがついに水を体に受ける。するとまるで焼けたかのような傷が広がってその痛みに手を放してしまう「マリアっ！！！」

落下していく少女が叫び、そして落ちる。

水深1センチ。クッション効果を期待しても無駄な深さに少女は落ちる

「マリア：大丈夫？」

メリアルが駆け寄り、助け起こす

「痛い…です」

じとーつとメリアルを睨み付ける少女の背後に、クロアは三枚の呪符を組み合わせた陣を展開する

「水はあるからな」

電符『100ボルト』

炎符『火の粉降る夜に』

木符『野草のくさむら』

その三枚が同時に発動される

「あばよ」

軽く挨拶を済ませて、クロア以外の二人は何が起こるか理解したクロアの足元に一マス分の草むらが現れて数センチ隆起する。そこから電流が発せられて水を伝い、二人に襲いかかる

そして、大量の水 H_2O が電気分解されて可燃性の物質水素

H_2 と酸素 O が生成されて、発生した炎が引火する。

クロアの前方に壁のように広がった炎はあつという間に二人を飲み込んで通路から見えなくなる

やっただか？

水が無くなった通路に再び水が流れ込んでくる…。通路で吹っ飛ばされたのか二人の少女は離れた位置で横たわっていた。

「…行くか」

クロアがガルトの場所へと行こうとすると、

「…待ち、なさい」

メリアルが立ち上がった。

「マリア…ありったけの防壁をあなたとエアに…。私にはいら
ないから」

スツと少女は黒い水晶を手にとり、マリアは何をするかを理解して黙って頷いた。

「私ね、昔『仲間殺し』の名を持ってたのよ…。敵味方関係無く皆殺し、ってね」

メリアルは鎌を捨てて手のひらに収まった黒水晶を軽く抱いた。

「越えられない壁を見せてあげる」

決意を込めた眼差しで彼女は叫び、武器の名を解き放つ。

「闇墮ちる太陽、白昇る月、対性なる夜に傷つきし少女の名を借りる！」

狂い、乱れて咲き誇れ！『黒水晶の絶華』！「何かが振るわれるのが、なんとか見えた。」

「くっつ…！」

青白い円形のバリアに守られたマリアが軽々と飛んでいき、落ちる音が空虚に響く

「じゃえ…」

小さく何度も呟くメリアルは手にした獲物を素早く二閃する。

風が切り裂かれ、武器に直接接触していないクロアの頬から紅い水が一筋流れる

「全部、全員、死んじゃえ…！！」

メリアルが叫んだ。

その叫びに応じるように遺跡自体が大きく揺れる

「おい…ちよつと待て」

ピシリピシリとヒビが入り始めた壁を見ながらクロアは戦慄する

「どうやって…」

天井が一際大きくひび割れたかと思うと、一気に崩落を始めた。

大小の瓦礫が降り注ぎ、砂ぼこりが視界を奪い、退路を分からなく

させる

「ちっ…こうなったら勘だな」

クロアは自分の背後の道へ走る。

その道が外に通じていることを願いながら、剣を頭の上ののせて落ちてくる瓦礫から頭部を守りつつ戦域から逃げ出した「…なんだ？」

ガルトは遺跡全体が振動しているのに気付いて様子を窺う

「…メリアル」

白蛇と死闘を繰り広げている青白い球体に包まれたエアリアルが小さく呟いた。

「おいおい…お前のとこのメンバー、何したんだよ…」

ガルトがやれやれと右手を真横に一閃する。

白蛇が頭でエアリアルを吹き飛ばして壁を数枚貫通させる

「頑丈なバリアだな…もう7回も吹っ飛ばしてるぞ…」

瓦礫に変わった壁から立ち上がりながらエアリアルはフランメリーゼを構えなおす

「マリアの防壁はそう簡単には壊せないわ。だから…」

ピシリ

二人の頭上から嫌な音が聞こえた。

「お？」

「へっ？」

頭上の天井が崩壊した。

ガラガラと周囲の壁を巻き込みながら瓦礫の雨が降り注ぐ

「白蛇！」

使役し、撤退しようとしたのだが

「シユー…」

と鳴くだけで振り返らない…

「?…どうし」

ゴウッ、と目の前を何かが掠めた。

白蛇が金色の粒子に変わり、世界から消失する。ガルトは数分の一秒で攻撃方法をシミュレート。次撃の予測をたてる

「後ろっ！」

二人が同時にしゃがみ、頭上を黒い何かが一閃する。

「やつぱり…『黒水晶の絶華』ね」

「おいおい…『仲間殺し』の武器じゃないのか？ソレ」

「わかったわ、メリアル」

「いや、わかんねえよ」

ピシリと壁が割れる。

二人はバックステップで互いに逆方向へ逃げると、身を翻して遺跡の中を走り始めた。

どちらも、自分の方に出口があることを祈りながら…数分とたたず、遺跡自体が轟音と共に崩壊した。

「ケホッ…死ぬかと思ったわよう…」

エアリアルは砂ぼこりを払いながら立ち上がる。

彼女は遺跡が崩落する直前に遺跡の入り口に辿り着いたのだ。

メリアルの鎌の跡が出口までの目印となっていた。

「さて…誰を狙おうかしらねえ」

「いつて…」

森と遺跡の間の草むらに倒れていたガルトはその身を起こして全身の怪我を確認する

「取りあえず大したことないな」

ガルトは遺跡が崩落する直前にぶち破った壁の残骸を投げ飛ばして悪態をつく

「クロアの奴、死んでねえだろうな…」

「…」

暗い場所でクロアは横たわっていた。

「ねえ…」

耳元で少女の声が出た。割と最近知り合い、割と仲良くなった、この戦いに参戦していない少女の声…

「っ…、アレイア…」

「契約にて参上しました。御命令を」

じっ、と自分の上に乗って座っている人外の少女を見つめる

「あれ？雰囲気出てると思っただのになぁ…もう一周聖杯戦争見直して…」

クロアは遺跡が崩落する直前に彼女の名を呼んだ事を後悔しながら真っ暗な空間で周囲から差し込む光を頼りに脱出を試みる

「脱出？なら」

ビビビ…と空気が振動して極彩色の光が瓦礫を飲み込んだ。光は遺跡の残骸を分解して更地に変えてしまった

「『ブレイク』してあげる」

最後の一片が消えて、クロアは立ち上がる

少女もまた立ち上がり、見慣れぬ服装で微笑んだ。

銀色に変化した髪、服はゆったりとした眩しさのない白銀の布地のドレストタイプの衣装。優しく差し出された手には銀色の指輪がはめられていた。

「お前…随分変わったな」

アレイアは、そう？と笑って幼い仕草で後ろ側に手を組んで言う

「恋をすれば女子は変わるの、ねっ！」

パツと顔を反らしたアレイアは背中越しに行こうと催促する

「…誰を狙うか、だな」クロアがそんな呟きを漏らしたのと同時刻、

『ブレイク』されなかつた瓦礫の中にマリアが取り残されていた。

「…誰か、助けてください」

青白い球体に包まれた彼女は他のメンバーの防壁を意識を集中させて確認する

「みんな無事ですね、だから見つけてください」

暗闇に取り残された彼女は暇そうに呟いた

「…全部生きてる？」

唯一、円形に残った遺跡の床の上で彼女は首をかしげた

自分以外の場所は全部壊したはずなのに、おかしいなと思いつつ闇

のように黒い、背の部分がハリネズミかと言いたくなるほどにギザギザと尖っている鎌を振るう。

鎌は禍々しく空間を引き裂いて全く別の場所を切り裂いた。

その鎌の能力は『無限射程』と『自動照準』、そして『狂化』。

無限射程は文字通りどこまでも狙える能力。

自動照準は敵を自動的にロックオンすることが出来る能力。

狂化は、攻撃を強める代わりに味方も容赦無く攻撃するようになるデメリット効果。

今の彼女は、味方さえいなければほぼ無敵。それほどに絶大な能力を操っていた。

「ガルト、みいつけた」

彼女は鎌を振るう。

「ん？」

ガルトは突然沸き上がった悪寒に嫌な予感を覚えた。

全てのマンガや小説において、こういう寒気は良くないフラグだな…とか思いつつ勘の命ずるままに上体を後ろに傾ける

スツ…と黒い何かが横切ったかと思うと首がほんの少しだけ切られて血が滲む

「うおっ、セーフ！」

タンタンタン、と急いでバックステップを踏んで背後の森に逃げ込む。森の中ならば多少は逃げやすいかと思っただが…

カカツと素早く振るわれた鎌がどこからともなく森の木々を伐採してしまった

「おいおい…マジかよ…」

カードを引いたガルトは、圧倒的に不利な戦いに挑む

「…ん？」

二人して歩いていたクロアが何かに気付く

「どうしたの？」

「…いや、何か聞こえたような」

そう呟いて、ボロボロになった双剣を構える。背筋に冷たいものが

走り、体が強ばる

「『炎刺赫染』、フランメリーゼ！」

突如燃え上がった草むらからエアリアルがその身を躍らせる。手にはクロアがこれまで見たことがないまるで『ランス』のようなフランメリーゼが握られていた。

「やっと見つけたわよ！」

「…運がないな」

隣でアレイアがエアリアルへと指をひとつつ向けていた。指先には極彩色の網が小さな球体として存在していた

「う…」

「ばいばい、馬鹿な人」

最後の部分だけ冷徹に言い放ち、アレイアは指先の網を弾く。ゆっくりと飛びながら花開くように網がエアリアルを包み込む…

漆黒の三斬がそれを阻んだ。

「馬鹿はアナタよ、私たちは負けないんだからねっ！」

燃え盛る武器がアレイアの胸を貫いた。

「…攻撃が止んだ？」

ゆっくりと辺りを見回しながらガルトは傷ついた体を動かす。彼の全身は致命傷だけはギリギリ回避してはいるが、失血で既に限界に近い程に切り裂かれていた

「百八斬…か。何者だよ…」

ガルトはボロボロになった体を動かして遺跡地帯を目指す。

やはり絶対的な距離があつては攻撃を避けることしか出来ない…。

こうなれば…「つく…ああっ！」

貫かれた痛みには彼女は叫ぶ

「アレイア！」

クロアが助けようと一歩踏み出すとエアリアルが近寄るなど一喝する。

「さあ、選択よ。貴方は今二つの命を司る。一つはアレイア、もう一つは、アナタ自身」

エアリアルはフランメリーゼを軽く捻る。

「！」

声にならない叫びを上げた人外の少女と、今いる自分。その二つの選択肢が今クロアに与えられた。

「貴方の成長、どんなものかしらね？」

ふふん、と笑う可憐な少女は真剣な眼差しでクロアの目を捉えるその眼に思わず魅入られそうになり、彼は首を振って正気に戻す。考える

そう、何故いまエアリアルがこんな無茶な選択権を与えたのか…簡単だろ？

頭の中で自分が笑う。

考えてみれば王道だろう。こんな自他の選択肢などマンガや小説で飽きるほどに明示されている…だからこそ考える。何か考えがあるのか、と

そしてふと気付く。

アレイアがまるで後ろを指差すかのように人差し指だけがクロアを指差している。

自分を選べ？

いや違う。これはサインだ

クロアは振り返り、

「こんにちは」

漆黒の鎌が首に添えられたのに気付く

「さようなら」「リザレクション」！

血に染まった視界に金と白の魔法陣が浮かび上がる。白がベースで、中央に金色のひし形が描かれている見事な魔法陣…

「まだ死んでない？」

地面に倒れきる前にアブナイ笑顔を浮かべたメリアルが現れる…。

背中に鎌が押し当てられて、刃にめり込む嫌な感触を感じる…

「『変数操作』！」

先程から物凄い勢いで詠唱が続いている

「0118/prayer/クロア/HP53/3120」
いや、アレイアはただ単にシステムを書き換え続けていたのだ。

「0118/prayer/クロア/DEF/315/chenge/999」

その言葉は一秒とたたずに発せられ、もはや誰も聞き取れない領域に入っていた。

それに加えて『リザレクション』による蘇生を交えながら彼女は口の動きさえも視認不可能になる。

「硬いつ！なんで急にい？！」

徐々にメリアルの様子もおかしくなってきた。何故だか鎌の攻撃により切り裂かれなくなったので痛みに痺れた頭でなんとか立ち上がるように命令する

ガツン、と鎌が頭を殴り付けて鈍い痛みが全身に染み渡る。鎌で斬られていないだけまだマシだろうと考えてクロアは双剣を握りしめる。

黒陽が与えるのは『自傷』の能力。白陰が封じるのは『無限射程』。鎌はおとなしく鎌の攻撃をやっている！キーン…と双剣の一撃が鎌を弾き返す。そして浮いた一瞬の隙に身体をひねりながらの斬撃を与える

パツと目の前に血の華が咲き誇り、少女の手にある鎌が手から離れて…

「あは」

笑った。

さも愉快そうに、さも幸せそうに、

「アハハハハハハ！」

彼女の『狂化』が暴走した。

自分の周囲を短く刈り取る見事な鎌捌きでクロアとの距離を離す。

「狂鎌『無限射程』いい！」

メリアルは全てが黒く染まったカードを取り出し、解き放つ。

次に引いたカードも漆黒のカード。

「狂操『狂乱世界』！」

世界がグニヤリと変形し、まったく別のエリアへと転送される。そこは『テスト01』のエリアよりも更に混沌としていた。空は白く、太陽は黒く。地面は紫、草は赤。

岩があるかと思えば人形が落ちており、かと思うと随分と古びた家が一軒だけたっていた。

屋根が派手な蛍光オレンジ、さらにひび割れたガラスは骸骨を描いている。

狂乱世界と呼ぶにふさわしい、実に壊れた世界風景。

クロアはつまらなそうに一度息を吐き出す。

「アレイア、大丈夫か？」

問いかけにやや弱々しく笑った少女はその手に純白の剣を持つ。

「うん。私は平気…。でも」

少女は危ない目付きの少女を見つめる。

「アイツは許せない」

彼女は柄まで白で統一された剣を一振りして自分の破壊意識を集中させる。

その剣は鏢にあたる部分がコウモリのように広がっており、そこに青と赤の鮮やかな宝石が花のように配置されていた。

「さあ、相手してあげる。」

白と黒がぶつかった

「…やっと脱出できました」

地面にペタンと座ってマリアはほっと胸を撫でおろす。流石に暗くて狭い場所は落ち着かないようでもう一度安堵の吐息を漏らした。

「…あなたもですか？ガルト」

彼女の死角で息を潜めていた人物は驚きつつも大人しく前に出る

「いつから気付いていた？」

「いえ、勘ですよ」

にこっと笑ったマリアにガルトは呆れた仕草を見せる。そんなんで見つけるなよ、と言い添えて。

「…それもそうですね」

バカにされているのかと思わず疑うが…彼女にはそんな気はさらさら無いようだった。

「さて、私たちもはじめましょうか」

小瓶を取り出した少女は小さく首をかしげる

「はっ…畜生め」

傷はいよいよひどくなっていた。

最後の望みは…素早く空が刈り取られる。白と黒の見事な螺旋がこの壊れた世界で唯一目を見張るものだった。

「狂鎌『ほうやのれっしやう 儂夜の裂傷』！」

「白剣『せんくうれんせん 旋空煉漸』」

素早く空中で武器がぶつかり合う。白陰が施した封印は既に八割ほど破られてはいるが、まだどうにかメリアルルの攻撃を弱めているが…あまり長くはもちそうにもない。

白陰が徐々に熱を帯びてきていよいよ限界だと訴えている錯覚を覚える

「あと少しだ、力を貸せ。白陰・黒陽」

クロアは白と黒の剣を持ち、変わらず続いているメリアルとアレイアの戦いにその身を躍らせるアレイアは目の前を遮るようにして現れた黒陽を見て驚く

「クロア…危ない！」

その持ち主を狙う鎌が襲いかかり、アレイアが防御する

「…増えた？」

「二対一は酷くないのかしらねえ？」

紅いフリルの服が華麗に舞い、フランメリーゼを手にした彼女はメリアルに加勢すると伝える

「いらない」

振るわれた鎌は彼女の細い首めがけて一直線に突き進み、球体のバリアに阻まれる。

「このマリアの防壁が有る限り、アナタは私を殺せないわ」

「む…ひどい」

もう一度鎌で殴り付け、阻まれたのを見ると彼女は興味を失ったようにエアリアルから目を背ける

「みんな斬れない…つまんない」

そう呟いて彼女は姿勢を低くして鎌を構える。漆黒の鎌は禍々しく、その姿は魂を狩る死神にも見えた「クロア、アナタはエアリアルを狙って。」

私があのだ狂人を止めるから」

アレイアは純白の剣を捨てて次の武器をその手に生み出す。手にしたのは、白き大斧。

『グリダ・アルビナ』…。以前現れた敵、ゾルアの武器

「一撃撃殺」

にこつ、と笑った彼女に苦笑いを返す。あれでも元氣付ける気持ちなんだろうとか思ってたわざと大きく叫ぶ

「行くぞ！」

「はいっ！」二人は同時に行動する。

アレイアは一気に跳び上がり、クロアは姿勢を下げた低い体勢のまま走り出す。

アレイアをエアリアルが、クロアをメリアルがそれぞれ狙いを定める

「いいの？エア」

「？」

アレイアの言葉に首をかしげる

「クロアの『付加』の能力、忘れてない？」

例えば、『防壁解除』の能力とかつけたら面白いんじゃない？」

さあっとエアリアルの顔が青ざめて思わず振り返ってしまった

「ホント単純ね、お馬鹿さん」

ハッと改めて振り返ったエアリアルを巨大な斧が叩き壊す。

フランメリーゼが砕けて空気の上で最後の瞬きを見せて、消滅した。

「ゲホッ、ゲホッ」

咳き込む少女は死にかけの体で力を呼び覚ます。

「貫け、『グングニル』」

残った炎が槍に姿を変え、一度体から流れ出す血に触れる

「決死の反撃？馬鹿ね、アナタに私は倒せない」

「違うわ…。決死の希望よ！」

少女は血に濡れた手で槍を握りしめて今まで見せたこともない構えをとる。

頭の上で手を交差させて槍を回転させている…。普段とは明らかに違う構え

「『空想う少女の白羽根』」

一度大きく回転させた後、エアリアルは気合いと共にグングニルを投げる。槍は手から離れると猛烈な勢いで加速してアレイアを狙う。「『隔壁』。人間ごときが、この私に勝てる筈が…」

そう言つて、言葉を飲み込む。今、目の前にある槍は姿を変えていた。純白の光の翼を得て白鳥のように鋭く飛来する

「そんな…」

隔壁が歪むほどの衝撃が襲った。アレイアは自分の盾と互角にぶつかる槍を見て呟く

「…やれば出来るじゃない。人間も」空想う少女の白羽根の衝撃はエリア全体に広がっていた。

「…っ、凄い風」

「防いだのは…誰だ？」

壁に寄りかかるガルトにマリア・フィオーレは笑いかける

「この世界、本来の力。まあ、ここで死ぬアンタにはわかんないわね」

チエーンソーを握った彼女はチエーンを作動させる

「バイバイ、脱落者」

「なめんなよ」

ガルトは呪符を抜く

「水呪『水蛇』」

空中から蛇が現れてマリアに襲いかかる

少女はつまらなさそうに武器で一掃する。だが、ガルトは笑い、次のカードを発動した

「『水壁』」

振るった体勢で身動きのとれないマリアが下から噴き上げた水に打ち上げられる。軽々と飛んだマリアは全身水に濡れて、苦しむ

「ぐ…うあつ、きさま」

「本当に水がダメなんだな…カナヅチか？」

クツクツク…と笑いながらガルトは次の呪符を手にする。それは、以前ノピアとヨロワが使用したカード

「こんな狂った世界はごめんだ。繰符『大草原への片道キップ』」

時間は少し巻き戻り、クロアがボロボロの剣で立ち向かっていった頃

「白陰」

「死んじやえ！」

低い軌跡を描いた鎌を跳んで回避し、クロアは鎌に白陰を叩きつける
「効かないわ」

反転、漆黒の鎌が空を刈る。闇のように素早く振るわれた鎌は、動きを止めた。

「？」

クロアは黒陽を叩きつける

「白陰『鈍化』黒陽『効果継続』」

叫んだ武器はそれぞれ『封印』『付加』の能力を起動する。二対一体の剣は互いの力を補助するように力を発揮する

「それが」

どうしたの？と言おうとした少女の鎌が突然動きを止めた。

「えっ？」

物凄くのろのろとした動きで鎌は動いていたが、その速度はカタツムリの十分の一すらない。あまりにも遅くなった鎌はクロアを捉えることはできない

「喰らえ、狂人！」

鋭い回し蹴りを側頭部狙いでくりだす

「ぐっ……」

一撃を受けた少女は鎌から手を放して吹っ飛ぶ。あまりにも華奢な体が地面に当たって汚れる

「剣技『影閃斬』」

殺意の一閃。呪符の攻撃。

メリアルはその剣を見て、笑う

「……さすが、エアが惚れた男だわ」

狂気をこえた殺意が少女を金の粒子に変えた。立ち昇る粒子の中心でクロアは喜びの叫びをあげる

「勝ったぞ！」

まるで彼の心境を映すかのように混沌とした世界が爽やかな草原へと姿を変える。

残った敵はたつたの二人！そのどちらにも恐ろしく強い奴が対峙している。もう負けることはないだろう

クロアは小さな満足感を噛みしめながら小さくガッツポーズをとった歪んだ隔壁は空想う少女の白羽根と拮抗した攻防戦を続けていた。アレイアは時間を見計らって止めを刺す。

「貫けえっ！」

「……弾けて」

パキン、と周囲に四散した隔壁はあっさりと白羽根を通過させて直前までアレイアがいた場所に突き刺さる

「チエックメイトね」

手にフランメリーゼを模倣した剣を持ったアレイアがエアリアル of 背後から宣告する。エアリアルも流石にかわせないな、と理解して小さく目を閉じる

「見直したわ、エアリアル」

アレイアはそう言って剣を心臓に突き立てる。スッと弛緩した少女は金の粒子に変わり、彼女はそれを見送る

「あと、一人」

もはや人数差でも勝利が確定した。草むらでマリアは空を見上げていた。ただ黙って、おとなしく

「…今度は太陽か、お前はそんなに私も私が嫌いか？」

「太陽が嫌いって…吸血鬼かよ」

ふん、とフィオーレは不機嫌に鼻をならす。本当に嫌そうに太陽を見つめて目を閉じる

「マリア、負けたわ」

自分自身にそう呟いて、手元に転がっていたチェインソーを握る。

ブウン、とエンジンが始動して独特な振動が生み出される

フィオーレはそのチェインソーを天高く投げる。高く昇った武器は重心である剣先を下に向けて重力によって落下する

「ぐっ」

自身を貫いたマリアは小さく唸り、粒子に変わる。もはや勝てない事へのあきらめなのか、仲間の後を追ったのか、最後の一人は自ら退場していった残った三人を光が包み込む。チーム戦終了、帰還のサインだ

「私は消えるね」

アレイアはクロアにメッセージを残すと、光を振り払ってノイズと共に空間に消えた。BUGの帰る場所とは何なのか気になるが…話は進む

「クロア、お疲れな」

「やったぜ、相棒」

声だけの通信、バーチャルの草原にいられるわずかな時間でこの世界での労いを済ませる

すうつ…と意識が遠退き、自分の肉体へと回帰するのを感じる。長かった試合も、ようやく終わりを迎えたのだガコン、ガコンと体が解き放たれる。

「試合しゅーりょーっ！」

今回のバトルの勝者は強豪『ワルキューレ』を破った、『チーム：ガルト！』

歓声と、

「よくもマリアちゃんをー！」

「エアさまがあああ！」

「メリアルさんに何をしたあああ！」

怒号が二人を包み込んだ。

「はあ…ぜんぜんクロアとできなかつたなあ…」

端末に腰かけたまま金髪がため息を一つ落とす。さらりと流れた髪に思わず見いつてしまう

「…お強いですね」

ちよこんと現れた幼子が笑う

「あの方…人と違うみたいですが、可愛らしい方でしたね」

クロアはそうだな、と頷く

「大切になさってください。それから」

マリアは冷たい目でクロアを見つめる。まるで別人のような変貌に意表を突かれる

「せいぜい失わないようにしなさい。あんた、トロそうだから私が忠告してあげるわ」

マリアは笑う

「…もう一人の私はそう思ってます」

お元気で、そう挨拶して少女は階下へと向かった。肩を落としていたエアリアルをメリアルと思われる少女が元氣付けている。どうやらマリアと話している間に近寄っていたようだ。

「負けたわよ…彼、咄嗟に強いみたいね」

『狂化』して殺されたの、何か月ぶりかしらね？」

「やっぱり強い…かあ…戦えなかったからなあ…」

元氣のないエアリアルをぼくりと殴る

「あいたっ！」

「シャツキリしなさい！」

…しょうがない、食堂で甘いものおごってあげるから」

ぱあっ、と顔を上げたエアリアルは何を?!と期待して聞く

「フレンチトースト。アイスクリーム乗せ」

「さつき食べたようー！」

戦闘中のあのエアリアルはなんだったのか…クロアは激しく思索する
「次の試合が始まります。両チーム共にご退場願います」

職員に注意されて四人は一斉に階段へと歩き始める。互いにチーム
メイトと話しながら配線むき出しの舞台裏を抜ける

「どうだ？死線を抜けた感想は」

クロアはぶり返してきた興奮を押さえつけながら、普段と変わらぬ
口調で答える

「やっぱ、面白いな」

ガルトは満足そうに頷くカチリ、とアレイアは音を聞いた。

誰もいない、ただ白いだけの部屋でたしかに音がした。

「誰？」

返事はない。

エアリアルは自分の同族かと問いかける

「…」

答えたのは沈黙だけだった。物音もそれ以降なにもなく、エアリア
ルはいかぶしげに周囲を窺う

「闇が訪れる」

突然、声が響く。

女性の声、とても威厳に満ちていて大抵の人間はそれだけで緊張す
るような、王の威厳だった。

「闇の始まりは、アレイア。

闇の終わりは、ウイストレア。

現出するは、ワルキュレア。

三位一体、全能なるはBUG」

声が終わる。

沈黙が訪れて、嫌な張り詰めた空気だけが身を突き刺すように部屋
を包み込んでいった…

第二十章 たまにはふつじに(後書き)

あとがき

エア「やつほー！こんにちはわぁ！」

クロア「…何があつた？」

エア「今回はゲストとプロフィール紹介！」

エア「かもーん！」

なんか白い煙がたちこめた

マリア「ケホツ…ケホツ」

メリアル「煙いっ」

エア「私の友人、sですっ、よろー」

マリア「…こんにちはは、前作『光暗の円舞曲』より、マリア・フィ
オーレです」

メリアル「前々作『光暗の円舞曲』より、メリアルです。こんにち
は」

エア「タイトルは同じだけど中身は違つんだつたよね？」

二人「…うん」「」

エア「なら、自己紹介いつちやえい」

マリア「吸血鬼です。所属は『血脈の十字架』：リーダーです。好きなものはクッキーで、特技は聖水を飲んで『吸血鬼人格』に変わることです」

メリアル「『天界の守護者』所属、地位は上級ガーディアン。ランカーみたいなものよ、

好きなものは…ノーコメント
特技は鎌と『狂化』かな」

エア「時間無い…次つ、半年とかって何？」

マリア「最後の出番からです」

メリアル「私の物語は未完で終わったわね」

マリア「私たちはノベルサイト閉鎖で…消滅しちゃいました。みんな無事かなあ」

メリアル「そういえばこの世界にもいるのね、嶺は」

マリア「ふん、あの頼りない奴が」

メリアル「フィオーレ。最後の一言譲るわ」

マリア「嶺の名を忘れるな。そして私たちの名を忘れるな」

第二十一章 深淵への布石 The BUG's Turn (前書き)

いよいよ後半戦に入りました。

クロア達のお話にもう少しお付き合いくださいませm(____)m

さて、シロツバのやり場のないコメントコーナーです。むしろ前書きなんて只の飾り。あとがきはのっけとられてるから未だに使えず…

梅雨入りしちゃいましたね…

僕はどうにも雷が苦手なので夕立とかは憂鬱です…。雷が落ちたら

…とか考えちゃうので(^^)；

稲光は平気なんです…雷鳴だけは…orz

あ、雨といえば。

つい先日、朝から雨が降っていた日(小雨ですが)に窓の外を見た
ら…

謎の超高速生物が何匹も飛び回っていたんですよ。実際はただの燕
でしたが。

でも、家のすぐ目の前は会社の倉庫。住宅街から家の前を飛び回る
羽虫を狙いにやって来たんでしょう。

鋭く切り込み、艶やかに回る。

やっぱり燕はカッコイイです

鋭く切り込める小説を書きたいな…とか夢見る白燕でした。

では、本編へどうぞ！

ザワザワ…と普段から賑やかなイントランスに戻ってきた。前の試合の議論をしているもの、売店でカードやスナックを買っているもの、会場へと入っていくもの達でこったがえしていた。

「ガルト！」

野太い声が相棒を呼び止める。

ガルトはおう、と答えて声の主の方を向く

いたのは黒い革ジャンに派手な赤いシャツを着た、『いかにも』な大男だった。

「よう、さつき呼んだのに参加しなかつたろ？あれなんでだ？」

あのとき、とはクロアが参加表明する前のことだろう。あの落胆していた時だ

「…すまねえ、全員参加しないようにメールされてたんだ」

すまなさそうに言う男にガルトは誰からの指示かと聞く。

「…エアリアルだ」

ガルトは眉をひそめる。

「あいつがそんな小さいことを？」

わからねえ…そう言った男はクロアを見る。誰だ？と指差してクロアはムツとする

「俺の相棒だ」

「ふん…強かつたな、流石はお前の見立てだ」

男はクロアの肩に手を置く。

「なにかあつたら力になるぜ」

「ああ、なにかあつたらな」

柔らかく拒絶するが、男には通じないらしい。親指を立ててからイントランスを颯爽と歩き去っていった

「…で、あいつ誰だっけ？」

「俺に聞くなよ…」

相棒は相手が誰かわからなかったらしい。まさかの展開にクロアは頭痛がしそうになったが…どうにか驚きだけで収まった人混みをかき分けて一人がズンズンと近寄ってくる。

「主、来い」

白衣を着た人物が現れ、声と口調からGだと判断する。

「G、何のようだ？」

ガルトは鋭い視線を送り、Gを威圧する

「なに、クロアに用があるだけじゃ。主には用はない」

見事にガルトの視線を弾き返して逆に威圧する視線を送る。

送られた人物は一瞬怯み、あっさり負けを認める。

「暫し借りるぞ」

「好きにしな」

Gはクロアの襟を掴み、スタッフエリアまで引きずっていく。ガシヤンと重く閉じた扉の先で管理者はクロアに問うた

「主、どうやってアレイアを呼んだ？」

単刀直入に話が切り出される。

「…お見通しか」

「当然じゃ。会話も、行動も、全てログがある。主のデータ改変もな」

ふん、とつまらなさそうに折り畳まれた紙を取り出す。おそらくは中にズラズラと会話やパラメーターがかかれているのだろう

Gはそれを広げることなく懐に戻した。

「あまり表立ってあやつを呼ぶな。よいか？あやつは人ならざる者、知られれば世界がどうなるかすら危うい」

つまり、警告か

クロアは最近多いこのパターンに飽々しつつ了解した旨を伝える。

「ならばよい。儂らもBUGが手元になれば監視しやすいからの」
「ちやつ、と小さく手を上げて話は終わりだと告げる。クロアはやつとか、と文句を言いながら踵を返して扉を開ける。

その先はエントランス端の空間、暇そうに待っていたガルトに声を

かける

「何を言われた？」

「ガンバレってさ」

適当に答えて、会話を終わらせる。

コイツはアレイアの事を何と思っているのだろう…、あの存在を知らせたならコイツは何を思うのだろうか

誰も答えられない疑問がふっと湧いて、消えた。その後は特に何事もなく過ごした。

試合を見たり、カードの調節をしたり、特に変わったことは何もなかった。

BUGも、何も無い一日。

当たり前でなかなか無かった一日。

クロアは平和だな…と思いつながらエントランスの椅子に座って自販機で買った缶ジュースを開ける。

ブドウ味の炭酸飲料を飲みながら自分のデッキを眺める。

直接攻撃の影閃斬、天剣斬、流影斬

防御用の防壁Lv.1

装符の長剣、白陰、黒陽

呪符の火の粉降る夜に、静電気、

大体使うのはこの程度。

ガルトはバランスが悪いなど笑っていたが…こちらでもカードが無いのだから仕方ない。パックを買っても望んだものが手に入るとは限らない…

…こうなれば

「おっ、レアカードゲット！」

ペリリとカードパックを開封しながら戻ってきた相棒に聞く。

「ダブリ渡せや」

「ん？いいぞ？」

あれ？意外とok？

クロアは意表を突かれたが、相棒がたった今買ったパックの中から不要なカードを抜き出した束を受け取る。

「感謝しろよ？」

ああ、感謝するよ…。

クロアは小さく呟いた。

時刻は既に夜の8時を指していた。

楽しい時間ほど早く過ぎる。これが、きつと最後…チチチ…という鳥の鳴き声で目を覚ます。

「あれ…俺…なんで」

部屋の時計は朝の8時を指していた。

「思い出せない…」

何故かこの12時間の記憶がスツパリ抜け落ちている…。

「…そういや、やけに静かだな」

エアリアルやヨロワが起こしに来る気配もない。普段ならば誰か来ている頃なのだが…

クロアは自室を見回し、昨日とよく似た組み合わせの服に着替える。
「行くか」

ベルトを巻いて、部屋を出る。廊下には人の姿がなかった。

いや、それ以前にこの居住区画にあたる部分に人の気配すらなかったのだ。

「…何かあったな」

中央管理室を目指して走り出す。
すると

「うおっ」

「てっ」

十字型の廊下でぶつかつた。

「あいたたた…ごめん」

「気をつける」

白衣を着た人物は床に散乱した書類をかき集めるともう一度謝つてからどこかへと走り去っていった。

「…何だよ、アイツ」

カサリと手に何かが触れる。

クロアが倒れた床に視線を落とすと、どうやって挟まったのか書類が一枚だけクロアの手の下に入っていた。

「忘れていきやつたよ…」

クロアはその書類に視線を走らせる

報 告 書 1 0 1 1 号

・ 報告書1010の通り、全世界の『ヴァルハラ』サーバーにはほぼ同時に大型のノイズが発生。

・ ほぼ全てのサーバーに大型BUG…以後『BUG-』と規格を統一したものが発生

・ 現在、BUGの出現したエリア以外は平常動作中…。だが、早急な対処を要する。

現在、アメリカ南部支部『BUG-Anna』

アメリカ北部支部『BUG-Lihit』

ロシア東部支部『BUG-Gendes'lw』

日本近畿地方支部『BUG-Karen』

日本沖縄地方支部『BUG-Atel』

中国支部『BUG-RenRen』

イギリス支部『BUG-Arther』

イギリス・カンタベリー支部『BUG-Hope』

エジプト支部『BUG-Cermen』の出現を確認。

『ツバイン』投入し、現在浄化作業中

「…なんだこれ」

見知らぬBUGの名がズラズラと書かれていた書類を握り潰す。一体、何がどうしたのか、全く理解できない！

クロアは倒れたままだった体を立ち上げらせ、手の中でクシヤクシヤに丸められた紙を強く握る。そして、先程よりも速い速度で中央管理室を目指して走り出した。金属質の廊下を慌ただしく走る音が聞こえる。常に薄暗い、中央に巨大な機械が立っている部屋の中で白衣を羽織った人物が走り回っていた。

「やれやれ、凄いな…ヘラヘラ」

昨夜から尽きることなく満たされる黒い液体を飲みながらDは各地の支部からの連絡を吟味する

「フランスのそこはサーバー落ちたな。ポーランドのそこには…たしかツバインがいたハズだよ」

メールを送ると、すぐにアルファベットだけで構成されたメールが届く。どうやらアメリカと連絡しているらしい。

「D、サボらない！」Tがマグカップにコーヒーを追加しながらピシヤリと言う。言葉は元気そうだが、目はどこか遠くを見ていた。

「Tもお疲れだねえ…ヘラヘラ」

「ツバインのみんなが頑張ってるんだから、私たちも頑張らないとね！」

ぐびーっ、とTはDのコーヒーを飲みほす。

さも当然そうにマグカップを元の位置に戻すと踵を返して他の管理者を激励に行く。

「キミキミ、ちょっと来な…」

近くにいた緑の制服の職員を呼び、マグカップを渡す。

「コーヒー、もらえないかい？ヘラヘラ」職員がマグカップを受け取った時、ほぼ同時に管理室の扉が開く。

「おい！D！どういことだ！」

クロアが叫びながらDの元へと歩いてくる…

歩いてくる…

歩いて…

…

ようやく辿り着いた。

「遠いんだよ！」

無駄に広大な敷地への苛立ちを乗せて殴り付ける。Dはそれをメモを挟んだ板で受け止める。

「ヘラヘラ」

「ムカつくな」

Dは大袈裟に手を広げながら立ち上がる。

「クロア、君は帰れ」

「はぁ？ふざけんな！」

割と当然の反応を返す。いきなり帰れとは失礼にも程がある。「君は昨日の夜の出来事を覚えているか？」

…痛いところを突かれた。

クロア自身昨夜何があったか何も覚えていないのだ。嘘を言っても仕方がないだろう…

「何があつたんだ？」

Dはやはりな、と小さく笑う。

「君、覚えてないのかい？」

職員が驚きながら振り返り、コーヒーくれないかい？と催促されて走り去って行く。

クロアは今職員が言った言葉により嫌な予想が浮かび上がる。

俺が、何かしたのか？

いや、と否定する。

自分が何かしたというのはまだ言葉から推測しただけだ。覚えていないのかい？とは事象に対しての記憶を指しているだけ…。

自分が何かしたとは限らない…

何でこんなに不安なんだ？

クロアは襲いかかってくる不安に疑問が浮かび上がる。まるでイタ

ズラをした子供じゃないか。

「まあ、君が覚えてないのも無理はない。

むしろ覚えていたら…君を殺していたかもな」

ヘラヘラと物騒な事を言われてしまっただけはこちらも黙っているわけにはいかない。直接的に聞いてみる。

「昨日、何があった？」

Dは一瞬躊躇う。だが、言った

「君は、突然エントランスにて言葉を紡いだ。『闇が訪れる。

闇の始まりは、アレイア。

闇の終わりは、ウイストレア。

現出するはワルキュレア。

対立するは、オーディスタ』。」

なんのことだかな、と苦笑していたDだったが、クロアの顔を見て真顔に戻る。

「…どうした？何か思い出したかい？」

「アレイア…だと？」

Dは何となく察する。

コイツ

小さく思っ、首を振る。

「今は人手が足りない。本来は帰れと言いたいが、特別だ。奥の端末からアクセスしな」

ニヤリと笑ったDはクロアが運ばれた部屋を指差す。当然、クロアはその部屋だとは知らない。どんな反応があるか期待しつつ運ばれてきたマグカップを受け取る

「死ぬなよ…ヘラヘラ」

「バーカ。誰が死ぬか」

クロアはやや速い速度で部屋を歩き抜け、二重ロックの部屋に入った…酷く見覚えのある部屋に辿り着いた。

クロアはめまいがしそうになりながらもなんとか耐える。なんてこった、こんな所に俺は閉じ込められていたのか!?

クロアは何人が既に曇りガラスの内側で端末に座っているのを見ながら誰も座っていない、部屋の中心に一台だけ設置された端末を見る

「……」

酷く昔のような、つい最近のような変な感覚に襲われる。

あそこでログインした時、処刑と称して殺されそうになり、アレイアに助けられたのだった

「闇の訪れ……か」

アレイアの名が出たのは偶然ではあるまい。クロアは誰もいないブースに入ると、静かに端末に腰かけて自分自身の身体と、意識を委ねる。

スツ…と薄れる意識の中で何か小さな声を聞いた気がした。ザザザツ、とノイズが走る。

いつものエリアではなく広大な白い空間に着地して、どうすればいいか虚空に聞く。

不思議な効果音と共に目の前に四角い画面が現れ、Dの顔が投影される。ヘラヘラ笑いながら映る姿に何故だか無性に殴りたくなった。

「君のセンチメンタルな表情が見れるとはね…ヘラヘラ」

「無銘『長剣』！」

素早く解放、それを画面に投げつける。

剣はDの顔を透過して数メートル先にカランカランと転がる

「無駄無駄。さて、君にはイギリス・ロンドン支部のサーバーに転送する」

「おい、待て。俺は英語話せねえぞ」

「安心したまえよ」

フュン、と足元に複雑な模様を描いた蛍光黄緑色の転送印章が現れる。

「こういうのはお約束で話は通じる。んじゃ頑張りたまえ…ヘラヘラ」

後で絶対殴ってやる…。クロアはそう心に決めて無理矢理転送を促

す印章に身を任せ、フツと消えた着地する。

目の前には巨大な時計塔があり、その左側には長い橋がかけられている。

人の姿はないが…ここはかの有名なビック・ベンなる場所だろう

「お待ちしておりました。」

振り替えると、売店の入っている建物の前に一人の女がいた。

「私はリゼ。貴方のサポートを頼まりました。短い間、よろしくお願ひします。」

頭を下げた、リゼと名乗る女はどこからみてもメイド服にしか見えない服を着て、どこからみてもメイドのような立ち振る舞いをしていた。

流石は本場…か？

そんなことを頭の隅で考えていると、町の風景が激しいノイズで醜く歪んだ。実世界を模した世界が内包した歪みを吐き出す！

「ジジ…ジジ…」

「『BUG - A e t h e r』です。厄介ですので、ご注意を。Mr . クロア」

灰色の生命体は大きく吠哮を上げ、半透明の体をこちらに向ける。クロアは手にした長剣を地面に突き立てると、自らの愛刀を虚空より呼び出して解放する

「巡れ『光剣』『白陰』『闇剣』『黒陽』」BUG - A e t h e r…面倒だからアーサーと呼ぼう。そいつは人の形をとりながらスライムのような半固体の体をしていた。

顔はないが、頭はある。それが真っ直ぐクロアを睨み付けている。アーサーの体長はおよそ五メートル。ビック・ベンの時計塔よりは小さいが、人間相手にはあまりにも巨大だった。

クロアは走り出し、アスファルトから跳び上がる。一気に飛翔し、頭上を取る

「はあっ！」

気合いと共に封印の白陰を叩きつける。

グニヤリとした触感が腕まで飲み込み、悪寒が背中を走り抜ける

「召喚『リビングフェアリー』」

リゼが地上で呪符を解放する。

ズルリ…とアーサーの体が動き、クロアと共に奇妙な生命体を見上げた。

「…？」

理解不能な言葉を紡ぎ、目の前をパタパタと飛ぶ体長三十センチ以下の生命体はそっとクロアの頬を撫でる

「妖精？か」

「…」

何か頷く仕草をして、妖精はアーサーに小さな手を向ける。

手の前に光が収束し、それを放つ。

ずどんという鈍い衝撃がBUGを震えさせ、クロアは吐き出される。

「…？」

落下中、妖精が同じ速度で降下しながらクロアに手を伸ばす。クロアはその手を取ろうとして、出した妖精に弾かれる

「…！」

ああ、そういえば妖精はイタズラ好きだったなとか思いつつ、クロアは笑えない落下にため息を漏らす

「『天鎖・六花の網』」

ジャラジャラとクロアが解き放った鎖がうるさく絡み付く。ガルトから受け取った新しい呪符の力はクロアを受け止め、静かに着地させて消滅した。

「…」

「リビングフェアリー。イタズラはやめなさい」

妖精はシュンと肩を落として、すぐに上機嫌に飛び上がる。薄い羽を飛ばたかせて天高く飛翔するアーサーが目の前をヒラヒラと飛んでいる妖精をうっとうしそうに見つめて、その手をゆっくりと持ち上げる。

「…」

小さく唱えた妖精を身長に比例して巨大な手が殴り付ける。

妖精は攻撃を受けきれずに空中で金の粒子に変化して、死んだ。

「生還『リバースソウル』」

リゼの呪符が使用され、粒子が妖精の形に収束し、復活した。

「……？」

愉快そうに笑った妖精は光の球を作り、放った。物凄い破壊力をもったその一撃でアーサーは地面に倒れる

「強え……」

「私は、この場所で最強のプレイヤーですから」

自信に満ちた彼女の言葉にクロアはなるほどと頷く。リゼはその腕前を買われて今ここにいるのだ。自分よりも確かな腕前……小さく心が痛んだがクロアは双剣を握り直して倒れたアーサーを睨み付ける……

「ジジ……ジジ……」

まるで壊れた機械のような音を出しながら奴は立ち上がり、両手を振るった。

その瞬間に腕が変形して二本の剣となり二人と一体を襲った。

「進化か？」

「いえ、フォームチェンジの一つです。意外と攻撃範囲が大きいので、見切つて下さい」

二人して上空へ逃げる。

アスファルトが砕かれ粉碎され、近くにあった聖堂までも破壊されてしまった。確かに攻撃範囲は半端ではなさそうだ

「二撃目、回避します」

リゼは盾符と書かれたカードを構えて左腕の斬撃に合わせて解き放つ

「盾符『強撃の狭撃』」

同質、同量の力がカードから放たれてアーサーの腕が力を相殺される。その力は六角形の盾を描いて霧散する

「リビングフェアリー！」

「……」

ずどん、と二度光球がアーサーを撃ち抜く。もう既にダメージはか

なり蓄積されている筈だが奴はまだ立ち上がる

「哀れね、眠りにつけば楽になれましたのに」

少女の前面を三重の魔法陣が展開して最も彼女の近くにある陣にはリビングフェアリーの光球が玩具に見えるほどに光々と輝いていた。

「滅光『ライト・イレイズ』」

敵を完全に消し飛ばす光の波動が放たれた。

陣を通過することに光線となった球が威力を増し、光を増し、アーサーを貫いた。

「伏せて、消えなさい」

金色の光が舞い上がり、BUGがその命が尽きた事を知らせる。

リゼの圧倒的なまでの力を前にしてクロアは何も感想が浮かばなかった。それほどにあの力は強かった。

「終わりました。Mr・クロア」

笑った彼女の後ろでビビビ…と巨体が揺れる

「伏せろ！」

思わず走り出したクロアはリゼを守るように立ちはだかる

「まだ…立ち上がれるの？」

驚きと畏怖で彼女が麻痺するのを感じ、クロアも同様に思考が麻痺するのを感じる

「俺は、何もできないのか…?!」

クロアは最も強い少女の名を叫ぶ。

「奴を倒せ！アレイアあああ！」

極彩色の光が放たれたザザザッ、ザザザ…

ノイズが走る部屋の中で小さな声だけが生まれた。

「…見つけましたよ」

ノイズが一層激しさを増した後、その部屋で声が生まれることはなかったザザザッ、と激しいノイズと共に一人の少女が空間をも超えてクロアの目の前に現れる。

小さく呟いた語は、隔壁。全ての干渉を否定するBUGの絶対防壁…光が四つ八つと分解されて球体の前に四散する。アーサーが最後の

力を振り絞って繰り出した剣の断殺を

「クロアを相手にして頑張ったわね」

アレイアは右手を剣に向けて続けた

「でも、私に触れていいのはクロアだけ。アナタなんて願い下げよ」
剣となっていた腕が弾かれ、先程よりも鮮やかな極彩色の光がア
サーを飲み込んだ。体内を蝕む光によって巨大なBUGは倒れ、滅
する。

「クロアっ、大丈夫？」

「ああ。とりあえず抱きつくな」

相変わらず…というよりも徐々に馴れ馴れしくなってきたアレイア
を引き離してクロアは何となくだが彼女の頭に手を置いた。

「ビクッ」

「うおっ」

目を丸くして驚いたアレイアに驚く。

「え…あ…今の、なに？」

今の、というやはり今のだろうな

「いや、撫でてみただけだ。何となくだから気にすんな」

アレイアは撫でるか？と小首をかしげる

まさか、知らないのか？

「撫でる、とは一般的に幼子を褒める際に用いられるコミュニケーション
シヨンの一つです。Ms・アレイア」

きよとん、としていたアレイアは次第にリゼの堅苦しい説明の内容
を理解してゆつくりと赤くなる

「クロア…ロリコ」

「何 故 そ う な る」

一語一語強調しながら全力で否定する。

とりあえず俺に幼児趣味はない。断じてだ

「でもね、ちっちゃいころの私からベタ惚れだったよね？」

「…Mr・クロア。只今より敬称表現を外したいと思います」

ああ、これだから堅苦しいのは嫌なんだ。遠回しに軽蔑しただけだ

ろうが「あれは…」

違う、と言おうとして場の空気に不穏なものが混ざったのを鋭敏に感知する。

半拍おいて二人も警戒体制に入る。自然と武器を手に背中合わせになる

「…来る。」

アレイアはいち早くBUGの出現を察知、警戒を促す。

ノイズが町を汚して、不快な雑音を発生させる。BUGが現れる度にノイズが走るので出現が近いのを感じる

先程破壊された道の、橋へと進んだ交差点の真ん中に空間の波紋が現れ、中から人が現れる

「お迎えに上がりました。アレイア様」

膝をつき、頭を下げた一人の少年がまるで騎士のように礼をする。

「…『ブレイク』」

躊躇いなく光を放つ。アレイアの顔にやや不安の影が現れた気がするのは気のせいだろうか？

「『隔壁』」

球体の防壁が極彩色の光を四散させ、何事もなかったかのように彼は顔を上げる。

幼い彼は小学生になるか、なるうとしているかくらいの年で不釣り合いなほどに端整で落ち着いた雰囲気と顔をもっていた。

「私は『BUG・エイド』。貴女の従者として仕えるために御母様の命めいにて参りました。」

クロアも、リゼも無視して少年…BUGのエイドは立ち上がり手を差し出した。

栗色…というには濃い髪はやや長く、ふんわりと丸く弧を描いていた。冷静な青い瞳は黒いフレームの眼鏡で曇りなくアレイアを見つめていた。

「おい、お前。俺達を無視して話してるなよ…。リゼ、アレイア、援護を」

静かに構えたクロアの腕をアレイアが掴む。そして、ほんの少しだけ力を込めてから彼女は口を開く。

「御母様はなんと？」

エイドはソプラノで答える。

「『帰らぬならば、帰る気にさせよ。』と」

握られた手がより強く締め付けられる…。心なしか彼女の手が震えている…

「仕掛けませんのですか？」

リビングフェアリーを手元に寄せ、いつでも攻撃の体制に入れるように構えていたリゼが見つめている

クロアは少し躊躇い、アレイアの手を払う

「いくぞ」

「了解しました」

リビングフェアリーを飛ばし、自身の前に大口径の魔砲陣を展開した瞬間に二人の体が動きを止める

細い極彩色の網が二人の身体を拘束していたのだ。

「ごめんなさい」

アレイアが謝る。何を？

「もう、時間切れ…楽しかったよ」

クロアは網をほどこうとしてもつれて倒れる。

「おい！どういう…」

意味だ！と聞こうとして空から降る雫に気付く。雲はあれど雨はない、超局地的な雫はアレイアに合わせて動きながら突然降り止む。

「さようなら。」

ザザザツ、と視界が歪む。

ふとマリアに言われた言葉が頭をよぎった。

彼女を失わないようにね

気付いてたのか？この状況を、誰もいない交差点にクロアは叫ぶ。

「一体、何なんだよ！答えろ、アレイアあああ！」

答えるものなどいはいはないガコン、と体が解放されてクロアは現実
に帰ってきたのかとぼんやりと考える

閉鎖的な空間に一人座りながら彼はアレイアの事を考える。

何であんなことを言ったのか。

エイドと名乗るガキは何なのか。

時間切れとは何なのか。

考え出したらキリがない。しかも答えは得られないのだから質が悪
い。クロアは網に囚われ続けているような錯覚を感じながら立ち上
がる。

ライトが天井からスポットのように光を降り注がせる。その光に何
故だか心が痛んだ。

「俺は、一体どうしたんだ？」

今まで感じたこともないような感情の高ぶりと落胆。まるで粗悪品
のクスリでも使ったかのような気分の悪さにクロアは頭をガシガシ
と掻いた。…こうしていても埒があかない。クロアは小部屋を出る
「やあ、クロア君」

…おそらく、この世で最もムカつく奴と遭遇してしまった。

「ルイエスか」

「君みたいな奴でも僕の名を覚えていたか」

感心感心、と笑うコイツに一発殴りたいのを堪えつつ何のようかと
問う。もちろん用がなければ失せろと言いついて

「いや、どちらでもないよ」

なんだそりゃ？

「君を笑いに来たのさ。君の最大の力であるBUGを他の男に盗ら
れ、無様に泣く…」

もう限界だ。クロアはさつきから握っていた拳を思いっきり叩きつ
ける

鈍い音がして、意外と小柄な体が吹っ飛ぶ。クロアはルイエスが転

がる場所まで歩いていき、蹴る。

「あはは、やってくれたね、いいのかい？君が消えても」

「消えねえよ」

地面に倒れるルイエスを見下しながらクロアは全ての冷静さを振り絞ってコイツが何を言っているか考える。君が消えても？

まさか、コイツがエイドを呼んだのだろうか？馬鹿馬鹿しい妄想を頭を振って霧散させる。そんな訳があるか、奴にそんな事が出来るはずがない

クロアは立ち上がるルイエスを睨む

「D、コイツを今すぐアカウント削除しろ！これは僕の命令だ！」
扉が開き、Dがひよっこり顔を出す。

「無理だよ、生憎と君のお父さんから君の言うことは無視しろと言われているんだ。前にテストを延長させた罰だね…ヘラヘラ」
パターンと扉が閉じ、何とも言えない気まずさが取り残される。

「おい、僕はこのゲームの社長の息子だぞ！そんなバカなことが…」
「あるんだよねえ…ヘラヘラ」

今度は館内放送で言葉を返している。とりあえずバカにでもしているのだろう、クロアは茶番には付き合えないと飽きれ気味に部屋を出る

「待て！」

「クロア、会議だ。急ぎなよ」

ヘラヘラ笑う声は何故だか許せたような気がする…。数秒だけだがパターンパターンと二つの扉を開いてクロアは中央管理室に戻ってくる。白衣の人々と何人かの私服姿のツバインが部屋に聳える機械の大画面モニターの前に集まっていた。

「来たね、まずは『BUG-アーサー』の退治成功おめでとう」

クロアの浮かない顔を見て、Dはやれやれと笑う。

「いいんじゃない？BUGが減ったんだしさあ」

そう言ったのは、エアリアル。

クロアは驚きと敵意で睨み付けるような目になる

「だって…そうでしょ？」

怖々と彼女が言い、賛同はなかった。

「ふざけるな」

冷たく放ったその一言はかなり深くエアリアルルの心に突き刺さる。

「…そんなに、あの子が好きなの？」

逆に今度はクロアに言葉の矢が突き刺さる

「違う！そんなのじゃねえ！」

「なら、なんなの？」

「…アイツは」

少し、途切れてクロアは叫ぶ

「アイツは、とりあえず訳が分からない奴だ！ほつといたら世界滅亡とかやりかねない、それに、訳分かんねえセリフ吐かれて黙ってられるか！」

Dは小さく笑い、Tは意地っ張り、と呟いた。

「大切な人なのね？」

エアリアルルの質問に、違い、と否定するが何もかもを見透かしたように微笑んで彼女は呟く

「あなたにとって大切な人は私にとっても特別な人。探すの、協力するわよう」

ぴしっ、と人差し指を突きつける。

「…昨日の敵は今日の友、かあ」

何か聞こえたがクロアは深く追求しなかった。コイツ、今までそう思っていたのかとは思っていたのだが…。

「…ふむ、どうやら丸く納めたようじゃの。では命ずる。BUG・アレイアを欠いたままでは我らにとって不利だということに変わりはない。ならば儂らであやつを奪還する」

Gが声高らかに告げる。アレイアを素早く見つけ、取り戻すことを皆に告げたのだ

「指揮は儂とDでとる。奪還部隊員はクロア・エアリアルル、志願者はおるか？」手を挙げたのは、三人。

「二人だけだと危なっかしいからな。」

楼騎がGの承認の元にメンバーに加わる。

「クロアおにいちゃんがいくなら、ぼくもいくよー！」

「ヨロワが狙われないように見張らないとね」

ちっこい双子が共に承認を受け、クロアの足元に移動してくる

「がんばるよ！」

ぱあつと笑うヨロワの隣でノピアが親指の爪を噛みながら明らかな不満を示していた。

まるで今にも

「妬ましい」とか言いそうな勢이었다。

「…ふむ、予想通りじゃの」

「元気な子達ね」

GとTが笑い、Dもへらへら笑う。

半拍あけてGは真顔に戻り、集まった全員に話し始める。一つ目の議題は終わった、と言って次の話題に移る

「各所、各サーバーに現れたBUGがアレイア消失とほぼ同時刻に消失した。その件についてじゃ」モニターにいくつもの地図が表示される。その全てに小さく『イギリス・ロンドン・イベントエリア』のように『国・支部・エリア名』が表示されていた。

「BUGの現れた全支部、十のマップじゃ」

そう言っただけのマップに時間を表示させる。時間は日本時間『9:15:00s』から

「この後、ツバインが9:23にかけてログインする」

カラフルな矢印がポツポツ現れ、その中に『クロア』の名を見つける。

「9:45:24、アレイアがログインする」

『アレイア』と表示された矢印が『アーサー』と書かれた矢印と触れ合う。

「9:58:42、『BUG-アーサー』消滅」

矢印が不自然なノイズに吞まれて消える。おそらくは『ブレイク』

の影響なのだろう、二秒ほどかけてゆつくりと矢印が消えた。

「9：59：31、BUG・エイド出現」

十字型の交差点の真ん中に『エイド』とついた矢印が表示される。それ以降矢印は動きを見せずに時間だけが経過していった。

「10：05：24、アレイア消失。前後二秒で世界各地のBUGが消失」

全てのマップから矢印が消える。

残されたのはプレイヤー達の矢印だけだった。「…と、言う訳じゃ。

奴等にとってアレイアとは何らかの価値：もしくは必要性がある可能性もある」

確かに、一斉に引き揚げたのだから少なからず何らかの用途があるのだろう

…何なのかは謎でしかないが

「なあなあGサン」

「jeeさんいうな」

ポクツと書類を挟んでいた板がDにあたって音を立てる。

「あいつらの居場所、わかってるのかい？わかってなければこの集まりも意味をなさないよ？」

集まった全員が

「そついえば」といった具合に賛同の呟きを漏らす。BUGの大発生とアレイア消失、そちらに気を取られ過ぎていたようで意外と重要なことを忘れていたようだ。

「調査中じゃ」

「なら、どうする？」

Dは詰め寄り、Gはそつじゃの、と顎に手を添える

「少々時間はかかるが、逆探知といこうか？あれならば今から流せば半日ほどで大まかな概要くらいは掴めよう」

「逆探知用のウィルスを流す気か？」

ザワザワ…と白衣を着た人物達がざわめく。何なのかとクロアが聞く前にTがDに聞いていた

「逆探知用のウイルスって？」

Dはヘラヘラ笑いながら親切に答える

「システムに感染し、その情報をこのバカデカイコンピュータで解析してBUGの居場所を探っちゃおう…ってコトさ」

「ちよ、それは不味いわ！」

何人かも賛同した。

楼騎も一言、駄目だ。と否定する

「だってさ…ヘラヘラ」

「やれよ」

感情的に口を突いた言葉が全員の視線を集め、クロアはもう一度同じ言葉を吐き出す。

反対の輪を断ち切る肯定の呟きはまっすぐにDを捉えた。

「…なるほど、だが、いくつか言わなければいけないかな…」

Dはポリポリと頭をかきながら一歩前に出て、クロアに話しかける
「問題点その一、ウイルスであること。プレイヤーデータに感染したら後で訴訟ものだ。」

問題点その二、万が一ネットワークに拡散した場合、やっぱり訴訟ものだ。

問題点その三、何らかの方法でバレた場合、最悪『ヴァルハラ』の閉鎖の可能性がある。そうなればアレイアどころの話ではなくなる。焦るとどうなるか分からないからね…」ぐっ…とクロアは押し黙る。
『ヴァルハラ』消滅となればアレイアを助けるどころか逆に失うことになる…。手は無いのか？考えども答えは見つからない

「はいはい！」

「『K』、なんだい？」

栗色の長髪を緩やかに巻いた三編みにした少女が手を上げて発言権を求める。頭につけた先端が緑色の羽根が揺れていた

「そのクロアを囿にしてみれば？ひよっとしたら何かリアクションがあるかもよ？」

意外とシンプル、かつクロアの同意なしの発言にJが鼻で笑う

「コイツに縁があるのはアレイアだけだ。他のBUGを呼べるとは思えないな」

Kが反論する

「想いは、どんな壁も乗り越えていきます!」

タンツ、と叩かれた机にDは小さく笑う。GもTも何となくニヤリと笑いながらクロアを見つめる

「…何だよ?」

Dは声高らかに叫ぶ。

「『クロアを餌に愛の力で釣っちゃおう』作戦会議を始める。責任はもちろんクロア君が持つよ?…ヘラヘラ」

俺かよ!

「…か、センスないな…本当に…」

クロアが天を仰ぐと、モニターに一度だけノイズが走った。

妙だな…と思いつつ、もう乱れることのない画面から視線を反らした。時間は戻り、一時間程前になる。

針は左回りに、人は後ろ向きに、別の世界の話だ

「…」

二人、暗い空間を歩いていた。

「…エイド、だったわね?」

アレイアは目の前を歩く少年に声をかける。少年は幼い双貌をアレイアに向け、何でしょうか?と聞く

「何故あなたは人の姿を?」

エイドは小さく笑う

「あはは、簡単です」

笑い、目を開け、あまりにも鋭利な瞳に変えてアレイアを凝視する
「アナタがノゾんだカラ」

ピシッ、とひびの入った顔を彼は傷をなぞって綺麗に消した。

「む…まだ安定してませんね、見苦しいものをお見せしてしまい、申し訳ございません」

ちよこんと頭を下げて彼は謝罪する。

アレイアは鋭かった目付きに優しさが戻ってきたのを確認し、内心胸を撫で下ろす

まだ子供とはいえ、あんな目付きは怖い。彼女は自分が人間みたいだなと自嘲気味に笑う

『本当、人間のよう』

頭に叩きつけられるような声があった。

まるで王のような女王の声、聞くものに服従を強いる絶対の力…アレイアはその声に聞き覚えがあった。

「御母様…！」

苦しい。なぜだか胸が潰されそうな苦しさが彼女をさいなむ。何？ なんなの？！世界が一転する。

白い、広大な空間…。どこか気品が高い無限遠の部屋に一つだけ、玉座のような背もたれの高い椅子が背を向けて存在していた。

『アレイア…失望しました』

チャリ、という微かな金属音、アレイアは胸の痛みでコンマ数秒反応が遅れた。

地面から、天井から、鎖が彼女に巻き付き縛り上げる

「っ…、御母様！」

『ウイストレア』

ザザザツ、ノイズで世界が乱れて一人の少女を虚空から吐き出した。その姿はアレイアの幼少期と瓜二つ…違うのはただ三つ。

銀の髪、紅い目、そして、黒い服。

「…お呼びですか？」

少女は幼い声で冷淡な目をしていた。

『神影の儀を行なう』

エイドとウイストレアは深く頭を下げ、その手をゆっくりとアレイアに向ける

ジジジ…と不安定な光球が生じ、アレイアは恐れと鎖で動けないことに叫ぶ

「っっ『ブレイク』」

極彩色の光がアレイアを飲み込み、この世のものとは思えない絶叫が無限の部屋にこだました。アレイアにとって、果てしなく長かった一瞬は二人のレベルアップによって終わりを告げる。

「…あー、っ」

「…」

エイドは首を回しながら自分の新しい服を上書きする。

三重のローブ、赤、黒、薄黄の三枚を羽織り、かけた眼鏡をゆっくりと押し上げる…。見た目は十代後半、肩にかかりそうな髪は綺麗に切り揃えられておりなかなかさまになっていた。

「…帰るわ」

銀の長髪を流したウイストレアはノイズと共に消え去る。残されたのは、アレイア、エイド、そして

『儀は終わった。アレイアのBUGとしての…【神影】としての権利の全てをウイストレアに移行させる』

気を失ってぐったりとしているアレイアの隣で先程まで小さかったエイドが了解の意を伝える。

「では、コレは？」

『ウイストレアに一任する。鍵は箱に成り上がり、箱が鍵に成り下がる時は…な』

「…かしこまりました。」

エイドは恭しく頭を下げるとノイズと共に姿を消す。アレイアも鎖ごとノイズに吞まれるように消えた

『…感付いたか』

玉座に座る女性は自らを見上げる少年を見る。彼は見上げた気はないだろう、おそらくはこちらの存在すら気付いてはいないのだろう…。だが、空間も飛び越えるほどに鋭い眼光に彼女は好感を覚え、敵意を覚える。

『オーディスタ』

神の道化が、と呟き…。彼女は部屋全体をノイズで覆いつくす。そのノイズが消えたとき、部屋には誰もいなくなっていた…。「クロア、

聞いているかい？」

Dの声にハツとする。今までモニターを見つめていて話を全く聞いていなかった…

「いや、聞いてない」

「…ハツキリ言うな」

Dがあんまりにも簡単に聞いてないと言われてやや困惑気味に呟く。クロアは悪びれもせず、何だ？と聞く

「…君達の最初の調査地点だよ。ロンドン支部のサーバーだ。ひよつとしたら何かしらの手がかりがあるかもしれないだろう？」

まあ、そうだろう。クロアはわかったと頷く。

「ならば解散じゃ。」

Gが告げ、そうじゃ、と呼び止める。

「エアリアル、こっちへ」

少女は一人だけGに手招きされて

「うんGさん。…それじゃみんなは先に準備しててね」

ポクツ、と殴られてエアリアルは機械の反対側に連れて行かれる…

「俺らは準備だ。行くぞ」

楼騎が部屋を後にし、双子が続く。クロアも最後に続き、ボソボソ聞こえる会話がかかったが…クロアはヨロワが開けている扉をくぐり、中央管理室を後にした中央管理室の機械の後ろでは、GとTとKがアレイアと話していた。

「らしくなかったの？エア」

「そうね…まさかとは思うけど」

「ツンドラですか？キヤー」

割と盛り上がる管理者と

「そんなんじゃないわよう！…ただ、アイツが意地っ張りだから後押ししてあげただけ」

「ツンデレ」

「うっ…うるさーい！」

Kの鋭いコメントにエアリアルは顔を紅くしながら否定する。

それをからかうTとKはより賑やかに黄色い悲鳴を上げながらエアリアルへの反応を楽しんでいた。

「むー」

ついにふてくされたエアリアルはツーンとソツポを向いて二人に顔を合わせない

「あつ無視したわね？」

「エアちゃんひどーい」

やっぱり茶化され、エアリアルはなんか失敗かも…と肩を落とす

「ふむ、私もまだまだ若い、若さとは良いな」

Gの呟きに三人が固まる。

「…なんじゃ？」

理解できぬ、と三人を見つめるGに

「どこが？」

蛮勇、Kが最大の禁句を口にする。

Gは口元の小じわを引き上げて笑い、

「K、ちよつと来い」

白衣の襟首を持って引き摺っていった。

「わっ…T、助け」

助けを求めた先は

「解散かしらね？」

「皆が待つてるから私は先に行くわよお」

手を振ってお別れモードの二人がいた。

「この薄情者ー！」

ズルズルと拉致られながらKが最後に叫んだ言葉はそれであった。

奥の二重扉の部屋につれていかれ、重苦しい音と共に閉じた。一方、クロア達はエントランスで買い物をしていた。

「クロアおにいちゃん！新しいパツクが出てるよ！すごい！」

「…『光暗の円舞曲』？変な名前だな」

そんな会話をしながらポイポイとカゴに放りこんでいくヨロワを見ながら最近の子供の財力に内心舌を巻く。

俺がこれくらいの時は缶ジュースすら買いたくても買えなかったのに…

ほんの少しだけ、羨ましい。

「おにいちゃん」

手を振り、自分を呼ぶヨロワの元へ行く。

紙幣を渡して商品と引き換えた少年はその中の一つを抜き出し、差し出す

「いつもありがとう、あげる!」

物凄い笑顔で、元気よく言った少年の手に握られていたのはカードのパック。一つ150円。

「…いやだった?」

受け取らないクロアを見て、ヨロワはシュンと目を伏せる…。嫌われたとも思っただのか一度だけ手にしたものを恨めしげに見つめる

まったく、これだから

クロアはその手から受け取る。

「あー、ありがと…な」

不器用に撫でる。少年は一度だけ嬉しそうに笑った

「…何よ、あれ」

ゴゴゴゴゴ…と燃え盛る嫉妬をその身に宿してノピアはクロアを見つめる

「ヨロワ! 離れなさい! 病気がうつる…っ!?!」

ひょい、と楼騎が持ち上げてノピアをちょっとだけ離れた場所に降ろす

「なにすんの!」

「弟の邪魔してやるな。おまえも弟から離れろ」

ぷう…とふくれた少女に楼騎はやれやれと肩をすくめる。どうやらこの姉の弟離れはまだ先のような

楼騎は一度ため息をつく

「お前はいつまでも変わらないな…」

「私たちは二人で一人! ヨロワが傷つけば…私も辛いから…」

楼騎は聞く。

「いつ傷つくんだ？」

「あの子、どう考えても総受けじゃない！」

ひよい、とまた持ち上げる。

「な…何！離しなさい！」

「そういうのは、無しだ。」

ふと、楼騎は廊下を走ってくる音に気付いた。どうやら、最後のメンバーが来たようだ。

「お待たせっ、ごめんね」

エアリアルは四人を見て…何かあったわね、と笑う。

「気にするな。親睦が深まっただけだ。」

楼騎はノピアを放し、楽しげに遊ぶヨロワと、遊ばれているクロアを呼ぶ

「準備はいいか？」

集まった全員が、一斉に手を突き上げ、そして叫んだ。

「…おーっ！」「…」

「ああ」

…クロアだけ、小さく拳を上げただけだった。

あとがき

エア「字数が足りねえ！(、(、(」

クロア「…もう突っ込まねえぞ」

エア「ねえ…足りないよお…600字なんかじゃ伝えきれないよう…」

クロア「何か知らせることがあったか？」

エア「いや…私の『愚痴』とかねえ…」

クロア「不許可。」

エア「まったく…汚れ役までしてあげたのに…あなたをそんな人に育てた覚えはないわ！」

クロア「奇遇だな、俺もそんな覚えはない」

エア「アレイアもいなくなって…ようやく『私フラグ』が立つと思つたのに…くすん」

クロア「何だそれ…つーか、アレイアは！」

エア「クロアの嘘つき。ばあーか！」

椅子を弾いて、どこかに走り去った

クロア「…なんなんだ？一体」

ノピア「それだから女心のわからないやつは…はあ」

クロア「ほう、お前に女心がわかったのか？意外だな」

ノピア「私は、ちゃんと『女』です！」

クロア「どこがだよ…」

ノピア「昼ドラっぽいところとか！」

クロア「ああ…それくらいか」

ノピア「な、何よ！変態！」

クロア「違えよ」

ノピア「なら何よ…馬鹿、ゴミ、間抜け」
クロア「表出る」
ノピア「死ねばいいのよ」
クロア「…」
ノピア「…」
クロア「巡れ」
ノピア「煌めけ」

第二十二章 神影 神の道化と戦姫（前書き）

二十二話です！

今回はいよいよやりたかった事の一つがようやく実現…。なかなか『神影』の名前が出せなかったから楽しかったな

ネタバレになるから話を変えますね

今回の話のお断り、

『北欧の方々、怒らないでください（^^；』
とりあえず神話についてやってるから（一部名称だけですが）何かしらあるかもしれませんが…独自解釈を元に大分再構成しなおしています。

だから…ね？ f ^ | ^ ;

ではでは、本編へドゾー（ノく>）ノ

第二十二章 神影 神の道化と戦姫

一斉に手を突き上げ、叫ぶ。

楼騎を筆頭に、エアリアル、クロア、ノピア、ヨロワがそれぞれ手を降ろして笑う。エントランスは閑散としており、入り口のガラス戸には『臨時メンテナンスのため、本日臨時休館』という張り紙が張られていた。

「まずは…ロンドン支部からか。全員、会場に移ろう」
ぞろぞろと会場へ移動を始める。

「ねえねえ、クロア」

「…なんだよ」

エアリアルはクロアが手にしている物を指差し、聞く。「そのパツク、あけないの？」

クロアは手を見下ろし、あ、と呟く。そういえばすっかり忘れていたクロアは一度手をかけて、やめる。

「後でにする。今は置いとくところがないからな」

クロアはポケットにパツクを滑り込ませ、先を促す。会場に入った三人は既にステージ上で暇そうにこちらを見つめていたのでエアリアルも仕方なく会話を終了する階段下に職員はいない。メンバーはもはや決まっているので確認する必要は皆無だ。クロアはエアリアルよりも先に階段に足をのせる。

階段はやや薄暗い。ただでさえ暗い会場の照明が必要最低限にまで絞られているからか多少足元が危ない。

ゴムで覆われた配線が縦横無尽に壁を伝い、奥のスタッフエリアにまで伸びている。このケーブルの行き先はおそらく中央管理室なのだろうとクロアは予測する

「揃ったな。」

楼騎が登りきった二人に話しかける。

彼は暇そうにしていたノピアとヨロワを呼び寄せ、端末に座るよう

に指示し、二人にも同様な指示をする。

三人は手近な椅子型端末に歩み寄り、座る。

ガシャン、と内部機関が稼働して手を、足を、頭を固定する。

意識がゆっくりと遠退いていき、自分自身の体から切り離されるのを感じる…。最初の頃は嫌な感覚だったが、次第に心地よさすら感じてきたこの奇妙な感覚はなんと形容しがたいことか。クロアは最後の意識の小片でそう思った…ザザザ…ザザザザツ…

身動きのとれない身体をノイズが歪ませ、奇妙な感覚に不快感を覚える。

アレイアは、天から地から縛する鎖を揺らしてもう何度目かの脱出を試みる。

「無駄ですよ。その鎖は『神影』にしか破れません」
エイドは小さく忠告した。

三枚のローブが揺れて、アレイアはこの男が身動きしたのを理解する。

「…私は、『神影』よ」

呟いたアレイアにエイドはゆっくりと首を振って、違います。と言う

「あなたの全ての権利はウイストレア様に譲渡されました。今のあなたは『神影』どころかその呼吸すらもウイストレア様の承諾が必要なのです。」

あの方がその権利を停止すればあなたは即座に呼吸ができなくなり、絶命なさいます」

アレイアは馬鹿げてるわ、と呟く

「…そうですね、お姉様」

ザザザ…ザザツ、ノイズが走り、その中心に黒い服を着た少女が現れる。その姿にアレイアは目を見開くほどに驚いた

「…私、がいる」

アレイアはウイストレアの容姿が自分にも似ていて一瞬気が遠くなりかけた。どうにか後一步のところまで卒倒は耐えられたが…綺麗な銀髪、紅い瞳、黒い衣服。その全てが彼女、アレイアの色違

いなのだ。

「…何者よ、アナタ」

ウイストレアは僅かに目を伏せ、上げたときには形容しがたい怒気を孕んだ瞳が真っ直ぐアレイアを貫いた。

「お姉様のバックアップ。『BUG-01ew』。今の名は『ウイストレア・アレイア』」

アレイアは絶句する。まさか自分の名を語る者がいようとは…。意識せずとも笑いがこぼれる

「何言ってるの？私が」

。あれ？

「、。。」

声が出ない？いや、そう言うよりは…

「無理です。お姉様、今のあなたにはその名を口にする権利はありません」アレイアは、何？と思わず聞き返す。その名を口にする？だから私は、

「今、『アレイア』は私。お姉様には何の名も存在しません」

それって…と口にしようとして一瞬にして現れた鎌が彼女の首に添えられる。鎌は身が黒く、刃だけが鋭利な銀光を照り返していた。

「それ以上喚^{わめ}くならば、その首、もらい受けます」

「っ…」

首に触れるか触れないか、その絶妙な位置に置かれた鎌だけで今の彼女には勝てない事を感じ、沈黙する

「…。ひとつ」

ウイストレアの言葉に名もない少女が顔をあげる。

「…私の言葉に従うのならば、代わりにひとつだけ願いを叶えましょう。御母様に鎖は解くなと言われています。それ以外ならば、何でも」

エイドはウイストレアの提案に眉をひそめる。今、彼女はアレイアだったBUGに取引を申し込んでいる。そんなもの…

「ウイストレア様、そのようなことは御母様が許されません！」

「黙りなさい！エイド！」

声を荒げ、エイドに発言を許させない。ウイストレアは名を奪われた少女に、何かある？と問う

「あたりまえよ……」

弱々しく、だが目には危ないまでの鋭さを持った少女は言う。解放？自由？そんなものには興味がない。言うのは　スツ……と意識が降り立つ感覚に、クロアは目を開ける。ここはロンドン支部のイベントエリア。現実世界を切り取ったような、そんな場所。

「わー！すごい大きなとけい！」

ヨロワが天高く聳える時計塔を見上げ、感嘆の叫びをあげる。まあ『ビツク・ベン』だから間違っではないない。

「ヨロワ、向こうに観覧車！」

テムズ川を渡る橋の先、やや左側。大きな円形建造物がまるでこちらを見下ろすように存在していた。

「ゆうえんち？」

キラキラと輝く視線がクロアをジッと見つめてきた。

「遊びに来たんじゃない。」

楼騎が却下したが、クロアは、いや、と呟く。一応指揮をとっていた人物はムツとクロアを見る

「行ってこい、ただ、BUGには気をつける」

二人の幼子は一度暗くなつた顔を再び輝かせ……いや、前よりも輝いた笑顔で橋へと全力疾走を始めた。

タタタタ……と走つて数秒で、ヨロワが転んだ。ノピアがすぐに助け起こして再び全力疾走で橋を渡りきつたそれを見ていたエアリアルは、にこりと笑いながらクロアを覗き込む。

「何だよ」

「うっん、ちよつと意外だなあーって」

ねえ、と楼騎に賛同を求めて

「そうだな。」

短いながらも同意の意見が帰ってきた。

「別に、ガキが邪魔なだけだ」

ふん、と鼻で笑ったクロアをエアリアルは即座に虚勢だと見抜いたが、あえて何も言わなかった。

からかえば面白いのだが、やはり後が怖い。彼女は一度クロアに片目を閉じてアピールした。

「ふうーん、へえー」

かなり邪魔だ。クロアは無視して橋と、川沿いの道とを繋ぐ十字路へと歩いていく。エイドが現れたのは…

「ここだな」

クロアはタンツ、と一度地面を蹴る。

意味はない。ただ無性に腹がたった。

「…くそっ」

周囲を見回しても何も手がかりになりそうなものはなかった。

クロアは肩を落として

「…ん？」

何かに気付いた。一方、二人の子供もある種の大事件に遭遇していた。

回るゴンドラを開ける人がいなかったのだ。

「ど…どうしよう、のれないよ」

ヨロワが姉を揺ると、ノピアが弟をガツシリ掴んで、大丈夫。と頷く

「取っ手を引けば大丈夫…いくわよ！」

ガチャ、ガ―

取っ手を引き、扉を開ける。

ガラスの天蓋の下に並んだ二つの椅子。たいして座り心地のよくない席に

「お待ちしてありました」

キリッ、とメイドが座っていた。

「やめましょ」

ガ―、ガチャ

扉を閉めた。

「ま、待って」

ゴンドラから声が聞こえて、ノピアはこれ以上ないくらいの笑顔で答える

「嫌。」

「……」

あまりの返答にメイドは固まり、数メートル上昇してから自らに仕える妖精を呼び出した。

「砕いて『リビングフェアリー』」ゴンドラの一つが砕けた。

ノピアは半歩後退しながら武器である短剣、『銀の煌めき』を解放して頭を守りつつヨロワを背中にいれる

「……！」

妖精は一度天高く飛び上がり、手に二つの光球を集束させる

「ストップ！」

メイドが鋭く叫ぶと妖精は光球を投げ捨てる。落ちた先の建物が崩落したが彼女は意に介さずに二人に頭を下げる。なんと完成された仕草にノピアは何故だか負けたような気分になる

「このエリアにてサポートを任せました『リゼ』と申します」

「えっと……ぼくは『ヨロワ』、あっちが『ノピア』お姉ちゃん」

ヨロワが勝手に名乗り、リゼは二人に軽く会釈してよろしくお願います。と頭を下げる

「クロアおにいちゃんたちはむこうだよ」

ヨロワが橋の先を指差し、リゼは分かりました。と答える

「……ですが、お二方に聞きたいことが」

ノピアとヨロワは顔を見合わせた

「なんですか？」

「なによ」

言葉にほんの少し警戒の棘が含まれる。リゼは何のことはありません、と前置いて二人に今していることの危険性を知っているかと聞く
「一歩間違えればどうなるかわかりません。死ぬかもしれない戦場

「であなた達は戦えるのですか？」

二人は即答する

「もちろん」

何を今さら、あたりまえだよ、と二組の視線がジッと見つめる。どうやら…

「私の見込み違いでした。あなた達は既に立派な戦士ですね」

にぱっとヨロワが笑い、リゼも少しだけ表情をやわらげる。それでも残る凜とした雰囲気。ノピアは嫉妬に近い何かを感じる

「お姉ちゃん？」

ヨロワが覗き込み、ノピアはなんでもないわ、と首を振る。それでも複雑な感情入り混じる表情のままノピアはリゼを見つめていた

「…Mr.クロアと合流しましょう。あなた方も信用に値する人物だと認識しました。ひき止めるのは不当でしょう」

リゼが橋に向かって歩き始める。上空からすいー、と降りてきた妖精がその背中に背中合わせに張り付いてちよいちよいと手招く

ノピアはヨロワの手を引き、その奇妙な後ろ姿を追った三人と妖精が橋を渡りきったとき、クロア達三人は十字路の真ん中で何かを話し合っていた。断片的に会話が聞こえたが言葉として認識するのは苦しい程の声だ。

「おにいちゃん！おねえちゃん！」

ヨロワが叫び、三人が振り返る。

三人はなんか増えた観覧車組に呆気にとられ、クロアは数時間ぶりとはいえまた合うことになったりゼに驚く

「数時間ぶりです、Mr.クロア」

「そつだな、リゼ」

楼騎はパチツと空気の何かが弾けるような感覚が走ったのだが…実際はなんともなく、この二人の異様な威圧はなんなのかと内心首を捻る

「数時間前はいつの間にか置き去りにして頂きありがとうございます。」

「俺も半分無理矢理引き戻されたんだ…文句言うな」

ムムム…と睨むリゼの視線を片手で防ぎながらクロアは言い訳する。無言でズイと踏み出した美女の前で何故か普段より小さく見えた。

やれやれ

頭の中で声がしたような気がした。

「やれやれ、見てられないわよう」

ずずい、とエアリアルが二人の間に入り、

「ここは一つ許してあげて？ねっ」

「クロアの謝罪があれば」

パチツと火花が散った気がした。

何か言いたそうにしていたヨロワの口を塞いだノピアは

(これが、大人の戦い…！)

盛大に勘違いしていた。楼騎が介入し、数分後にどうにかこうにか二人は矛を収める。

クロアが

「悪…かった」

ととても歯切れの悪い謝罪を半ば強引にエアリアルが認めさせて一応は事態を終息させる。

「…で。だ。」

楼騎はようやく質問ができる環境になり、リゼに質問する。

「『リゼ』、上級ランカーのお前がどうしてここにいる？今は一般プレイヤーはログインされていないはずだ」

クロアは楼騎が上級ランカーだと言った少女に視線を向ける。そういえばコイツの正体なんか気にした事もなかった。

…所詮、数十分の関係なのだが

「私は実力をもってこの地に派遣されました。私のシマ…えっと、テリトリーは守ります」

楼騎はほう、と驚きの仕草を見せる。エアリアルもまた同様に驚き、妖しげに笑う

「『ツバイン』ですらないのにここにいるの？あなたは」

エアリアルという言葉にリゼは少し言葉を選びながら

「はい。Ms・エアリアル。私は純粹にBUGを圧倒する力を評価され、ここにいます」

ふうん、と呟いたエアリアルは楼騎に目配せして彼は頷く。

「ならいいわ。只のじゃばりならば容赦はしなかつたわよう？」

「…じゃばり？わかりません」

流石に通じなかった日本語をエアリアルは気にしないでと流す。結構酷い事を言っていたのにあんなに簡単に話を終わらせるとは…

「女って恐いな」

「なんか言つたあ？」

別に、と答える。あれ？なんでこんな話になつたんだっけと思いついた時クロアが先程気付いた物についての話に切り替わつた

「それは、本当でしょうか？」

リゼがエアリアルと楼騎からその話を聞き、やや疑い…というよりは信じがたいという面持ちで丁度自分達がいる場所の真ん中を見つめる。

そこには、ほんとうに小さな歪みがあつた。注意していても言われなければ気付かないような糸屑程度の半透明な歪み…。日常では顕微鏡で見た世界にあるような質感だつた。

「日常では顕微鏡なんて見ねえよ」

「？、クロア何か言つた？」

「いや、何でもない」

思わず口をついた言葉にクロアは自分を恨めしく思う。いつかの復讐だ、クロア。

「十何話も前の話だろ…」

また口をついた言葉にいよいよ苛立つ。地の文へのツッコミなんて必要ない。自分にそう言い聞かせて歪みに手を触れる。「クロアが見つけたんだけど、どーやって気付いたのかしらねえ…」

「それは、作戦名に起因するのでは？」

作戦名は

「クロアを餌に愛の力で釣っちゃおう」。いや、でも…
愛の力ではないわね、と思考していたエアリアルは自分の前をゆっ
くりと進む手に気付いた。クロアの手が歪みにちよんと触れる。

ピキッ

世界がひび割れるような音が聞こえた。

「全員警戒。武器を持って」

楼騎が素早く指示を出してクロア以外が武器を手元に出現させる。

来る

頭の中でまた声があった。

世界をノイズが滅茶苦茶に掻き乱し、嵐のような雑音に聴覚をギリ
ギリまで認識しないようにコントロールする。

全員が陣形を組んだ中央に、三枚の布がふわりと揺れた。

「『ツバイン』の皆様、お揃いのようですね」

眼鏡を押し上げた青年はよく通る声でそう言った。クロアはやや姿
勢を低くして自分と触れあいそうなくらい近くにいた敵に警戒を怠
らぬように注意しながら無手の構えをとる。

若草に教わった、武器が手元に無くなった時の緊急用バトルスタイ
ル。無手ではあれどそれなりの牽制になる。

「…私はお話があつて来たのですが」

冷静に、武器などを手にした総勢六人の中心で彼は淡々とした表情
で話しかける。

「名を名乗れ。」

楼騎は最低限の礼儀を要求する。

「失礼、私はウイストレア・アレイア様の従者、名をエイドと申し
ます。」

エイドはクロアとリゼを見て、楼騎を見る。

「俺は楼騎。コイツラのまとめ役だ」

簡単な自己紹介が終わる。敵同士の名乗り合いにしては妙にパーソ

ナルデータが多い気がした。

「ここに何のようだ」

まとめ役が聞き、従者が答える。

「私の、前の主の伝言を伝えるに」

前の主？

クロアは少しだけ構えを緩める。コイツの主はアレイアじゃないのか？

「主はウイストレア・アレイア様ただお一人。前の主はウイストレア様と取引し、その存在観念全てを譲渡なさいました。」

「お前、何言つて」

クロアが掴みかかると、

「『クロアに手を出さないで』。それが、今は名を奪われたアレイア様の最後の願い。ウイストレア様はクロアが我々に干渉しない限り一切の関与、及び干渉をしないと確約されました。」

クロアは動きを止める。

何だそれ、その言葉だけが無限に頭の中に残響のように響いていた。

「クロア以外には、今すぐご退場を願いますよ」

エイドは指を弾き、パチンと鳴らす

ザザッと走ったノイズが一行を取り囲み、嵐が晴れたときには巨大なBUGが四体、四方を囲むようにして立ち塞がっていた。

「上級のBUGか。」

幽月を構えた楼騎が相手の力量を目測する。体格、雰囲気、弾き出された勝率はとても低かった。

「うわっでっかい！」

「ヨロワ、はしゃがない！」

幼子達は短剣を片手に数枚のカードをあらかじめ準備しておく。相手の動きを見てから、確実に罠で仕止めるのがこの二人の戦術だった

「私が一体仕留めます。Mr・楼騎、Ms・エアリアル、一体ずつ
お願い致します」

リゼがリビングフェアリーを右手にのせてまるで拳銃かなにかのよ

うにBUGに突きつけて叫ぶ。楼騎も

「いいだろう。」

エアリアルも

「おっけい」

幽月、フランメリーゼを構えて答える。

「クロア以外。行くぞ」

楼騎の号令で五人は一斉にBUGに向かって行った。トクン

クロアはいつの間にか暗い部屋にいた。その部屋には何もなく、ただ一人だけが鎖に縛ばくされていた。

「…クロアには、手を…」

どこかを見ていて、どこも見えない名もなくなった少女がうわ言のように呟つぶいていた。自分以外の人間の命いのちごいをいつまでもいつまでも呟つぶいていた。

「…！」

声が出ない。

いや、彼女の名を呼ぼうとしてその声が相殺されたような奇妙な感覚かんじだった。

だが、それでも彼女は気付いた。かつて自分の物だった名にちゃんと反応した。「クロ…ア？」

弱々しく現実かを確かめるように彼女は呟く。でも実際は夢や幻でも関係はなかったのだろう、自分の最期を好きな人が看取みとってくれるのは…名を奪われ、全ての権利を剥奪されたのに最期がこれならば…

「悪く…ないわね…」

スツと目を閉じ、この世界にいるのかは知らないが死神に思いを馳せる

完全に弱気になった少女にクロアは起きろ、と叫ぶ。

「今度は俺がお前を助ける。だから生きてろ！必ず全部取り戻してやる！」

実際は全て掻き消されていたので聞こえていたのかは定かではない。

だが、少女は呟く

「わかった…クロア」

ジジジ、とすぐ隣に『クロア』が現れる。

今の自分を形作る。内面存在にして助言者でもある、『ヴァルハラ』の存在だ。

「彼女は『神影』の鎖に囚われているよ、君は彼女を助きたい？」

クロアは当たり前だ、と答える

「なら、また選択肢だ。」

すう…と現れたのは二つの光。どちらもよく似ていたが彼はどちらか選んでと促す。

「右は『神』を司る力、左は『影』を司る力。どちらもその力は絶大。さあ、『箱』と『鍵』を選べ！」

パリン、とガラスが割れるようにして世界が砕けて消え去る。まるで選択肢を確認させないかのように光が消えていく…神と影、箱と鍵、意味不明の選択肢を手探りに選び、クロアは無明の闇の中心でその選択を叫ぶ

「…見事に身動きしませんでしたね」

砕けたアスファルトの土ぼこりを払いながらエイドは地面に座り込んで放心していたクロアを見つめる。

四方を囲むようにして立ちはだかるBUG達は未だに戦闘を続ける自分よりも遥かに小さい人間を邪魔そうに振り払い、極彩色の光線を放つ。

「チツ」

射線上にした楼騎は数枚の呪符で防壁を作りながらその破壊の光から身を守る術を完成させる

「…しかし、この程度で心が砕けるとは…人間とはなんと情けない生物でしょうか」

エイドはクロアを哀れむように見つめる。だが、目の奥にある軽蔑の眼差しは隠しきれていなかった

「闇払え」

ポツリと聞こえた解放の言葉^{ことだま}。エイドはこの男から聞こえた言葉にピクリと反応し、自分の武器を解放すると躊躇する

「『神となる神影の選定』」

クロアの体が激しいノイズに包まれる。内部のデータを書き換えるその異様なノイズはクロアの網のようなモデルまで浮き上がらせる…。あのモデルは人間でいう骨格のようなもの、それにまで干渉をしているこの事態はただ事ではない、

エイドはやはり武器を抜こうと身構える。

「下がりなさい」

天空より彼の主の声が響いた。空高くから鎌を構えて落下してくる黒衣の少女は内部データの改変処理を行なうクロアにその鋭い尖端を振り下ろす。

キーン…と残響が残る反射がおこり、クロアは一切の攻撃を受けていない。

「『神影』の名を持つ人間、まさか、そんなものがいたとは…」

鎌が通じないとわかると銀髪灼眼の少女は退く。退却ではなく、退避。

「幻燈」

エイドの手元に炎が集まり、手のひら程度の渦を巻く。彼はそれに向けて名を告げる。

「『メディカラゴラ』」

炎は姿を一本の長い杖に変えて所持者の手に収まる。淡いオレンジの色合いで先端は緩やかに内側に向けて弧を描いている。

その中に柔らかな光を発する炎が内包されており幻想的な美しさでエイドを照らしていた。

「炎杖『火刑』」

杖を向け、術を放つ。

内包されていた炎がクロアの周囲の空気を発火させて円形に燃え上がる

周囲に散る面々からクロアの名を呼ぶ声が聞こえたがエイドは全力

で最大火力にまで引き上げる。

「……」

天まで焦がすような火柱になった『火刑』は制御すらも困難な暴れ様を見せつける。路面を焼き、建物を焼き、川を焼く。大気すらも呼吸すれば肺を焼く程の熱を帯びる

そのまま数分、エイドは火葬の手間を省くのか焼き続けた。

「クロア……」

エアリアルが燃える柱に呟く。

全身から力が抜けてストーンとその場にへたりこむ……

「ギギギ……」

BUGが巨大な拳を振り上げてエアリアルを押し潰そうと力を込める。ヨロワが、リゼが、楼騎が、ノピアが逃げると叫び、エアリアルは力なく『火刑』を見つめる

「……」

エイドは無言で炎を消す。

赤く溶けてアスファルトなのか地面なのか、はたまた別のものなのか分からないくらいにドロドロになった場所にクロアの姿はなかった。

「そんな……」

ゴウという風鳴りと共に拳が振り下ろされ、エアリアルがすっぽり収まるほどに巨大な影が彼女を押し潰した。 トクン

一度、鼓動が聞こえた気がした。

眩い銀光が煌めき、BUG四体を白い線が結ぶ。

「……生きてましたか」

黒衣の少女がエアリアルの隣に現れた人物に話しかける。その人物は手にした長い剣を静かに下ろして答える

「僕^{おれ}を呼んだろ？」

青碧の衣服が風になびき、クロアによく似た声で、よく似た笑いを浮かべる。

「……御母様の予測の通り、現れましたね」

少女は鎌を握り、敵意を向ける。

「くくく、僕はそう簡単にアイツには捕まらないよ。お前にもな、ウイストレア」

飾りもない、シンプルなナイトソードは刃が白と黒に別れており、二メートル近いその剣をこの人物は軽々と片手で持ち上げる。

「いや、ワルキュレアか？」

その言葉にウイストレアは嫌そうに顔を歪める。嫌悪、というよりは何故という意味合いの拒絶。この人物には何故か隙がなく武器を振るうのすら躊躇いなくなった。

「その名を知っているのなら」

ウイストレアは瞳を閉じて小さくうつ向く。

「我が下にひれ伏せ！」

ウイストレアの体がパリンと割れ、鏡を裏返すようにしてその割れた破片が再度人の姿に変わる。

黒衣に、銀髪。灼眼は変わらずとも手や胸や足に現れた鎧が異様なまでの不気味さを生み出した。

「『箱』を『鍵』があける。我は『神影』のワルキュレア。今、私が世界の王となる！」世界が歪む。波打つように景色が歪み、何も模様のない白い地平線に変わる。

無意味に広大な、白い部屋。だいぶ離れた先に縦型長方形の影が見えた。

「え…ここどこよう？」

「ヨロワ、離れよう」

二人の女子が困惑気味に後退する。

楼騎は手に何も持たず、悠然としているウイストレア…いや、今はワルキュレアらしい人物を見る。

「武器を持たずに無手で…か。僕もそれで受けよう」

二メートルはあるつかという鉄の塊を放り投げる。まるでそれが合図のようにワルキュレアが走り出す。

腕を覆う金属装甲、ガントレットのストレートが青碧の人物を捉え

る。

タン、と軽くその一撃を止めてクロアによく似た人物はその腕を捻り上げる。ワルクユレアもその行動を予期しており捻られる方向に手を使わずに側転する。

「…から空き」

頂点に来たとき、彼女は目の前にある頭めがけて上から蹴り上げるといふ体勢で攻撃を仕掛ける。

「甘いよ」

掴んでいた手を解放し、落ちてきた足を首の動きだけで回避する。

「無手『单打』」

素手の一撃は彼女の隔壁により防御される。空中を滑るように衝撃で後方へと飛んでいく少女を追うように彼は走り出す。一度軽く跳んで空から落ちてきた長剣を手にすると目があったワルクユレアに剣を振り降ろした。

キン、と金属どうしがぶつかり合い剣に鈍い衝撃が伝わる。

ワルクユレアの手にはいつの間にか槍が握られており、その柄の部分で彼の剣を受け止めていた。

「やりますね、オーディスタ」

オーディスタと呼ばれた、クロアによく似た人物はお前もな、と返す。

「ですが、御母様は許されません。この『ヴァルハラ』に二人の『神影』は必要ないのでから」

スツ…と掲げた手に先程の槍が握られている。特にこれと言う特徴はないのだが…彼女が名を呼んだ途端クロアはその考えを撤回する。

「『戦乙女の槍』」

槍の先端に炎の輪リリングが現れ、回転しながら槍の動きに合わせてオーディスタと呼ばれた人物に襲いかかる。

回避、三步後退、剣を構える。それを一秒程度で終わらせてオーディスタは突き出された槍の先端を切っ先で受け止める。

「『戦乙女の槍』か…。なるほどお前はこの世界の管理人と洒落た

か？」

「オーディスタ、主神の影の道化が何を言います」

二人は武器を引き離し、素早く振るう。オーディスタは下を薙ぎ、ワルキュレアは上を薙ぐ。

両者はしゃがみ、飛び上がり回避する

見ていることしかできない戦いを前に楼騎は小さく悪態をつく。

「あいつら、一撃死の威力で殺りあつてるな。どんな化け物だ」

振るわれた武器の衝撃が轟風としておそいかかる。彼らがこちらに殺意を向けていたのなら今の風は全て見ていたものを斬り刻んだだろう…。殺意が互いに異様な存在にしか向いていないのは最大の幸運なのだろう。

振り上げられた剣が槍によって弾かれたが上手く立ち回るオーディスタが槍を逆に叩き上げる。彼らに体力の概念は存在しないのか、呼吸を乱さずに戦い続ける二人に僅かな畏怖を感じた。

「化け物だな。こいつらは」

ノピアが小さくうなずいたのは誰も見ていなかった

「槍技『リングフレイム・オブ・ケルベロス』」

炎の輪が広がり、槍を中心に幾何学的な模様を描き出す。まるで木のような模様を中心にくつももの小さな絵が炎で描かれていく。

それは見るものを魅惑する芸術。そして、滅びの炎を携えた絵。

「業火に焼かれよ、道化！」
オーキュスト

道化と呼ばれたオーディスタは剣を炎に向ける。その絵をすこしなぞるように剣を動かすと小さく諦めたように笑う。

「その娘、槍を持っているだろう」

エアリアルに指だけを向ける

「へっ？」

今まで見ていただけだったのに突然呼ばれて思わず変な声を出してしまう。そのあと少しだけ恥ずかしさで顔を赤らめる

「槍を渡せ。クロアが死ぬぞ」

自分をもう一方の指で差しながら彼は言う。絵はさらに巨大になり、

もはや白い空間でこれ以上ないほどの存在感をだしていた。

「うつつ…わかったわよ！解放！『グングニル』！」

急かされ、解き放つは神の槍。北欧の主神『オーディン』の槍と同じ名を持つ必中の武器。

それをオーディスタに投げ渡す。

「借りるぞ」

そのあと二、三言呟いたオーディスタは槍を構える。絶対命中の槍が狙うのはまるで今まで待ち構えていたかのような表情のワルキュレア…。オーディスタは槍に新しい名を与える。

「『主神の自贄槍』」

グングニルと呼ばれた槍は樹の描かれた絵に飛翔する。その絵はオーディスタにはわかっていた。世界樹の絵だということが

「自贄槍：ルーン文字を産み出した方法ね。人間ごときの道化が、この技を…」

打ち破れる筈が、と言いかけて槍の狙いが変わったのに気付く。この絵でも、ワルキュレアでもない何かに狙いを変えたのだ。「おれ僕を見ているな？」

オーディスタがワルキュレアの遙か先にある四角い物体を見つめて言う。

「御母様！」

エイドの叫びでオーディスタは狙いを固定しグングニルに狙いを変えさせる。

槍は猛烈な勢いでゆうに数百メートルはある距離を飛び抜けて長方形の、椅子のような物体を貫く。

『なんと愚かな』

女の声が響いた。

威厳と自信に満ち溢れたような堂々とした雰囲気をもつその声はもう一度同じ言葉を呟いた。

「今の声…」

エアリアルが呟いた途端にオーディスタが走り出す。一度の跳躍で

数百メートルを飛び抜ける

「お前は、誰だ?!」

二色の剣をその手に持って、両手で椅子に突き立てる。

『オーディスタ、お前は私に勝つつもりか?』

ピシッ、と剣に細かな亀裂が走り、砕けた。オーディスタは隣で椅子に突き刺さっていたグングニルを引き抜いてもう一度投げる。

『失望したよ、オーディスタ』

ジジジ…という雑音が耳に入る。

振り返ると、極彩色の光が無数に放たれたところだった。その光はオーディスタの体を貫いた。

絶叫と閃光が彼の体から発せられて見ていたものは思わず目を背ける
「オーディスタ、あなたもお姉様と同じ。人に近く生まれすぎたの」
ワルキュレアはスツと目を閉じると細かく割れるようにして細分化されてから裏返しになるようにウイストレアの姿に戻る。

「私も、同じですが」

全身に光の侵食が起きている人物を見て呟く。もはや手を出すまでもないとエイドを呼んでオーディスタの近くまで移動する。

「ゲホッ、ゲホッ、ちく…しょ」

立ち上がったオーディスタもワルキュレアと同じようにひび割れて、裏返るようにしてクロアの姿になる。

「ちく…しょう…っ」

小さく叫んだクロアに威厳に満ちた声が落ちてくる。

『人間ごときが、我々に敵うはずなど無いのに…理解できませんね』

「そうでしょうか?」

「私は人間のほうが優れていると思いますが」

そう言ったりせは自分の妖精を肩に乗せて歩き始める。

「あなた方にとって、どのような理論で我々を見下しているのかは理解出来ません。ですが確実に言えることは私にもあなた方に確実に優る点があるということです」

「」

リビングフェアリーも頷く。

『ほう、大層な口を聞くものもいたな』

「御母様、ここはエイドにお任せ下さい。あの者を排除致します。」
エイドは手にした『メディカラゴラ』を握りしめてリゼとその後ろにいる人々の様子を窺う

『…いや、良い。人間にも変わった者がいたのだな。道化、一度だけ見逃す。次はない。』

ジジジ…と白い空間が揺れて、弾ける。

どんよりとした空と焦げたアスファルトが白だけだった世界に上書きされて突然の変化に目が痛む

「…消えましたね」

リゼが数回まばたきしてクロアの場所へと歩いていく。

「目が…目がああああ！」

エアリアルはそんなことを叫んでいたがリゼの動きに気付いて負けじと走り出す。

二人の距離は二百メートル程度、すぐにおいつく事はできずクロアの元で二人はようやく並ぶ。「Mr・クロア、ご無事ですか？」

「クロア、大丈夫?!」

二人が声をかけると、小さな唸り声が帰ってきた。とりあえず生きてる…と安堵していると、クロアの体を蝕む光が見えた。

まだ体内を侵食していたのだ

「!、離れて！」

リゼがエアリアルを制して後退する。

「ぐあっ！」

クロアの体から光が飛び出して二人の少女の元へと飛来する。

「」

リゼの肩にいた妖精が両手で小さな防壁を作り、その光を弾き返す。
「よくやったわね」

クリクリと撫でられて妖精は嬉しそうに笑った。エアリアルはその

隣でクロアの様子を窺っていた。

「D、見てる？」

空中に四角いモニターが現れて、見ているよ、とDが言う。管理者とプレイヤーがゲーム中で出来る唯一の会話方法だ。

「クロアを強制終了させて、ロールバック。出来る？」

Dはやってみよう、と頷いてカタカタとキーボードを叩く。最後にエンターを押す一際大きな音が聞こえ、クロアの姿がエフェクトと共に消える。

Dが強制終了したよ、と言ってエアリアルは軽く感謝の言葉をのべる。一刻も早く現実世界に帰還したいがまだやることがある

エアリアルはログアウトしたいのを堪えてDにクロアの面倒をみてもらうように頼んだ。

「いいよ、仕事優先へへへへ」

GがTに頼めばよかったと内心悔やみながらエアリアルはポカンとしていたリゼを呼ぶ

「あ…はい！」

リゼはもう一度モニターを見て呟く。

「日本の技術はやはり凄いですね」

そんな呟きを漏らしてから彼女もエアリアルと一緒に交差点へと走る。隣に崩壊している大聖堂が見える。大型BUGと戦った時に壊れたのだろう、著名人が葬られたという聖堂にリゼは内心一礼して通り過ぎる。

「…そうか」

エアリアルからの報告を受けた楼騎が小さく頷く。どうやら強制終了した経緯までは伝わっているようだ。

「クロアお兄ちゃん、だいじょうぶなの？」

不安そうに見上げる子供に楼騎はしゃがんで大丈夫だと頷く。その一言が魔法のようにヨロワの顔に輝きをもたらした。

「リビングフェアリー、私たちの魔法はまだまだのようですね」

「…」

しゅんと肩をおとした妖精はリゼの肩の上で二、三言呟いてカードの姿に戻る。お疲れさま、と小さくカードを撫でて彼女は服に『リビングフェアリー』を挟んだ。「どうかしたか？」

楼騎の鋭い眼差しがリゼを見つめる

「いえ、何でもありません」

キリツと答えたりゼは、そうか、と答えた楼騎にもう一度同じセリフを答える

「ならばいい。とりあえず調査も終了だ。クロアがあの状態だと全員身も入らないだろう」

気を使ったのか楼騎が切り上げを提案する。それは全員に魅力的な提案だったがやはり調査が完全に終わったようには思えなかった

「ならば私が調べましょう」

リゼが提案する。

「いいのか？今そつちは朝の四時頃だろ？」

日本とイギリスの時差はおよそ・7時間。こちらの時間が11時なのでそういうことになる

「いえ、エキサイティングな夜でしたから眠くはありません」

メイドは何やら気付いて笑う

赤くなっているノピアにヨロワが大丈夫かと聞いた。

「エキサイティングな夜って…ヨロワが影響つけたらどーするの！ヨロワが」

「おもしろかった、ってことじゃない？」

「はうっ、ハメラれた…」

「お姉ちゃん、なんかヘン」

コホン、とりゼが咳をする。

「ですから皆様、Mr.クロアのお見舞いに行ってください。私は遠いので行けないのでせめて皆様のお手伝いをさせて頂きます。」

エアリアルがどうする？と小首をかしげる

楼騎としてはこのエリアは危険に達しないので一人残しておきたくないのだが、その視線にお圧されて許可する

「無理はするな。エイドとか言う奴やあの訳の分からないBUGが現れたらすぐに逃げろ。」

「かしこまりました。Mr・楼騎」

一礼したりゼは輪から外れてクレーターのようにはくられた交差点に移動する。

「俺たちはログアウトだ。G、頼む」

「うむ、暫し待て」

体が粒子に変わり、金色の風となって空へと舞い上がった。曇った空に輝く金は一人だけが見ていた。

「本当に、素晴らしい技術ですね」

リゼはもう一度そう言っただけで調査に戻ったガガガゴン！と盛大に音を立てて四人が機械から放たれる。

「クロアはっ?!」

エアリアルが近くにいたGに叫ぶ。

「こつちじゃ」

手招きされてエアリアルは走る。急がなくとも良いと言われたが彼女は連れてってと言う。

「取り乱すとは主らしくないの」

「いいから、早く!Gさん!」

あまりの剣幕にGは気押される。うむ、と小さく頷いてスタッフエリアの扉を開ける。

その先はやや緑がかかった照明が照らす通路、金属質の足音が二つ響き、数秒あいて三つ増える。

「G、クロアの様子は?」

「うむ…予想外に悪い。どうやら普通の状況でなかったのが災いしたらしい」

二つほど扉を抜けて医務室にたどり着く。

「みんな遅いわよ」

Tが部屋の隅のカーテンで仕切られた場所から顔を出す。

その先にいるのはクロア。なのにTはそこを退かない。

「どうした？」

「ううん、ただ、動揺しないでね」

何故だかそう前置きしてからTは道をあけたカーテンの内側にはベッドと小さめのチェストがあるだけの割と殺風景な薄暗い空間が広がっていた。

そして、ベッドの上でクロアが頭を抱えて座っていた。

「クロア、大丈夫？」

エアリアルが手を伸ばすと

「お前は誰だ？」

クロアはそう言って不審な目を向ける。敵意、警戒、そんな目付きは知り合いにするものではない

「くっ…頭が…」

記憶の混乱か彼はまた頭を抱え込んでしまう。Tがずっとこんな感じ、とエアリアルに耳打ちする

エアリアル自身、『ブレイク』された時の記憶の混乱は覚えがある。このゲームを始めた頃にBUGに放たれたのでツバインだと発覚したのだが…

（ツバインならばここまで重症化しない筈…一体、どうして？）

どこか焦点の合わない目付きのクロアはカーテンから覗いていた二人の子供に気付いて嫌そうな顔になる。

「なんだお前等？消えろ！」

ビクツと驚いてカーテンを二人は閉じる。

「クロア！二人はあなたを心配してたのよ！なんで…」

「うるせえ！」

クロアの手が上がり、エアリアルは身構える

「っ！くっ…」

突然頭を抱え込んで苦しみだした。

エアリアルはゆっくりとその頭に手をのせる

「ほら、しっかり」

ほんの少しだけ力を込める。痛みなどではない何かクロアの中に

流れ込むような感覚に彼は目を細める

「私たちはちゃんとここにいます。あなたもちゃんとここにいます。だからおやすみなさい。頭がこんがらがったら寝るといいんだよ」
ふつり、とクロアの中で何か切れるような音がしたような気がした。

俺は

自分自身の中で声がする。まるで内包人格が叫ぶような感覚

俺は、こいつらの

グシャグシャになった思考がほどかれて繋ぎなおされる。

仲間だ

眠気が沸き起こり嫌が応にも深い眠りの谷に突き落とされる。ドツブリとまとわりつくようなダルさが体を弛緩させてベッドへと横たわらせる

「おやすみ、クロア」

彼は眠気に全てを委ねて眠ることにした…カーテンを開いてエアリアルが出てくる。二人の子供がととと歩いてきて

「クロアお兄ちゃん、怒ってる？」

そう聞いてきた。

「怒ってないよ、ちょっと混乱してただけ」

楼騎とTがエアリアルのしてきたことに気付いてニヤリと笑う。やるな、と楼騎の呟きに彼女は笑いで答える

「まったく、世話が焼けるわよう」

凄く嬉しそうな彼女をTが肘で小突く

「コノコノっ！」

「へっへっへー」

得意気に胸を張るエアリアル隣の隣で

「あのカーテンの裏で、何が…」

また一人だけが勘違いしていたザザザツとノイズで荒れる。ここはBUGの世界。アレイア『だった』少女が拘束されている場所。その場所に二人のBUGが出現する。

エイドと、ウイストレアだ。

「ただいまお姉様…もう心は壊れていますが」

鎖で縛られ、吊るされている姉に話しかける。人は自由を奪われ、暗闇に放置されると真っ先に意識を落とすという。自衛か逃避か人で無い身には理解できないが似たようなものだと言連付ける

「ははは、誰が…壊れてるのかしら？」

鎖が揺れて少女が呟く

「あらお姉様、まだ意識が…」

「さつきね」

名もない少女が嬉しそうに話し始める。

「クロアに会う夢を見たの。知ってる？ウイストレア、人間には恋した人が夢に出てきたら相思相愛って伝説があるのよ」

『神影』の少女はくだらないと呟く。

「私たちは人間なんてものじゃない。より知識のある、新しい生命体よ」

「たかが『アーティフィシャル・インテリジェンス』の凄いやつ。私たちは所詮人工知能が一人歩きしているだけ。理解してる？私たちがいかに力を持つと人間にこの世界を壊されたらおしまい。消滅よ」

わかってない、ウイストレア・アレイアはそう言って首を横に振る。姉にあたる人物の言うことはおかしい。何故そんなにも人間に味方するのか、BUGでありながら御母様に刃向かおうとするのか、彼女には理解できなかった。

「その人間を統制できるのこそ御母様です。私には何故お姉様が人間に入れ込むのかが理解できない…何故？確率でも確実に御母様のほうが人間ごときに遅れをとらないの？」

何故、何故なんですか？！」

ウイストレアが叫ぶ

姉の理解できない思考に、絡めとられるような話になんたかわ

からなくなっていく。お姉様が正しいのか、御母様が正しいのか、人間よりも遙かに早い速度で考えても理解することはできなかった。「ウイストレア様、お気をたしかに」
エイドが冷静に諭す。

「あの方の言うことには主観が大量に含まれています。他者の感情は理解することは出来ません。人間ごときには理解できぬのかもしれませんがそれがそれは真理です」

「ばかエイド。理解じゃなくて感じるのよ、人間は」

この場で最も立場の弱い存在がより上位の二人よりも話の優位を取り続ける。エイドの計算ではこのような事態は想定していなかった。

これだから人間は

見下していたのが仇となったのか

…『会話』の権利を停止します」

ウイストレアは小さく呟いて息を詰まらせた姉から顔を背ける。

「私にはまだ全ての権利を操作できる権利があります。

…あまり刺激しないで下さい」

口をパクパクとしている少女は出ない声に出ない叫びを上げる

私には無意味よ、ウイストレア！

聞こえなくて良かったのかもしれない。

パクパクという口の動きでエイドは彼女が次に言った言葉を読み取る。

絶対、クロアが助けに来てくれる！その時を覚悟しなさいよ！

エイドは小さく笑う。

人間ごとき、御母様の敵ではないのだから。と

第二十二章 神影 神の道化と戦姫（後書き）

あとがき

エア「みんなー、暇してるう？」

クロア「暇から聞くのか？」

エア「いいじゃない…私も毎回斬新な切り口で…」

クロア「今日のゲストを呼ぶか」

エア「無視しないでえ〜！」

ぷしゅううう、と怪しい煙が吹き出して部屋を覆いつくす。

クロア「ケホツケホツ、誰だ？この煙出したのは！」

エイド「私です。」

エア「わっ！出た！」

エイド「私特製の煙は効きますか？人間ごときイチコロだと思いますが」

クロア「ゲホツゲホツ、てめえ…」

エア「ケホツケホツ、あなたは平気なの？」

エイド「人間と一緒にしないでいただきたいですね。ケホツ。」

クロア「…」

エア「…」

エイド「の…喉に、ケホツ、目がしみる…」

クロア「ゲホツ、換気！」

三人開窓中

エア「やっと煙が晴れたよう」

クロア「どんな仕組みなんだろうな？」

エア「さてっ、ここでは本編での立場やキャラクターは関係ありま

せん、さあ、有能な執事っ子の心情を露吐してくださいっ」

エイド「執事っ子？」

クロア「スルーだ」

エイド「本編に関係無いのなら……」

エア「おおっ」

エイド「アレイア様、ストロベリートークをしないで下さい。聞いてて恥ずかしいです」

シロツバ「書いてて恥ずかしいです」

クロア「シロツバ、やっぱ出てきたな。」

エア「後でアレイアに伝えとこつと」

クロア「字数少ないよな、もう14字しかない」

エア「またねっ」

第二十三章 行動開始／闇の始まり（前書き）

と、いうわけですいつもの前書き！

今回は注意事項はないので、いつも通りのんびり読んでください m

（ m

あんまり言うことは無いですが…皆さんに一つ質問です

この小説、長い？

もし長いようならば次からは短めにしようかと思えます。
それについて何かありましたら一言ご連絡ください。

ではでは、本編へどうぞ〜* 〇（ノシ

第二十三章 行動開始／闇の始まり

「やれやれ、痛かったよ」

光源のない空間に『クロア』がいた。

クロアは目の前にいる自分を眺めて、ボロボロになっている体を見下ろす。まるで内側から食い散らされたかのような体は力が入らずかわりに口から一つのため息が漏れた

「君が選んだ選択は『鍵』、僕の『影』となる選択だった。なのにどうして僕は無傷だと思う？」

知らねえよ、と思いつつもクロアは右手をほんの少しだけ動かす
「…まあそういうなって。今、君を助けられるのは僕だけだ。

僕という媒介がいなくなれば君をその苦しみから解放できる。よかつたね」

『クロア』がゆっくりと目を閉じて言う。

「『神影』に選ばれた人よ、我が望み、人とBUGの共生を成し遂げてくれ。僕は君の代わりに『鍵』として『影』として滅しよう。

君一人に任せるには大きすぎる力だけど、君には素晴らしい仲間がいる。彼らが力になってくれるだろうね」

『クロア』が金の粒子に変わり、クロアの体に吸い込まれていく。

二人の間にまるで橋のように架かった光は温かなぬくもりを伴ってクロアの瞼を閉じさせる。

「さあ、仲間の元へ帰りなさい」

『クロア』の最期の言葉が聞こえた。…目が覚める。

やや薄暗い小部屋のような場所にクロアは寝かされていた。ぼんやりした頭でここはどこかと考える

「むぎゅ」

手を動かすと変な音がした。

音の出所に目をやるとエアリアルがベッドに頭を押し付けられていた。慌てて手を離す

「一晩中側いてあげたのに酷いー！ばかクロア、私の苦勞を返せえ」

「…ああ、悪かったな」

「やれやれ面倒くさい。さつくりと誤ってこの会話を終わらせよう。そう思ったのは間違いなのだろうか、」

「心がこもってない」

「うるせえよ」

もう一度頭をベッドに沈める

「むぎゅ」

変な声を出して彼女は沈んだ。ふと、エアリアルの頭が小さく見えた。

人とはなんて小さな物なんだろう、かぼちゃ程度重さしかない頭で物事を考え生活し、新しいなにかを生み出せるなんて理解できない…

「俺は、本当にどうしちまったんだろうな…」

『クロア』の夢を見たからなのか感傷的になっている気がする…。気合いを入れるために自分の頬を両手で張る

「むうーはぐらかされたあ」

抗議なんて聞かねえよ。クロアは立ち上がりカーテンを開けた。

窓のない医務室の殺風景が白だけだった世界を切り開く

「起きたかい？」

シャーッとというカーテンレールの独特な音がしてすぐ隣の仕切りからDが現れる。

何故そこに？そんなツツコミはいらないよ

「何でそこにいる？」

「言わなくてもいいでしょ、ヘラヘラ」

…あれ？地の文とセリフが被った？

「…ああ。もう大丈夫だ」

そうかい、と頷いたDはちょいちょいと手招きして彼が出てきたベツドの上にあったノートパソコンを引つ張り出してくる

優先でコンセントに繋がれた端末を何度か操作して大量の数字が羅

列されている画面を出す。

「懐かしいかな？君のデータコードだよ…バグデータみたいなのもちゃんとある」

0と1。『ない』と『ある』の中の『どちらでもない』…2。その画面がモザイクにより塗り潰される

「今の君のデータコードだよ」

0と1で構成された中に2があり、3があった。

「な…なにこれっ」

エアリアルが画面に飛びついて叫ぶ。『3』とは一体なんなのだろうか？クロアは聞いてみる

「0と1と2、それらにも属さない言わば『存在しえない』…ってところかな？ヘラヘラ」

そんな…とエアリアルは衝撃で軽くめまいがした。

「それって、『神影』とかいうのとの関係があるの？」

Dは頷いた。「ずっと君たちの様子をモニターしていたが、なんだったかな？『神影の選定』だったかい？そんな呪符…いや、操符の発動で君のデータが書き換えられた。

その前後のデータを比較するとなんと8つも2が3に変わっていた。一体何を使っただんだい？」

…、はて？何かしたか

クロアはおぼろ気な記憶をまさぐって断片的な『クロア』の記憶に触れる

頭の中にその時の光景が流れ込んできて彼にはなかった記憶を宿す

「…あれは、なんなんだ？」

「いやいや、聞いているのはコッチだよ」

やや不安定な気持ちの起伏に戸惑いつつもクロアは自分自身のデータを書き換えたのだけは理解する。まさか、そんなことがあったとは…。そう思ったが『クロア』に聞くこともできない。

夢ならばアイツは消滅したはずだ。それに、ただの夢とも思えないリアルさがあった。ただの脳内妄想の一種と掃いて捨てるわけには

いかないだろう

「俺には分からないな…、『クロア』の行動は俺の行動とイコールじゃない」

Dはなるほど、と答える。

何か思っているのだろうか？が追及はこれ以上無くなった。

「それじゃあ次の話題にでも移ろうか。ついておいで…ヘラヘラ」いつもの笑いを浮かべながらDは医務室の出口に向かう…。次の話とはなんなのだろうか？

新しい会議か、はたまたアレイアが見つかったのか…頭のなかで様々な可能性を生み出して期待の低い可能性を排除していく…

部屋を抜け、通路を抜け、日が落ちた外に出る。一体何時間医務室にいたのかはわからないが軽く七時間はいたのだろう。夕焼けの名残すらも黒く塗り潰された空は月と星と雲が支配していた。

「…どこまでいくの？」

エアリアルがガラス張りの入り口を見つめて呟く。何故建物から出てきたのかもわからないのに不安にかられないはずはないだろう。

「少し離れるよ。誰にも邪魔されたくはないからね…何でも屋を呼んでおいたよ」

建物の前で停車していた車の窓を叩く。黄色い小さな車で、多少傷を補修した跡があった。

「Dね、嶺から話は聞いてるわ。乗って」

栗色の髪を高く一つにまとめた少女が顔を出す。年齢的にクロアより少し上といったところだろう…十七、八の少女は果たして免許を持っているのだろうか？

「ほらほら、乗った乗った」

ヘラヘラと助手席に乗り込んだDは屋根から顔を出して催促する。

「…」

警戒するクロアに

「大丈夫だよお、ねっ」

「ええ、大丈夫。別にとつて食べたりはしないわ」

エアリアルと少女が笑う。

クロアは助手席にいるDに恨めしげな視線を送ってから後部座席に乗り込み、続いてエアリアルが乗ってドアを閉める

「それじゃ、出すわよ」

エンジンが回転し、ガソリンを燃焼させて車が発進する。クロアはもはや高級品と化したガソリンを浪費する車に啞然とした

「ん？ああ…これ？平気よ、燃費はかかるけど『車』って感じよ」
いや、違うんだが。クロアは思ったが口には出さない。

「ああ。違うの？わかった、私が誰か、そしてなんで超高級の油で走る鉄の馬に乗ってるか聞きたいんだよね？」

こいつ、エスパーか？

半分本気でそう思ってしまう。クロアは今度は顔にも出さないようにする

「あははっ、面白い人。全部顔に出てるわよ？ちなみに、エスパーじゃありません。」

…似たような物だけどね」

含む意味は読み取れなかった。助手席にいる人物が何故彼女に協力を求めたかという話を始めたからだ。

「君達が行く場所にBUGが出現するのは何故かと考えたらね…何らかの方法で奴らに情報が流れている可能性があったんだよ

盗聴器の類いは見つからなかったから、それは可能性としては薄い
んだけどね…ヘラヘラ」

いまいち頼りない。クロアは後方へ流れていく夜景を眺める

人工灯の光が建物を照らし、路面を照らし、空を照らす。星が見えなくなったのは何年前か知るものは誰もいない…明るいのが当たり前の世界だ

「すっごい…嶺と同じこと言った」

運転手がミラー越しにクロアを見つめる。今思ったことも見抜かれていたのかと小さく舌打ちする

「っーか、お前誰だ？名前くらい名乗れ」

運転手が両手をポンと鳴らす。ハンドルから手を離すな

「そういえばそうだったわね…。Dと一緒にだから忘れてたわ…」
彼女は名をなめる。

「私は聖蓮瀬名^{せいれんせな}。何でも屋の瀬名よ」

聖蓮瀬名：か。クロアは頭の中で反芻する

「すごい名前ですね」

エアリアルが曖昧に笑いながら呟く

「聖蓮家は元は海外からの移住組だからね、ちょっと派手なのよ…。名前だけね」

ふうとため息をついた瀬名はDに目をやる。うむ、と答えたDは脱線した話を戻す

「内通者、または何らかの方法により漏洩を防ぐために全幅の信頼をおける何でも屋に協力を依頼したよ。彼女は絶対に秘密を守るし、また力にもなってくれる」

「場合によっては別料金よ…。まったく、お得意様でも流石に厄介な仕事は割りしにくいわ」

ピシヤリと言った彼女、瀬名は肩をすくめるDの隣で自分の襟の場所から一本のコードを引き出す。どうやら携帯電話の代わりの通信装置に繋がっているようだ。

「黒須^{クロス}、私たちの周囲をモニターしておいて…。うん。うん。わかった」

プツリとコードを外してシウルシウルと巻き戻して襟の中にしまう。外見からは一切その通信装置は見つけられなくなった

「この先三キロメートルの路地裏で停車します。そこならば一方からしか私たちに干渉することはできません」

事務的に伝えた瀬名は少しだけアクセルを踏み込んだ。

「わかったよ…話はもう少しだけ待とう」

ぶろろろろ…と唸るエンジン音にクロアは軽く目を閉じる。小さな頃にはよくこの音を聞いていたっけ…

「クロア？大丈夫？」

エアリアルが聞いてきたので眠いだけだと答える。クスリと瀬名が笑ったが無視する

「そっか、大丈夫ならいいよ」

少しだけ嬉しそうにしたエアリアルはクロアを見て一度だけ片目を閉じた

クロアは軽く視線をずらす。すると緩やかなカーブを描く道を見つめる

「そこよ」

車はその道に入る。

やや下に傾斜した道は緩やかな曲線を描きながら街明かりから離れていく…。誰も通っていないさそうな道は坂が終わるとすぐに行き止まりになる。

車から見える景色は左右の廃屋と、目の前のコンクリートの壁のみ。

「ここならば誰もこないわ。私は外で見張るから手短にやってね」

「はいはい、まったく仕事の時は真面目だねえ…。ヘラヘラ」

「大丈夫、そういうスイッチがあるだけだから」

パターンとドアが閉じられた。

瀬名は左右を警戒するようにしながら車の裏側に向かった。

「…ようやく話せるね、ヘラヘラ」

Dはいつもの笑いを浮かべて二人の方に振り返る。そして、話を始めた。「君達に次のアクセス先を知らせる。次のアクセス先は『ヴァルハラ』メインコンピュータだよ」

一瞬、なんだこいつ的な空気になった。

「おや？何だいこの空気は」

「あの…説明して」

仕方ないな、と言ったDは何か言いたげな視線を無視して話を始める。「前回の『アレイア消失事件』の調査中に転送先がメインコンピュータを経由していたんだよ…。つまり、何らかのポケット、つまりは横穴のような場所から出現・または生産されている可能性があるんだ」

ひどく曖昧な説明だが、言いたいことはよくわかった。クロアはぼんやりとメインコンピュータについて考える

「管理室のあれよね？ログインできるの？」

「心配ないよ…あれは『ヴァルハラ』最初期から活躍してるフィールドだからね、みんなアクセスしてるよ」

ふうん…とエアリアルは呟いてクロアにむきなおる

「なんだよ？」

「ううん、なんでもないつ。じゃあ帰ってすぐにログインしよ？」

そうだな、と答える。Dは話は終わりだと言ってからドアを開けて瀬名に話しかける

「わかったわ。帰りましょ」

運転席まで回り込み、彼女は運転席に乗り込んでストラップのついた鍵を挿しこんで捻る。ブロロ…と作動したエンジンを少しの間暖めてから狭くてカーブを描いていて、さらに上り坂の散々な道をバツクで後退する…。見事なハンドル捌きで一度も止まることなく、擦ることもなく坂を登りきり最初に来た方向へと進路を変える

ブロロロ…とエンジンを唸らせながら瀬名の車は夜道を走る。カ

ーラジオでもつけたらば雰囲気の出そうな夜の星のない空を見上げる

アレイア

小さく心の中で名を呼ぶ。

必ず、助けてやる

瀬名がクスリと笑ったがクロアは、ふんと小さく文句を言うだけにとどめて先程とは逆向きに迫ってくる夜景を眺める…じきに車は『ヴァルハラ』センターへと帰ってくる。施設の照明はだいぶ減ってはいたがまだ職員が走り回っているのが窓から見える。

その中に書類を大事そうに抱えたヨロワを見つけ、そういえばまだ開けていなかったパツクを思い出す。

別にたいしたものが入っていないだろうが…車から降りる前に開封する

「『光暗の円舞曲』？…へえ」

瀬名は何か意味ありげに呟く

「なんだこりゃ」

見たこともないカードに妙に長いテキストがかかれていた。とてもじゃないが読む気になれない

「『虚空の幻影』？これははじめて見たあゝ」

一枚をひよいと取り上げたエアリアルはへえ〜と物珍しげにカードを眺める

「…あはは、そっか。あのバカのカードがモチーフなのね…」

瀬名は驚きと、啞然と、失望の表情で何やらガサゴソと取り出す。

「私の装符。名前は『雷鳴』…。一回だけ使える幻影符だけど力は同等なの。使って」

聞きなれない単語が飛び交う。

「幻影符っていうのは…嶺が最初に作ったカードでね、『リミテイ・ブラステイカ』みたいに一度使ったら消滅しちゃう特別なカードのこと。普通の呪符とかより数段強いだよ」

ほらほら、と黄色い刀の絵がかかれたカードが揺らされる。瀬名の好意を無下にする必要もあるまい、ここはもらっておこう

「いーなー、瀬名さあん、私にもー」

「『氷炎』のあなたにはない…って、あれ？なんで私が持つてるの？」

ゴソゴソとカードを漁っていた瀬名は一枚のカードに首をかしげたが、まいつか、とエアリアルに差し出す

「氷剣『白華』…。私の妹のだけど、あげる。使って」

すつと渡されたカードには青い刀が描かれていた。『雷鳴』と色こそ違えどよく似ているその刀のカードを見てエアリアルは驚く

「妹のって…まさか、あなたは…」

「秘密、今の私は何でも屋のメンバーよ」

ぶい、と言いながら笑ってVサインをする瀬名はエアリアルの肩を叩く

「頑張りなさい、応援してるわよ」

「はいっ！」

妙に元気になったエアリアルは車を飛び出してクルリと一回まわる。髪がふわりと夜闇に舞った

「ほらっクロア！メインコンピューターだろうがなんだろうが、サクツとやっっちゃうわよう！」

タタタ…と駆けて振り返り、

「はやくー」と呼ぶエアリアルに何事かと呟く。車内からでは当然声は聞こえない。クロアは席を立ち上がる。

「気を付けなさい。あなたも『神』に魅入られた…。嶺も、私も、魅入られた者は全てを得られる…。地位も、名誉も、富も、仲間も手に出来る。…代わりに全てを代償にしないとイケない。あなたは、大切な人を失う気はある？」

意味が分からない。なんだ？この会話は

ドアを開けようとして、全てが凍り付いたかのように動きを止めているのに気付いた。

エアリアルは片足のまま走り出そうとして、Dは薄く笑いながら固まっていた。

「…警告か？」

臨戦態勢に入りながらクロアは目の前にいる、先程とは違い、冷徹な雰囲気纏う少女の冷たい瞳を睨む

「違う。これは宣告。あなたはじきに全てを知る。私たちのように仲間を犠牲にするのかはわからない、でもね、一つだけ教えてあげる。

誰かを助けたいだけじゃ想いは届かない。気持ちと、願い。その二つもしっかり伝えないとうちのバカ嶺みたいにチャンス逃すわよふっ、と笑った彼女は世界の凍結を解除する。エアリアルは足をつき、Dはシートベルトを外してドアを開ける。

「それじゃ、頑張つてね。私たちも応援してるからね」

瀬名がクロアを送り出す。その笑顔は何故だかとても純粹なものに

思えた…

「クロアー！」

「うるせえ！」

ガチャリ、とドアを開けてエアリアルの元へと走る。なんとなく平和な一時、頼むから後少しだけ続けてくれよ…

クロアはそう、小さく願った

「無駄よ。たとえお姉様でも！」

そう叫んだのはウイストレア。名もなくなった少女はどうかしらね、と小さく笑う

「その鎖は『神影』にしか切れません。なんと言えは…」

ジャラジャラと鎖を弄びながらアレイアは、なら切つてよと目で訴える

「無理です。御母様がお許しになりません。数値ゼロの不可能な思考は破棄してください」

アレイアは声が出なくとも呟く

はやく来ないかなあ

ウイストレアはまた不可能だと切り捨てる。BUGといえどやはり柔軟な思考はないらしい…。

私たちが見下していた人間の方が余程利口だわ…。アレイアはそう呟いた。

「…お姉様、あなたは人間と親しくなりすぎました…。こうなれば目を覚まさせて差し上げます」

エイド！と短く叫ぶ。

ノイズで世界が歪み、一人の少年が歪みの縁より具現化する

「お呼びでしょうか？ウイストレア様」

一拍の間に呼んだ本人は頷いて指示を出す

「クロアを討ちます。支度なさい」

かしこまりました。恭しく頭を下げたエイドは再び現れたときと同じようにノイズの中に消える

鎖が揺れる。

声を出さずにアレイアだった少女が笑っていた。狂気じみたその光景にウイストレアは戦慄する

闇が訪れる

始まりを告げるはウイストレア

闇より現出するはワルキュレア

相対するはオーディスタ

ほらね、闇が訪れた

「お姉様……」

狂った頭が際限なく演算を始める。

「御母様！これは！」

暗闇の中に叫んだが答える人はいなかった。いや、いかなる存在も彼女の叫びには答えなかった

狂った頭が際限なく演算を続ける

闇が、彼女を支配する

第二十三章 行動開始／闇の始まり（後書き）

あとがき

瀬名「こんにちわー！みんな、元気してたかな？旧作ではレナだった私、参上！」

エア「瀬名さん！（；）！！！」

瀬名「ほらほら、ピース！ねっ、ピース！」

エア「…変なものでも食べました？」

クロア「いつものお前だろ」

アレイア「…（頷き）」

エア「酷い…私はあ！」

アレイア「…（鼻で笑う）」

クロア「…お前、声が」

エア「そんな…嘘でしょ？」

アレイア「…」

瀬名「…なるほど、ね」

クロア「声、出ないのか？」

アレイア「…いやまあこっちなら喋れるけどね」

クロア「…巡れ」

アレイア「解放はちよつと待ってー！」

瀬名「許可する。雑払え」

アレイア「まつて、弁解を…」

エア「字数と時間とケータイの消耗的に聞けないわねえ…あー残念」

アレイア「こ…ここに鬼畜がいる…」

エア「私のお仕置きは百八式まであるわよ」

アレイア「それどこのレミリア…っきゃー！」

クロア「久々に来た出番…俺は、俺は！」

アレイア「いや、主役がそこまで悩まなくてもいいと思うけど…」

クロア「『神影』として、何をするか…」

瀬名「クロアが見た世界の姿！」

エア「殺戮ロマンスの先にあるものは！」

シロツバ「次回、第二十四章お楽しみに！」

アレイア「…（どれがほんとの次回予告？）」

アヴィス・メモリアル・アナザー（前書き）

腹がたつほどに燦々と輝く太陽の下で窓と扇風機の側にいたシロツバメはぶすつとふてくされていた

「むう……」

シロツバメは携帯を置いて空を見上げる。

「なんかパツとしないなあ……」

すいーと滑空する燕を見上げてあんなふうには飛びたいなと思ってしまっ

ケツ、なら叶えてやろうか？

頭の後ろから声がした。軽い衝撃と共においと声が降り注ぐ

黒燕様が叶えてやるよ。なにがいい？

「暑さで幻聴が……まあいいか。クロア達の様子が見てみたいなあ」
いいぜと声が聞こえた。

報酬は黒燕を主役に番外編を書くことだな！

シロツバメの頭から足にカメラをつけた燕が飛びたつた……。優雅に旋回した燕は虚空に溶けるように消えていった……

なんだつたんだ？あれは

誰も答える人はいなかった

ca t t i o n ! 注意事項

今回は番外編です。この中のキャラクターのいかなる言動・挙動も本編とは何ら関係はありません！

また、一部キャラはカリスマブレイクされています。ごく一部のキャラはもはや別人です

それでも……見る！という方は番外編へお進みください

m () m

アヴィス・メモリアル・アナザー

世界は何もなかった。

世界にあるのは虚無・虚空。うつろなる歪空にグニヤリとした歪みが生まれる。

出来たのは、箱。

俯瞰視点では箱だが、それは建物だった。コンクリートと鉄と、それから歪んだ物理法則により産み出されたそこは…あとがき会場だった。

「マジかよ」

『偶然』この場に居合わせた少年が愕然とした表情でこちら（カメラ）を見つめている

「あんな出だしで本編あとがきか？正気か！シロツバメ！」

当たり前だ。いやいや、シロツバメとは誰だ。地の文は『精霊・黒燕』がお送りするのだ

「新キャラか…ハッ」

鼻で笑うな。

「ケッ」

唾を吐くな。お前掃除担当な。

「クロアー、どうしたの？って！」

ひよっこり顔を出した少女は大量の赤いフリルのついた服を着ており、そのせいで歩くフリルにも見えた。金髪茶眼、なかなかの美人である

「くっ…いきなり私を懐柔する気ね…べ、別に嬉しくなんか（ry
ツンデレ乙、っと

「斬っていい？むしろ貫いていい？」

まあ待て、精霊・黒燕には物語を自在に操る能力がある。つーかここはあとがきだからこっちで死なない限りシロツバメにも影響はない
「そうなんだあ…って！なに？こっちで死ぬと不味いの？！」

うん。存在概念消失。ブローはこっちでアレイアにムッコロされたから消滅

「消滅して…」

「で誤魔化すな」

ボクツ、と殴られた。イタイ

クロアよ…貴様にはアレイアに罵られる罰を与える！ノイズが走り、異空間より金髪碧眼の少女が飛び出してくる。年齢17ほど、服は簡素ながら威厳のある白いドレス。材質は柔らかかそうではあるが絹ではないようだ

「クロア！跪ぎなさい！」「アレイア…会いたかったよ、なっ」

クロアは今まで見せたこともないような笑顔でアレイアに微笑みかける。つーかお前はそんな表情出来たのか？！

「あ…う…わ、私…が跪づくわっ！」

もーだめだ。2秒で懐柔された

「よしよし、いいか？あの煩い奴を捕まえる、そうすればまた撫でてやる…行けっ！」

「わっっ！」

アレイアは四つ足で走り出す。彼女の頭にはもはやクロアの事しかない。

この人でなしー！アレイアを猟犬みたいに使うんじゃない！

「ハッ…消え失せろ」

この人でなしー！

仕方がない。ここは廊下に逃げるとしよう

「いらっしやい」

ガシツ、とアレイアに良く似た人物に捕まってしまう。銀髪灼眼、黒い服はアレイアとそっくりの作りをしていた。

ウイストレア、何を！

「わっわっっ！」

アレイアが飛び付いてきた瞬間、ウイストレアは精霊・黒燕を放り投げた。

つまり、アレイアとウイストレアが抱き合う形になる

「お姉さまあああつ！」

「『ブレイク』」

微塵の容赦もなくウイストレアに極彩色の光を当てる。光は黒いほうの少女の体を包み込み、その姿を分解する

「私に触るな。」

ほんとに容赦ねー！

ここは距離を開けよう。うん。そうだ、曲がりなりにも『会場』というのなら控え室がどこかにあるはず…そこへ行こうっ…流石にこの世界のキャラはどこかがおかしい…。早く退避しないと…

暫く直進すると、左右に曲がれる交差になり、その先にはいくつかの部屋があった。これはもしや…楽屋か？！

行くしかなるまい！

扉には紙が張ってあり、それぞれ『クロア控室』などと書いてあった。流石にこの部屋だと見つかる可能性が高い…、見つかりにくそうな部屋は…

ん、ここならよさそうだ。部屋に入ることによろ精霊は手を使わずに扉をすり抜けることができる。黒燕もその力を使い部屋に入る。楽屋はこじんまりとした部屋で、照明つきの鏡と四畳程度の畳が敷かれていくらいでそれ以外はハンガーラック程度しか置かれていない。

この部屋は…

「誰？」

声が出る。平均的な少年よりもやや高めの声の主は部屋の角で体育座りをしていた。

白いコートが特徴的な人物は顔もあげずにこの黒燕に気付く

「…なんだ、お前か」

一度もこちらを見ずに看破する。この嶺と言う人物…なかなかやるな
「聞いてくれよ」

どんよりとした空気が部屋に充満した気がする。

「僕はさ、昔主人公だったんだよ？でもさ、ここでの出番は『通行人A』と『いきなり襲われる協力者』だよ？ひどくね？しかもそれ以来出番無いし…ひどいよひどいよ」

コイツ…ネガティブになつてやがる…！

思わず後ろに後退する。この部屋やめようかなあ…

そう思った矢先、部屋のノブがガチャガチャと回転する。

「見いつけた」

細く開いた扉からアレイアが覗き込む

狂気を含んだ視線に体が拒絶反応を示して思わず扉を閉める

「痛い。」

指が邪魔で閉められない！というより

「痛いよ、痛い。すつごく痛いよ？痛い」

恐すぎる！逃げ場は…無い。つーか、どこのひぐらしだお前はああ！

「『ブレイク』」

扉が粒子に変わり、廊下と楽屋が一つの空間になる。嶺はゆっくりと立ち上がりアレイアを見る

「邪魔だ。風遊べ『疾風大鷲』」

「『変数操作』」

二人の手に鳥を模した剣が握られる。その双剣はゆるやかに風を巻きながら圧倒的な存在感を放つ

「模倣…いや、幻影符か？」

「残念、同一存在。その剣そのものよ！」

風が楽屋から吹き出し、黒燕も風に吹つ飛ばされる。こいつらの戦いは後でシロツバメに手土産にしてやろう

とりあえず黒燕は騒ぎに乗じて逃げ出す。とりあえず一旦適当な場所隠れて…よし、あの部屋にしよう

『若草控室』へとすり抜ける相変わらず質素な部屋がずいぶんと改造されていた。

鏡の照明は格子と和紙で障子のように包まれ、小さな壺に一輪の赤

い花が活けられていた。

「ようこそ、私の部屋へ」

団子と湯気のたつお茶を装備した若草が不適に笑う。金髪に若草色の和装、キツネのような糸目はどことなく胡散臭い

「失礼ですね…。まずはお茶でも」

コトリ、と出てきた湯呑みを前に黒燕は、では…と目の前に座る。

注がれたお茶に鳥の姿が映りこむ…

結構なお手前で…嘴で一口飲んでそう言う。

「いえ、番茶なので必要ありませんよ？ですが、お言葉はいただき
ますね」

二人してお茶を飲む

「お団子どうぞ」

では…黒燕の好物は御手洗団子だ！みたらしだ！読み間違えると恥ずかしいぞ！

「カメラ目線ですね、わかります」

ズズズ…コトン。若草は飲み終えた湯呑みを机の端に寄せる。

コンコン、と叩かれたドアに黒燕は素早く反応する。奴だ！勘が告げる。獵犬が来やがった…

若草が手招きする。黒燕は従う。こういう場合素直に従うのが死な
ない選択の一つだ！わかったか！

「静かに」

黒燕の頭に指を置いて若草がたしなめる。若草は黒燕を隠すと扉を
開ける

「若草、ここに一羽の燕が来なかった？足にカメラをつけたやつな
らんど…」

「見てませんね…どうかしたのですか？」

アレイアはむうとうつ向く

「確かにこつちから気配したのにな…うん、クロアに撫でてもらう
ためにがんばる！若草、見つけたら教えてね！」

はいはい、と手を振って若草はアレイアを見送る。

ふっ、助かったぜ…。黒燕は若草の懐から頭を出す。

「うまく行きましたね、現実世界ならばもう少し上手く隠せました
が」

そつえばお前は女なんだつてな、シロツバメも嘘つきだな。まな
板じゃねえ…

「恩知らずはむしりますよ」

翼を握るな！この艶やかな羽は手入れが大変、って抜くな！

「このキャラクターは男性モデルですが、現実世界では立派な女の
子です。名家なんですよ」

そ、そして金があるから引きこもりか

「いちまーい」

いてててて！抜くな！

「この世界での死は消滅なんですよね？なら、消えてみるのは如何
です？」

遠慮する。死にたくはないからな

若草は精霊・黒燕を放す。まったく、もう少し丁寧に扱えよ、黒燕
は軽く羽を手入れする

「見つけた」

…また、ドアの隙間から覗く姿があった。本当にコイツの執念はな
んなんだ…黒燕は部屋に舞い上がる

「『変数操作』 ShiftChange / 0000 / 若草 / 01
23 / アレイア」

ギョーン、と二人の姿が歪み場所を交換する。ドアの隙間からやられ
ました、と笑う若草とニヤリと隣で微笑むアレイアに一瞬何が起き
たか分からなかった。

畜生め、黒燕は悪態をついて滑空体勢になる

「捕まえた」

逃げ切れなかった。放せ！このっ！

「やだ。クロアのところへ逝きましょう？」

字が違う！行き先は冥府か彼岸かこのやろー！放せ！はなせえええ！

「天縛網『六花錐・封牢』」

ガチン、と黒燕の体が水晶のような色合いの六角錐に囚われる。あ、もう逃げられない…

カツカツと廊下が後ろに流れていく。行き先は『収録室』と名付けられたあとがき会場だ。黒燕、もう逃げられそうもない。グッバイみんな、後は頼む…ガチャリ、と扉が開かれる。

「遅かったな」

クロアがマイクの据えられた机に肘をつき、後ろ向きで話しかける
「ごめん…なさい」

弱々しく呟いたアレイアの元に、立ち上がりやって来たクロアは小さくその頭を撫でる。一瞬だけ目を丸くしたアレイアは嬉しそうに笑った。

「つーか、黒燕様を無視かよ。まったく…」

抗議は聞き届けられそうもなかった。黒燕は六角錐の中で舌打ちにとどめておく。

「お前、何者だ？」

精霊・黒燕だバカが。つーか解放しろ。喋りにくい

「解除、頼む」

「うん、わかった」

フォン、と戒めが解かれて黒燕は自由になった翼を広げる。やっぱり籠は窮屈でしかないな！黒燕は自由を尊ぶのさ！

「お前がシロツバメからの使いなのはわかった。だが、何が目的だ？」

あとがきメンバーにスポット当ててやってるだろ！理解しろ

「一々腹がたつな…だが、敵じゃなさそうだな。アレイア、全員呼んでくれ」

うん、と走り出した少女の背中を二つの視線が追いかける。

残された二人は彼女が戻ってくるまで険悪な雰囲気を大量生産していた。カチャリ、と扉が開かれてアレイアが帰ってくる。その後ろからぞろぞろと人が入ってくる

「ねー、マリア、嶺がいるよ」

「そうですね。時空が通常とは違いますから」
少女二人が言い

「ふん、汚い椅子だな」

「ルイエス様、なら、私の膝に！」

「（鈍い音）…ラムダ。その様な行動は慎め」
どこかで見た三人も話していた。

「ほら、これがやりたかつたんだろ？全員、名乗れ！好きなように、
順番はないぜ！」

クロアは目の前にあったマイクを取り外し、手に掲げる

「カメラ、撮り逃すなよ」

クロアは群衆むけてマイクを放り投げた。マイクはゆっくりと弧を描いて我先にと掴もうとする手に捕らえられた。最初は…「やつほ
ー！エアリアルだよ！」

職業・学生（ヴァルハラはバイト扱い）
年齢・8

好きなもの、甘いもの（特に洋風なもの）
嫌いなもの、ルールを守らないプレイヤー
一言、ばいにゃー！

「おー、お姉ちゃん！マイクが！」

「さすがヨロワ！さあ、いくわよ！」

ノピア・ヨロワ

職業・学生（小学生）
年齢・8

好きなもの（ノピア）ヨロワ。マンガ

好きなもの（ヨロワ）ノピア、優しい人

嫌いなもの（ノピア）ヨロワに危害を加える奴ら

嫌いなもの（ヨロワ）ノピアを傷付ける人

一言、『ずっと一緒にいるからね』

「む…俺か。」キャラクター・楼騎

職業・なし（無職）

本来はある家の後継ぎ。事情により叶わずその為ヴァルハラで働いているが、管理者よりもプレイヤーに近い
ためかなり微妙

年齢・19

好きなもの、月夜と桜。

嫌いなもの、都会の外灯。空を見ない人間
一言、特に無いな。次渡すぞ

「よつと。次は我が主、ルイエス様に」

年齢・14

職業・学生

ちなみにヴァルハラを運営している会社の社長の息子。幼少時代より
へりくだった大人を見ているため自分以外は目下と勘違いしている。

好きなもの、権利と圧力

嫌いなもの、利己主義と偽善

一言、僕はここで一番偉いんだよ

「続いて私ラムダが…」

年齢・21

職業・ルイエスのSP

ちなみにかなり小さな頃から仕えていて、さらに年齢よりも若干幼
いためによく姉と間違えられて内心喜んでいる。だがメインメンバ
ーは誰も気にしてないかわいそうな人

好きなもの、ルイエス

嫌いなもの、ルイエスが敵と見なしたもの。ヴァルハラをけがすもの
一言、我が宝玉は主の剣と盾！

「ふむ…盛り上がっていますが、私が貰います」

キャラクター・ゾルア

年齢・23

職業・ルイエスのSP（兼SP総轄）

見た目はそんなでもないのだが、性格ゆえに常に無表情な為、歳をとっているように思われてしまう人

好きなもの、甘くないもの

嫌いなもの、甘いもの全て

一言、我が大斧は主の敵を圧碎する。

「マイクもらいつ！ほら、嶺いくわよ！」

名前・聖蓮瀬名

年齢・18

職業・何でも屋

旧作りバイバル。『雷鳴』は彼女の力そのものを具現化した兵器。

彼女以外の手には余るが幻影符ならば問題ない

好きなもの、甘いもの。人助けをする人助け

嫌いなもの、悪事

一言、私たちは応援するわよ。クロアをね

「はいはい、僕の番か」

名前・風翼嶺

年齢・18

職業・何でも屋

旧作りバイバル。今回は風翼家当主

『疾風大鷲』は彼の家紋と力の象徴。この剣がある限り彼は負けない

好きなもの、のんびりすること

嫌いなもの、誰かを悲しませる人

一言、以上。つぎ投げるよー！

「ナイスパス！嶺！」

名前・メリアル

年齢・19

職業・？（そういえば決めてない…）

旧作リバイバル。昔は結構可哀想なキャラでしたが…今回はまあいい方かな？出番少ないけど、限界まで枠はとったつもりです
ちなみにシロツバ作品で最初に鎌を持たせたキャラなので思い入れは強いです

好きなもの、光と太陽と空と風と星と月

嫌いなもの、暗闇と牢屋

一言、旧作メンバーは全員語らないこと！

「マイクが…次は私ですか？…では」

名前・マリア・フィオーレ

年齢・135（打ち間違いではない）

職業・吸血鬼（…職業？）

旧作リバイバル。名前の原形は世界遺産『サンタ・マリア・デル・フィオーレ』より。

マリアは人間としての8歳の人格。

フィオーレは吸血鬼としての人格。彼女の家系は記憶を継承しますがその為に前当主の人格を自分に移植しないとイケないルールがある。

好きなもの（マリア）、彼女の召し使いのクッキー

好きなもの（フィオーレ）血と戦争

嫌いなもの（マリア）、争いと復讐

嫌いなもの（フィオーレ）戦う意思のないもの

一言、私たち、もう出番無いのかなあ…

（さあね。全ては運命よ、マリア）

「私ですか？では若草の紹介をしましょうか」

年齢・18

職業・なし（無職）切風家当主。

家柄に直接的な関係は無し。だが、風翼・聖蓮と同様に名家であり

古い家柄でもある。でもそれはまた別の話
キャラクターは男性、名前も刀夜という男性名だが実際は女性。家の仕来たりで当主はみな『切風刀夜』の名を継がなくてはならない好きなもの、緑茶と番茶で団子を食べる。縁側で猫と戯れる。サーバー・ミッドガルドでプレイヤーと戦う
嫌いなもの、秩序を乱そうとするもの
一言、私はきつとまた出ますよ、きつとね

「ん！ようやくBUGの番ね！アレイア行つきまーす」
BUG - アレイア。

システムに存在するBUG種の人間型へと進化した第一個体。何故かクロアと精神同期しており二人は二人の境界を超える…。
好きなもの、クロア。次に若草
嫌いなもの、痛み、頭の固いBUG
一言、私って扱い酷くない？拘束とかあるし

「：アレイア様、次は私が」
キャラクター・エイド

人間へと姿を変えたBUGの二体目。自分の姉と妹にあたるアレイアとウイストレアに絶対の忠誠を誓う。
何故かBUGは女性優位。たぶん原因は御母様にあると思う
好きなもの、二人に仕えること
嫌いなもの、ツバイン

「私、復活！お姉様『ブレイク』しないで！」
キャラクター・ウイストレア

人型BUG三体目。アレイアとは神影の絆で結ばれており、アレイアとの精神同期により『ワルキュレア』へと昇華。

姉を非常に尊敬しているが母には逆らえないかわいそうな人
好きなもの、アレイア。エイド
嫌いなもの、クロア。アレイアを傷付けること

一言、神影でなければ…お姉様と一緒にいられたのかな？

「…」

キャラクター・御母様（キャラクター？）

全知全能、正体不明のBUG…。時折現れては意味深な言葉を吐いていつの間にか消えている。姿を見たものはいない。

好きなもの、秩序と知識

嫌いなもの、人間

一言、「…平伏せよ。人間よ」

「俺の番…だな」

キャラクター・クロア

職業・学生（一応行ってます。）

年齢・16

今作の主人公であり負け続けの可哀想なキャラ。本人の実力はかなり上位クラスだが、相手が上級ランカー、しかもベテランが多いので経験の差が敗因となる

人間でありながら神影とツバインの資格を有し、アレイアと精神同期している不思議な存在でもある

彼の剣は『矛盾』の剣。『ある』と『ない』を内包し体現化する能力は人にもBUGにも絶対的スレイヤーとなる。

好きなもの、戦場の緊迫

嫌いなもの、アレイアを傷付けけるもの

一言、俺は必ずアレイアを助け出す。ふう、ようやく一段落だな。

黒燕は机に降り立ち、撮影した人々を眺める。うむ、疲れたぜ

「何言ってる…まだいるだろ」

…撮り漏らしがあったか？仕方ない、誰だ？

「お前だよ。黒燕。」

…は？

「鳥も表情があるのねえ…」

黒燕のプロフィールも必要なのか？

別にいらなと思うが…

「いいから、ほら！」

「うん。くろつばめもいっしょにやる！」

…わかったよ

黒燕はカメラを自分に向けることにする。レンズに一羽の鳥が映った

「黒燕の鳥生で始めてだな」

職業・鳥（職業？） 今回のカメラ担当

一人称が

「黒燕」のナイス・ガイ（鳥だけど）精霊であり他のキャラクター

とは別時空の存在。シロツバメの手下

好きなもの、カメラ撮影

嫌いなもの、カメラ撮影をしているところ撮影。すう…と黒燕の姿

が薄くなる。時間切れだ

「帰るのか？」

ああ。この映像をシロツバメにも見せてやらないといけないしな

黒燕は疲れたぜ？

「そうか、またな」

ああ。クロア。ありがとうな

「礼はいらない、帰れ」

黒燕は透けてきた翼を広げて部屋の中を飛び回る。

クロア、アレイア、楼騎、若草、ラムダ、ゾルア、ルイエス、メリ

アル、マリア、ノピア、ヨロワ、瀬名、嶺、エアリアル、エイド、

ウイストレアを眼下に見て黒燕は天井へと飛び込んだ。

すり抜けて、本来では存在しない空間に浮かぶ建物を見る。

案外、イヤツラだったな。

黒燕は最後に大きく旋回すると虚空の中に溶けるように消えていった…。

アヴィス・メモリアル・アナザー（後書き）

バサバサツ、と羽音がする。
戻ったぜ

半分暑さで溶けたシロツバメは無言で手を少しだけ上げる。

ほらよ、全員のプロフィールまで撮って来たぜ。黒燕を褒めよ崇めよ奉れよ

「つつさい」

シロツバメは燕を指で弾く。

「『神影』や『管理者』のプロフィールはとったのか？まさかないとは言わせない」

黒燕は黙りこむ

「はあ……」

いや違うぞ

反論が聞こえたので一応聞いておくことにする。

次にまた出番があるようにだな……

でろでろに溶けたシロツバメは答えない。

わ……悪かったよ、な！

「……太陽なんて引きこもれ」

物騒だな。天の岩戸じゃねえか

「このままじゃオチがなさそう……」

言うな、考える！ほらこれでも見て……

もはやシロツバメの姿はなかった。

あのやろう……溶けちゃった……！

黒燕はやれやれと器用に首を振る。仕方がない、コイツが復活するまで待つてやるか

翼を広げて、空を見る。青空に浮かぶ雲がまるで黒燕を誘うように道を開けている

さて、黒燕はひとつとびしてくるぜ。みんなまたな！

翼を折って敬礼の仕草をしてみせた燕は空へと舞い上がった。あっという間に黒い点にまで縮小された後ろ姿は数秒とたたないうちに青く塗り潰されていった…

番外編、アヴィス・メモリアル・アナザー

これにて終幕です

お付き合いありがとうございましたm(_____)m

…と、文字が床に浮かび上がった

第二十五章 オーディスタの知識の鴉（前書き）

こんにちは、シロツバメです

最近冷房が強いですね…思わず冬眠しそうにな…ZZZ…（〇―）

（―）

（〇―） o z z z …

（クロア注：おい、話が進まねえぞ）

寒い…眠い…冷夏…

（意味不明なセリフを呟くな。実際冷夏だが…）

何現象だっけ？レオジーニョ？

（サントサ・ベラフォートじゃない。）

えっと…え【文字化けしている】？

（サイトだ。管理人に怒られるぞ）

なら、エルア【文字化け】？

（モバゲーのゲームだな。お前はアカ持っていないからできないやつだ）

ならなんだっけ？

（エルニーニョだ。馬鹿が）

オーディスタ化して言うなよ…そういうえばつみねこアニメ化したね
〜DVDで後追いします〜

（BGM：つみねこのなく頃に〜煉獄〜）

PC版の続きが気になるなあ…

（…で、俺達の話と何の関係が？）

いやほら魔【文字（ry）】だからさ、クロアの相手の【金色の蝶が

とまっているので読めない】がさあ…

(ネタバレ防止線長いな、読みにくい)

うむ、ネタバレ以外にも怒られそうなネタには入るからね、【こんな感じ】で

今更かよと

(今更かよと)

さてっ、ようやく区切り(?)がついたので本編へどうぞっ

(相変わらずカオスだな…)

いいじゃん、それも一興

(限度があるだろ…)

第二十五章 オーディスタの知識の鴉

楼騎は、ふと顔を上げた。

ここは中央管理室。メインコンピュータ近くの机とそこに散らばった大量の書類に埋もれていた体を起こす。どうやら眠ってしまったらしい

「…っ、頭が痛てえな。」

こんな場所で寝ていれば当然か、と小さく笑う。そして同様に埋まっていたパソコン端末を発掘してキーを叩く。

ブウン…という音と共にノートパソコンの画面が明るくなる。中身は作業途中のままだった。今回のロンドン支部のサーバーであった出来事の報告書なんて書こうとするだけで嫌気がさすが…仕方あるまい。楼騎は画面に向かって、妙な音に気付く

ゴゴゴゴゴ…とガガガガ…とブブブブ…という音を混ぜたかのような規則正しい異音がしていた

「なんだ？」

楼騎がメインコンピュータを見上げると職員の一人在り叫んだ

「メインコンピュータ、異常演算！発熱60%増加してます！」

さらにもう一人

「『ヴァルハラ』全体に処理遅延^{ラグ}が発生しています！処理速度現在50%！」

管理室がにわかに騒然となる。管理者が一斉に立ち上がり、メインコンピュータ前に集合して会議が始まる。

「…Dが見当たらず、どこじゃ」

Gが言う。確かにDの姿が見えない。そしてクロアとエアリアルルの姿も。

楼騎はその身を翻して管理室の扉を目指して走り出した。何故だか今いない三人の力が必要な気がしたのだタタタ…と廊下を走る。金属の残響を聞きながら扉を抜けて舞台裏に出てくる。左右を見回し

てからエントランスへと進路を変える。

人がいない会場を走り抜けて、扉を手前に引いて会場とエントランスを一時的に一つにする。

「はやくー!」

エアリアルの声がして楼騎は窓の外を見る。ちょうどクロアが小さい黄色の車から降りてきたところだった。

「あいつら、どこ行ってたんだ?」

楼騎は見覚えのない車から出てきた三人に眉をひそめる。

そして、その後に出てきた少女を見て、頭の中で記憶が再生された

蒼い刀、自分の手、伸ばして…

見守る少年、栗色髪の少女、二人の師匠、

触れる指先、暗転する記憶…

「つく!あ…何だ?何で今ごろ…」

頭の中がガンガンと痛む。楼騎はあの少女を見ていた知っていた。

まさか捨てた記憶の中にいた人物を見るとは…

「『幽月』…選定の儀か」

過去の出来事を思い出すとは…楼騎は頭を振って嫌な回想を振り払う

「もうあの家は関係無い。俺は俺だ。」

自分自身に言い聞かせて一度壁を殴り付ける。かなり痛かったがようやく目が覚めたような気分になる。

「クロア、がんばりなさいよ。私たちの力が欲しければ連絡しなさい。有料で手伝うわ」

「有料かよ」

少女とクロアはフツと笑うと手をあげて別れの挨拶とする。エントランスの自動ドアが開いて三人の人物が施設に入ってくる

「おい。どこ行ってた」

楼騎が話しかけると、D以外は驚いたようにこちらを見つめた

「はやく来い。嫌な予感がする」

楼騎は入ってきた扉を潜り、暗い会場へと入る。振り返って三人が来ていないのを見ると早くしろと急かした。

三人は顔を見合わせてから歩き始めた。ガチャリ、とクロアは扉を閉めて必要最低限の灯りしかついていない会場を抜ける。舞台裏の階段でつまずきかけたがたて直してなんとか昇りきる

薄緑色の塗装がされた廊下を抜けて四人は中央管理室へと足を踏み入れる…。

「…なんだいこれは？」

真つ先にDが異変に気付いた。クロアは何かと思うとTが駆け寄ってきた。

「大変よD！メインコンピューターがBUGに攻撃されてる…！プロテクト解除30%を超えたわ！」

つまりなんだ？クロアはTに説明を求める

「ハッキングよ！どうしよう…このままじゃ『ヴァルハラ』がのつとられちゃう…」

クロアとエアリアルが驚く。ここを出た時に異常はなかったのに帰ってそうそうメインコンピューターの乗っ取りだ。二人の驚きは想像に難くない。

「…丁度いい。T、メインコンピューターにこの三人をログインさせる。Gを呼んで来てくれないかい？」

「ちよっ、ログインは無理よ！だって…プロテクトが…」

「私とGなら解除できるんだな、これが」

ポカンとTはGを見つめる

「へらへら」

相変わらずの笑いに戻ったGを見て何コイツとか思っていたTはGを呼びに走る。

「さてと、君達は例の部屋に行つててくれないかい？Gと話をつけてから向かうよ」

待てよ。クロアは呼び止める。何故だか…Dに何者かと聞かないと

いけない気がしたのだ。彼は振り返り、笑う

「なに、私が作ったプログラムなだけだよ。『ヴァルハラ』もあのコンピューターもね」

人は見掛けによらない、居合わせた人はそう思ったという。

「ふむふむ、なるほどの」

TとGがこちらに歩いてくる。二人は軽く議論しながら本当にログインさせるかと言いついていた。

「私は反対です！ログインして不具合が出たらどうするんですか！」

「大丈夫じゃ。僕らもそこまで阿呆ではない。しっかりとできるルートは確保しておる」

なかなか話はまとまらないようだ。

二人はDと話せる距離になると彼を強制的に議論に加えた。

「行こうぜ、俺らには関係無いことだ」

クロアが振り返ると、視界が暗転した。

無明の闇が帳はかばかのように全てを覆い包み隠してしまう…。誰も見えず何も聞こえない世界

全ての中心にクロアはいた

「…なんだこりゃ」

適当に手をかざす。闇を切り裂いた手は闇に飲まれてすぐに視認不能になる

「なんだ、なんなんだ？」

濃密な闇は不可思議な密度でベールのようにこの手を包む

不可視の闇の中に揺らめきが生じる…。揺らめきは波となり、見えないはずの視界に照らされたかのような明かりをもって明滅をする明滅は次第に大きくなり波は音波に変わる。声が耳を介さずに頭の中に響く

クロア

名を呼ばれた本人はその奇妙な感覚に鳥肌をたてる。とにかく気持ち悪い

時間がない。私の声を聞いて

クロアは声に耳を傾ける…。アレリアのようだが…今はどこにいるかもわからない上にここは『ヴァルハラ』ですらない。懐疑的にクロアは声を聞く

私はシステム奥にいるわ。三重のプロテクトが邪魔で…声が…持ち直して！よし、次に私のいる所への…

待て待て待て、意味が分からない。クロアは頭の中で言葉を紡ぐ。何故だがそれで通じるような気がしたのだ。

…だよ、ね。でもごめんね時間が…御母様が感知しちゃう…だから、お願い！メインコンピュータへ来て！私を

ふつり。声が途絶えて闇が突然消えて世界の明るさに目が眩んだ。心配そうに見ているエアリアルと微妙に倒れている上体を支える楼騎、GとTは近くの職員に何か冷やすものを持ってくるように指示しており、Dは何かヘラヘラと笑っていた。「…大丈夫？」

「あ…ああ…。なんだったんだ？」

クロアは体勢をたてなおしてまるで夢のように現れては消えた幻覚を再度頭の中で繰り返す…。白昼夢、と言いたいが生憎と夜…しかもそれなりに遅い時間になってしまっている。夢でも見たか…クロアは思うと

「馬鹿が、そんなわけないだろ」

自分自身が無意識に反論していた。

「ど…どうしたの？急にさあ」

エアリアルが戸惑うようにクロアを見て、楼騎を見た。

「さあな。」

明らかに興味がなさそうな楼騎にエアリアルは肩を落とす。はあ…と一度ため息をついてからクロアを見つめる

「大丈夫…なんだよね？」

「あたりまえだ、さっさとあの部屋に行くぞ…。あいつを助け出す」
エアリアルはうん、と笑ってクロアから見えない方向を向いて小さく呟く

「私もあんなふうに言われたいなあ…殺し文句だよ？」

誰も聞いていない。誰にも聞かれたくない言葉は空気に溶けて無くなった。エアリアルは歩き出したクロアの隣へと走り、追い抜いてはやくー！と急かして楽しそうに笑ったロックの外れた二重の扉を抜けて三人は管理者達のログイン端末のある部屋に足を踏み入れる全ての小分けにされた端末は暗く、誰もログインしていないのがわかった。

「メインコンピューターで落ち合おう」

クロアの言葉に二人が承諾の言葉を返し、各々端末のある部屋に入る…四つの端末が起動して、四つの明かりが点った。四台の端末はそれぞれ座った人物を固定してその意識を電子データへと変換する

…ん？四台？

クロア、

エアリアル、

楼騎と…？

あれ？

四人の意識は体を離れ、通常ログインから迂回する形でメインコンピュータにアクセスされ、キャラクターカードに記された姿で再構成される…

「こちら、エアリアル」

ぼんやりとした白い空間に赤いフリルが舞う。通信回線を開いたエアリアルはトークカードを出して同時に二人に話しかける

「メインコンピューターにアクセス完了…かな？クロア、楼騎、どこ？」

霞には濃く、濃霧には薄い微妙なこの領域は視界が悪いので目視に向かない…エアリアルはトークカードの反応を待つ

『…楼騎だ。お前の後ろにいるのを視認した。』

エアリアルが振り返ると楼騎が小さく手を上げるのが見えた。

彼女もまた返すと次の通信が入る

『クロアだ…。なんか人影が見えた。お前ら移動すんなよ』

合流した二人は顔を見合わせる

『クロア？今も移動してる？』

『はあ？四・五メートル先歩いてるのに何言ってるんだ？』

不機嫌そうなクロアがカード越しに睨む。エアリアルは戸惑うよう

に隣にいる和装の人物を見る

『…クロア』

『カシャン。』

カードの先から何だよ、と何かを叩き込むような、例えば銃弾を装填するような音が重なって聞こえる

『逃げるクロア！そいつは敵だ！』

『はあ？何言ってるんだ？ん？振り返って…』

タン、タン、タン。短い発砲音とクロアが素早く反応したのがカードを通じて伝えられる

『撃つて来やがった？！くそっ』

タンタン、と連続した音がしてクロアのトークカードからの通信が切断される。若干遅れてエアリアルと楼騎の耳にも発砲音が聞こえた

『近いぞ。散開！解放！』

二人は武器を解き放ち、三步後退して周囲を伺う…。迷霧の先から光の明滅が見えて薄ぼんやりとした人影が駆けてくる。次第にはつきりとしてきた蒼碧のコートを翻して走るクロアと、白衣のルイエスが楼騎とエアリアルの間を走り抜ける…！

『焼き尽くせ』フランメリーゼ』！亜式解放『炎刺赫染・フランメリーゼ』！』

解放、同時に行なった追加解放によりフランメリーゼは長大な細剣として炎を纏う。その姿はまるで槍、馬上槍にも似たその細剣はエ

アリアルの肩の位置まで引き上げられて構えられる

「炎舞『フレイムスパイラル』」

振るわれたフランメリーゼから炎の塊が発射され、返した斬撃から追撃弾が放たれた

「解放『幽月』」

抜かれた蒼い刀が低く構えられて空気を切り裂いて移動を始める。

楼騎は姿勢を低く保ったまま両手で握った刀に力を込める

炎の塊が両脇をよぎりルイエスの周囲で軌道を変えて螺旋を描くように火柱と共に天を焼く

「いくぞ。剣技『新月』」

ズツ…と楼騎の姿が火柱の直前で空間に溶けるように消える。次に姿が現れたのは火柱の内部、ルイエスの目の前だった。

「ルイエス。どういうつもりだ？」

銃を片手に空を見上げていた人物に声をかける。当然、刀を構えた臨戦態勢で、だ。

「なんだ楼騎か…僕はクロアを狙ってたんだけどねえ……。まあいや、とりあえず死んでよ」

引き金に指がかけられたのを見て楼騎は横に跳ぶ。後を追うように短い火薬の破裂音が響いて鉛玉が赤い光の軌跡を描く…。

「お前の我が侷わがままに付き合ってられるほど、俺達も暇じゃねえ。悪いが、一刀に伏してもらおう！」三枚のカードを抜いて走り出す。素早く射撃圈内から身をそらしつつ猛烈な速度で遠距離、中距離、近接圏、クロスレンジへと距離を詰める

「『眉月』、『下弦』！」

下方斬撃符二連。足下から頭までを優美な奇跡が蒼い線を描く。ルイエスは銃で軌跡を反らす。銃身を短くしつつ、二回。

「終りだ！」

闇を生み出し、二人の全てを黒く塗り潰す。断固たる力は光となつて幽月を鮮やかな黄色で染め上げる…。

「『望月狂乱の御剣』！」

黒く塗り潰した世界を切り裂くほどに眩い光が放たれた。それはまるで雲を切り裂いて現れた月光、月明かりの色の光が炎の壁も貫いてクロアのすぐ隣を切り裂いた。

「…やったか。」

楼騎は壁の外から聞こえる抗議の声を無視して消えていく闇を見透かすように目を細める…。

刀を振るった先には何もいない。地面を抉った光の爪痕があるだけだった。だから気付くのに遅れてしまった

「ようこそ、楼騎様」

カチャリ、と炎を内包した杖が背後から右肩の上へのせられる…。

それはBUGの武器『メデイカラゴラ』

「じゃあね、楼騎…、ハハハ」

カチャリ、と今度は左後方から銃が突きつけられる…。楼騎は一度舌打ちして刀を下ろす…

「水面に映せ、鏡像の月」

素早く、それこそまばたきすら追いつかない早さで二本目の刀を抜く。

『水映月』。『幽月』の動きを多少の制約はあれどノーコストで同時に発動する能力を持つ楼騎の切り札だ

『新月』『眉月』『下弦』『望月狂乱の御剣』。この四枚分の力が

同時に発動されて暗闇の帳が降りた世界に鮮やかな軌跡が駆け巡る！

「危ないですよ」

「平気だよ」

闇の煙の中からルイエスとエイドが並んで飛び出して来た。クロアとエアリアルは共にその異様な光景を見つめて武器を手に炎の壁へと飛び込んだ。

「悪い。仕止め損ねた。」

紅と蒼の刀を手にした楼騎は息を荒くしながら二人に謝罪する

「気にするな」

「やられなかっただけ凄いわよっ」

二人は楼騎を守るように前面に並んで武器を構える。目の前にいるのは

「やっと出てきたね、クロア」

「炎の術で私に挑みますか？人間ごときが恐れ知らずですね」
人間とBUGが並んで武器を構えていた。

「ルイエス…お前どうしてここに！」

クロアの言葉に少年は笑う。どこか壊れたような笑い方で

「ハハハ！どうやって？馬鹿だね…管理者たちが勝手に入れたんじゃないか」

クロアはそういえば…と思い至る。コイツDにあの部屋に閉じ込められてたんだ、と

まさかアイツ入れたまま忘れてたのか？

そんな考えが浮かんだがすぐに消す。たとえ扱いが空気並みでもBUGと共に目の前にいる。その事実だけである種の驚異なのだから
「ならエイド！お前は何故ここにいる！」

クロアの問いに彼はくだらないと笑う。

「我が主、ウイストレア・アレイア様のクロアを滅せよとの御命令に従ったまで！」

メディカラゴラを三回まわしてクロアに先端を向ける…。そこにはいつの間にか現れた魔法陣が展開されていた。「我が手にあるのは魔杖。ヤドリギを焼き、月桂樹を灰へと変える争乱の杖、今ここにその力の一端を。我らの前に立ちほだかる者を白灰に変える炎をあらわせ！」

燃え上がった杖を見てエアリアルは

「やばいかも…」

そう呟きながらもフランメリーゼを構える

「お願い…耐えて！炎刺赫染『火龍の炎壁吐息』っ！」

フランメリーゼの炎が左右に展開し、燃え盛る盾となって三人の前に立ちほだかる。

「『インフェルノボルテージ』」

エイドの杖から凄まじい火力で火柱が放たれる
触れてもいないのに熱が灰を焼きそうなくらい鋭く襲いかかる！
「うっそ…この子強い！今までなめてたかもっ！」

マジかよ

生み出された壁が吹き飛ばされる瞬間、そんな眩きが聞こえたとい
う…

「っだあ！…っ」

衝撃で大きく飛ばされたエアリアルは十メートルほど後ろに落着す
る。どさり、と落ちて二・三回転がってようやく止まる

「脆いですね、防壁としてはランク『B-』でしょうか」
くるくると回された杖が再びエアリアルに向けられる。

「エアリアル！逃げろ！」

クロアの叫びに体を起こしたエアリアルはエイドを見て逃げようと
立ち上がるうとしてしているが…間に合いそうもない

「『インフェルノボルテージ』」

二発目の火柱はより大きく、より強い火力でエアリアルを狙う。ク
ロアは剣を手に走った。また、失いたくはないから！

鍵と箱

カチリと頭の中で何かが開く音がした火柱がエアリアルを飲み込ん
だ。

足下に緊急用の簡易防壁を発動してはみたが…正直まだ持ちこたえ
ていることが驚きだ。エアリアルは呪符を抜いて炎を見る…。する
と赤いドーム状の防壁の前にある四角い防壁が炎を遮っていた。エ
アリアルははて？と首をかしげる

「こんな強い防壁、私発動してないけど…」

「あたりまえだ」

エアリアルの肩を両手が掴まえる

「俺が張った防壁だ…そう簡単には破らせない。」

クロアは：いや、クロアだった人物が手を離す。エアリアルはまだ耐えている防壁と目の前の人物を見比べる

「オーディスタ？」

「いや、クロアだ。俺はな」

帽子を被ったクロアは笑い、防壁に指を向ける

「『クロア』。お前がいなくても俺が使いこなしてやるよ。この力をな」

防壁が水面のように揺らいでその中にエイドの炎を吸い込み始める。白かった壁は吸い込み続けるうちに赤く染まっていた

「：吸収系、珍しい能力ですね？」

赤くなり相当な熱を発している防壁を見てエイドは険しい表情で言う。吸収系とは文字通り相手の力を取り込むタイプの術式でタイプは大きく分けて三種類。

力や衝撃を奪う、防御型

能力や防衛能力を奪う、特殊型

一定量溜め込むと発動する、反撃型

どれも魔法系を無効化する場合が多いために魔法系術者には絶対的優位に立つ能力だ

「：ルイエス様。お願い致します」

エイドは杖を仲間の人間に向ける

御母様はこの事態を予期していたのですね

最初は人間と組むなんて何を考えているのかと思っていたが、エイドは考え方を改める事にする

人間は上手く扱えば便利ですね

と。クロアは：今はクロア・オーディスタである人物は向けられた銃口を眺めていた。

「撃ち抜け」

左目のすぐ前に添えられた銃口の中に銀色の弾丸を確認して、やれやれと呟く

「『レベツカ』」

名を呼ばれた銃はその黒い身から力チリと音をたてる

「この目を失うことは構わないが…こんな事で失っては本物に顔向け出来ないな」

隔壁。と小さく呟く。

弾丸はレベツカ内部で動きを止めて出現した壁に本体もるとも吹っ飛ばされる。ルイエスの手から銃が抜けたのを見てクロアは長剣を空間から取り出して、突き刺す。

「現虚入り交じりて彼方へと繋げ。『混沌幻影』」

剣を握る右手から光と闇の小球が浮かび、剣に宿る。ぼう…と二色の剣に二色の光が輝きを与える

「刻む始点『黒陽』」

剣を突き刺した地点から斜めに斬り上げる

血と黒い帯がルイエスから剣の軌跡を追いながら抜き出される

「なん…だ？」

黒い帯は白い幾何学模様が描かれておりその両端はルイエスの体とクロアの混沌幻影の黒い半分と繋がっていた

「しばらく思考の海に沈め。刻む終点『白陰』」

刃を返し、白い方で斬りつける。
剣で斬られた場所から今度は白い帯が抜け出してきて半回転分捻れながら黒い帯と繋がる

「なんだ…こんな帯！撃ち抜け！レベツカ！」

パンパン、と乾いた破裂音が響くが帯は悠然と漂うまま。

「なあルイエス。『メビウスの輪』って知ってるか？」

循環する一つの帯、メビウスの輪。表を通れば裏を通り、裏を通れば表を通る不可思議なリング…それがメビウスの輪

「まさか、メビウスの輪なのか？！くっ…」

「『メビウスリング』。無限循環の思考の海に沈め！愚かなる人間よ！」

ルイエスの体を挟んだ輪が一度輝く。

「ぐ…あ…」

突然目を見開いたルイエスはその場に頭を抱えて倒れこんだ。

「へっ？今何があったの？クロア？」

「能力…というか『メビウスリング』を発動した。」

クロアは倒れたままうめいているルイエスに剣を向ける。そのまま目の前を軽くはらっていつの間にか霧の消えた白い空間をどこでもなく見つめる

「こいつの能力は『強制無限思考連鎖』…むりやり頭の中に問題を叩き込んでそれをひたすら解答させ続ける…。まあ分かりやすく言うと1+1=2を答えた後即座に2+1=1の問題が、その次に3+1=1が本人の意識と関係無しに出てきてそれを強制的に解答させる。ちなみに全てを答えつくすと最初からランダムで出現される。まあ人間ならば一生かけても1000分の1も答えられないかな」

「随分…ふざけた能力ですね。たとえ人間でも『ヴァルハラ』においては戦いが常。思考の能力とは…やはり神の道化。オーディンの模倣ですね」

エイドの言葉にクロアは笑う。

確かにそうだな、と自嘲してからエイドに剣を向ける

「だが、お前の主もまた道化。ワルキューレの名をかたる影にしか過ぎない…。だろ？」

「…そうですね。オーディスタ」

すう…と空間から現れたのは槍を手にしたワルキューレア。槍は炎を円環状に纏っており彼女は既に臨戦態勢であるように見えた

「ですが…この世界に二人も『神影』は不要です。御母様はそうお考えです」

二人の神影の間に不気味な静けさを運ぶ風が吹き抜けた

「そうか…。なら、お前が消えりゃ丸く収まる訳だな」

「あなたさえいなければ、お姉様は自由になれる。だから…消えなさい…」

二人の姿がエアリアルな視界から消えたガキン、と硬質金属のぶつ

かる音が派手に響いた

音がしたのは遙か上空。一瞬にして跳び上がった二人は武器を振って火花を散らしていた

「楼騎、クロアが」

「ああ。ワルキュレアは任せよう」

蒼と紅の刀を手にした楼騎がエアリアルと合流する。楼騎の手は微妙に赤くなっていた

「大丈夫？『望月狂乱の御剣』の水映月は無茶だからね…無理しないで」

「気にするな。元は背後を取られた俺の責任だ。それに、少し休んだからな…。充分動かせるさ」

二人は武器をエイドに向ける

「…いいでしょう。半流魔術師に手負いの犬…、私にとって敗因には小さすぎますね」

スウ…と軽く目を閉じてエイドは呟く

「『空間転移』。0011/2245/2412/Field/s
hiftChenge/3-24-51。エリア：廃工場」

三人の体がノイズに包まれて別座標に転移する。三人はまったく別のエリアに場所を移した。

「…舞台は整った、ってか？」

上空から見ていたクロアはウイストレアの一撃を払いながら呟く
「独壇場…。それも悪くない！」

強烈な踏み込みを含んだ突きがクロアの首を狙う

そこに上手く合わせてクロアは穂先を止める

「それもそうだな。混沌幻影の全力も試してみたいし…な！」
槍そのものを弾き返してクロアは剣を振り上げる。白い刃がウイストレアの目に映り、周囲と同化した剣が降り下ろされた

「くっ…」

上手く槍を操り柄で受け止めたウイストレアはその体勢のままクロアを見上げる。若干とはいえ高地に立てたのなら自然と優位が生ま

れてしまう

「火符『火の粉降る夜に』」

剣から吹き出した火の粉がウイストレアの視界を狭める

「隔壁！」

四角い盾がウイストレアを守る。火の粉とその後続いた黒い斬撃を振り払い彼女は槍の名を叫ぶ

「『戦乙女の戦槍』！」

炎をより大きく纏った槍が主人の叫びに答えて大きく炎を吹き上げる。

「ふん…また炎系か」

BUGは本当に炎ばかりだな、とクロア・オーディスタは笑う

「昔から炎は神の所有物、別に不思議じゃないわ！」

先程よりも鋭い突きがクロアの剣を弾く

高く放られた剣はどんなに急いでも手が届かない位置にまで垂直に飛んで行ってしまった

「貫け！戦槍！」

クロアはウイストレアに左手を向ける。

スツ…と滑るようにして間に割り込んだのは赤く燃える盾…！

「なっ…！」

「誰がこの盾を消したと言った？…砕ける！」

パキン！と一瞬でひびが全体に広がった防壁が内部の炎を撒き散らしながら砕け散った

クロアは爆風に乗って一気に後退。天より落ちてきた剣を掴む

「生きてるか？…いや、死んでくれてもいいがな」

クロアが笑いながら剣を向ける。空中で未だに渦を巻いている炎を見て化物じみた火力だな、と思う

「お前の従者の力、受けてみた感想はどうだ？」

渦巻く炎を槍が切り裂いて内部からきらびやかな光が溢れ出す…

「『ブレイク』」

極彩色の光が吹き出して炎を食らいつくして金の粒子に変える。そ

れでも食い足りない先端をクロアの方向に向けて光は四つの細い光に分裂して弧を描きながら飛来する。

「ふん…言葉は無しか」

クロアは剣をやってくる極彩色の光達が描く正円の中央部分に剣を向けた

「『ブレイク』」

剣先から無数の細い光がほとばしりそれらが滅茶苦茶に動き回る。

光はやってくる極彩色の光に触れると動きを止めてピタリと狙いを定める。その様子はまるでレーザーサイトの一斉照準にも似ていた。

「『データ・ブレイク』」

四つに収束した光の束がより強い、より強力な光となってウイストレアの『ブレイク』を飲み込む

光はそのまま突き進み、ウイストレアの光の軌跡を逆になぞりながら彼女の光の根本、左腕を飲み込む。

ゾリツ…と食い込んだ光がウイストレアの腕に深く食らい付くその直後、この世のものとは思えない程の絶叫が世界を揺さぶった。光に蝕まれたウイストレアは空中で光を振り払おうと不格好なダンスを踊る

その動きは次第に遅くなり、十秒程度で動きを止めて彼女はそこから崩れ落ちるように地上に落下していった。

彼女の体は無数にひび割れて、それらが裏返るようにして本来のウイストレアの姿に戻る。神影化の証であり、解除の証明も兼ねた特殊なエフェクトが一瞬で完了する。

「さて…エアリアルと楼騎は…負けちゃいないだろうが…な」

クロアは剣を空中に溶かして地表まで飛び降りたほこりっぽい随分横長の建物の中でエアリアルは倒れていた。

すぐ目の前には軽そうな靴と明るく照らす火の灯った杖が見えていた
「意外とやるわねえ…いたた…」

エアリアルは振り上げられた杖を紙一重で回避する。うつ伏せの状態から腕だけで上体を起こし、その勢いに任せて足で地面を蹴りあ

げての宙返り。エイドと逆さのエアリアルの視線が並ぶ

「炎舞『ブレイジングインフェルノ』!」

空中から取り出した炎刺赫染のフランメリーゼを素早く一閃!炎が横長に広がる

「...」

無言でしゃがんで回避したエイドのだいぶ後ろから別の叫びが聞こえる

「剣技『三日月』!」

エイドは足を空中に投げ出して足下を飛び抜ける光を回避する

「炎舞『ノックダウンインパクト』!」

高らかに宣言された呪符がフランメリーゼの火力を増大させて空中にいる状態で降り下ろす。両手で叩き付けたフランメリーゼの一撃がエイドを床に叩きつけて巨大なクレーターのようなへコミを作り出す

「縛せ『天鎖・六花の網』!」

天空より屋根を貫いて六本の鎖がクレーターの中央に降り注ぐ。ジャラジャラと鳴る鎖がエイドの手足を押さえつけて自由を奪う鎖が縛った先から小さなうめきが聞こえた。

「...痛いですね、もう少し器用にやって頂きたいものです」

地面に鎖でぐるぐる巻きにされたエイドは鎖を鳴らしながら文句を言う

「いいじゃないのよう...ほらっ笑って」

「誰が笑いますか」

エイドは自分を縛る鎖を値踏みするように見つめる。この鎖は割と高いランクにあり解除は意外と難しい...。いくらBUGといえど脱出には時間がかかるだろう

「クロア、大丈夫かなあ...」

エアリアルは穴の空いた天井から別空間にいるクロアを思う

「平気だろう。今のあいつは強い。」

楼騎はエイドの近くにまで行き鎖の緩みを確かめる

「そーなんだよねえ…。強いよ、クロアは…はあ…新人クンに追い抜かれちゃうとは上級ランカーの名が泣くわあ〜」

「うがー！と両手を上げて不満を叫ぶエアリアルを完全無視して楼騎は呟く

「強すぎるんだ。…力は思いで破壊も想像も出来るが、強すぎると何も生み出せない。あれは…」

身に過ぎた力じゃないのか？誰にとでもなく聞いた言葉に答えたのは縛られたままのBUG、カサリと布地が音を立てて少しだけ首をもたげる

「そうですね…『神影』は本来は我々の…システム側の特異能力です。何故人間如きがその力を持ったのかは分かりませんが、所詮は身に過ぎた力。御母様は存在をお許しになりません」

楼騎はエイドの襟を掴む

「今何て言った？」

エイドは離して下さいと冷たく言う

楼騎が手を離すとエイドは小さく笑って繰り返す

「過ぎた存在など御母様は存在をお許しになりません。せつかくウイストレア様が助けて差し上げようとなさったのに…本当に、愚かな人間はダメですね」

ザザザツ！と強烈なノイズが視界を乱す

「ウイストレア様、戦闘不能。妨害プログラム、ダウン確認」

エイドの呟きの後、再び強烈なノイズが耳に雑音を運んできたクロアがいる場所にもノイズが砂嵐のように広がっていた。

「何だ？回線不良か？」

クロアは目の前で腕を押さえつけている少女を見ながら呟く。BUG・ウイストレアは破壊されたデータの復旧をしつつ周囲を窺うそして悲しげにうつつ向いて、終わりか…と呟いた

「間に合わなかった…ごめんなさい、お姉様」

何のことだ？そう聞こうとしてふと足を止める。

誰か…見ている！

クロアは剣を取り出して空を見上げる

『…危険因子確認。メインコンピュータ防衛プログラム起動』
風になびく服を着た女性が上空から見下ろしていた。

「何者だ！」

黒い髪を髪留めの櫛で結び上げた女性はクロアの事など眼中にないと
言わんばかりに無視する

『ノス・レイディ・ヒドウン』

足下に巨大な魔法陣が展開し、空の半分を覆い隠す。水色の光が描く
円の中央から光が明るさを増していく

「…答えないか。行くぞ『混沌幻影』」

白と黒の剣に二色の光が宿る。

白には『始点』を刻む力が、黒には『終点』を刻む能力が宿る
『愚かな』

ただ一言聞こえたただけだった。

怯えるように叫んだウイストレアの姿が消える。その直後に雷撃。
幅二・三メートルはあろうかという蒼雷が白い床に穴を開けるパラ
パラ…と抉れた床の一部がクロアの服にぶつかって落ちる。あまり
の一撃の強さに一瞬頭が真っ白になってしまふ

「隔壁！」

気付いたのは直前。『絶対防御』の隔壁を出現させて襲いかかる雷
を弾き返す。

『…消えよ』

威厳に満ちた声が終わりだと言わんばかりに呟く。まるで耳元でさ
さやかれたように聞こえて思わず耳をかばう
蒼い光が隔壁にぶつかった。

幾つもの雷撃が同時に盾に襲い来る。クロアはなんとか両手を突き
だして弾き飛ばされそうになる盾をコントロールする。

「コイツ…プレイヤーじゃないな」

攻撃に無駄撃ちがないうえに、何というか無機質な殺意…だろつか、
言い知れぬ感情が…感情というのも間違いのようなものが伝わって

くる。

人ならば余程でなければカケラ程の感情は伝わってくるはずなのだが…それがあまりにも希薄だった。

クロアは隔壁に全意識を集中して破壊されないように努める。濁流のように潰そうとくる雷は次第に押さえつけるのも辛いくらいに強烈になつてきた。

途切れることなく続く攻撃に半歩分押される

「ちっ…いつまで続くんだ、コイツは」

今度は一歩分押される。

更に一歩、ゆつくりとだが確実に押し負けている。このままだとじきに破られてしまうだろう…

どうするか

そう考えていると、何かが足に触れた。

「なんだ？」

足元を見ると、白と黒のリボンのようなものが巻き付いたルイエスがいた。

(…まだ生きてたのか)

なんとも運が強いというか…なんとというか…クロアはやる気をなくしそうになりながらも『メビウスリング』を解除する。

「あ…ぐっ…クロアああ！」

突きつけられた銃口を蹴り飛ばす。

元から引き金を引く余力などありはしないが、抵抗されると会話すら困難になる。ここは適度に力の差を示せば相手の抵抗も消し飛ぶ。クロアはそれを知っていた。

「っ…！」

随分あっさり手から飛んでいった銃は隔壁から飛び出した直後に雷に触れて消滅する。武器を失ったルイエスはその場でうめきながら両手をただ握り締めた手から飛んでいった銃は隔壁から飛び出した直後に雷に触れて消滅する。武器を失ったルイエスはその場でうめきながら両手をただ握り締めた

「…おい、ルイエス。そんなことしてないで少し手伝え」

ルイエスが顔を上げて、何故？と聞いてきた

「ここから強制終了する。お前も死にたくはないだろう」

二歩分ほど地面が滑る。いい加減隔壁も限界だと訴えている。

…もう少し、耐えてくれ

そうなのだめながらクロアはルイエスの返答を待つ

「嫌だね。なんで僕が君の言うことなんて聞かないといけないんだ？君なんてどうせ『あの人』にやられるんだからね！」

「…あの人？ウイストレアのことか？」

「ハッ！あんな程度じゃない、この僕に協力を求めてきたもつと賢い奴だよ」

クロアはなんとなく理解する。

(こいつは捨て駒か)

そして今、それをしそうな人物を検索する。

エイド…あり得る。だが、あいつは違う気がする

ウイストレア…多分違う。こんなことするよりもあいつは直接殴りに来る

…となると

「お前に声をかけたのは、あいつか」

クロアは巨大な魔法陣の上にいる人物を指差す。集中が乱れて防壁にわずかな亀裂が走った。

「ならどうしたんだい？彼女と僕、二人に挟まれて君は生き残れると？」

撃ち狂え！『ヴァネッサ』！

もう駄目だ。

頭の中で諦めた。仕方がない。こうするか。

「少し防壁頼むぜ『フギン』『ムニン』」

バサリ、とクロアの足元から翼が広がる。黒い羽が巻き起こりクロアの視界を黒く変える

風が止んだとき、クロアは剣を振り下ろした。

黒一色の長剣。『黒陽』をルイエスに突き立てる

「能力付与『地縛』」

床の一部がルイエスの手足に絡むように動きを禁じる。地縛の能力は初めて使ったが…いまいち微妙だ

「おい、はやくして。こっちもたないぞ！」

クロアは『白陰』を手にした自分に振り返る。自分とそっくりな、でも実際はまったく同じ存在『クロア』の概念

「悪い。すぐ離脱の術式を準備する」

「もって二分！急げ！」

「まったく、わかってるよ」

完全に一人二役。ルイエスどころか魔法陣の上にいる人物すらも不思議そうにこちらを見ている

「なんだよ」

二人分の不機嫌な声が重なった。

「なん…だ、その姿は」

一応刺されたままのルイエスが苦しそうに言う。やはり説明は必要か
「神影固有スキル『フギン』『ムニン』。」

俺と『クロア』の概念存在を具現化する能力。」

「ちなみに意識は共有、クロアは二人分の操作を一人でやらないといけない…っ」と

「意外と疲れるな…ちょっと黙ってるよ『クロア』」

「だが断る」

ビキッ、と隔壁が割れて二人は頭上を見上げる。どうやら言い争いをしている暇はないらしい

「聞いているか？D。今から俺を強制終了させる。」

返事はない。通信が通っていないのか

「『電子の海、泳ぐ大魚、波の反乱巻き起こし全てを巻き込む争乱

となれ』」

メキツ、と嫌な音を立てて頭上が窪む

「急いで…!!」

「『荒ぶる波よ、全てを乱せ!』」

叫んだ。

最初の数秒はただ時が過ぎるだけだったが…やがてノイズが走った。

「もつとだ!もつと乱れる!」

クロアが叫び、『クロア』も同様に叫ぶ。

ノイズが数本走り、その数は次第に増していく

『これは…』

女性も気付いたらしい。

『データが崩壊値にまで変動?まさか…全乱数の強制操作ですか?』

呆れた、と言わんばかりにため息をつく

『これだから人間は…。もう少し機械を大切に扱いなさい』

その声は荒れ狂うノイズに半分ほど掻き消された。常に走り続ける

ノイズは遂に画面全てを覆いつくし、終いには

『システムエラー!!不正操作が実行されました。システムシャッ

トダウン。』

その表示すらもノイズの嵐の中に放り込んで飲み込んでしまった

クロアとルイエスのブツリと途切れた意識は現実世界の肉体へと回

帰する…。ガコン!と体が機械から投げ出される

いつもよりやや手荒な気がするのには気のせいだろうか?

『おつ、クロア強制終了確認!』

…あなたも無茶するわね』

Tがガラスに映されたモニター越しにうんうんと一人頷く

どうやら…なんとかメインコンピュータのダウンに成功したらし

い…。クロアは安堵の大きなため息をつく

『クロア君…。Gが怒ってるわよ?』

「わかったよ」

やれやれと呟いて扉に手をかける。押し戸の曇りガラス越しに誰か

の人影が見えた。

このパターンは…

ガチャリ！と開けられた扉からエアリアルが飛び込んできた。やっぱりこういうパターンか…

「おつかえりー！心配したよお！」

「うつつとうしい、離れる」

飛び込んで来たエアリアルを後ろへと流す。勢い余った少女はガラスにぶつかって

「あいたっ！？」

そう言っつて崩れ落ちた。

「ったく…先行くぞ」

鼻をおさえているエアリアルに素っ気なく言っつて小部屋を出る。

「ふぁ、まっふえー！（あつ、まっつてー！）」

クロアは後ろ手で扉を閉める。

ガツン！あいたっ！？という音がまた聞こえてズルズルとエアリアルが倒れていくのがわかった

「それくらいにしとけ」

静観していた楼騎が隣のブースに寄りかかったまま言っつ。

「ああ、そうだな」

ヒラヒラと手を振っつてクロアはわかったよ、と意を伝える。青年はどうだかな…と首を振る

「…まあいい。行くぞ」

楼騎が歩き出すとブースの内部から扉が開けられる。白い服を着た少年が這うように扉から出てくる

「クロア…お前、なんなんだ？この…！」

げしっ、とその頭を誰かが踏みつけて黙らせる

「ヘラヘラ、ごたくはいいよ。彼は人間離れしてるだけだから」

Dが明らかに楽しそうにルイエスの髪の毛をちよいちよいと引っ張っつてから改めて踏みなおす

ルイエスは手で足を掴もうとしていたがそれをうまく避けて管理者

は一つしかない出口を指差す

「行くよ、鬼のGさんがお待ちかねだ。へらへら」部屋を出て、中央管理室に入った瞬間頭に衝撃が走った。まるで板で殴られたような痛みだった

「この馬鹿者が！メインコンピュータをダウンさせる者があるか！僕はそんな奴は知らんがとにかくそこになおれい！！」

耳をつんざくような勢いで意味不明のお叱りを受けた。

「GさんGさん、落ち着いて」

「落ち着いていられるか！

こ奴のせいで復旧作業を強いられる僕らの身にもなれ！このうつけがあー！」

手に持ったメモ板による第二撃をしゃがんで避ける。

「まあまあ、おかげでデカイ獲物が釣れた訳だし、帳消しにしてやるうよ、Gさん」

「…ふん！僕はそんなに甘くない。じゃが…海老で鯛…いや、イルカを釣ったのもまた事実…」

むむむむむ…と考え込むGの隣でクロアはイルカ？と呟いた。

「イルカつてのはね、あなたが対峙した相手の事よ。まあ別にイルカつて名前じゃないから」

「T、お前いたのか」

クロアが何気に酷いセリフを言った直後、Gは仕方ないのう…。とため息をつく

「今回はこれ以上追求しないでおいてやろう…。あとD、僕の事をじーさんと何回呼んだあ！」

すぱーん！といい音がしてDが飛ばされる

Gはその後を追いかけて手にした板の角でビシビシ叩いていた。本当に呼ばれるのが嫌なんだな…としみじみ思う

「でねー、私の愚痴聞いてよ」

アレイア、無事なんだろうか…

勝手に話すTを無視してクロアは思考の海に潜る。アレイアの安否

と、ウイストレアのその後がとても気になったのだ…

第二十五章 オーディスタの知識の鴉（後書き）

あとがき

エア「やつほうく！本編ではあまり語られないカリスマランカー・エアリアルだよ」

クロア「……」

エア「一話から読み返すと私の扱い変わったよね、最初は黄色い悲鳴が包んだのに今はクロアに弄ばれるとは……」

クロア「撤回要求。悪人みたいに言うなよ」

エア「ひどいー」

クロア「うるせえ」

楼騎「……俺も影が薄くなったな。」

エア「大丈夫！私ほどじゃない！」

ガルト「ああ、俺なんてもう何話も……」

………

ガルト「何だよ？全員凝視して」

三人「誰？」

ガルト「ガルトだ！！忘れたのか？なあ！」

クロア「……登場フライング？」

ガルト「ずっと出番待ちだっつっ！」

楼騎「そんなに頭を抱え込むな、邪魔だ」

ガルト「ひでえ！クロア！覚えてろ！」

クロア「……おお、ガルトだったか！」

エア「もう部屋から走り去ったよう」

黒燕「ケツ、情けねえ」

クロア「後二百字で黒燕だと?!」

エア「やばっ! エンドコールが間に合わない!」

黒燕「ふん。黒燕様はこの世界の神! 字数制限なんか無視してやるぜ!」

エア「エンドコール! クロアから!」

クロア「そろそろ俺の主人公補正が発揮されるよな!？」

楼騎「知るか。俺の記憶フラグ、たぶんこの話じゃ回収無理だ」

黒燕「なら次の話でやっちまおうぜ」

エア「うう…えっと、私は次の話で頑張るよ! うん!」

黒燕「仕方ない…伸ばしてやるか…『延びろ!』」無理

第二十五章 『氷炎』の昔話（前書き）

ゲームファンタジー！

こんにちは、電池が残り二つ、パソコンがウイルス（と僕の手）によりご臨終された白燕です。くそっ

今回のお話は結構迷いました…。タイトルにもあるように昔話が主体、しかも『氷炎』。やるべきか否かは最後まで決めかねていましたが…書き上げました。

何故か昔話は楽しい（・・・）

こっ…キャラに厚みが増すというか、知られざる秘密がつ！みたいなのが好きなのかもしれない…自覚はないんですが（^^；
夏休み、しかもお盆が入ったので書く時間が少なかったので遅くなりましたが…これでちょこっとでも楽しんでもらえたら嬉しいです

それでは、本編へどうぞ！

* 0 (ノ)

6年間使ったPC、壊れたのは凹むなあ…（T|T）

第二十五章 『氷炎』の昔話

クロアはエントランスのソファ―に寝転がっていた。

夜遅い時間で軽い眠気が沸いてはいるが眠ろうとは思わない。こうしているあいだにもアレイアの身に何か起きているかもしれないのだ。休んでなどいられない

だが

ふと思う。俺に助けられるのか、と

さつきもメインコンピューターにログインする事は出来た。だがその後は失敗と失態以外の何物でもない…。クロアはかなり高いガラスから見下ろす自分を見つめる。

「俺は、何にも出来ないな…。もう少しくらいは何かできる奴だと思つてたがな…」

返事はない

「そっかなあ…私は頑張つてると思つよ？クロア」

コツン、と頭の上に冷たいものが乗せられて思わず飛び起きる

「びつくり…、いつも通り『ああ…』とかで終わると思つたのに」

エアリアルが隣にあつた椅子に腰掛けながら缶ジュースを一口含む。

「いつの間に来た?!」

「ちょうど新人クンがセンチメンタルになつちやつたあたりからなあ」

オレンジジュースと書かれた缶を何回か回して中身を攪拌させながら彼女はクロアに笑いかける。

はい、と渡された缶を受け取る

「私だつて昔はそんなだつたわよ…。どんなに頑張つても勝てないし、何度も失敗して恥ずかしい思いもしたし、『氷炎』なんて今考えたら恥ずかしい通り名もあつたし…今思えば、いい…：…やつぱハズイ思い出よう」

カタン、と椅子に缶が触れる。クロアは葡萄味の炭酸飲料に口をつ

けながら『氷炎』…と呟く

「なあ…『氷炎』って何のことだ？説明なしでお前らみんなその話をしてるだろ？」

エアリアルは目を丸めると、そういえばそうねえ、と頷く。

「仕方ない…新人クンの頼みとあればっ！」

「いや、頼んでねえし」

「話してあげるわ」

「話すのか…」昔々…といつても2年前だからね！

私が『ヴァルハラ』を始めたばかりの頃、すごい腕前のプレイヤーが上位を独占していたの。

1st 嶺

2nd 瀬名

3rd 御簾

4th 緋糸

5th 黒須

上位五人はなんと同じ同盟を組んでいた仲間だね、6位のランカーとの勝率差はなんと20%…。当時も今も化物みたいな強さは有名でね、彼らを敵は『死神』とか味方は『天界の守護者』とか…その時々で呼び分けてたの。

今思えば勝手なことだけど彼らも気にしないで日々遊んでたわ…。そしてある日、御簾さんと同じ試合に出たの。その時はまだ弱っちだったんだけどね、あの人は私の目の前で他の参加者を全滅させてこう言ったの。

「立ち振る舞いは悪くない。けど、まだ一手一手の詰めが甘い…。」彼女の手には氷の剣、私の手には三枚の初級呪符…彼女はいつでも私を殺せた。それでも彼女は立ったまま私を見つめていた。

「…あなたは、人を殺す覚悟があるの？」ゆっくりと喉元に突きつけられた剣は冷たかった。冷徹な冷たさ、凍てつくような冷静さ、

それら全部が私との違いだと気付いたとき愕然としたわ…。

私が叫んで呪符を放つと彼女は鋭く私の心臓を貫いて言ったの

「また戦いましょう。その時は全力で殺しに来なさい?」

あれは鮮烈な思い出だったわ…エアリアルは一旦話を区切り、オレ
ンジジユースを一口飲む。

「…で、『氷炎』は?」

「まあ待ちなさい、これからよ」

エアリアルは、ふう…と一息ついてもう一度話を始めた。今度はそ
の後の話…冷徹な強さに惹かれた私はその後変わったわ。

どんな時も意識を乱さず、感情を消して相手を仕止める…。最初は
只の剣だった私の武器が『フランメリーゼ』に変わったのはその頃
私のランクは徐々に上がっていき、ようやく中級ランカーの最上位
になったの。そしたらね、御簾さんにあったのよ

「『氷炎』エアリアル。昔はもつとかわいい眼をしたのにな」

よっぽど冷たかったのかしらね?私は言い返したの

「私はあなたの強さに惹かれました。昔より強くなっています。言
われた通りに覚悟を手にして」

「馬鹿ね、あなたが手にしたのは覚悟じゃない。思考を止めた逃げ
道よ」

軽くあしらわれた私はね、彼女に挑んだの。1 vs 1の戦いをね

「そんなに言うならば私と戦って下さい。今の私ならばあなたとも
戦えます」

彼女は笑って言ったわ

「馬鹿ね…そんな勝負やる必要はないわ。それは私たちのランクが
ものがってるわ」

「逃げるんですか?ランク3位のあなたが、ランク51位の私を相
手に」

御簾さんは今度は無表情になったわ…。そして

「いいわ。管理者に言って次の試合の前にエキシビジョン扱いで入
れてもらおうわ。私とあなた、『氷の御簾』と『氷炎』の戦いをね」

「ええ、必ず勝ちますから」

私は一人で会場に向かったわ…ズズズ…とクロアは炭酸の抜け始めた飲み物を飲み込む。

「ほう…お前の冷たい時期か」

「そうよう…。まっ今考えれば信じられないけど、たぶんそれは御簾さんのお陰」

エアリアルは缶を振って中身がないことに気付くとゴミ箱に向けて投擲した。

カンツ！と弾かれた缶が床に転がり、やっぱ無理かあ…と苦笑いしながら彼女は拾いに行く。ゴミ箱に押し込んで隣の自販機からさらに一本購入して彼女は椅子に座って封を開ける

「えっと…確か私と御簾さんの戦いの所からよね？」

エアリアルは話の続きを始めた。会場で私たちは顔を合わせたの。

「今日は乱入の特別試合だっ！御簾が指名したのは『氷炎』！凍てつく乙女の戦いだあっ！」

いつも通り司会が盛り上げたけど、会場は静まりかえっていた…。

私の、無表情で敵を殺すつてのが広まりきっていたから…私は悪役以外何者でもなかったわね

私たちは共にログイン、街中エリアで武器を構えたわ。

「貫け『フランメリーゼ』。」

「氷原の雪乗華、『白華』」

その解放だけでエリアの半分が凍り付いたわ。

「行くわよ。その強さに自信があるなら…せいぜい足掻いて見せなさい？」

「その言葉、返す！」

氷剣の名を持つ剣に炎熱の剣は優位に立てる。私は一撃で彼女の喉に剣を突きたてた。…と思ったんだけど

「『フリザード・ファントム
雪原の亡霊』」

剣が御簾さん突き抜けて何も無い場所を穿ったの

「言ったわよね？一手一手の詰めが甘い…って。本当の氷はこんな

火で溶けたりはしない。理解できて？」

「くっ…！」

ようやく背後に回り込まれたのを理解して私は剣で払った。素早く、鋭く

「…緋糸に弟子入りでもしたら？」

「誰が」

ピン、と服が張ったのよ

「何？」

振り返ると何て事はない氷の破片が引つ掛かっていただけ。でも彼女はほらねと言った

「だから甘いのよ」

彼女が振るった剣は凄かった。

たった一回の攻撃。しかも私には触れていない斬撃がエリアのもう半分を一瞬で凍らせてしまったの

もちろん私は氷漬け、しかも誰も助けてくれない1vs1…。私は絶望したわ。こんなにも弱かった力と悠然と佇む彼女の姿、凍り付けども凍らない悔しさが私をさいなんだ。

「わかったかしら？」

彼女は振り返りながらそう言った。そして

「…今度は私を本気で殺しに来なさい。そうでないともた凍らせてあげるから」

パキン、と私の世界が砕けた…。氷の破片と金の粒子が見えて、私は負けた。

「っと…言うわけよ。私の始まりから今までのお話、一回200円」

「有料かよ」

素早くツツコミを入れる。もっとも薄々予想はしていたのだが…

「飲み物代だ」

銀色の硬貨を投げ渡す。驚きの表情で受け取ったエアリアルはありがと、と笑う。

「…そーいえばあの時は妙なネタが噂されてたわねえ…。確か最上級ランカーは武器がもらえる、とかなんとか。何であんな噂がたったのかしらね？」

「知るか」

クロアは立ち上がり、ゴミ箱に空き缶を放り投げる。

カロン、と滑り込んだ缶はゴミ箱の中の先客達とぶつかって音をたてた

「G達を手伝ってくる。お前はそこで寝てろ」

「そう？…って寝れないわよ。乙女として！恋する子としてっ！」
ボタン。と無情に扉が閉じられてしまった…。エアリアルは一瞬泣きたくなつたがなんとかこらえる

「瀬名さん…あなたの苦勞がわかります…」

一筋だけこらえきれなかつた涙が頬を伝つたクロアは扉を閉めて試合会場を横切つて舞台裏のスタッフ用の扉を開ける。その先は薄い緑がかった廊下、クロアは先に進む。

いくつかの扉を抜けた先に中央管理室への大きな扉へたどり着く。内部からは何人もの人の声が響いていた。

『クロア』のキャラクターカードを端末に差し込んで扉のロックを解除、奥へ開いていく扉について行くようにして広大な空間に足を踏み入れる。

中央に巨大な機械が聳える中央管理室は今はかなり騒がしかった。

「D、復旧は？」

中央まで歩いていき、クロアはメインコンピューターを操作しているDに声をかける。彼は画面に表示されているキーボードを叩きながらそうだな…と考え込む仕草をする。

「誰かさんがエラーを起こした部分と、そこに付随したプロテクトの解除が70%。ついでにエラー時の仕様変更が50%つてところだね…ヘラヘラ」

だが、笑い声にもいつものような覇気がない。現在の時刻は…午前
三時。瀬名と出会ってからまだ十時間とたっていないことに驚きつ

つ、また非常に長いこの一日に軽い目眩を覚える「長いな、今日は」
「そうだね、君が余計なことをしなければ…全部カタがついてたかもよ？へらへら」

クロアは振り返り、部屋を眺める。

白衣を羽織った管理者達は主に画面の前で端末を操作しており、何人かは書類や本なんかを持って走り回っていた。

緑の制服の職員は数人がまばらにいただけであまり復旧作業に参加している様子はない。管理者達の働きと比べると随分と差があるようにも思えるが、普段は逆なのだろうとクロアは思う。

「D、手伝えることはあるか？」

キーボードを打つ音が止まる。

そのまま数秒硬直したDはゆっくりと振り返り、言った。

「ないよ。」

即答された

「即答かよ…。まあいいが」

軽くやる気を失いかけたがクロアは仕方がない、と軽く頭を振って眠気を払う。徐々に夜が更けてきたからか体が気だるさに飲まれていく…。

もう一度頭を振ってクロアは目を覚ます。

「なあ、一つ聞いてもいいか？」

「なんだい？」

カタカタとキーボード…と言うべきなのかイマイチ判断に困るものを叩きながらこちらも向かずDはクロアに返答する

「『氷炎』って言われてたんだな…。アイツ」

「…聞いたのか。」

「ああ」

ふう…とため息をつきながら彼は少しだけ手を休める。

「見えないだろ？今はちゃんと笑えてるからな」

「…ああ。それに、なんだろうな？」

妙になつっこい気がする。誰にでもあんな風なんて俺には一生出来

ないな」

Dはジツとクロアを見つめる

「…何だよ？」

いや、そう言っただけ彼は再び作業を再開する。カタカタと響く音の切れ間に

「鈍感」とか

「鈍いな」とか聞こえた気がした。

クロアは目の前の男に気にかけてつつ巨大な機械を見上げる

天井まではゆうに十メートル以上あるだろう空間にまるで柱のようなその姿には威圧される

「なら、私も少しだけ昔話といこうか。『氷炎』のその後だ」

彼はキーボードを叩きながら語り始めたまあ…、一年と少し前の話だな。

私はエアリアルがBUGと対峙した時に彼女と出会ったのだが、とりあえず妙な感じだったよ。

どこか遠くを見ていたんだ。別に『ブレイク』を受けたわけではない、違う理由…。

彼女と何度か話してね、ようやく理由がわかったんだ。

『天界の守護者』、最上級ランカー達の一斉脱退。それがあまりにもシヨックだったらしくてね、軽く人間不信になりかけていたんだ。まだあまり話す人もいなくて…と言うよりまだ彼女にキルされた人達は怖がって近寄らなかつたんだ。まったく難儀な話だよ

…そして、三回目のBUG遭遇の時、彼女は二人に出会った。

『マリア・フィオーレ』と『メリアル』。この二人は一般プレイヤ―だったがBUGと戦うエアリアルに加勢して驚くべき事にBUGを倒してしまつたんだ…当然、我々は彼女達にコンタクトを取つたが…拒否されてしまつたよ…。ヘラヘラ

そしてその時、彼女達は言つたんだよ

「やっぱり、御簾の言う通りの子ね」

「…メリアル、さん。あんまりそう言わない方が」

エアリアルはメリアルに掴みかかるようにして聞いた

「御簾さん?!知ってるの?!」

メリアルは腕もはらわずに言った。

「ええ。まだ危なっかしい子がいるから面倒を見てあげて…って。」

「…」

そのままその場に座った時の顔は未だに忘れられない…。藁にすがり、藁を掴んだ顔だったね、あれは。

「ソロプレイもいいけど、たまには仲間と一緒に戦ってみなさい。

状況判断・選択肢の取捨選択、今とは全然違うスタイルになるけれど強くなるわよ?クスクス…」

「メリアル…悪い顔ですね」

呆然としていたエアリアルにマリアは手をさしのべる

「…私達でよければ一緒にやりましょう。きつと楽しいですよ?」

エアリアルは戸惑いつつもその小さな手をとった…。カタカタカタカタ…とキーボードを叩く音がクロアの耳に響く

「…メリアルとマリアか…。どうりであいつら強かった訳だ」

あの鎌とチェンソーの二人組は忘れたくとも忘れられそうもないほどに強烈な強さをもっていた。ガルトとの協力がなければ…考えるだけでも恐ろしい

「ヘラヘラ、あの二人は元10、9位のランカーだからね。今はランクに興味はないみたいけど」

「本当、あの強さでランクに入らない方が逆に難しいわよねえ…」
背後からエアリアルが現れた。

Dはそうだね、と実に微妙な相づちをうち、カンッ!とエンターキーを叩く。

ブウン…と機械の動作音がして巨大なモニターが光を発する

「システム再起動成功」。いやあ疲れたよ」

管理室からまばらな拍手と小さな歓声が沸いた

「さて、昔話は終わりにしようか。次はこれからの話だよ?ヘラヘラ」

クロアは空気が変わったのを感じ、真剣な眼差しで頷いた

第二十五章 『氷炎』の昔話（後書き）

あとがき

D「あとがき…と」

G「む…クロア達担当ではないのか？」

D「知らないよ、まあ気まぐれだろうね」

G「儂らの出番少ないし…。たまには譲る優しさも良からうて」

T「えっ…」

D「なんだい？T」

T「なんでもない…うん」

G「さて、儂らも何かするかの。何がしたい？」

D・T「…」

T「あつ、私達の自己紹」

黒燕「黒燕様の力で却下だ。」

T「わっ喋った?!」

黒燕「そういえば初めてのリアクションだな。」

D「Gさん、燕鍋なんていいんじゃない？」

G「jeeーさん言うな」

D「いてっ」

黒燕「食うなよ、黒燕は食べ物じゃないからな？絶対食うなよ？」

T（フラグ立てちゃったー！）

G「主は何用じゃ？」

黒燕「てめえら静かすぎんだよ。盛り上げる小じわ！」

G「今夜は燕鍋で決まりじゃの」

黒燕「だが…作者権限で回避だ」

G「その程度で逃げたつもりかの？」

黒燕「背後だと?!」

T「Gさんが掴んだっ！」

G「じーさん言うな」

D「へらへら」

黒燕「いだだだだ！羽が痛む！黒燕様の艶やかフェザーに何しやがるっ！」

G「羽が邪魔で調理できぬからの…。まずは抜く。」

黒燕「目がマジだー！誰か助けるー！」

D「いやぁ…鶏肉はよく食べるけど燕肉を食べるのは始めてだな…」

へらへら」

T「夏の鍋も乙よねえ」

黒燕「ぴっ…！」

教訓『言葉には責任を持つ！』

T「オチ無し？」

うん

第二十六章 戦場へ(前書き)

ラーメン食べたい！(何

なんかラーメン食べたい…白河ラーメン…最近行ってないなあ…
くすん(っ…)

さてさて、煩惱終了(^^；

今回は…最終回…の、前の前くらい？

伸びるかもしれないけど一応それくらいの位置。ちなみにだいたい
こういうのはここでフラグ整(r y

…。

そういえば、昔(ここに来る前)この作者スペースで万引きとかの
犯罪に熱く語ったのを思い出しました

なんでだろ？選挙だからかな？

どこの政党が勝つか楽しみに待つとします

それでは、開票が終わるまでごゆるりとおくつろぎ下さいませ

第二十六章 戦場へ

メインコンピュータが復旧した。機械独特の重低音を響かせながら巨大なモニターに起動 %《パーセンテージ》が表示されている。夜通し続いていた作業から解放されて、何人かは歓声をあげた

「さて、君達にも仕事だよ…ヘラヘラ」

Dがクロアとエアリアルを呼び寄せてから館内放送でGと他のツバインを呼ぶ…。

「なあ、仕事つて何だよ」

「教えてあげないよ」

Dの言葉にクロアは軽くため息をつく…。

コイツのノリにはどうにもついていけない…。肩を落としてもう一度ため息をつく

最近、こんなのばかりだ…数分後、元からいたクロアとエアリアルを除いたツバインのメンバーが中央管理室にやって来た。

楼騎・ノピア・ヨロワの順で整列した後ろにエアリアルに手を引かれて並ばさせられる

「さて…Gが来ればokだね」

相変わらずのヘラヘラとした笑い方に微妙な緊張感がある気がした…。

いや気のせいかな。クロアは普段の行いからそう判断する。間違っても緊張するやつじゃないのだから

「待たせたの、主ら。こちらの方はやや時間がかかってしまった、すまんの」

Gがカツカツとやって来てそう言った。

「では始めるとするかの。D、あれを」

はいはい、と答えたDはメインコンピュータのキーボードを叩く。ジジジ…と音がして五人は一斉に頭上のモニターを見上げ、ぶつぶ

つとしたノイズが画面に表示されているのに驚いた

「ジャミングしたよ。これでメインコンピューターを介して私たちの会話は聞こえない…。再起動の時にちょこつと仕組んでおいたんだよ…ヘラヘラ」

Gが、うむと頷いて五人に話しかける

「これから、作戦を伝える」 ノイズが走る。

鎖で身動きを封じられている名がない少女の足元に、非常によく似た少女が横たわっていた。

数時間前に逃げ帰って来た直後、青い雷撃に背後から貫かれてから身動きをほとんどしていない。一応呼吸はしているようなので死んではないようだ…。

もつとも、BUGに死の概念はない。

自身のバックアップさえ残してあればたとえ『ブレイク』されようと入れ替わるのだから…

ウイストレア…！

拘束された少女は声が出せない口で呼びかける

何度も呼ぶが、ウイストレアは服の裾を握ったまま動かない…。

どうしよう、このままだとまた御母様に…。

雷撃の発射源にして彼女を拘束している張本人…。未だに姿を見てはいないがウイストレアは最初、半狂乱の様子で御母様来る！と叫んでいた。

まあ…その時攻撃を受けちゃったから、詳しくは聞けなかったけど…

彼女はぷつぷつと現れたノイズに気付く

お願い…クロア。この子も助けてあげて！私、やっぱり放っておけない…

「無理ですよ。」

ノイズが溢れて、三枚のローブを重ねた少年が空間から現れる。

エイド！

「…気安く呼ばないで下さい。私は今より『神影』となります。ウイストレア様の力をいただいで、ね」

ジジジ…とノイズが増幅される。

まさか…！

「『ブレイク』」

極彩色の光がウイストレアを飲み込んだ。

今まで身動きをしていなかった彼女は光を受けてこの世のものとは思えないような叫び声を上げて手に握っていた服の裾を引く次第にその手の力は弱まっていき、床に落ちて動かなくなる

「…ふうん、なるほど、これが『神影』の力ですか…。なかなか心地よいものですね」

嘘でしょ？

少女は驚きで目を見開く

『神影』の力が…奪われた？！

驚いたが、すぐに自分も似たようなことを受けていたのを思い出して冷静になる。

クロア、意外と時間が無いかも…

ノイズが世界を掻き乱して消える。

その場に残ったのは一人の少女だけだった… 現実世界・とある家

一人の人物がいた。

なんとなく眠れず、なんとなく星の見えない空を見上げていた。

「やれやれ…昔は一番星とか探すのだけでも楽しかったのに…今は星そのものが見えないや」

ぼてん、と縁側から家の中に倒れこむ。その家はとても広い日本家屋…を改装しており、ただっ広い家に二階と言う名の広大な空間が付随されていた

ふと、家の電話が鳴っているのに気付く

「およ？誰だよ…こんな夜中に…」

彼は電話まで歩いていき、受話器を取って言う

「近所のゴミ拾いから要人警護まで、何でもこなす何でも屋です。名前はまだないけどね」「…と、言うわけじゃ。主ら、わかったか

の？」

クロアは閉じていた目を開ける。

「ああ…。オムライスがどうした？」

「話聞け」

ガツン、とメモ板の角がクロアの頭にぶつかる。痛い

Gはコホン、と咳払いして他のメンバーの様子を窺う…。

「にえむ…」

あくびを噛み殺しながらエアリアルは呟き、

「ううん…メンマ…玉子…」

「しなちく…とるとろ…」

意味不明な単語を発しながら眠る双子と

「…起きてるぞ。」

キリツと一人だけ真面目に聞いていた楼騎を見てGは軽いめまいを起す

「主ら…起きぬかああああ！」

「ふとめんっ!?!」

「しらかわっ!?!」

Gの怒号に双子は目覚める。どんだけラーメン食べたいんだ…コイツらは

「もうよい。T!連絡はついたか？」

ずいぶん遠くにいたTが携帯片手に手を大きく振っている。どうやら肯定の意味らしい

…イマイチ理解に苦しむが

「ふむ。では行動開始じゃ

皆また例の回線を使う。管理者用ログインルームに移動じゃ」

まだうつらうつらとしているノピアとヨロワを先に立たせてエアリアルが最初に移動を始める

次に楼騎、続いてクロア。

待ってる、もうすぐ…

正常動作を阻害されているモニターを見上げる。何故だかそこにア

レイアがいる気がした…管理者用ログインルーム。中央管理室に付属しており、度々足を運ぶ因縁めいた場所、そこには今七人の人物がいた。

「まず最初は別サーバーへと主らを転送する。前回のアクセスでメインコンピューターが自動的に回線をブロックしてあるから全く同じ手は使えぬ…。じゃが、他を経由すれば接続出来るはずじゃ」
ほうほう…とDが頷く

「主の提案じゃろう！」

「そうだったねえ…へらへら」

もうやだコイツら

クロアは徐々に頭痛に変わってきたこの感情をどうにか押さえつけて個室に入る。

曇りガラスに囲まれた中には照明が一つと椅子型の端末が一台。クロアはそこに座り手足が機械に圧迫されるのを感じる

「いくぞ。主らに神々の祝福のあらんことを！」

頭を押さえる端末が起動して意識が薄れていく…揺らめくような意識は電子の世界で形を作りなおす。蒼碧のコートを羽織りクロアは地面に着地する。

「ログイン…ってここは…」

薄暗い空に死んだような町、いつだったか見覚えがある景色だった。

「よっ。と」

「着地い」

「すたっ！」

「到着ね、ヨロワ」

四人が少し遅れて現れる。エアリアルと楼騎はなんだが微妙な表情で周囲の建物を見つめていた。

楼騎は建物の壁を撫でて軽く目を閉じる

「…これは」

「お久しぶりですね、皆さん」

聞き覚えのある声があった。声の方を振り返ると若草色の上等な布地

に金の糸で刺繍した和装の人物がいた。常に笑っているような顔つきの人物は、おや、と二人の新顔に笑いかける

「お二人とも初めまして。私はこのサーバーの管理人、若草と申します」

ノピアとヨロワは一度顔を見合わせてからそれぞれ名乗る。

「ノピアさんにヨロワ君ですね。以後よろしく願います」

やんわりと会釈しあい、三人は自己紹介を終える。

「まずゲームマスターの方々に。私はこのサーバーを緊急回線としての使用許可を出します。これである時の契約は完了ですね？」

ブウン…とモニターが現れてGが映し出される。うむ、と重く頷いた彼女は若草に一人だけ言う

「主のサーバーは本来違法じゃ。じゃが…その完成度は高いからろう…仕方なしの特例じゃと言うことは忘れぬよう」

「はいはい…。私もこれを壊されたくはないのでね。仕方なくとは言え両者の思惑が一致したのは幸いです」

ふん、とGは鼻を鳴らして話を変える。

「ツバインの面々にはそこからメインコンピューターへとログインさせる。良いな？」

無言の頷きが返された。

「良からう。ではいくぞ」

五人の体がふわりと浮き上がる。

青白い光が包み込み、僅かな浮遊感に双子は感嘆の声を上げた

「クロア。アレイアをよろしく願いますよ？」

クロアは頷く。

「あいつを連れ戻したらお前らが出会った経緯を聞かせてもらおうぞ。若草は戸惑いぎみに笑う

「忘れなければ、そのうち」

体を包む光は明るさを増して視界全てを光の色に塗り替える。五人は互いの距離さえも見通せなくなったのを認識し、その空間から転

移していった

「さてと…。後は彼らに任せましょうか」残された若草は呟き、右手を水平に広げる。その手には巨大なリボルバーが収まっていた…。狙いの先は円と球で構成された生命体にピタリと定められていたズドン！と火柱が吹き出して内部から巨大な弾丸を打ち出す。

BUGは自分の体長の半分はある弾丸を受けて吹き飛ばされてどこかの建物の裏まで飛んでいく…。

「やれやれ…ですね、私が『御母様』とやらを裏切ったのはお見通しですか…。」

次弾を装填して若草は建物の裏から出てきたBUGに向けて銃弾を放つ。だが、今度は吹き飛ばされずに弾をはじかれてしまう

「…ちよつとばかり手間がかかりそうですね」

あはは、と笑いながら次弾を装填。動きに合わせていつでも撃てるように身構える

…三度目の銃声が響いた青い光に包まれたクロア達はすごい勢いで移動していた。光とほぼ同じ速度で東京という巨大都市の電線を何度も分岐しながらメインコンピューターへと転送されていく
終点までは長くかかったような気がした。

体を包んでいた光が弾けて、五人は宙に放り出される…。各自は体勢を立て直して床に着地する。

「来たわね…。メインコンピューター」

霧がかかった広大な空間の中でエアリアルだけが音をたてる。

五人は武器を解放して現れるだろう敵に備える…。一秒、二秒、三十秒、一分と待ち構えるが、迎撃部隊の現れる気配はない。

「…気付かれてないのか？」

「それは考えにくいわ…ですよね？エアさん」

ノピアがさかさず言い返してエアリアルの賛同を求める。話しかけられた本人は微妙な顔をしていた。

「う…ん…。ノーコメントでいいかなあ？」

「構わん。それよりも敵が来ないのならば今のうちに移動すべきだ。」

楼騎の言葉にクロアは賛同する

「議論をしても意味がない。敵が気付けば嫌でも出てくる。今のうちに先へ」

クロア！逃げて！

くらり…とめまいがしてアレイアの声が聞こえた気がした。刹那、世界がノイズに掻き乱され、無数の球体に囲まれてしまう…。

「ちつ。『BUG-01』か」

楼騎は舌打ちして『幽月』を構える。

五人を囲むのは8体ものBUG。一人一体というわけにもいかない状況にヨロワが不安そうに見上げる

「…お前ら、何者だ？」

クロアは言った。

黒い翼を広げるようにして『神影』であるフギンとムニンの力を発動する

刹那的に放たれた白と黒の閃光、彼を中心に一瞬にして全てのBUGを斬り伏せる

…。一瞬の静寂の後に取り囲んでいたBUG達がグズグズと崩れるように粒子に変化して消滅する。崩れた足元に積もった粒子はまるで砂金の山にも見えた

「すっごーい！クロアお兄ちゃん、つよくなったねー！」

クロアは『神影』を解除して首を振る

「こいつらはBUGじゃない…。少なくとも、今までのやつよりもずっと弱い劣化品だ。」

一体…何があった？」

クロアの言葉に、ヨロワ以外の三人は顔を見合わせる。大差は感じなかった…。三人の意見はそれで一致したのだ

深く考え込むクロアにエアリアルは明るく話しかける

「敵が弱くなつたのならラッキーじゃない」

サクサク進めるよっ！ねっ！」

キツ、っと二人を見る

「そうだな。」

「う…うん」

その笑顔の裏の威圧に二人は威圧され、頷いて参道の意見を述べる。クロアも少し間を空けてそれもそうだな、と頷く。

アレイア。お前はどこにいる

そんな思いとは裏腹に一行はどこまで続いてるかわからないほどに広大な部屋をまっすぐに歩き始めたノイズが走る虚空に二人の姿があつた。

一人はその場に倒れていて気を失っているようだったが、もう一人は炯々^{けいけい}と輝く炎を抱いた杖を手にしていた。

「…ふん。最初のは失敗でしたか…。確かにあなたの言う通りですよ？クロアさん…」

ですが…次はどうでしょう？」

足元に倒れてたいいた人物の指が炎の光に揺れた…。彼が杖を掲げると空間が歪み、新しいBUGが即座に作成される

「…行きなさい。クロアと人間、全てを消して構いませんので」

青白い光を出したBUGはつい先ほどクロアに切り裂かれた『BUG-01』とよく似ていたが、色が蒼白くなっていた。

一度だけ中央の核を揺らすとソレは姿を変えて創造主である目の前の人物に頭^{くぶ}を垂れる

「はい…。必ず」

人の姿になったBUGはまるで少女のような声で答え、ノイズの中に消えていった…

第二十六章 戦場へ（後書き）

あとがき

シロツバ「パソコン死んだ」

クロア「そうかい。邪魔だ」

エア「やつほー あとがきだよっ！」

楼騎「今回はシロツバがパソコンの弔いをしてるからな…。クロアも拉致られて俺らしかいない。」

ヨロワ「えっと…なんだっけ？ど…」『どたんば』っ！

ノピア「『独壇場』よ…」

エア「それじゃっ！最近のお気に入りを聞こう！のコーナー！わー…」

楼騎「…まあいいが。」

エア「みんな、お気に入りの曲を一つあげてっ！そして宣伝するのよ！」

ヨロワ「エアお姉ちゃん…わるいかお…」

ノピア「見ちゃいけません！」

エア「私は…コレかな？ワールドイズマイン！CD化もしてるボイカロイド曲っ」

この歌詞がいろいろ」

楼騎「…俺か。『twister』か？

すばらしきこの世界の曲の一つだ。あのリズム感がいいな。」

ノピア「なら…すばせかから『give me your all

love』！あの訴えるようなリズムがクセになりそう…」

ヨロワ「えっと…ぼく？…えっとえっと…『荒野流転』っ」

エア・ノピア「意外っ！？」

ヨロワ「いうただよ？」ほーろーびーとお『』」
エア「歌わないでえええ！軍曹がつ！見てるっ！」
ノピア「エアさん…またハレンチなっ！」
エア「なっ…何言っ…」

第二十七章 メインコンピューターへ（前書き）

前書きです。

今回、長いです。字数20000超えました

しかもあんまりにも長いので『上・下』に別れました
つまり、半分ですね

まえがきで語る部分はあるありません
ネタバレしちゃうしね

つと言つわけで本編へどうぞ

今回はあとがきも僕ですよ

第二十七章 メインコンピューターへ

カツコツと霧がかった部屋を歩く…。視界が悪いために歩き始めてからの正確な方角や距離はおるか時間感覚も霧となったかのようにあやふやなものになってしまう…。

この中を歩き続けていた五人はそれぞれに文句をいいながら歩き続けていた。

「お姉ちゃん…。もうなんにちあるいたの？」

「まだ何時間…。よ」

子供には流石に疲労の色が見えてきていた。いくらここがゲームである『ヴァルハラ』とはいえ感覚は現実とほぼ同じ。このままだと現実世界の肉体にまで悪影響を引き起こしかねない…

「ねえ、一旦休みましょ？二人とも疲れてるし、私たちも休まないと危ないわ」

エアリアルルの提案に、二人の少年は足を止めて小さく頷く。彼ら自身もこの霧にうんざりしていて少し休みたかったのだ

「なら…。ちよつと休みましょ…。足疲れたし…。ってゲームなんだけどね」

あはは…。と笑って彼女は座り込む。子供二人もそこに近寄って座り込んだ。

クロアと楼騎は周囲を確認してから座る。

どの程度歩いたのかはわからないが…。とても長くかかったような気がする。感覚が狂うと認識できるものが減ってしまうから怖い。五人はその場に座り、各々体力の回復に努める。座って目を閉じるだけでも人は回復できるのだから凄い。

クロアはそのまま心の中でアレイアに呼びかける

一体お前はどこにいるんだ？

その返事はない。

クロアはボンヤリと頭を持ち上げるもう一人の姿を見る。『クロア』

だ。

『クロア』、無事だったのか？

彼は同じ顔で柔らかく微笑む。クロアにはおそらくできないだろうその笑いはほんの少しだけ彼との差なのに気づいてクロアは押し黙る。二人の間には嫌な沈黙が訪れた。『クロア』が口を開いたのは数分後。彼はクロアに問いかけた

君が望むのは何？

クロアは答える。

「アレイアを助ける事だ」

『クロア』は質問を続ける

ならば君が失うのは何？

意味が分からない。と答える

あらゆる対価。僕らは君の喪失で力を得る。すなわち、君が差し出す代償…。

僕はかつて君を助けるためにこの身を捨てた。だから君も助けるためにその身を投げ出さないといけないかもしれない…。それを選択できる？ 『神影』の資格者

クロアは答える。

「…なんで失う前提なんだ？俺は何も失わないであいつを取り返すつもりだ。協力してくれ、『クロア』」

瓜二つの少年は曖昧に笑う

やれやれ、贅沢な選択だね…。うまく行かないだろうけど、頑張るって。

あと、BUGが来てるよ？上手く切り抜けないとアレイアは助からないよ

ブツン、と集中が途切れてクロアは目を開ける

「…」

「…」

女がクロアの顔を覗きこんでいた。

「…おい」

他の四人がハツとして左右を見回す。どうやら眠っていたようだ
「こいつ誰だ？」

指差しながら聞くとエアリアルが顔色を変えて剣を手にする。鋭く
突き出された切っ先が女の眉間を射抜いて吹っ飛ばす

「おい…いいのか？いきなり攻撃なんて」

「寝ぼけてんの？！私たち以外にここに人間がいるわけないでしょ
！」

クロアはボンヤリとした頭を振って正気に戻す。考えたら当たり前
だ。今ここにいる五人以外は全て敵の状況、迂濶だと言えな
かった。

吹っ飛ばされた人物は霧の先で立ち上がる…。体型からしてあまり
大きな体つきではないが細くともしっかりとした体で立ち上がる

「…おいおい、またかよ。」

「ノピア、ヨロワ！見ちゃダメ！」

また服を着ていないBUGだった。どうやら生まれたては全員着て
いないらしい…。

まったく、どういう基準なんだか相変わらずわからん…。クロアは
話しかける

「お前は何者だ？BUGか？」

少女は何も言わず、ジツとクロアを見つめる。次にアレイアを、楼
騎を、ノピアを、ヨロワを順に見てクロアに視線を戻した。

『『迎撃対象』。データリンク…。転送完了。サンプリング開始
します」

トスツ…。と軽い音がした。

「なっ…」

エアリアルが吹っ飛ばした距離をもろともせずその少女は右手を
クロアの体に突き立てた。ほんの一瞬で距離を詰められてクロアは
大した回避も出来ずに傷を負う双剣で少女を斬るが、うまくかわさ
れてしまった。

傷口はあまり酷くはないが…深くはないだけで痛みがひどい。治療に役立つような物は持ち合わせていないのでこの傷はもはや致命傷に近いものになっている

「クロア！大丈夫？！」

エアリアルが呪符を抜いて駆け寄ってくる。どうやら治療系の呪符を持っていたようだ

クロアは傷口を押さえて痛みを耐える

「ちょっと待ってて…楼騎っ！後ろお願い！」

「任された。」

『幽月』を手にした楼騎がBUGに警戒しながらエアリアルの背後に立つ。クロアの治療をしている彼女をBUGは見つめていた。

「サンプリングデータ『クロア』。解析完了…。『模倣』」

楼騎とクロアはBUGが服を纏ったのを見る。青碧のコート、襟に走るライン、形状・色彩ともにクロアの服装に酷似していた。

「…なるほど。これが衣服ですか…。これならば確かに恥ずかしくないですね」

ふんふん、と頷くBUGは両手を広げて武器を呼ぶ。

「巡れ。光剣『白陰』闇剣『黒陽』」

白と黒の双剣が彼女の手握られる。

その武器は名も、色も、大きさをさえもクロアの双剣と同じものだった。

「…なんだ？こいつ」

「能力封印『一撃断殺』」

いつの間にか背後に回り込んだBUGが剣と刀を触れさせようとす。それを察知した楼騎は半回転するようにしながら袈裟に斬り下ろす。鋭利な一閃が彼女を切り裂いた

「…っ！」

切り裂かれた彼女は距離を空けるために後ろへと跳ぶ。点々と赤い飛沫が白い床に染みを作った「はいっ！すとーっぷ！お姉ちゃん！」

「『インビジブル・ステール』不可視の糸！」

着地点へと先回りしていた双子が手につけていた糸を張り巡らせる。その糸はピアノ線よりも硬く、また蜘蛛の糸のように細かった。二人は素早く飛び回りながら器用にお互いの軌跡を絡ませあって堅牢な拘束を施す。

「よくやったわね！二人ともっ！」

エアリアルが親指を立てた隣でクロアはいかぶしげに眉をひそめる……。まだ生まれたばかりのBUGとはいえ、こんなに簡単に捕まるだろうか？

その疑問は相手の少女を見ているうちに氷解した。笑っていたのだ。

「二人とも！逃げる！」

叫んだが、二人はなんで？と首をかしげる。手も足も武器すらも絡めとった糸の拘束はそう容易く破れるものではない。

その武器の持ち主の子供はそれをよく知っていた。知っていたからこそ

「ゾクゾクする……」

後ろから聞こえた声に戦慄した。一体……。そう考える時間すらも彼女は許さずに拘束を破る。

黒陽の『能力付加』で『軟化』させ、白陰の『能力封印』で『結合』を解いたのだ。

白と黒の閃光が二人を弾き飛ばす！

「巡れ！光剣『白陰』闇剣『黒陽』！」

名を呼び、クロアは双剣を左右に広げて猛進する。その姿はまるで鳥、低空を飛び抜ける燕にも似ていた。

白い光が互いを結び、跳ねた剣の勢いで黒い剣の切り上げを強化する。

両者の思惑が一致した一連の動作、クロアは『能力』が互いの武器には無効であることに気付く。

面倒だな。

だがやるしかない。クロアは剣を鋭く振り下ろすガキン！と黒と黒、白と白の衝撃が腕を伝う。自分と全く同じ攻撃方法、それは間違え

ようなない事実だった。

くそつ、なんなんだ…こいつは

クロアは呪符を発動する。即座に起動したのは火符『火の粉降る夜に』

小さな火種が吹き出して一瞬だけBUGを怯ませる…。そのわずかな隙にクロアは黒陽を突き出す！

BUGは避けたが、足がもつれたのかバランスを崩した。そこに白陰を頭上から全力で叩き付ける！

「あぐつ…」

直撃。クロアは切っ先をBUGに向ける

「まだ生きてるだろ。質問に答える」

少女は動かない。

「お前はなんだ？名を名乗れ」

少女は肩を震わせる。

「答える！お前は」

「ヘル…。BUG - ヘル。」

少女は答える。顔を上げてはいないが…間違いなく彼女が答えた。

クロアはさらに続ける

「何故ここに来た。人間型BUGはアレイア、ウイストレア、エイド以外にいない筈だ。」

「…そうね、私はウイストレアを元に作られたBUG。本来の方々には遠く及びません」

時折震えながら彼女…ヘルは答える。怯えているのか、痛みか、クロアには判断がつかなかった

「そうか…」

クロアは剣を引く

すると素早くその剣をヘルが掴んで自分の首に突きつける。彼女の皮膚が切れて赤い血が剣の切っ先へと垂れていく

「やめないで…もつと…」

エアリアルがぼかんとしているのが視界の角に映った

「ハレンチな…」

「お姉ちゃんなにいつてるの？」

鼻血でも出すのか押さえているノピアをヨロワが不思議そうに覗き込む。

健全な子供には知る必要はありません。「…そっちの人お？」

「…。」

正気に戻ったらしいエアリアルがすつとんきょうな声を上げる

楼騎は無言で視線を反らして我かんせずと霧を見つめていた。そんな楼騎をエアリアルは服を引いて振り向かせる

「男の子ってああいうのが好きなのお？…ねえ…」

「知らん。俺は興味ない」

非常に言い放ち、

「うるうる…」

なんか見つめているエアリアルに折れる。

「どっちも特殊だ。クロアも、ヘルとやらも」

「俺は確定かよ！ふざけんな！」

クロアは剣を振り上げる。手が離れて自由に振り下ろせるようになる…。目の前の少女に狙いを定めて、力を込め

「痛い…痛いよ」

ヘルが血の流れる手を押さえて咳く。最初は感じなかったのだろうがそれは本来とても痛い傷痕、クロアは思わず手を止める

「痛いよ…痛い」

トクン、と大気が揺れる。

まるで何かに反応するように、一つ分の鼓動を刻む。クロアを除いた四人はその音に気付かずにした。

「痛い、痛い、痛い！くっ…あああああ！」

絶叫と共に極彩色の光が四方、八方、十六方へと放たれる。それは周囲全てを包むように弧を描きながら少しずつ落下半径を広げていく…。

ちよつと虹のようなアーチがクロアの頭上を掠めてすぐ後ろに落下

して床を壊す。物理的ではなく、電子的に『ブレイク』する。

「これは…マズいな」

身動きどころか…触れただけで『ブレイク』されかねない…。一応はツバインの能力で意識は保てるがそれでも受けるべきでない攻撃だ。

「『神影』…っ?!」

極彩色に輝く体をしたヘルがクロアの首に手をかけて、噛みつく。

「あ…かつ…」

表現不能な刺激が首を駆け上がり脳で弾けるように広がる。その刺激は…あえて言うのなら頭のデータを読み書きしているようななるとも奇妙な感覚だった。

クロアは力が抜けてその場に倒れる…。

ヘルは倒れたクロアには興味がないのか光のアーチを抜けて猛烈な速度で駆けていく「えっ…きゃわっ?!」

エアリアルの声が聞こえた。クロアは力が抜けた手足にもう一度力を加えて立ち上がる

次に軽く動かして四肢の状態を把握…。異常なし。クロアは少しだけ数の減ってきた『ブレイク』の脱出タイミングを計る

「くっ…そっ！」

楼騎の声が聞こえる。あいつも噛まれたのかそれ以降何も聞こえなかった

「ノピア…はいいか。ヨロワが危ないな」

主人公失格なセリフを呟いてクロアは一步前に動く。足のすぐ隣を

『ブレイク』されて一瞬硬直する

「ヨロワ…危ないっ！」

「お、お姉ちゃん！」

クロアは走り出す。この降り注ぐ光の雨はそんなに厚くはないはずだ。そう考えて光が掠めて服の一部を破かれてもそのまま走り続ける外が見えてくる。足を止めずにそのまま走り抜けた！光の壁が後方にできていた。

目の前の空間には『ブレイク』の光はなく、倒れた体を起こそうと
している四人と、ヨロワの隣で光り輝いているヘルがいるのみだっ
た…。

ヘルはまるで卵のような形の光の膜に覆われていてその中で座って
いた。

トクン

そこから鳴動が起きる。力強い命の鼓動、それは本来電子情報に過
ぎないBUGが持たないもの。ただのバグに命など無いはずだった
のに…

「成長…したのか？俺達のデータで」

トクン

ヘルが目を開けて、クロアを見る。

その目はとても綺麗に澄んだ水色。彼女は服を再構成して新たにす
る。

赤いフリルに青いラインを添えた帽子を被り、白と黒のワンピース
を着て、その上から紺色の着流しを羽織る。

和と洋の服が混ぜられたそれは彼女にとっても似合っていた。きっと
彼女だからこそ似合っていたのだろう。

全てを『模倣』したのだから。

トクン

彼女は膜に手を触れる

ツプりと穴が空いてそこから青白い光が噴き出した。光はまるで噴
水のように高く高く伸び上がり、やがて消えた

「『クロア』、『エアリアル』、『楼騎』、『ノピア』、『ヨロワ』

。各データを認識…。生命構造理論取得完了、データリンク」

彼女は右手をクロアに向ける。その指先には『0』と『1』が列を
作り出していた…。

「全てを統べよ。冥府の剣『罪剣 デュランダル』」

ヘルの手に黒い炎を燃やす刀が握られる。『フランメリーゼ』・『
黒陽』・『幽月』を真似た武器はその身の炎で大気を焦がす。

「キリスト教の聖剣：デュランダルか。柄には聖骸布と神の毛髪を収め、『斬れないものはない』力を持つ武器、だったな」

いつだったかガルトに聞かされた話だった。キリスト教の布教によってその名を轟かせたが、それは所詮侵略者。北欧の神の名を語る物には罪剣にでも見えたのだろうか…

「行くぞ…。白陰、黒陽。模倣品を砕く！」

トクン

二本の剣が鳴動してまるでうなずいたかのような錯覚を覚える…。

クロアは剣を手にヘルへと突っ込んでいく黒い炎と黒い線が激突する軽いステップを加えた斬撃は軽く払われてしまったがクロアの攻撃は終わらない。白陰で斬り、今度は守りが薄くなった右側に蹴りを入れる…！鈍い衝撃、脇腹に命中！

ヘルが半歩よろめいて手にした剣を切り上げる。それを素早く回避、反転して白陰で武器に封印を試す

白い光が二つの剣の間ではせて二人はその衝撃に飛ばされてしまう。やはり『矛盾』同士の戦いではお互いの武器に封印と付加はできないようだ。

それはメリットであり、デメリット。

クロアはデッキに入っているカードを選択して発動のタイミングを計る

「ああ…この感覚。いいわね…もつとやろ！オーディスタ！」
今だ。両手の剣を放して譲り受けたカードを発動する。

「轟け。幻影符『雷鳴』！」

パリパリという軽い振動と共に黄色い日本刀のような武器が手に収まる。これが…伝説のプレイヤーの武器…

クロアは一閃する。

轟音と轟雷が響きわたりヘルを雷撃の一光が捉える

「くっ…あああ！」

気合いと共にその雷光を受け止めたヘルに更に返しの一閃が襲いかかる！

「吹っ飛ばええ！」

単純計算で二倍、実質攻撃としてはさらにその上をいく斬撃には流石のヘルも耐えきれずに飛ばされた
そしてまた、所詮幻影に過ぎない剣もその力に耐えきれずに砕け散る。

「…っ、化け物じみた力だな。あの瀬名とか言うやつはこんな力を毎回使うのかよ…」

呆れ半分、同時に半分はその圧倒的なまでの力を羨ましく思った。
いつかはこんな力を手に入れたいもんだとクロアは両手に白陰と黒陽を生成して握る。

「まだ生きてるだろ？来いよ、ヘル」

雷光に姿をくらませた少女は背後から現れた。察知したクロアは右へ一歩ずれて黒いデュランダルの一撃を避ける

「『ブレイク』」

ヘルの右手が背中中に押しあてられる…。油断した。そう思う前に光がクロアを貫いた光が体を突き抜ける。痛みはないが、ガンガンと頭が痛み、そして酷い目眩が襲いかかる。

いくらツバインとは言え『ブレイク』を無力化できるわけではない。意識を奪われるのを回避する程度の耐性しかないのだ

「っ…っ…」

全身から力が抜ける…

『神影』化していたらより酷い影響がでていただろう。そう思えば少しはマシだと思えてくる

抜けかけた力を無理矢理引き戻して剣を手にしてヘルと距離を開ける。今もう一撃受ければ間違いなく意識ごと持っていかれる

アレイアを助けるどころではなくなくなってしま…。ふざけるな！

「亜式解放！」

闇よ、力を…

「邪剣『混沌幻影』」

手にしたのは巨大な螺旋剣。白と黒の刃が互い違いに噛み合わさっ

た大剣！オーディスタの剣とは違う、歪みの力！

「ヒハハハハ！」

闇が身体を支配して異常な高揚感と快感を幻錯させる

「行くぜえ！ついてこいよな！ククク…！」

クロアは『神影』としてではない力で一步踏み込むヘルの背後に移動する

「…！」

ヘルが振り返ればその反対：正面に移動して大剣を振るう！

一つの角が鋭く尖った剣が彼女を捉えて同時に数カ所に傷を作る

「隔壁！」

「おせえよ！」

隔壁が生み出される前にクロアは螺旋剣を振るう。今度は軽々と飛んだヘルを空中で補足する

「ラアツ！」

力任せに叩き付ける。黒い炎を上げるデュランダルが剣を受け止めるが：そんなもの役に立たない。立たせはしない！

床を砕いて墜落したヘルの首に螺旋剣を突き立てる。先端はサスマタのようになっており一度填まれば抜け出すことはできない。

押さえつけて無力化する。シンプルだが決まれば本当に何もできなくなる…

「…捕まっちゃったわ」

クロアは闇で宿った力に酔いしれながらヘルの首を押さえている剣に体重をかけて見下ろす「質問を再開しよう。アレイアは何処だ？」
ふるふる、と彼女は首をふる。押さえつけてはいてもその程度の間は残しておいた

「私にそれを言う権利は存在しません。まあ…もっと力を込め」

全力で踏む。一応骨がおれないように加減した。BUGに骨があるのかは疑問だが

「っ…！いい…すごく」

折れてもいいか。そんな力で踏む。

「答える。言うのか言わないのか、お前が言えるのは二択のうちの一つだけだ。それ以外は殺す」

赤黒く染まったかのような眼光にヘルは一瞬だけ押し黙り、答える。「言います……」

クロアは剣を放して闇を解いた。

「……どこだ？」

白陰と黒陽の間に寝そべる少女にクロアはキツイ口調で問い詰める。

「検索します……少しお待ちください」

そう言つて空へと手をかざす……。彼女の細い腕の先に球体が現れて、ぐるぐると球の中で0と1が配列を無数に変えながら高速で回転している

はじめてから数秒で彼女は手を下ろした。

「検索完了……。座標特定。プロテクションブレイク！」

パキッ、と白い空間がひび割れる。ひびは徐々に大きくなり次第には人が並んで四人は通れそうな巨大なものになる

「……こちらをお使いください。アレイア様がお待ちです」

そつと触れるとひびが砕けて内部の巨大なトンネルが姿を現す。

「あちらの四人は私が介抱します……。ですから、先に行つてください。」

クロアは倒れたままのノピアと、隣にいるヨロワを見る……。

「頼んだ。」

「私もすぐに追いつきます」

「……来んな！」

クロアは一人、トンネルへと飛び込んだ。

暗い足場が心もとないがそれでも奥へと走っていく……

「私も行きますのにね、エイド様を押さえないと……」

すくつと立ち上がり、手を掲げる。

「模倣『カラーージュコンディション』」

光が集まり、彼女を照らす。ヘルは光に小さく呟いて光を放した
空中をゆっくりと昇つた光はまるで意思があるような四つに別れて

倒れていた四人を包み込む…

「ん…あつたかい…よう」

「ちっ…やられたな。」

「お姉ちゃん！おきて！きれーだよ」

「ヨロワは可愛いよ…むにゃ…」

「お姉ちゃん…なんかへん」

四人は割と思いいいに立ち上がり、ヘルを見る。

「ああ…アレイア様がクロアに惚れた理由がわかりました…。あの眼、ゾクゾクします」

「いや、それはたぶん違うわよお」

エアリアルが一人、小さくヘルにツツコミをいれた…ノイズが走る。クロアはトンネルを走り続けていた。

最初はただ暗かった通路は次第に光を発するようになってきて今は淡い緑の光と粒子が幻想的に照らしていた。

壁にはサイバネティクスな紋様が刻まれており、時折その紋様に光が走る。

その度にノイズが走ってクロアは顔をしかめる

「なんなんだ…これ。頭痛てえ…」

不快な雑音に気分を害されつつも現実世界では存在しえない照明にはやはり美しさを感じる。

「でも…アレイアはどこだー！」

叫んで、迂濶さを呪う。

ここはBUGの住処。いることがバレれば囲まれて即ゲームオーバー。しかもバッドエンド直行だ

「やりにくいな…ん？」

トンネルの終端なのか道が暗くなっている…。入り口と同じ構造ならば然程たらずに外へと通じているはずだ。

「…」

躊躇う。

果たして一人で進むべきか…。ここは数分遅れても確実に人数を揃

えるべきか…様子を窺うべきだ。クロアは足を止める
ズズン…。鈍い衝撃と振動が響いてくる

「何だ…？遠いが…まさかあいつら戦ってるのか?!」
後戻りしようとして止まる。

「…あいつらは強い。今更行っても俺は足手まといか…。」
戻りかけた足を暗闇に向ける

「やられんなよ、お前ら」
もう一度走り始める

一度も振り返らずに単身先の見通せないトンネルの最奥端へ足を踏み入れた…エアリアル達は丁度クロアのいた場所と反対の位置にいた。つまりは入り口付近の明るくなってきている場所に円を組んでいた。

「手荒い歓迎だな。ヘル」

「ほんつとーにこれはあなたの指示じゃないのね？」

「当たり前です！私を人間のような姑息な存在だと誤解しないで下さい」

五人は手にした武器を握り、通路の左右を挟むようにはだかるBUG-アーサーを睨みつける。

「ノピア、ヨロワ、エア。三人、任せられるか？」

楼騎の指示に小さな頷きが返される

「行くぞ。手伝えヘル」

五人は三人と二人に分かれて数メートルの巨体を持ち上げる半液体状のBUGに猛進する。それぞれの手には武器が握られていてそれが照り返した光が五つの軌跡を描く

「不可視の糸」
インビジブル・ステール

「畏符『トラップホール』！」

「燃え上がりて全てを紅く焦がせ！亜式解放『炎刺赫染・フランメリーゼ』！」

ボコン、とアーサーの足元が陥没して落下していく…。

そしてその巨体を透明な糸がキリキリと締め上げる！いかにBUG

といえどこの状態では身動きを封じられる…

そしてそこに巨大な火の塊が降り注ぐ！炎刺赫染の肥大化したフランメリーゼが全てを紅く焦がした。

もう一方のBUGも鋭利な閃光と烈火の黒炎の裁断をうけて無数の線をその身に深く刻んでいた。

パチン。と楼騎が刀を収めるとその背後でグズグズと崩れていった…。

「増援感知。…この反応、正規BUGです！」

楼騎はやれやれと肩を落とす。

BUGの力を借りないといけないとは…。そう思いながら姿勢を低く、静かに柄に手を置く。

「3…6…9…12…15…20…30！捕捉成功しました。全員にデータリンク！」

各人のモニターにBUGを示す光点が30個表示される。それらは素早く入り口から入り込んできていて人が走るよりもずっと速く移動していた

「遭遇まであと3秒」

「秘剣…」

楼騎はゆっくりと息を吐き出して姿を現したBUG・01達を見る。
2…1！

「『細月』」

細い閃光が一回だけ走り抜けたBUGを示す光点がその一瞬で25個にまで数を減らす

「いまの…なに？」

ヨロワの問いにノピアが答える。

「一撃必殺の居合い切り…細月。いつ抜いたか見えなかった…」

まったく変わりのない体勢だった楼騎は幽月を抜いて始めて動いたように錯覚させる。『細月』の動きは誰も見えないほどに早かったのだ。

「ちっ…紙一重で避けたのが多い。全員気をつける」

それぞれが五体のBUGを相手にするという過酷過ぎる状況…せめてもつと力が援軍がいれば…！

楼騎が刀を振るうとヘルがピクンと入り口を見つめる

「ぼさつとしてるな。」

「反応感知…これは…人間?!」

「…何だと?」

予想外の返答に楼騎も思わず手を止めてしまう。体当たりをまともにつけて壁に叩きつけられる

『全員、防壁展開! 下手な防御なら叩き斬るわよ!』

『エア! 小域防壁展開しなさい!』

トクカードが二人分の叫び声を響かせる。五人は一斉に防御の呪符を展開する

「轟け!」

「凍てつけ!」

今度はカードからではなく耳に声が響く。その声を聞いてエアリアルは二人の人物を思い浮かべる…。

「『雷鳴』!」

「氷剣『白華』!」

黄色と青の斬撃が空間を凍らせながら猛烈な速度で走り抜ける。BUGと五人の隙間を抜けて二本の斬撃が全てのBUGを麻痺させ、凍結させる

トンネルの入り口方面から空中を走る機械が見えた。先頭を走っていた人物は手にカードを持っていてそれをすれ違い様に発動する

「風遊べ『疾風大鷲』!」

風を纏う双剣が一瞬にして全てのBUGを砕き、その姿を金の粒子に変化させる

後からやってきた4つの機械に乗った人物達に五人は掴まれて機械の上に乗せられた

「ゴミ拾いから要人警護まで、手広くこなす何でも屋、ご依頼品をお届けに来ましたー!」

黄色いワンピースに栗色ポニテの少女が笑いながら引き上げたノピアとヨロワに笑いかける

「Gから頼まれた『強い援軍』。しめて5人。全員『天界の守護者』よ」

青い髪の人物がそう続けた。栗色の髪の少女ととてもよく似た顔立ちをしていた…。

「せ…瀬名さん！御簾さん！」

御簾に抱かれたエアリアルが叫んだ。上級ランカーの最上位の存在と言っても過言ない憧れの二人がそこにいたのだ

「やつほ、また会えたわね」

「元気そうじゃない。心配して損したかも」

双子の姉妹は愉快そうに笑う。

そういえば一人忘れていたような気もするがまあいいやとエアリアルは思う

「言いたいことが一杯ありすぎて…何から言ったら…」

泣きそうになるエアリアルの肩を御簾は軽く叩く。慰めと元気付け。今は再会の喜びを語る時間ではない

「はい、ツバインのみんな！私は黒須。現在の敵の捕捉状況伝えるわよ」

後ろにちょこんと乗ったヘルが黒須を名乗った人物を観察する。

黒髪短髪、やや鋭い視線は仲間の司令塔といった感じを与える

「入り口方面に50！」

「黒須。嶺が帰って来たぞ」

まるでスケートボードのような機械に乗った嶺が四人に追いつく。

「酷いなあ…置いてかないでよ」

瀬名と御簾は答える。

「遅いわよ、ばか」

「ばかって言うなー！」

フン！と鼻をならした嶺に先程黒須に話しかけた青年が声をかける。赤髪赤目、さらには真紅のコートを羽織った青年は冷たく静まった

目で瀬名と御簾を見る。その顔は並みの男子では勝てない程に整っていた

「俺と黒須で入り口側は押さえる。他は先に行った奴を追ってくれ」
瀬名が大丈夫かと聞いた。

「ああ。」

「緋糸がやられるわけないでしょ、私がサポートするから大丈夫」
緋糸と黒須がそれぞれ答える。瀬名は頷いて二人に

「気を付けて」

と言った。二人は同乗していたヘルと楼騎に機械の操縦を任せる。

なんでもアクセルとブレーキだけのつくりで特別な操作はないから安心してほしいとのこと

「じゃあな。楼騎、弟にたまには顔を見せてやれ。」

「待つて〜緋糸〜」

二人は高速で移動を続ける移動用飛行機関『ライド』から飛び降りる

「リーダーは僕なのに…」

嶺が一人嘆いているが誰一人気にしていない。ここはエアリアル達も做すべき…なんだろう？若干人数の減った面々はようやく出口付近にたどり着いた。薄暗い闇の先には何があるのか…。

ライドが停止して、全員が地面に足をついた。

「さて…いよいよかな？」

嶺が暗闇を見つめて呟いた。

「メインコンピュータ 最深部」

「ラスボス手前のセーブ地点、ってどこかしらね」

三人は六人を見つめて、小さく笑う

「もちろん。って感じだね」

ヨロワが大きく頷いた。

「楼騎くん、私たちはあなたの指揮下に入るからね」

「名軍師の采配でも期待するわ」

瀬名、御簾がそれぞれ楼騎の肩を叩いた。

「待て。お前達俺を知ってるのか？」

三人は不思議そうに顔を見合わせるヨロワもエアリアルに何事かと聞いているが部外者にはわからない

「知ってるさ…。楼騎、君の家主も、想騎そりもね」

楼騎はそうか、と肩を落とす。

「二人は元気か？」

聞いて、舌打ちした。今の楼騎にはそんな資格などないのだと思いつ出したのだ

「…元気してるよ。今度伝えとくから…先に行こう」

ヘルが先頭を歩きはじめると前方から壁づたいに光がやってくる。

今までの背景の時とは明らかに違う光がヘルだけを飲み込んだ。

「…あれ？いないよ」

「本当…あれ？」

子供達がヘルが居た場所を撫でるが何も無い。忽然と彼女は姿を消したのだった…クロアは暗闇を抜けて、空洞にたどり着いた。ノイズが走る空間、縦も横も砂嵐が塗り潰した大空洞…。

その中央に、無限の高さから伸びている鎖を見つける。

手を後ろで縛り上げられたアレイアがそこにいた。

「アレイア！」

名を呼んで駆け出した。

部屋の中央までは遠かったがまるで気にもならずにとどり着けた

「おい、しっかりしろ。」

チャリ…と鎖が揺れて目の前の少女は目を開ける。そして、目の前の人物を見て笑う

遅いじゃない。待ちくたびれたわ

声がない会話が聞こえた気がした。ただ口が動いたただけだがクロアにはしっかりと聞こえた

「今外してやる。動くなよ」

アレイアは鎖の動きを止めた。クロアは白陰と黒陽を構えて意識を研ぎ澄ませる…

そして脆そうな場所を見極めて双剣の二閃を放つ。固い鎖に絡みとられそうになるが『腐蝕』を与え『結合』を封印する。ギシツと軋んだが、砕けなかった…

「硬いな…まあ、もう一度…」
来た。

トクン、と一度だけ大気が揺れる。ノイズが荒れ狂うように巻き起こり砂嵐の後には二人分の人影があった

「ようこそいらっしやいました。クロア様。アレイア様、ウイストレア様に代わりまして厚くお礼を申し上げます」

スツ…と頭を下げたのはエイド。BUG-エイド。

エイド！ウイストレアをどうしたの！

アレイアが声を張り上げる。もっとも声が出ていないのは…何故だ「少し意識を引き剥がしました。今は『ヘル』として第二の人生を歩んでいますよ」

エイド！

「いい趣味してんな…この野郎！」

クロアは双剣を向けて怒りをあらわにする。アレイアも激昂して叫んでいた

「…わかりました。では、召喚符『幻想空虚・因果転換』」

巨大な光がエイドを中心にこの部屋の入り口へと駆け抜けていった…何をした」

エイドはそれには答えずに手にしていた杖を床に一度押しつける。

赤い魔法陣が広がり、その中心に青白い光が現れる

球体状のその光はゆっくりと大きくなり、弾けた。

そこにいたのは、ヘル

「おかえりなさい。さあ、早速回収したデータを渡して下さい」
ヘルはそれを拒否した。

「私は…クロアの敵になりたくありません…。エイド様…」
「そうですか、では。」

極彩色の光が放たれる。

なんの躊躇もなく放たれた『ブレイク』はヘルのデータを壊し砕き引き裂いて彼女をデータの海に霧散させる

ウイストレア！

アレイアが叫ぶと、エイドがにっこりと笑う

「ウイストレア様は今まで繋ぎ止めていた媒体が消滅されたのでじきに目を覚まされます。そんな目をしないで下さいアレイア様」

憎々しげに睨むアレイアの隣でクロアは叫ぶ。ヘルはお前達の仲間じゃないのかと

「…何を言っているんです？

あれは私が作った人形BUG^{ひとがた}、正規の存在ではありませんが消耗品としては十分な性能に仕上げました。ですが…作ってみて分かりましたがやはり邪魔な不確定要素は『感情』ですね。あれもまたクロア様に特別な感情を覚えていたようです…。今度は排除して作成するとしましょうか」

それが何か？とでも言いたげな顔でエイドは二人を見つめる。彼は手を顔の高さにあげて周囲に霧散したデータを手のひらに集める。

そこに現れたのはフロツピーディスクを少し分厚くしたような記憶媒体MOディスク。エイドはそれを指で触れて中身を読み込む。

「ふむふむ…炎刺赫染、亜式の混沌幻影、なかなか興味深いデータの回収がされていますね」

そう言いながら頷いてエイドはアレイアに杖を向ける。どうやら何かをしたいようだ…

「少し緩みましたね、鎖」

パキパキと音がしたので見ると鎖についていた傷がみるみる修復されていく。すぐに叩ききるのは無理そうだ

「ではアレイア様、宴を始めましょう。夜のヴァルハラの大宴会を杖を持ち直したエイドにクロアは対峙する。不安そうに見ているアレイアに

「心配すんな、俺があいつを叩きのめせば時間ができる。そしたら邪魔な鎖を外してやる」

…
アレイアは小さくうなずいた。

わかった。負けないでね

クロアは声高らかに双剣の名を叫んだ。絶対に負けられない相手を前に全身が熱くなるのを感じた

「巡れ『白陰』、『黒陽』！あいつを潰す！俺に力を貸せ！」

「灯せ。幻燈『メディカラゴラ』、御母様に刃向かう人間に惑乱の幻影を」

二人の武器がその力を發揮して互いを牽制するように力を噴き上げる。すなわち『光と闇』『炎』の二つがこの虚空を満たす

「行くぜ！エイドオオオ！」

「お相手しましょう。馬鹿な人間！」

二つの武器がぶつかり合い、力の奔流が生まれた二閃が炎の壁を引き裂いて内側で杖を手に詠唱していたエイドはその攻撃を受け止める。そしてそのまま二・三言で詠唱を完了する。

「『ストームバーニング』」

クロアの足元を炎が円形に渦巻く。直感的に飛び退いて目の前で火柱になった魔法に舌打ちする。

結構威力高いな…

少し大きめに距離をとり、最善と思われる呪符を選択して発動する。両手が使えないので空中に出現した呪符はその場で力を發揮した

「盾符『水幕』」

体を包む水の膜があらわれてクロアを炎から守る。熱も遮断する水の盾は一時的とは言え炎対策には有用な呪符だった

「食らいな！『地縛』！」

エイドの足下に黒い影が現れて両足を地面に結びつける。こんな場所でも一応地面の判定はあったらしい

「『地を走る蛇、我が足元より出で目の前の贅を喰らわん』」
ゾワツと背筋に悪寒が走る！

これは…白蛇と同じ召喚術、出されては厄介だ。クロアは双剣に命

運を託す

「召喚『世界蛇・ヨルムンガルド』」

「白陰！能力封印『具現化無効』！」

発動された術に割り込んで無効化を試みる！白陰がメディカラゴラに触れて封印の力を使う。ジジジ…と二つの武器が震えて互いの力を反発させる

「くっ…何をしていますか！来なさい！ヨルムンガルド！」

「押し切れえええ！」

ビキン、嫌な音がして白陰が無理矢理封印の印を発動する

白い傷跡を刻み、一時的に術の起動そのものを封じた。大健闘の結果だったが、やはり無理が祟ったか白陰に現れたひびから炎が散っている…。どうやら強引過ぎてメディカラゴラの力の一部まで取り込んでしまったらしい…

やや不安の残る姿になってしまったが今はどうしようもないので目をつぶるとしよう。

「なんて無茶を…私の術を封印したところであなたに勝ち目などないというのに…」

クロアはその言葉を鼻で笑う。

「ハン、そんなこと言ってる下次は死ぬぜ？油断すんなよ、気を抜くなよ、俺に止めを刺されるまでな！」

エイド！お前のしたこと…二人のBUGにしたことを後悔させてやるぜ！」

エイドはやれやれと肩を落とす。

「何を言っているんです？」

アレイア様を拘束なさったのは御母様です。御母様に間違いはない…。使い物にもならなかったアレイア様が原因ですし、ヘルは私が作った模造BUG。失敗作は処分するのは当然でしょうに…」

三枚のローブが揺れる。何故分らないのでしょうか、とため息をついたBUGが足に絡む地縛を破り自由を取り戻す

「紅く燃え上がれ。灰なる人間。大地より縛するは地縛の影、天よ

り縛するは空鎖の戒め。さあさ焼き出せ『ヘル・プロミネンス』」
ジャラジャラと天より無数の鎖が現れる。それらは全て意思を持つ
ているようにクロアめがけて猛烈な勢いで降り注いできた

「くっ…逃げ切れるか？」

ギシツと力を入れた足が動きを止める。見ると先程エイドに使った
地縛がクロアの足を完全に固定していた

動かせない…。天と地の二つの拘束を受ければ次の攻撃で即死する
だろう…

クロアは内包存在に問いかける

何か方法はないか、と

『クロア』は答えた。

剣技

天から降り注ぐ鎖を二つの剣が弾き飛ばす。次から次へとくる鉄の
塊を発動した呪符の力を使って『自分への狙いを反らす』。

天剣斬。ヨロワ達と戦った時に手に入れた呪符がまた役に立った。
鎖は一度弾かれると碎けて消えてしまうので上からやってくる鎖だ
けを破壊すれば容易に対処できる

今、100本目の鎖を破壊した。

「よそ見しないで下さい。まだ攻撃いきますよ」

エイドの前面に炎で描かれた魔法陣が赤々とこの空間を照らしてい
た。その陣は六芳星と正方形を縦横に二つ並べたものだった。

「焼き尽くしなさい『ヘル・プロミネンス』」

ちっ

どうやらこのままでは詰みらしい。クロアは仕方なしに内包存在の

『クロア』と同調する。一時的に『神影』して固有スキルを発動、

『フギン』・『ムニン』に存在を二分する

「『隔壁』」

鎖を捌くクロアの後ろで『クロア』が巨大な火炎弾を受けていた。

一メートル程度はあろうかと思われる炎は隔壁越しでもその熱量を
感じさせた。

スゲー暑い

「ちよつとちよつと、こつち受けきれないよ？クロア！」

「うるせえ！話しかけんな！」

少し前に200本目の鎖を破壊したクロアは、気が散る、と叫んで
だいぶ落ち着いた数になつた鎖を払う。

いい加減、腕が痺れてきた。天剣斬も効果切れ。もはや気合いと気
力でギリギリ保っていた「クロア！」

「るせえつて…言つてんだろお！」

白陰が手からこぼれ落ちる。

一瞬の間が空いて手に痛み…、捌き損ねた鎖が手を叩いたのだ。そ
してそれは一気に筋肉を弛緩させて白陰を受け止めることすら出来
ない

「貰いました！」

「させないよ！クロア！」

隔壁がはせて火球がクロアを飲み込んだ。防御を捨てて撤退に回っ
たが故のあっさりとした結末…

エイドはそれを笑う。

「油断した…？違いますね。あなた達人間なんてこんなものです！
自分達の思い通りにならないと滅ぼす。そんな愚行の結末に相応し
いですね！」

「かも、な。ククク…」

クロアは笑いながら剣をエイドの肩にのせる。灰色の無骨な長剣だ
つた。

「…生きてましたか。どうやって？」

「簡単さ。『神影』としてちよいと力を使ったただけだ。んじゃ、あ
ばよ」

ガキン、と振るわれた剣が止められる。どうやら…

「後ろを取り、慢心しましたか？」

烈火の如く怒らせたようだ。

「『空を覆う天涯、蒼穹貫く紅き地平。灰塵とする魔手はヤドリギ

「でさえも逃れえぬ断末をもたらした」

詠唱の雰囲気が変わった。より痛みを感じる破滅の詠唱に…

「『永久とわにその地に命なし』」

終わる。ほんの一拍の間が異様に長く感じる…嫌な気配だけは徐々に増しているのだが…

「第二解放『罪フレイムス・ティンなす枝』」

杖が炎を吹き上げて炎上する。

みるみる杖が溶けていく。

メデイカラゴラの『幻燈』など微塵もない上位解放…。亜式のような別モードではない完全なる進化…

「さあ、いきますよ」

炎を払ったエイドの手に握られていたのは黄金の杖。先端に赤々と燃える炎を包むように存在する四本のくの字形の部分がクロアの顔面の前に現れる

「あぶねっ」

黒陽で受けたクロアは『神影』を解いて応戦する。こいつにデータを測られているのは感覚的に理解できていた。

だからこそ早めに解いて相手の出方を窺おう…。そう思ったのだ金と赤の光がクロアの喉元を掠めていく。どうやらエイドは手を抜く気はさらさら無いらしい。いきなり首狙い致命傷で来たのだからまちがいないだろう

黒陽一本で凌ぐのは辛いが…白陰はまだ使い物にならない。数分はエイドの術と同様に使用不可だ

「どうするか…。」

そう呟くとエイドがにこやかに答える。

「ここで消えるのはどうです？」

「寝ぼけんな、馬鹿が」

カチン、とBUGが苛立ったのがまるで手の上の出来事のようにわかった。

にやり

クロアは悪い顔で何かを思いついた。なかなか面白い作戦が浮かんだのだ。「やるな、そんなオモチャみたいな杖でよくもまあそんなに動けるもんだ」

ガキン、と振り下ろされた杖を受け止める。杖の持ち主は素早く状況を判断して後退する。

クロアの表情が微妙に違うのに気付いて、やや警戒していた。

「ありがとうございます…それとも、ふざけるな？」

クロアは首を振る。

「どっちでも構わねえよ。素直に感心してるぜ？オモチャみたいな杖でやるな…ってな」

「構いますね。『ふざけるな』」

再び炎が真つ直ぐ突き出されて、それを首を曲げてよけた。くるりと返された峰が頭を殴り、鈍い衝撃と星のような瞬きが襲う

体勢を崩したクロアにエイドは杖を両手で操って左右上下、回避場所のない連続技を披露する

「追撃『デイバンデイバーン』！」

ぼう…と小指の先端くらいの炎球がクロアのヘソのあたりに現れる。それはまるでガラス玉のように透明で、爆弾のように危険な炎を内包していた…チリツと小さく輝いてその球は炸裂した。炎が吹き出し、熱が襲い、風が吹き飛ばそうとする！

「ゲホツ…ゲホツ！くっそ…」

何とかやられはしなかったクロアは口から溢れる赤い液体を拭う。

『ヴァルハラ』は基本的には血の表現はないはずだが…。いや、この鮮明な痛みが生き死にの戦いを自覚させる。

痛え

心臓が高鳴る。一際大きく、うるさく！

いてえ…これが…アレイアの…ウイストレアの…ヘルの求めた痛みか

ゲホゲホと咳き込んで赤い水溜まりを作る。口を真つ赤に染めたその姿はとても異様だった

俺は、まだ何も出来てねえ！こんな場所で！こんな奴に引導を渡されてたまるか！

「俺は！負けられねえんだよ！アレイアを、ヘルを、助けるまでは…こんな終わりは望んでねえ！白陰、黒陽！俺の手に！」

二本の剣がクロアの手に出現する。ところどころ刃が欠けてたりひびが入ったりしている満身創痕の双剣…。クロアはそれに叫ぶ

「俺に…力を貸せ！お前達もそう思うだろ？巡れ！因果の端！無限と収束、対なる矛盾を抱いて力と成せ！」

エイドはその詠唱に驚く。

「まさか…こんな時に、こんな方法で次の名を？あり得ません」

クロアは双剣を手に、叫ぶ

「極限剣『矛盾交差』！」

トクン、とアレイアが顔をあげて呟いた。

勝負あつたわね…クロア　パキパキと剣が一つになり、まるで黒い水晶のような結晶になる。仄かな光を発するこの塊は数分とたたずに砕け散った

内側より現れたのは…白と黒に塗り分けられた一本の杖。二つ、上下に伸びた刃が白と黒の光を照り返す…

「何ですか？その珍怪な武器は…。剣…槍？いや、杖…でしょうか？」

「…わかんね。まあ、頼むぜ？『矛盾交差』！使いこなす自信はないが…」

どこからどう見てもテクニカルな武器。どちらかというとパワータイプのクロアには…向いていない。

それを手に取り、バトンのように回してみる…。うん、なんとか成功。

「做うより慣れる…だな。行くぜ？」

「戯言を。私に同じ系統の武器で勝てるはずないでしょうに…」

エイドは杖を弄もてあそびながら呟いた。年季が違ちがう上に生まれた時から数々の戦闘情報が搭載されている彼の知識と擬似的な経験は人間ごと

きが容易く超えられるものではない。

ましてや、たった今、新しく手にした武器で勝つことなど不可能。エイドはクロアの蛮行を憐れんだクロアは両端に刃のついたまっすぐな棒を回して軽く慣れる。長さは三メートル弱。二メートル八センチとあったところか。

重さは丁度よく、重すぎず軽すぎない完璧なバランス。重心は中央にあり動かすのには申し分ない作りだった
そして回転を止めて突き出す。

「おっと」

うまく避けられた。突きだしがたは槍に近く、

今度はそのまま武器の石突きの方を持ち上げて叩きつける。

こちらの感覚は剣に近い。クロアは今まで戦った相手の行動を思い返す…。『朱色』、『必中の神の槍』、『縫いつける百万余の軌跡』…『青竜』、『銀の煌めき』、『白陰』、『黒陽』、『ルージュ・アン』、『幽月』、『水映月』、『サディステック・プリンセス』…。槍と剣と、そして杖の『メイカラゴラ』、『罪なる枝』の動きを思い描く。

全てが鮮烈に思い出されてその全てが『矛盾交差』を動かすイメージに変換される。

「そついや、Dが言ってたな…。『ヴァルハラ』はイメージの戦い、だっけか」

クロアは白い刃を突き出す。朱色は確か…一点を貫くオレンジの槍だったな。

「なっ！」

突然精度を増した突きがエイドを掠めた。当たらないと思っていたのに計算が狂ったか正確な間合いが掴めない

「フレイムズ・ティン！」

鋭く弧を描いた金の軌跡。名を呼ばれた杖が主の敵の首元を薙いだ。しかしそれは不発。後ろに跳んだクロアにかすりもしなかった…が、本来の狙いは威力をそのまま乗せた第二撃、返した先端での強打だ。

クロアのこめかみを狙って出された強打が白い刃に阻まれる。

「能力封印『火炎』」

バン！と杖が弾き飛ばされた

まるで力を失ったような杖は所有者の三メートル後方に落下して乾いた音を立てる。

「『影閃斬・連』。」

一瞬にして二回の衝撃がエイドを襲い、杖の元に吹き飛ばす。

「ハッ！何だよ、弱いな」

「…よくもやりましたね」

隔壁で刃は阻んだものの、衝撃は殺しきれなかった…。ズキズキとした痛みを意識しないようにしながらエイドは力が封じられた杖を手にとる。二・三言呟いてみたが反応はない。

「…武器の存在観念にまで干渉していますか。なんとも卑怯な力ですな」

「そうだな。俺もそう思う」

くるくると白と黒が円を描く。今のままでは…。エイドはウイストレアへと手を向けて、叫ぶ

「我が傀儡かいらいとして起きよ、神影の殉教者！」

大気が大きく揺れる。意識が無かったウイストレアに無理矢理擬似的な意識を埋め込み、目覚めさせたのだ。ウイストレアアレイアが呟いた。

「…お前は、ウイストレアか？」

ゆっくりと立ち上がる少女に問いかける。

「…ええ。当たり前よ、クロア」

パキパキと彼女の手元に武器が生成される。それは巨大な鎌で…黒く畏怖の念を刻みつける迫力を持っていた

「ウイストレア様、やりますよ」

「はい、そうですね」

エイドの指示に頷くウイストレア。何か変だ…

「ウイストレア。お前、正気か？」

「あたりま…え…っ、目眩が…」

彼女は軽く頭に手をのせる。

BUGにも目眩とかあるのかとか思ったがクロアは手にした武器を操って二人を攻撃対象としてロックする

「悪いが、アレイア救出の邪魔するなら叩きのめすぜ？ウイストレア」

ヒュンヒュンと風を切り、武器を止める。だいぶ手に馴染んできた。クロアは矛盾交差を体の後ろに持ちながらウイストレアに挑む

長物同士、ロングリーチを失わないように気を付けながら互いの武器の間合いを見極めて武器を振るった金属がぶつかり合い、素早く二色の光が離れて激突する

クロアは槍の技法を中心にうまく上下の刃を切り換えながら大きな隙を作らずに連撃する。ウイストレアは長い鎌を巧みに操りそれを迎撃、返された刃を石突きで弾き返してクロアのよるけた一瞬に魂を刈り取るうと黒い斬首を放つ！

後方に宙返りして回避。クロアは二撃目の斬首を黒い刃で払う。

「能力付与『自傷』」

武器を振るう度に自分の体を傷つける力を与えた。時間としては長くは効かないが…暫くの間相手は攻撃しにくくなる

「矛盾『光の軌跡』！」

無数の細い光が照準器のようにウイストレアの体に照射される…。

これはこの技法の下準備、次の呪符でその照準に攻撃を命中させる。

「連舞『闇の追走』！」

二枚の新しい呪符の力を発動する。クロアは武器を器用に、そして巧みに操って正確無比にウイストレアに点る光を打つ

その速度は目では追えず、ただ一瞬視界に黒い影が入ったようにしか見えない

「死出鎌『是無空開闢』」

ウイストレアの足下に突き出された鎌が空間と物理法則を無視してクロアの足下から突き上がる

「ぐっ」

鎌の刃の反対側、割と小さな金属部分がクロアの顎を打つ

「浮錬鎌『迎慧墜煉』」
げいけいづいれん

空間位置を無視したまま鎌が振るわれる。柄が顔を打ち、後方まで下がった鎌が引き戻される

「私だってあなたやアレイアには負けられないのよ」

鎌が首へと引かれた

後ろへ逃げれば即座に殺される状況でクロアはウイストレアに突進した。

「いたっ！」

「正気じゃないんだな…お前。ならば容赦しない」

鎌の柄を握り、動きを封じる。

「『天鎖の網 六花錐』」

鎖が六角形の底辺を上空に作る。

そして各頂点から鎖が伸びて錐の形になる。内側に封じ込められたウイストレアは小さく舌打ちして鎌で防壁を殴る

ガン！ガン！と叩かれても防壁は何事もないように平然としていてウイストレアは小さく舌打ちする

「アレイアの術ね？よくも…」

「…呼び捨てか。まあ、当然なのかもな」

正気ではないウイストレアに今は何を言っても無駄。クロアは武器を軽く振ってエイドに向き直る

「…。予想より若干早いですね。」

「当てにならない予想だな…。BUGならBUGらしく演算してキツチリ求めな」

売り言葉に買い言葉。互いに牽制しつつそれなりに苛立っていた。睨み合うこと十秒。パキンと武器が鳴った

赤い光が飛び出してフレイルムズ・ティンに吸い込まれていく…。どうやら封印の時間切れのようだ

「今のあなたを倒さなければ我々に多大な不利益が生まれそうです

ね…。仕方ありませんが、本気を出させて頂きます」
チャリ…。杖が水平に持ち直されて顔の前に持ち上げられる…。炎
に照らされた金の輝きが灰色と表現すべきこの異空間に鮮烈に輝く
「神影なる力を解き放て。我はここに金の雄鷄を屠して災厄の枝
を手に入れる。金色の尾羽を手には、我はアースガルドの神となる」

罪剣『レーヴァテイン』

第二十七章 メインコンピューターへ（後書き）

あとがき

こんにちは、白燕です

今回のお話は楽しんでもらえましたか？

まえがきの通り、ちよつと長くなるので一旦区切りました（^^；
長い間やりたかった戦いだから楽しくてつい…初期案では無かった
り、途中で断念してた『矛盾交差』まで出してる辺りやりすぎたか
も…とか思ってます

終端へと向かう物語、もうしばらくお付き合いくださいませ

あとがきおわり

つてな訳で紹介コーナーミニ確保あ！

二人分手早く行くぜー！

『緋系』

旧作りバイバルキャラ。赤コートのクールガイ。

武器はまだ出てないけど炎系。

ちらつと出ただけだから書く内容がないちよつと捨てキャラっぽく
なってしまうって不遇

『黒須』

旧作りバイバルキャラ。ツンデレとは言えないツンデレ。むしろツ
ンベタ

大分前に名前だけは登場、今回ようやく姿が出せて本人はちょっと嬉しそう

武器は…まだ出てないけど、弓

ちなみに某携帯戦略ゲームでアチャやってるキャラは昔の彼女

本人いわく「平行世界の住人よ」

第二十八章 罪なす災いの剣（前書き）

まえがき

リニューアル後の初投稿です

ところどころ変わって使いにくい…（^^）；

慣れれば問題ないんだろうけど、それまでは辛いなあ

特に改ページが見えないから多用するシロツバにはややきつい仕様
変更です…

とりあえず、まえがきとかの領域が延びて幸せです。携帯からだ
全部埋められないのが口惜しいですが…

さて、本題

今回は前回の『下巻』にあたり、物語の終盤戦…気合いいれて
がんばりました

今まで溜めていた物を一気につめてパッケージング、皆様にお届け
します

それでは、あとがきでお会いしましょう（ ）（ノシ

第二十八章 罪なす災いの剣

天より舞い落ちる金の羽が今、この場にいる四人の視線を釘付けにする。ひらりひらりと揺れる金色の尾羽根は天に掲げたエイドの手に握られる…。

「フィドフニルを殺す、唯一の武器…。今ここに具現化してその力を行使せよ！荒れる炎は紅蓮を焦がし、振るう力は天を裂く。

フィドフニルの尾羽根を対価に解き放て！『罪なす災いの剣』」
レイヴァーティン

天空を切り裂く炎が現れる。天より出でたか、地より現れたか、その強大な火力は天地を無差別に焼き焦がしてゆっくりと姿を安定させていく……。

「これは…」

マズいわね

クロアとアレイアが小さく呟いた。二人の眼前には大きさ数メートルを誇る火の塊が陽炎を共に揺れていた

その圧倒的な存在感と熱量に全身の筋肉が弛緩しそうになり、アレイアにクロアの名を呼ばれてハツとする

屈伏にはまだ早い。手にした『矛盾交差』を軽く操り息を整える…。

よし、行こうクロアは両端の刃に意識を集める。左右の打ち分け、その記憶を呼び起こす…

以前戦った記憶におぼろげながら鎌の軌跡を見つけてだしてそれを頭の中でイメージする。このゲームの戦いはイメージに依る戦闘。イメージすればするほどそれは優位に作用する。思考を止めれば殺される。思考を止めさせれば殺せる。クロアが戦いの中で獲た最善手への道はそれだった

「初刃『袈裟』」

易々と受け止めたエイドの足下に刃が突き刺さる。狙いを外した？
そう思わせて次の技を連続する

「『返し刃』あー！」

一気に振り上げた白い刃をレーヴァティンが受け止める。流石に簡単には割り込めそうもないこの敵に小さく舌打ちする。

「『炎刃…』」

冷たい声が一撃で終わらせる技をつむぐ。

「『皆滅』」

大気そのものがレーヴァティンに引き付けられて一点へと強風が吹き荒れる。その中で身動きを取れずに出来た隙に回避不能な一閃が放たれた。

刹那的に防壁を展開して威力の軽減を試みるが…その火力を目にしてそんなもの気休めにしかならない事を悟る。何故ならエイドの武器は悪意のような業火…いや、いかなる表現でも現し尽くせないような火力で武器を振るった。

『一撃断殺』は見たが…『一撃滅殺』とは呆れて物も言えない…。
荒れ狂う炎の濁流に吞まれたクロアは耳元で小さな声を聞いた。

「世話が焼けるわね…新人くんは」熱を感じたのは一瞬だけだった。次に感じた熱はどうやら違うようで…柔らかな匂いを連れていた。

その匂いの主は笑いながら手にした剣を一閃した。

「やっと追いついたわよう…クロア」

「いいとこ取りだな…エアリアル」

手にしていた幻影氷剣が砕け散りパリンパリンと床で細かく割れる。熱は絶対零度にまで引き下げられた大気が相殺し、消滅していた…やるわね、エアも」

さらに声がして振り返る。そこには六人の姿があった

「御簾、ちよつと黙ってて」

「クロア。無事か？」

「お兄ちゃん！」

「ま…平気そうじゃない。ヨロワに心配させてんじゃないわよ」

「援軍到着…つと」

瀬名、楼騎、ヨロワ、ノピア、嶺がそれぞれ空中に浮いた機械から飛び降りてくる…。なんだあれ？ UFOか何かか？

「おかしいですね…。あなた方は…御母様が足止めをしていた…はず…っ！」

レーヴァティンが再起動してその炎を周囲に撒き散らす。エリア全てを巻き込むほどの大斬撃を放った直後にこれだけ早く起動するのは…伊達に伝説の名を冠してはいないということか

「悪いな…俺はお前と遊んでられねえ…。終わらせるぜ！ウイストレア！」

エイドが振り返る。その先には砕けた六花錐…そして、鎌を手に立ち上がる少女の姿があった

「エイド…クロアは、私が仕留めます…。お姉様を…巻き込まないで…」

レーヴァティンの破壊力はBUGですら殺しきれないらしい。胸を押さえて息を切らせる彼女を見てエイドは小さく首をかしげ…そして頷いた。

「そちらはお任せしましょう…。私は他の侵入者を排除します」

クロアは武器を握りなおし、他の面々は武器を手にエイドに照準を定める。思った以上にこの場所は泥沼と化してきていたウイストレアの鎌が光る。

柄で正確にクロアを狙い、それを右手で受けた彼はそのまま吹っ飛ばされる。二メートル程度飛んで着地する。地面で情性を殺して着地…武器を左手から右手に持ち変えてウイストレアを迎え撃つ

「ふん、多少はやるようね？クロア」

ギリギリと細い柄で槍のような刃を受け止めたウイストレアは呟く。幅数センチの円形部分で正確に受け止めるコイツの技量もいかなものかとクロアは内心ため息を一つついた

「鎌符『弧を描く銀の軌跡』」

ヒュ、と右下から鋭利な一撃が手の矛盾交差を弾き、鎌の刃とは反対側の金属部でクロアを殴り付ける

頭が割れそうに痛み、くらりと意識が遠退いていく…。先端部が腹部を突き、息が止まる。前のめりになった所を刃が首めがけて走る

ガツン、と硬いものが顎を打ち体が舞い上がる

「あれ？ミスった…？」

刃のない中央部分で殴られたクロアはアレイアの隣に墜落して、そのすぐそばに矛盾交差が落ちてくる

クロア！大丈夫？！

「っ…まだまだ…」

つう…と垂れてきた血を拭い、アレイアの隣で立ち上がる

「お姉様…私は、あなたを殺します。あなたの大切なものを壊します。嫌ならば抵抗してみなさい！」

鎌を振り構えたウイストレアに小さくクロアは呟く「お前、何を企んでる」

ウイストレアは何を？と首をかしげる

「何のこと？私は、クロアを抹殺しろと言われた。ならばいつそのこと二人をまとめて殺つちやえばいい話…」

「嘘だな。お前…正気だろ？」

ウイストレアは鎌を振るう。その狙いはクロアの首…

「何を！」

「呼び方、アレイアから『お姉様』に戻ってるぜ？忠犬が」

ピタリ、と鎌が首に触れて止まる。薄く切れた場所からまた血が流れる

「…迂闊、ね」

ウイストレア？なんで…

アレイアが不思議そうに見上げる

私をあんなに敵視してたのに…

ウイストレアは首を横に振って否定する。違いますと言って胸を押さえながら呟く

「最初はそうでした…。BUGでありながらBUGの存在理由を無視したあなたが許せなかった…。でも、こんな事は間違ってた…私には、御母様と同じ結論は出せません！」

叫んで、少しだけトーンを下げて彼女は話を続ける。ほんの少しだ

け声が震えていた

「私は…私が…お姉様を想うのは何故でしょう…。私の中の『ヘル』のせい？いいえ、きつとお姉様と同じ世界を見たから、共有したから、全てが変わったんです…お姉様をこんな目にあわせるいわれはありません。」

…この鎖は『神影』にしか断ち切れない。今のお姉様は力を奪われ、私が持っていた力と共にエイドに取り込まれています…。クロア、まさかこんな事を人間ごときに言うとは思わなかったけど…。協力しなさい、お姉様の為に、私たちの力を奪い返すのを！」

「いや、断る」

すっぱりとクロアは首を振って拒否する。あんまりにも唐突な展開に二人の良く似た少女達はポカんとクロアを見つめるしかなくなつた。「別に俺はそんな取引に乗るつもりはないし、BUGの実情や内情には興味ない。ぶつちやけると御母様とか言うのもどうだっていいしな…。」

ウイストレアはふざけないで、と叫んでクロアに掴みかかる

「バカじゃないの？！御母様はそんな風に扱っていい存在じゃない…。まさか、お姉様を見捨てるつもり？！」

「バカはお前だ。見捨てる気なら最初からこんな所に来るか。」

俺はアレイアは助ける。それまでに降りかかる火の粉は全て払う。

そのスタンスで貫いてるんでな…。興味ない奴らでも邪魔するならば叩き斬る。御母様だろうがなんだろうが…全部だ！」

二人はそうなのか…と顔を見合わせて意外なスタンスに目を丸くする

「…目的が同じならばその途中は手伝ってやらなくもないがな」

そう呟かれた言葉にアレイアは小さく笑う

素直じゃないわね

「ふん、やっぱりあんた嫌いよ。でも…手を貸してくれるんでしょ？ひねくれもの！」

クロアは小さく頷いて

「ひねくれてるのはお前だ」

そう付け加えた。

「んな…？人間ごときが戯言を！」

「見下してんじゃねえ二次元生命体が！」

「んなつ！…言ったわね！」

ギヤスギヤスギヤーギヤーと二人は叫び合い、取っ組みあいになるうかと言わんばかりに互いに言い争う

本当に素直じゃないわ

アレイアは一人笑う

ねえ、二人とも。それは後回しにして…まずは…

燃え盛る炎の先にいる人物を見る。異様に長い炎の剣を手にしたエイドが一人で七人ものプレイヤーを相手に余裕の戦いを演じていたクロアとウイストレアは話の矛を収めて手短かに作戦を立てる

「まず、お姉様を解放して…」

「…そうだな」

待つて、それより先にエイドを！今のウイストレアは『神影』じゃないしクロアの『神影』の詳細データをとられると厄介よアレイアがクロアに告げる

私より先に、エイドを。

流石にウイストレアも嫌そうな顔をしてクロアを見つめる。アレイアは自分よりも先にこの場の事態収拾を要求してきたのだ

鎖で拘束された…いくらBUGとはいえ身動きのとれない奴を守りながらエイドと戦うのは無謀…いや、不可能に近い

私は大丈夫だから、ウイストレアに守ってもらえるだろうし

「もちろんです」

髪を掻き上げたウイストレアがカマヲ床に叩きつけて笑う。

どうやら…こいつの後ろは安全地帯らしい。クロアは手にした矛盾交差をウイストレアの鎌に軽く触れさせると能力を付加する。

『範囲防壁』。ウイストレアの鎌の周囲一帯を防御する能力。範囲は彼女の技量に依るが…きっと凄まじい能力を持っているはずだ。

範囲に困ることはないだろう

「後は頼むぜ」

「頼まれたわ」

顔も合わせずに短く伝えると、クロアは七人の輪に向けて走り出した。罪剣を前に神影以外の人間が戦い続けるのは無理がある…。クロアは徐々に追い詰められつつある七人の元へとさらに急ぐ「っ…効いたあ」

「嶺さん、退いて！」

理不尽な長さの武器が床のデータを砕いた

嶺は双剣の風を利用して高高度に跳んでレーヴァティンの攻撃を回避。逃げるように叫んだエアリアルがフランメリーゼを手にエイドの背後へ移動し、捉える

「させません」

信じられない速さで返された剣がその身で風を切り裂いてエアリアルを裁断しようと唸りをあげる

「『細月』」

鋭い閃光がレーヴァティンを跳ね上げてエアリアルが脱出する為のごくわずかな時間を稼ぐ。もっとも…稼いだのは脱出時間だけではない

「雷鳴、データリンク！」

「白華、データリンク！」

良く似た声が良い似た言葉を叫ぶ。二本の刀が互いに共鳴して強大な力を揺さぶり起こす

二人の使い手は武器に意識を奪われないように気を静めて刀を振り上げる

「『ブリザードライトニング』！」

ごう、と駆け抜けた剣閃がレーヴァティンを打ち、凍り付く。

瀬名と御簾の武器も凍り、ブリザードが終わる。次に起きたのは瀬名の武器の光。その刀身に溜めていた電撃を全て氷に向けて流し込む

「御簾！防御！」

「大丈夫よ、ちゃんと私の方は純水にしたわ！」

流れた電流は何故か御簾の氷を無視してエイドの方へと向かう

「融かしきれ、紅蓮の炎！災厄の轟震は終らない！」

パキンと氷を砕いて数メートルの巨体が雑払われる！

その身が氷を砕いて突き進み、二人の少女は武器を捨てて後ろに宙返りする

上下逆さの世界で二人はほんのコンマ数秒前に足があった場所を炎が焼くのを見下ろす

「炎技『烈火錐』」

「風技『翼風の鷲』」

エイドを挟んで左右にいたエアリアルと嶺が呪符を使って攻撃する燃え盛る炎の槍と化したフランメリーゼと、吹き荒れる風の翼と化した大鷲が中心に向けて力を放つ

狙いはエイド。そこに二つの呪符が命中する！

「…いつたかなあ？」

「…いや、違う。」

楼騎がいち早く刀を手に走り出す

「拘束を。」

「はいよ、『鏡紫光牢』！」

嶺が大量の呪符を投げた。それらは紫色に輝いて二枚一組で先端と終端を綺麗な薄紫の光で結び合い、向きを変えてエイドに降り注ぐ！

「罪式…『潰える神話』」

手足を挟みこむように拘束する光をもるともせずエイドは巨大な剣を振り払う！

巻き起こった風がノイズの砂嵐を巻き起こし狂った暴風が吹き飛ばそうと荒れ狂う

「ちっ…エア！動けるか？」

「木の葉のように飛ばされそうー！ダイエットは失敗だったかも…」
んなことは聞いてねえ！風の中を二筋の光が駆け抜ける。白と黒、鮮やかな軌跡の持ち主に嶺は小さく呟く

「風翼よ、彼に我が家紋の祝福を」風を抜けたクロアは矛盾交差の

白い刃をレーヴァティンに触れさせる

「能力付加『自傷』」

刃を返したエイドの動きが止まる。自傷の能力の発動を回避するために彼は暫くの間攻撃することが出来ない。今のうちに、叩く！

「エアリアル！楼騎！行くぞ！」

二人は武器を握って叫ぶ

「ええ！任せて！」

「ようやく本領だな。クロア」

武器が駆けてレーヴァティンを削る。

「くっ…」

攻撃を受け止めるエイドの動きも心なしに鈍い。仕掛けるならば今がクロアが二人に小さくサインを送って総攻撃を指示する
こくん、と頷いた二人はエイドに向けて攻撃を行う…。

「待ちましたよ、この間合いを！」

長大な剣が世界を刈り取った。

赤い光と熱が三人を捉えて宙に放り投げる。一瞬なにかあったのか理解できずに三人は逆方向から襲いかかる第二撃をまともに受ける
「ちよつと！大丈夫？」

「三人とも、追撃来るわよ！逃げて！」

全身を血に染めたエイドの手が振り上げられる…。瀬名と御簾が駆け寄ろうとするのを嶺が止める

「『炎刃』皆滅』！」

赤い炎と紅い飛沫が瀬名と御簾の目の前を飛び抜けて遙か先にいるクロアを打ち落とした

「これ…血?!」

瀬名と御簾は自分についた血を見て叫ぶ

嶺は白いコートにできた染みをかるく手で払い、エイドを見た

「お前、随分無理してるな。この血、そうだろ？」

「勝手なことを…言わないで下さい……。私は…私の仕事を…する…まで…」

かくん、と力なくその場に膝をついてエイドは舌打ちする

「無茶よう…だんだん命中精度が落ちてきてるし…もう止めよ？アレイアもきつと助けてくれるから」

エアリアルが真つ先に立ち上がり説得する。左腕から血が流れてはいるが無事なようだ

その説得をエイドは無視して立ち上がる

「私は…私がやらねば…御母様の願いが…誰にも成し遂げられなく…なります。…私は、絶対に…BUGの本分を離れるわけにはいかないのです！」

燃え上がったレーヴァティンがエイドの腕にまで炎を広げる。小さな悲鳴のような何かが聞こえたがこうなったレーヴァティンは止められない

「お二人が…生まれた理由。お忘れに…だから、私が…御母様に…仕えなければ…」

語っている…と言うよりはうわ言に近い叫びが灰色の空間を揺らす
「私が！全部！元に戻せば…全て治せば御母様の願いが…叶うはず…だから！消えろ！消えてくれ！クロアああああ！」

振るわれた剣はエイドの身体を引き裂く『自傷』の対価を払いクロアを狙う

「…悪いが、俺はアレイアを助けるまでは負けられない。ついでにヘルも…な」

雄叫びと共に走るエイドの前で武器を放し、ゆっくりと落ちていく中で蹴り上げる。くるりくるりと舞い上がる武器にゆっくりと手を伸ばしながら小さく呟き、

二人が互いに武器を振るった。鋭い一撃が二人の間で放たれた。

お互いに駆け抜けるようにして繰り出した最後の一撃は…

「…なんで、私ばかり」

エイドが地に伏せる事でようやくの決着とされた。

「運がないんだよ、てめえは」

クロアもその場に座り込んでしまい、手にした白陰と黒陽が音を立てる

第一解放に戻った双剣は疲れたと言わんばかりに一度鈍く光を放つ。持ち主は笑いながら軽く拳を当てて労う

「クロア！」

後ろから羽交い締め。もとい、抱きしめられる。首に腕が巻き付いて一瞬だが呼吸が止まる。

「やったね！見直したよっ！もう…新人クンじゃないね」

「…あたりまえだ」

どうにかロツクから逃げ出すと地に伏したエイドの元にまで行き双剣を地面に突き刺してから話しかける

「俺の勝ちだ」

「私の負けですか…まさか、人間に遅れをとるとは…不甲斐ないです」

長大な剣は今にも燃え付きそうに小さくなっており、もはや戦う力は残されてはいなかった

クロアは一つだけ気になっていた事を聞いてみる

「なあ、一つだけ聞かせろ。お前達の狙いは何だ？人に『ブレイク』をする理由…教える」

エイドは少しだけ沈黙する。答えるべきか否か、彼は思案する

「いいでしょう」

呟いてから語り始める呟いてから語り始める「私たちは御母様の意思にて生まれました。理由は御母様の意思を叶えるため…。最初に生まれたアレイアは『神』たる力を与えられ、この世界を変えるべき存在でした。

ですが…クロアに感化されてあの方は反旗を翻し、御母様の計画を潰そうとしました

そしてその後に生み出されたのがウイストレア。『影』の因子を与えられたウイストレアは姉のアレイアを補助…又は抹殺して計画を続行するためのバックアップとして作られました。

同時に生まれた私は万が一の保険、修正因子としての役割。二人の『神影』候補を補助…又は抹殺して代替を作成する役割でした…。やはり、私に扱える代物ではありませんでしたし『神影』には未練はありません。

…ですが、私は修正因子。『エイド』の役割を果たします」

そう言つて、彼は火の消えかけた杖を手に取る。炎の核となつていたのか溶けかけている装飾部が歪な造形になっている

「『メデイカラゴラ』…亜式解放」

杖がほどけるようにして外郭部を廃棄する…。内部から現れたのは銀の杖、柄に蛇の紋様が描かれているそれはノイズを放ちながらぼんやりと輝く

「天にまします創造神、二対の螺旋をこの手に揃え、現るるは完全螺旋。あらゆる虚数を超えた存在の足音が響き世界は新たな光景を目にする」

ノイズと光は更に強まり次第に目が痛くなる…。銀白色の鈍光が場にいた全員を飲み込んでいき…ふっ。と消えた

灰色の空間に残ったのは金色の粒子。グズグズとその場に小さな山のようになつた隣に落ちている銀の杖がノイズを反射していた…光が消えて、総勢十人も的人物が姿を表す。全員まとめて転送されたのは、白い空間。目の前に大理石のような石で作られた背の高い椅子が聳えていた

「ここは…」

クロアは何度か来たことがあつた。この景色、この風景。ああそうだ

「ここにいたのは…お前たちだったのか…俺の名を呼んだ三人は…」
アレイアとウイストレアは小さく頷いた。そうだ、何で今まで気付かなかつた…ここは…そうここは…

何者ぞ？

ゴウン、と響くような女の声が出た。威圧と威厳…いや、威厳によ

る威圧か聞いたものは何故だかひれ伏したくなる声だった

「御母様……」

ウイストレアがかすれた声で呟く……。こいつが、アレイアをこんな目に合わせた、BUGの王……

ウイストレア、か。何用か？もうお前にも興味が失せた……。出来損ないの妹は所詮出来損ない……。もう用はない。消えよ

天に青い光が現れて複雑な模様と円を描き出す。魔法陣。クロアはそれが前に見たものとは別物だと悟る

だが、コイツの技量を考えると気休めにもならない……。二人を攻撃圏から突き飛ばそうと走り出すと傍らかたわを金色の光が飛び抜ける

「来なさい！私とお姉様の力！」

ウイストレアが手に光をおさめると魔法陣から極彩色の光が放たれたのはほぼ同時だった……

第二十八章 罪なす災いの剣（後書き）

あとがき

エア「あとがき、スタートお！」

クロア「あとがきも長くなったな…。ようやく長台詞が言えそうだ」

エア「最後に泣く泣く字数を削る必要もないしね うん、良いことだよ」

クロア「見やすいな…。っと。今回はゲストにあいつらを呼んだんだな」

エア「それではどうぞ！嶺さん！瀬名さん！御簾さん！」

嶺「ある時はゴミ拾いのボランティア」

瀬名「またある時は大統領の護衛官」

御簾「どんな依頼も即解決！あなたの町の何でも屋！」

嶺「名前はまだ無いけどね！」

クロア「久しぶりだな、前に出会ったのは『ミッドガルド』だったな」

嶺「うん、そうそう。いや、成長したね君達」

瀬名「そうね…。見違えたわよ」

御簾「私たちには及ばないけどね」

嶺「そう言うなって…。ほら、『最初から上手い奴なんていない』精神だよ」

クロア「ああ。さて…挨拶は終わったな。俺の手元に今手紙がある。PN-メガネのあいつから」

『嶺とか誰ですか？なんか私が戦ってるときに攻撃してきたり拘束かけてきたり…ちよろちよろして迷惑でした』

クロア「ふん、で？」

嶺「あれだー。うん。僕は昔の存在でその時は『光暗の円舞曲』って作品で主役やってたんだよ…それからこの先」

エア「わーわー！言わないで、ネタバレるから！」

瀬名「くすくす…。すっかり可愛くなったわね『氷炎』も」

御簾「本当…。私の矯正のおかげで立ち直ったのかしらね？瀬名」

瀬名「どうかしら？」

二人『』

嶺「ストップストップ、ここは僕らの世界じゃないんだから…追い出されるよ」

クロア「だな」

二人「うっさいばーか！バカ嶺！ついでにヘタレクロア！ばーかばーか」

嶺「風遊べ……」

クロア「巡れ……」

エア「ストップ！ちよ……待って……」

嶺「『疾風大鷲』！この建物を吹き飛ばせ！」

クロア「『白陰・黒陽』、能力付与『自壊』能力封印『耐久』！」

エア「か……風が、スカートが！やっぱ危ないって！ほら、建物がミシミシいってる！むしろ空気エアのように飛ばされる」

二人「だ、誰が上手いことを！」

プッン。ザザザザザ……

第二十九章 終端への軌跡（前書き）

ゲームファンタジー！

前書きって本当に何を書くべきなんでしょうね（^^；
さて、今回はやったら長くなりました∴大体13500文字くらいの長さです。途中で切る場所を逃しましたorz
なんと書きはじめてから20日という期間が空いていて∴大体1週間と少しで一話書くペースなのにうまく行きませんでした
最終回はもう少し、あと短い終端へ彼らは道を無視して走り続けま
す！

それでは、開幕です

第二十九章 終端への軌跡

金色の光がウイストレアの手に掴まれた。頭上には攻撃しようと待ち構える魔法陣、彼女の隣には名を返されたアレイアが鎖に縛られたまま静かにウイストレアを見つめている

逃げて

「嫌です」

短い会話だが、二人にはそれだけで十分だった。なぜなら二人は本来は一つの存在『神』と『影』に分かたれたが二人揃えば『神影』となる。

「『神影』」

小さく呟いて彼女はアレイアに触れる。アレイアも軽く目を閉じてそれを受け入れる。本来の姿に：二人は望む

『神影』ワルキュレア。その解放を頭上の魔法陣から極彩色の『ブレイク』が放たれる。まるで雷撃のような凄まじい光は手甲をつけた片手を上げるだけで防ぎきる。

純白の翼をその背に纏い、武装した姿は気高く美しく、この地『ヴァルハラ』を居城とする聖騎士：ワルキュレア。

「御母様：私たちはあなたに従えません。クロアとお姉様に手をあげた罪：この槍にて貫きます」

甲冑が力チャリと鳴る。青と白を基調にした波を連想させる紋をスカート状の衣類に描いていかな敵おも敵としない戦場の女神の名を語る。

ワルキュレア、彼女は槍を空間から取り出して名を呼ぶ。

「第二解放『勝利を呼ぶ天空の槍』」

呼ばれた槍は神々しく光り輝いて彼女の手で姿を変える。先端は矛のように、石突きは馬上槍のように、そしてフォームはより軽く細く…。全体的に先端に重量の集まった形状になった槍は主人の革と

金の手甲の下で静かに待機する

「教えて下さい御母様…この恨みはどのように晴らせばいいのでしょうか？」

此方からは正面を見れない王座から声が聞こえる。

データの羅列に変われば分からなくなる、あまり手を煩わせるな一瞬後、王座が上下に二分される

岩のような王座を一撃で破壊したワルクユレアはその先にいる筈の人物が攻撃を回避したのを理解して周囲の全てのキャラクター座標を読み込む…。上空にアンノウン…。素早く舞い上がり彼女は展開された魔法陣を突き破り槍の一撃を放つ！クロア達は白い床から上空に鋭く舞い上がったワルクユレアを見上げていた。とてもじゃないが人間技ではない飛翔と、細腕から放たれた致死の一撃はまともな人間では勝てないものだと言強制的に理解させる

「カツコイ…」

ヨロワが目を輝かせて天で青い光の魔法陣を突き破るBUG…いや神影を見つめる

…。さすがのクロアもその姿に見とれるばかり…

「すげえな…」

小さく鳴る自分の鼓動を感じつつクロアは素早く槍を操る天空のワルクユレアを見つめ続けるワルクユレアは槍を操り、魔法陣の中心に立つ人物を貫く

…槍の穂先が触れた瞬間、目の前にいた人物がかすれるようにして消える

幻影だと気付いても伸ばした槍を手に戻す前に背後に気配を感じる。底知れない威圧と膨大な魔力の波動。カチリと頭の中で危険だと警鐘が響く

天鳴り響く九音の雷鳴。我が名の元に集いて殺せ

「隔壁展開」

間一髪、雷の攻撃から身を守る。球体に張られた強固な防壁がどう

にか攻撃を受け流して難を逃れる…。安堵したいが気を抜いてる時間にはカケラほどもない！

「固有スキル、『戦乙女の流儀』」

一对の翼をはばたかせる。羽が舞い、周囲に数枚が散らばる…。一枚一枚が仄かな光を発していて、それはワルキュレアの力の一端を担っていた。

「『白翼はくよくの天蓋』！」

全ての羽が対峙する人物の頭上に集結して逃げ道を塞ぐ。手にしたへブンズニールを叩き込むための一瞬には長すぎるほどの時間を稼いだ…。

神速の一撃を叩き込んだ羽に包まれた人物が落下してくる！

下にいた楼騎は着落地点にいたエアリアルとノピアを下がらせる羽の輝きが地面に激突して床にひびが入る。内部にいた人物は羽を払い除けながらゆつくりと立ち上がり…。その姿を晒す

長身に腰まである黒髪、それをやはり腰の辺りで黄色い布で軽く結わえてありどことなく不思議な雰囲気をかもしている。服装は…：アレイアやウイストレアをさらに強化…：いや、豪華な装飾をつけたようだ。

灰色の装衣、両腕に刻んだ『』を引き延ばしたような紋様、そして頬の小文字の『』のような印章…：紺色のオーラを纏う彼女が何より異様だったのはそれらではなく、眼。

紺色の眼は瞳孔が小さく、また彼女は常にどこかを見つめているようだった…。

今、目の前で武器を構える者たちなど見てすらいないように感じたなるほど、少しはやれるか…。

声が響く。それは口は動いてはいたが口からの発音ではないような不思議な声だった。まるで彼女の周囲から四方へ向けて拡散しているような響きなのだ

「ちびっこ！やれ！」

ククロアが叫んで二人の子供はいつの間にか手にしていた縄を引く

白い床にばらまかれていた白い縄があちこちで結び目をつくりながら目の前の人物の足を縄で縛り付ける

「畏符『フォールホール』!」

ボコン。と足元が陥没して彼女を支えていた地面がなくなる。支えを失った彼女は重力に従って落下していく

しばらく落ちると張り巡らせていた縄が伸びきりノピアとヨロワは必死に縄を手元に引き寄せる

今頃アイツは逆さ釣り：クロアは白陰と黒陽を手に穴を覗く：死を巡る輪廻の狭間、闇の底より這いずる手がこの地をつごめき埋め尽くさん。

そう聞こえた詠唱の直後クロアと女の眼が合う。闇の底を見るかのような底無しの暗い紺の眼。思わず気を失いかけて頭を振る。

(落ち着け、アイツは逆さ釣りになるようなやつ、何も出来ない)目を開けると本当に目の前に紺色の眼があった。

貴様、クロアか？

「失せろ!」

黒陽を一閃して切り裂こうとして：体が動かないのに気づく。黒陽を一閃して切り裂こうとして：体が動かないのに気づく

手足にズシリと重い何かがまとわりついてギリギリと締め付けている!水底で冷えたような感覚に戸惑い、首まで這い上がられてそれが手だとようやく認識する

「氷剣技『ブリザードフラワー』」

クロアを中心に腕が凍り付く。まるで蓮の花のように凍り付いた花弁の端に御簾がちよこんと腰かけていた

「雑魚は私たちが引き受けるわ。：好きなだけやりなさい?」

「ハッ、言われなくてもやってやるさ。行くぞ、白陰・黒陽」

トクンと鳴動して応える。クロアは手にした双剣で凍てついた腕を払い目の前の女に突き立てる!氷が砕けてくると破片が舞う。

一瞬のスローモーション、その時に相手はのけぞりながら穴の壁面を蹴り、脱出するという芸当を見せた。攻撃を回避し、不利な地形

から脱出する二重の逃走……。絶対に当てたと思ったクロアは啞然と
フォールホールの反対側に着地した人物を見つめる……。人間技じゃ
ねえ……

「いくよ！へブンズニール！」

天空から槍が岩盤を砕いて落ちてきた。白い翼が地面近くで向きを変えて遙か後ろに転移した人物へと猛烈な速度で小さくなっていく……。ワルキュレアの高速戦法には今はついていけそうもない……。クロアは手持ちの呪符を確認して走り出す槍の重い一撃が遠くを見つめたままの女を捉える。心臓に向けて放たれた攻撃はしかし彼女の胸の手前で停止する……

どうした？届いておらぬぞ？

「くっ！」

後ろに逃げて、針先ほどの小さな盾があったのを目ざとく見つける。極小の一点防御、腕に自信があるのか……実力が測り知れない相手にワルキュレアは少しだけ不安になる

（御母様……やっぱ強い。けど時間もかけられない……。クロア達とはつくに限界を超えてるから私かなんとかしないと……）

彼女の胸中でウイストレアが話しかける

（お姉様、私に考えが……）

ワルキュレアは頷き、その案をとりあえず採用する。

「変わるわよ、ウイストレア。第一解放『戦乙女の戦槍』！」

槍が形を変える……。穂先が長くなり柄がさらに長くなる。全体的に細長い形状になった槍は先端部に炎の輪を生み出して一気にその存在感を増す……

「今度は私が……。お姉様は少しお休みください」

（休んでられないわよ、さあ、行きましょう！）

人格を交代したアレイア・ウイストレアは翼を広げてもう一度自分達の母親に挑みかかる。

「罪の清算、軽くすむと思わぬよう。私は……あなたを赦ゆるしません！」
槍を掲げ、彼女は炎で絵を描く。『リング・オブ・ケルベロス』。

世界を焼く業火の絵画を…

「焼き尽くせ…私と…お姉様と…あとついででの憎しみを！恨みの獄炎『フレイム・オブ・ケルベロス』！」

焼き付いた世界樹の絵から咆哮があがり、引き裂いて巨大な炎の獣が現れる。

体長はゆうにビルの三階…七メートルは超えているであろう巨体から耳を引き裂くような咆哮が世界を滅茶苦茶に揺さぶる

ケルベロス。異界の者が何用か…。出よ『世界を飲み込む狼』^{フェンリル}

目の前の人物の目の前に展開した魔法陣からも巨大な咆哮が響き、世界を揺らして巨大な狼が姿を現す

「嘘…そんな…」

巨大な狼と巨大な三頭の犬が吠える！

ビリビリと鼓膜を激しく叩く咆哮にツバインは耳を塞ぐ

「くっ…行きなさい！ケルベロス！」

飲み込め、フェンリル

二頭の獣が互いの喉元に牙をたてる

二匹の獣は互いの牙で他方に噛みつき、逃がすまいとさらに深く突き刺す！

巨大な…小さな家すらも噛み砕きそうなフェンリルと、鋭い牙を三つも備えるケルベロスは一步も譲らずに互いを引き裂き合う…

絶叫と咆哮、互角の攻防戦は厄介な方向に移ろいつつあった…。

「ウイストレア、この場を頼む！」

クロアは走り出す

「なっ！馬鹿！何を」

止まって！クロア！

二人分の制止を振り切ってクロアは暴れる獣の足下を縫うように駆け抜ける。一步動く度に地面が揺れてバランスを崩しそうになるが…なんとか持ち直して走り続ける

目の前で巨大な肉球が地面を砕いてケルベロスが叫びをあげる！喉笛を噛みきられた頭の一つがぐったりとしているが残りの二つがギ

ラギラと目を怒りに輝かせて咆哮する

床が弾け飛び、破片から目を庇う

足を止めた一瞬に巨大なフェンリルの尾がクロアを吹き飛ばす

人間が敵う相手ではないぞ

「うるせえ！知った事か！」

倒れた体を起こして再び走り出す！

エイドに殴られた傷が鈍く痛んだ…。飛ばされた拍子に頭をぶつけたのが原因で傷が開いたらしい…。一筋の血の嫌な感触が降りてくる…

「そこを…退きやがれえええ！」

二振りの剣を重ねて叫ぶ

「亜式解放『混沌幻影』！」

捻れて重なる螺旋剣、トゲトゲとしたその外見は当たれば痛そうに見える、実際あたるのかなり痛い。

「失せる犬コロガ！」

跳び上がり、両手持ちの大剣をフェンリルの側頭部に叩きつける

ギャオン、と鳴いたフェンリルは怯みはしたがそのままクロアを一口で飲み込む。一瞬の早業に気付いたワルキュレアは自身の召喚した獣に指示する

「クロアを助けなさい！」

グルウと短く答えた二つ頭のケルベロスはフェンリルの喉を噛み砕こうとして…退避する

「なに？」

なにを…

二人の術者が驚くなかで呪符が発動する

「剣技『天斬剣』」

フェンリルの頭蓋を吹き飛ばしてクロアが飛び出してくる…いや、少しだけ違う

「まさかラグナロク前に喰われるとはな…俺もまだまだだな…。そう思わないか？ワルキュレア」

オーディスタは手にした長剣をもてあそびながらフェンリルの死骸の上で浮遊する。二色に塗り分けられた剣が白い空間に不気味な黒をもたらす

オーディスタ…。

憎々しげに見つめられたクロアは自分の中で名を呼ばれたのを感じて内包存在『クロア』に話しかける

(…少し、変わって欲しい。)

ふざけんな、と言いたかったが『クロア』はジッと見つめるだけで後は何も言わない。まるで

(わかるよね?)

そう言いたげな視線は…あまりにも真剣で見えていられなかった。

「仕方ない…少しだけだぞ」

(ありがとう、クロア)

すっ…と体のコントロールが変わるのを感じる。まるで別人に変わるような…丁度ケンカして我を忘れたときのような感覚でクロアと『クロア』が入れ換わる軽く閉じていた目を開く…。ほんの少しだけ柔らかな目付きの『クロア』が呟く

「お久しぶりです。御母様…いえ、『BUG-00』ヘル」

『BUG-00pr』。何故ここにいる

御母様…ヘルと呼ばれた人物は『クロア』に問う。

「ヘルって…人違いよ?だって私の中にいるのが…」

ワルキュレアが言うが、『クロア』は無言で否定する

「プログラムは『新しい物』を生み出せない。絶対の制約だよワルキュレア。

『ヘル』はエイドが断片データを元につけた名前。彼は御母様の名前を知らなかった…いや知りえなかった。

本来役割の無いBUGだ。使い捨ての駒だったんでしょ?」

遠くを見つめる女は静かにうつむき…そして

いかにも!流石と言うべきか?『知識の探求者』のオーディンの名を与えた神の駒よ。

それとも愚かと？貴様を殺した私の前にのうのうと現れる滑稽な道化師よ

笑い始めた『ヘル』はオーディスタを指差して叫ぶ

私はヘル。地獄の深淵を知るものよ！

初めて何も見ていないようだった目と視線がかち合う。どこまでも深い紺色の瞳の奥底まで引きずりこまれそうになり…。オーディスタは軽く目を閉じて剣を放る遙か天空に飛んだ剣にヘルは目が釘付けになる。その一瞬の隙にオーディスタは距離を詰めて無手の手を広げて突き出す

手応え無し。後ろに下がられた

(変われ！)

クロアが体のコントロールを取り戻してヘルを睨み付ける。怒りか憐れみかどちらともつかない目をしていたがすぐにいつもの光を取り戻す

右手を振るように回転して鋭く裏拳を放つ。突き出された手がかすりはするがダメージにはならない

次いで左足払い、そのまま軸足にして右足に回転の力を乗せて後ろ向きに蹴り上げる

無骨だな、オーディスタ

「避けてるのが優雅か？ヘル！」

風を切り、大気を斬り、天空から混沌幻影が落ちてくる。それを掴み、叫ぶ

「刻む始点『黒陽』！」

黒い刃が斬りつける。

薄く切れたのは彼女の鋼鉄よりも硬い服だけ…。あまりの硬さに正直驚いた。

『クリエイト
創造』

魔法の印章がヘルの指先に現れて仄かに光り輝く…。『知識』を持つオーディスタはその印章を読み解き舌打ちした。

打ち据えよ『雷神ニルニルの鉄槌』

彼女の手握られたのは小振りのハンマー……。やけに柄が短い。それは気にするに値しない。

振るわれた一撃が混沌幻影を弾いてお互いに行動不能の時間が出る。その刹那的な時間の中でオーディスタは自分の物ではない知識をかき集めて確固たるイメージを作り上げる

『必中の神の鎚』

投げられたミヨルニルはくると回りながら猛烈な速度と質量で迫ってくる。これこそ優雅さの欠片もないと思うのだが……構わないのだらうか

『必中の神の槍』

偽物の槍はオーディスタの手が触れた瞬間に本物のグングニルへと昇華する

軽く放るとミヨルニルめがけて疾走してその柄に命中。鎚はバランスを崩して落下……しかけたが地上付近で回復して再びオーディスタめがけて乱暴な力で迫ってくる

『止め、グングニル』

小さく命じて向かい来る鎚を槍が弾き飛ばす。どうやら……それでもミヨルニルの進撃は止まらないらしい。弾き飛ばされた場所から弧を描きつつオーディスタを狙いに定めている

『流星は巨人族の武器、か。しつけえな』

グングニルを手元に戻して混沌幻影を右手一つで構える。この世界では確固たるイメージが物を言う……。自分の知識を用いてミヨルニルの軌道を演算、そして迎撃の太刀筋をいくつも描き出す

『光の奔流』

残り少ないデッキから一枚の呪符が弾き出されて無数の光線を放つ。それらは全てミヨルニルを貫く軌跡を描いていた

『闇の追走』

さらにもう一枚。こんどは黒い刃が一振りにして思考された全ての軌道を切り裂いた！砕けた破片の隙間からヘルを捉えてグングニルを投げる

「『主神の自贄槍』！」

破片の隙間を縫いながら飛び抜けた槍はヘルの心臓を狙って飛来する。ヘルは小さく呟いて針先ほどの小さな盾を作り出してピタリとグングニルの穂先に合わせる

槍が衝突し、派手に衝撃波をぶちまける！

甘い。

「しゃらくせえ！ぶち破れ！」

パキリ、と盾と槍が同時にひび割れる。最硬度の盾と伝説の槍の間で矛盾が生まれかけているのか二つの力が均衡している

『クリエイト
創造』

呟いてヘルは

『フリージング
フレイアの胸飾り』

盾よりも自身の防壁を増加させて槍を弾こうとする。オーディスタも押し返される槍に意識を集めて次なる名を解放する

「『縫い付ける百万余の光』」

金色の糸を空間に引き始めた針が一度隔壁から離れて滅茶苦茶に糸を張り巡らせるように飛ぶ

（ワルキュレア。行けるか？）

ヘルの背後に回ったワルキュレアに目で伝える。ほんの小さな顔き
が帰ってきてオーディスタはグングニルを掴み

「止めだ！BUG！」

「『ヘヴンズニール』！行くわ！」

二本の槍が前後から襲いかかる

一つは必中の槍

一つは絶対の槍

回避はさせない。終わらせる！

「貫け！」

針先ほどに密度を高めた隔壁が二つの槍の先端部に押し付けられる。だが、所詮は先程までの密度の半分。ひび割れたグングニルが、輝くヘヴンズニールが盾を貫いた！ 不様ね

青い光の魔法陣がヘルの左右の手の前に現れて槍を受け止める
隔壁よりも硬い、ブリージングの力を得た堅牢な防御陣……。しかも
悪いことに反撃印章が組み込まれていた

魔法陣が炸裂して二人は吹っ飛ばされ、御簾が凍らせた氷を砕いて
停止する

「痛てえ……」

不気味な腕が地面から生えていて、それらが全て巨大な氷に内包さ
れていた。ずいぶん派手に暴れたのか白いこの部屋のほとんどが氷
に閉ざされていた

（交代して、君も気付いてるでしょ？）

内包存在が叫んでいるがうるさいと一蹴する。気付いてるさ……とっ
くに

「ヘル！俺はこの世界の全ての『知識』を持っている。だから一つ
聞かせる、お前の力を！」それは本当にお前の力なのか？」

ヘルは口元を微妙に三角にして、ワルキュレアは少し首をかしげた。
その時、タンタンタン！とクロアの隣をエアリアルがステップを
踏んで吹っ飛んだ衝撃を殺しながら飛んできた

「クロア、手早くお願い！」

わかった、と小さく頷いてみせる。視線は絶対にヘルからそらさな
いが周囲の状況を把握する

『BUG-01』が大量に押し寄せてきていて、いくらあのチーム
でも削り負けるのは時間の問題に見えた

答える義務は無いぞ？私はただ時間切れを待てば良いのだからな
嘘だ。オーディスタは何故かそう思う

あいつは絶対に答える。そんな確信めいたカンは的中する

『創造』だ

オーディスタはしめたと内心笑う

「物を作り出す能力……だな？」

いかにも、とヘルが答える。

……やはり腑に落ちない

「俺はさつき言ったな…『プログラムに新しく生み出す能力はない。それは絶対の制約だ』と」

ワルキュレアは気付いたのか、はっとする

「お前はミヨルニルを、ブリージングを、俺を、ワルキュレアを、エイドを、BUGを生み出した。それは…プログラムを超えている何者だ…お前は」黒い手甲が空を掴む。

ヘルが愉快そうにその手を揺らして人差し指でオーディスタとワルキュレアを順に指す

『創造』した事実。それこそが私の存在理由、アーティフィシャル オリジン人工でない唯一のAI。私がお前達を作ったのは人間の為！人の愚かしさを私は嘆く！

『クリエイト創造』と呟いたヘルの手に暗い光が集い、剣の形を成す。細身の剣は名を呼ばれてその光を弾いて銀色の刀身を晒す

終焉を『ダーレンスレイブ』

オーディスタは自身の『知識』を駆け巡りその名を持つ武具を検索、即座に特定する。

「抜かれれば血を見るまで鞘に戻らない呪剣…か。厄介…いや迷惑だな」

細身のメートルと少しの剣が走る

混沌幻影を操り初撃の防御を選択する。オーディスタの様子見を見てヘルは軌道を変える叩きつけるように放たれた一撃はオーディスタの予想とは違う線を引いて混沌幻影を砕く。刃がほんの少し欠けただけだがただ一撃でこの威力、オーディスタは認識を改める

手にしたグングニルを突き出し、必中の名を呼ぶ

「右腕を貫け。グングニル！」

物理法則を完全に無視した静止状態からの飛翔の後に神の槍は狙いを正確に捉える。その狙いはミクロン単位ですらずれることなく厳密に設定された

飛来する槍の前にヘルは呟く

ブリージング

パキン、と槍に触れた瞬間に砕けた胸飾りが破片を撒き散らして周囲に散らばる。それらが散ったときほんの少しだけグングニルの軌道がずれたのをオーディスタは見逃さなかった

「攪乱^{チャップ}兵装か！」

博識だな

隔壁を破壊されては神の槍を止める手立てはない。彼女は回避を諦めて自身で受け止める決断をしたのだ

ミクロン単位の照準をブリージングを破壊して生み出したグングニルの『ぶれ』を利用して彼女は右腕を貫かせる！狙いは一ミリ以下のズレで命中した。だが、そのわずかな差は武器を持ってなくするために筋肉の中心を狙ったものとは違えてしまった

「ちっ……」

グングニルを手元に戻しながら次の攻撃を模索する……

『^{ダレンスレイブ}緋色に染める呪殺剣』

第一解放の名が呼ばれる。ヘル剣が本来の力を宿して禍禍しい灰暗色の光を照り返す……。オーディスタは急いでその場から飛び退いて混沌幻影を修復させる

リカバリーに時間はかからない。ヘルの手にかからなければ、だが……血を求めた大斬撃が放たれた灰暗色の光が隔壁を展開した二人の神影を飲み込む。防御をしてもわかるこの理不尽なまでの強さにオーディスタは不快に顔をしかめる

「楼騎！聞こえるか?!ここから全員引き離せ！」

叫んで両手の武器の状態を確認する。

混沌幻影はリカバリー中、あと数秒で回復できる。なんとかかなりそう

グングニルは細かくひびが入っていてこれ以上の酷使は危険だろう……。リカバリーは間に合いそうもない

小さく舌打ちして灰暗色の晴れた景色を見る

打つ手無し、か？

オーディスタは答えずにグングニルを握りしめる。悪い、許せ

「『武器砕く神の槍』」

最後の名を叫ぶ。

オーディスタが呼べるグングニルの最後の名前は『武器砕く神の槍』。かつて人間を英霊にするために使われた神剣を破壊する力！

「砕けた装具によるチャフ。いい発想をもらったな…知識を感謝しよう御母様」

オーディスタ…。いや『クロア』の言葉なのか最後だけは口をついて出てきた

振るわれた灰暗色の一閃によりグングニルが無残に砕け散る…

破片が散らばり、それらが小さな金の光を放ち消滅を知らせる

「貫け！」

無茶は承知。神の槍ならば俺の命令を聞き届ける！

そう半ば祈るような心の叫びに反応したのかバラバラだった槍が破片を集めて黄金色の武器となる。揺らめくような光を纏った槍は最後の力を振り絞るように一際輝きを増した

やるな、武器を昇華したか

正面から受けるように剣を構えた女に槍の穂先がピタリと定まる。

絶対命中の槍は今度は外さないとナノ単位での補正を行い、一秒以内に全ての行程を終える！

「『必中の神の槍』」

本来の、そして最もシンプルな名を叫んだ！槍は舞い上がりあたりを高速で動いてヘルに補足させずに死角に入り込む

背後から貫いた槍は心臓の位置を射抜き、完全な命中で胸部を貫通。ヘルが槍に手を添えてその場に崩れるように座り込んだ

くっ…

抜こうとする槍はびくともしない。だが消滅直前の槍が抑えられるのはあまり長い時間ではない。オーディスタはリカバリー終了直前の剣を手に走る

『リカバリー』

補修完了。黒い刃で袈裟に斬りつける！ヘルの体から黒いリボンの

ような帯が抜け出し出てくる。『強制思考無限連鎖』の半分でもう一つの白いリボンのような帯を生み出せば、決着！

「刻む終点『白陰』！」

伸びた二色の帯……。刻んだ始点と終点、『メビウスリング』が起動する！

「思考の海に沈め」

白と黒の輪の中に残された女はその無限思考連鎖を頭に直接叩き込まれてどこも見ていない目を見開く

「御母様：お許しを」

小さく呟いたワルキュレアはオーディスタの隣へとやって来る。小さく一礼して彼女は二人のキャラクターに変わる

全身が細かく割れて鏡を裏返すように二人の、アレイアとウイストレアに戻る

クロアも神影化を解いて知識の道化師からキャラクターに戻る。小さく安堵しながら二人のよく似た少女を見た「クロアーっ！」

飛びつかれ、なんとか受け止める

「やっと逢えた！ やつと話せた！ ぐすっ…うわーん」

よしよし、と小さく撫でてやる。助けるまでに随分かかった、そう心の中で呟きながら、絶対に顔に出ないようにしながら…

「ああ。やつとだ…」

泣き声がより大きくなり、クロアは優しく抱きしめてやる。ほんの少しの気まぐれだ

「お姉様、クロア、迷惑をかけました」

ウイストレアは告げてクロアを見る。アレイアは会話できないくらい泣いているので仕方ないのかクロアに意見を求めているようにも見えた

「ああ、そうだな」

素っ気なく答える

実際迷惑したし、『ブレイク』もされた。断らずともいいんじゃないか？

「…でもま、悪くなかった」

口について言葉が出る。『クロア』め余計な…

「なら…良かった」

え？と思わずウイストレアを見る

…笑っている。

「共闘してっただけ見直しました。人間も悪くはないですね…あなたに限って、ですが」

言って、ついと顔を背けられる…。なるほど、少しは見直したか
クロアは嬉しくもあり、なんとなく態度が変わった事に違和感を感じながらも答える

「ああ、俺もだ。少しはお前らへの価値観が変わったさ

まあヘル…御母様だっけか？アイツは訳分かんねえがなんだったんだ？」

ウイストレアは小さく首をかしげる

どうやら彼女ですら把握できないような相手だったらしい。ならば直接聞いてやろうと振り返ると異変に気付いたメビウリングがロボロになっっていた。

何故だかはわからないが、とにかく穴が空いて擦りきれて今にも千切れそうになっっていたのだ

「まさか…解いたのか？！無限の問題を！」

ギチツ…と帯が軋んで、張り裂けるように千切れた。

無限連鎖の消滅したヘルは立ち上がり、右手を前に、そして詠う。

「『愚者の選択、世界の輪廻。表と裏の顔を覗き我は世界の意思を汲む！』」

抜かれたのは一枚の黄金の呪符。目映い光は他の金属を抜きん出た不死と栄光の光！

「選べ『アルカナフォーチュン』！」

黄金のカードに絵柄が宿る。現れたのは円環の絵、
ホイールオブフォーチュン『運命の輪』輪

がぐるりと周囲を取り囲む。ちょうど死闘場の真ん中にいるような変化にクロア達は危機を察する

「おにいちゃん！」

ヨロワが輪の外で叫んでいる。たまたま近くにいたようだ

「ヨロワ、全員動けるか？」

彼は周囲を見渡して

「がんばればいけるよ！」

思わず苦笑いする…。余裕はないって暗に言われたようなものだ
仕方がないと双剣を呼び出して対峙する

「この輪を壊してくれ。…無理ならば逃げる策を頼む」

こくん、と頷かれる

この先はヘルだけに集中出来そうだ…

「御母様！」

アレイアのかすれた呟きに怒号のようなノイズが上書きされた

この私にあの程度の問題など無意味。愚者は世界を探訪した果てに果てよ！

黄金のカードが黄金の銃に変わる。

そして…ふわりと幾枚ものカードがヘルの眼前に現れてゆっくりと回転を始める…

「…そんな、嘘！」

「お止めください！御母様！」

二人が駆け出した途端、カチリと狙いがカードに合わせられる。

『アルカナジャッジメント』

パン。と乾いた破裂音と共に一枚のカードに穴が空く

「あっ…あっ…」

エアリアルが急に苦しみだし、倒れた。クロアは何が起きたのか理解できなかつたが楼騎が輪の外から力の限り叫んだ

「そのカードを止める！」

クロアは頷き、双剣を手に走り出す

あっという間にヘルを攻撃圏にとらえ、二本の剣を振るい…

動きを止める。今日の前にあるカードが何かわかったから…攻撃、できない…

やはり、人間はそんなものか

カチリと黄金の銃口がクロアを狙う

退避してミスを呪う。射程にカードが入ってしまった…

パン。と穴の空いたカードが二回目の衝撃に二枚に千切れて無惨に舞い散る

「あつ…あああ…」

エアリアルを見ると、金色の粒子に変わっていくところだった…クロアは千切れたカードの絵柄を見ていた。だから…この結末はわかっていたキャラクターカード『エアリアル』。ヘルが撃ち抜いたのはそれだった。まだあどけなかつた彼女の面影が無残に破られて…金の粒子に変化する

「ヘル…貴様！」

「次来る！クロア」

カチリ、カチン。と流れるように野戦ライフルのような銃が操られ、引き金をひかれる

バツン、とカードが穴空きになり誰かのカードが飛んでくる…。その

の名前は『ヨロワ』

「いたい！おなかが…くっ！」

金の光が目の端に映る

消滅だ

「うるせえ！その銃を降ろしやがれ！」

カチン。パン。次の犠牲者は、『瀬名』

カチン。パン。次の犠牲者は、『御簾』

カチン。パン。次の犠牲者は、『嶺』

「そんな…」

「絶対即死…？バカにしてるわ」

「嘘だ…よな…」

相次いで三人が金の粒子に変わって消滅する。元上級ランカーの三

人がなすすべもなく…クロアは膝に力が入らなくなり、地につける
「なんだよ…これ…なんなんだよオ！」

立ち上がり、止まろうとする足が言うことを聞かずにもつれて転んだ
無様に倒れてカチン。パン。と次元が違う武器の能力が放たれる

「うっ！…ごめん、むり…耐えられな…」

ノピアが粒子に変わり、楼騎がその光を掴もうとして倒れる

「チツ、この輪さえなんとかなれば…」

楼騎の刀ではこの輪に傷一つつけられなかったが…カシャリともう
一つの刀に触れる。

賭けてみてもいいかもしれない

「クロア、輪から離れる。こいつを斬り壊す…。」

地面に倒れたままのクロアは無言で立ち上がる…ボタンとまた倒れ
た。

「楼騎さん、これは人間には斬れません」

ウイストレアが言つて、楼騎は頷く

「人ではなければ」斬れるな。…妖姫様（まじゆ）、俺は掟を破ります。想騎
には言わないで下さい…。って今はいいんだっけか」

呟いて刀に手をそえる

「『流浪の月、禁章之巻』」

一息止めて、あらん限りの力で叫んだ

「『月下の守人』」ゆらり…と幽月が蒼い光の跡を残しながら『ホ
イルオブフォーチュン』に触れる

ガギンと物凄い音と共に三回の斬撃が叩きつけられたのをヘルだけ
が見ていた。

運の良い奴め。この世界で禁章を発動するとは

楼騎は手にかけた水映月を抜いた。

無数の斬撃、呪符の模倣が荒れ狂うように輪を痛めつけるガリガリ
と削る猛攻にヘルが警戒をしている

禁章、人間の愚かな産物。私が破棄します

手にしたダーレンスレイブを輪の外の楼騎に向けて呟く。クロアは

剣を床に突き刺して杖がわりにしてようやく立ち上がり、禁章？と聞く

「…知らなくていい。俺の家の術ってだけだ」

楼騎が珍しくはぐらかし、歯切れの悪い言葉を口にする。嶺たちがいたのなら聞きたかったが生憎つい先ほど消滅してしまった

「知らせる」

「断る。」

がんとして聞かない楼騎はクロアの説明要求をさらに二回断り、ヘルを見る

終わつたか？

「待たせたな。」

女はしなやかにとびあがり、ホイールオブフォーチュンを突き抜けて外の楼騎とぶつかる。灰暗色と紅と青の色が物凄い速さで駆け巡り苛烈に斬り刻もうと振るわれる

ヘルの周囲に回るカードは残り七枚…。クロアはこの場に五人しかいないのに存在するカードが誰のものかを考える

『神影』はカードによるものではない。だから除外。俺ら以外には他にログインした人間にはいない。除外。そうなるか…あの二人か？行き着いて、クロアはニヤリと笑う

「どうやら、まだ詰んでなかったな…」

剣を握る手に力が入る。そうだな、小さく呟いて床に両足を叩きつける！

「『クロア』。もう一度、いけるか？」

（もちろん、余裕だよ）

クロアは神影の力を剣に込めて再びオーディスタに変化する。知識と主神の模倣が長剣になった武器を手にして神影と打ち合う楼騎を見上げる

「行くぞ、手加減はしない」

床を踏み碎いて跳んだ。

手にした剣が風を斬り、ヘルを射程に捉える

来たか、愚息よ

「俺は…人間だ」

灰暗色と白黒の明暗がぶつかりあった

第二十九章 終端への軌跡（後書き）

あとがき

あとがき書き忘れたー（ ; ）！！
危ない危ない… キャンセル間に合ったかな？

さて、少し補足とキャラ紹介のページです。まずは背景キャラだった二人

想騎そり

楼騎の弟にして彼の実家離縁の原因の一つ。この話では登場予定はなし。

彼は旧作りバイバル、だけど今作では登場しません。させたいけど出来ません…
名前だけです…

実家離縁の原因ではありませんが想騎は悪くありません。彼もまた被害者詳しくはまたいつか…

妖姫まじ

楼騎の上司（？）にあたる人物。旧作りバイバル。

今作では様々な都合で妖姫は登場出来ず…。でもマリアは出てたので無理矢理は出せますが…やっぱり無理です
伏線の一人、でも登場出来ず

以上、楼騎にまつわる人々でした
ルイエス関連もあるんだけど…彼の出番が…（-_-）
次は補足

『禁章』

楼騎の禁術。ゲーム内では使用禁止を妖姫に定められていたが…彼の意思により発動、結果的に『人間よりも上位の武器同調』を得ている

複雑なカード。彼の切り札を切るための札で切れない札。リミティ・ブラスティカの完全上位の呪符でありながら使用者の精神磨耗

第三十章 深淵の記憶 アヴィス・メモリアル（前書き）

詰みを重ねるゲーム盤、神影の戦いは援軍達と共に再燃する！

って訳でもないラストスパート！（前から同じことを言ってる気がするが…）

終盤に向けては進んでいます。ええ、実際は終わる予定でしたとも！

…終わらなかつた…orz

前回詰め込んだ意味を疑う2万文字…少し、纏める能力の無さを実感中

コホン。

さあ、終盤スパート！開幕です

お立会いの皆様、あと少しの物語をお付き合い下さいませ

第三十章 深淵の記憶 アヴィス・メモリアル

楼騎は、血の高鳴りを感じていた。

楼騎は、心臓の爆音を感じていた。

楼騎は、禁章の力を感じていた。

悪魔のような破壊の力こそが禁章の存在理由。彼はこれを使うことを禁じた家の掟を破った

（大丈夫。まだいける）

刀を振るう手から力が抜けないように気合いの叫びと共に鮮烈な三連斬を見舞う

来たか。オーデイスタ

ヘルに興味は既になく、『人間にしては長持ち』程度の認識にしかなっていない。だからこそ必殺の一瞬があるはず…そう、その一瞬以外に彼に勝つすべはないのだから…。ガコン！と現実世界で端末から吐き出されたのはエアリアル。

即死して強制退場を受けた彼女に続いて次から次へと死亡者が続出した。ヨロワ、ノピアと続いた死亡者はみな啞然とした表情でヘル
の装具…なのか呪符なのか見分けがつかない攻撃を回想していた

「おやおや、まだ仕事は終わって無いよ〜ヘラヘラ」

笑い声に若干のトゲがあるDが現れた。

まだポカンとしている二人に変わってエアリアルはトゲを込めて答える

「即死技なんて卑怯よう…Dもやって来たら？」

遠慮するよ、と曖昧に返された。

「君達に続いて援軍の三人も帰って来たよ。今中には四人と三体のBUGしかいないからね…相当しんどいよ？ヘラヘラ」

うぐう…とエアリアルは言葉を返せず黙りこんでしまう

不本意だと言いたかったが今は何も言えないので悔しさを噛み殺して小さく威嚇した

「D、ツバイン。遊んどる場合ではないぞ
何せ得体の知れん敵を相手に一人でも人員を割けないのはしんどい
からの」

Gが部屋の扉から言った。

その後ろに走つてくる人影が三つ…現実の嶺、瀬名、御簾だった

「Gさん、僕らを再ログインさせて！」

Gの手に持ったメモ台が鋭く眉間を貫いた！

「あだあつ?!」

まともに受けた嶺は痛む場所を両手で押さえてしゃがみこんでいる…
その隣の瀬名がずいと前に出て嶺とGの間に入る。高い位置からの
ポニーテールが揺れた。

「G、私達のログインをお願い。このままじゃ緋糸達も…」

Gは首を横に振った

「駄目じゃ。…というか無理じゃ。僕らの端末以外からこの六人の
アカウントが凍結されとる。主らはログインさせられぬ」

瀬名は閉口し、何でと御簾が口を開いた

「理由は…おそらく奴の『アルカナフォーチュン』、それも『ジャ
ツジメント』。あれ以外は考えられぬ」

それには御簾も同意して頷く

「ならG、端末からの解除が無理ならば他に凍結を解く方法は？」

Gは首を振った。無い、と

「…ならば、私たち以外ならば？」

御簾が呟き、瀬名が手を叩いた。

「それよ！」

私たちが駄目ならば他の人達に頼めばいいわ！」

「誰にじゃ？」

瀬名はうぐつ…と答えに詰まる。

時間はもう夜明けに近い。今からメンバーを探すのはかなり骨が折
れる。今から集めてもすぐに揃うとは思えない

「集められるか？」

Gがキツイ口調で言った。

「どうやら…彼女も焦っているようだ」

「…っ！」

瀬名は嶺を見る。『天界の守護者』の仮にもリーダーなのだから…

「コイツなら！」

「もしもし？ああ、うん。『ヴァルハラ』に来てほしいんだけど…」

「え？朝早いつて？」

カチン、と嶺の額に青筋が立つのをその場に居合わせた全員が目撃した。

「最後の出番のチャンスだって言ってるんだよ！わかってんのか？！」

ふっ、と憑き物が落ちたように嶺は携帯端末を落とした

「あ…また…」

瀬名が駆け寄り、肩をゆする

ガクンガクンと揺れて彼は目を開けたまま気絶していた

「あちゃ、まさかこのタイミングで…」

「人格が入れ換わったからね、無理もないわ」

瀬名と御簾が交互にため息をついた。二人だけは事態を把握してるらしい

「え…っ？瀬名さん御簾さん…これって？」

「エアリアル疑問に気にしないでと二人が答える。

「…よくある事だから」

同時に答えた双子は小さく息を吸ってタイミングを合わせて…

「…聖蓮チヨップ！」

首筋に手の側面を叩き込んだ

…。

ぐったりとしているが、大丈夫なのだろうか？

「平気よ、さつて…私たちも連絡してみますか。嶺が一人呼んでくれたからね」

瀬名の言葉に御簾も頷く

「面倒だけど、このままって訳にもいかないしね。

聖蓮の名に傷をつけるのもアレだし」

伸ばした後ろ髪をかき上げながら御簾もそう言って携帯端末を取り出す。管理者二人は小さく笑いながら、いかにも二人らしい、と囁きあう

「…うん、今から…そう、うん。」

「そうそう、ルイスも連れて…え？朝食の準備中？そんなの今日の夕方以降じゃない！連れて来なさいよ！

代役？誰よ…」なんか盛大に叫んでいる御簾を尻目に瀬名が携帯端末をボタンと閉じてGに一人確保と伝える

「やるのう…」

「まつ、これくらい楽勝よ！」

えっへんと胸を張る瀬名の隣で御簾も端末を閉じて、言う

「四人確保」

おお〜とざわめきが走る

「なっ、四人?!一番苦戦してそうだったのに！」

「ふっふっふ…御簾様を舐めない事よ」

むきー！と瀬名が叫んで掴みかかる。それを予期していたのか管理者二人は襟をつかんで持ち上げて、引き離れた。

「む〜。じい〜、ひどーい」

「D、放しなさい！首っ！痛い！」

ポトリと落とされて御簾は尻餅について痛がる。それを無視してDは意外と集まるな、と感心していた

「…ねえ、もう一人候補がいるけど？」

「呼べばいいさ」

御簾は携帯端末を操作してどこかに電話をかける…どこかの大豪邸で電話がなった。

白いオーク材の電話台の上に鎮座したいかにも年代物のアンティーク電話が鳴っていた。このご時世に電話器など珍しい

「はい」

近くにいたメイドが電話を取り、答える。

「『天界の守護者』、御簾よ。お嬢様いる？」

電話を受けたメイドは左右を見渡してから答える。

「お嬢様は只今ヴァイオリンのレッスンを…」

「どうしたの？Anna」

背後から御簾の目当ての人物が現れた。声を聞いた彼女は電話越しに呼びかける

「ちょうど良かった。『天界の守護者』からの招集よ」

電話をメイドから奪った少女は笑顔で断る。

「『天界の守護者』ならば行きません。Ms・御簾、貴女の頼みならば考えますが」

電話越しに笑い声が聞こえた。なるほど、とどうにかこうにか笑いを噛み殺して電話向こうの少女が伝える

「日本のサーバーへ来て、管理者には伝えとくから。私からの命令よ！」

「ok・see you」

プツン、と受話器を置いて電話を切る。

「さあ、出かけるわ！車を！」

「お嬢様！ヴァイオリンのレッスンは？！旦那様に怒られますよ！メイドの静止を振り切って彼女、黒髪のお嬢様は出掛けるような帽子を取り頭にのせた。中には綿がぎっしり詰められたフカフカのお気に入り。彼女の上機嫌のお出かけスタイルを見てメイドは止めても無駄だとため息をついた

「お気をつけて、リーゼお嬢様」

「後でお礼するからごまかしてね！アナ！」

彼女は素早く手配された車に飛び乗り、行き先を告げる。そこは同じだが違う場所

「『ヴァルハラセンター』へ！」プツン、と切れた電話の先で御簾は再びくすりと笑った

「ワイゼルのご令嬢もなかなかやるわね、今度あっちの会社とのコラボレートも視野に入れようかしら？」

瀬名は小さくフツと笑う

「しつこくお見合いを迫る馬鹿親父に媚びて？」

「たまにはいいでしょ？説得は任せなさい」

コホン。

「説明して頂いていいですか？御簾さん」

エアリアルは疑問に頷きが返された

「知り合いよ、仕事と私的にね」

なるほど。とエアリアルが頷く

今のところ援軍は六人。問題は何分で揃えられるか…

GとDが職員に指示を出している

おそらくは手はずを整えているのだろうが集まらなければ意味はない

「案ずるな儂らがなんとかしよう。…A、E、L、会議じゃ」

三人の管理者がGの後ろに同行して中央管理室へと去っていった

エアリアルは二人の子供が見上げているのに気付いて作り笑いを浮

かべた この二人はそれを見抜いたがあえて何も言わずに笑い返した

「…クロア、もう少し待っててね」

エアリアルはもどかしさを感じながら眠るように端末に座る少年に

小さく呟いたクロアの頭上で雷光が煌めいた。

「楼騎！寄れ！」

『隔壁』を張つてその青白い雷撃を受け止める。危なかった

「オーディスタ、そのまま動くな」

人格をウイストレアに切り替えてワルクキュレアは天空に飛翔する。

手にした槍で風を斬り裂き雷を叩き割り純白の羽を舞わせながら彼

女は上空に設置された魔法陣を破壊する

「下！」

槍を投げて自分の下方に出現した蒼い陣を貫く。パリンと割れた魔

法が暴発して残骸を四散させた

ほう…

感心したような声を出して黄金の銃をカードに向ける。今、神影の状態だとアレイアかウイストレアが撃ち抜かれるだけでワルクキュレ

アは殺られる…。

「来い！『フギン』『ムニン』！」

黒い羽を撒き散らしてオーディスタは自身の眷族の鴉の名を叫んだ。バサリバサリと二対の羽が開いて二人の『クロア』に分裂する

「やれやれ、どうしようか」

「知るか。止めるぞ」

『クロア』とクロア、二つの人格が同時に操作される。肉体を超えた能力はオーディスタの固有スキルで他の神影では真似できない白い剣と黒い剣。白陰と黒陽を模した剣が二人の手に握られて一振り空気を切り裂く斬撃を放った

回避したヘルは狙いを外して再度銃を構える。だがその間にワルキュレアは槍を抜き、羽を広げて空気を自分の加速装置に変えて突撃した！

「槍の本分は『突撃』。ですよね御母様！」

『御母様』はダーレンスレイブで槍を反らしてワルキュレアを軽くあしらいう

ならば防御の本分は『無傷』。穂先が触れねば傷はない

カチリと銃口がワルキュレアの後頭部に押し当てられた。…回避は、不可能

「『戦乙女の流儀』次の礼。『遊撃の翼』！」

散った羽が向きを変え、ピタリと根元をヘルに合わせて球体状に全方位から照準を合わせた。死角は皆無、ワルキュレアの神聖な羽が敵を斬り刻むのはもはや確定事項そして『勝利』の女神の名の元に完全な完成が宣言された

馬鹿馬鹿しい

素早い一閃が羽を斬り刻んだ。

「そんな…まさか！」

『ダウンフォルツ』

頭上からの叩きつけるような一撃がワルキュレアの甲冑を破損させ、床まで凄まじい勢いで叩きつける！

「『天鎖網・六花』」

落ちてきた彼女をクロアは鎖で捕らえる

六花鎧はもうないので一つ下のランクのもので代用した。鎖が手足に巻き付き、胴を支えて墜落を免れた

「くっ…感謝するわ」

鎖を解いた彼女はそう言つて軽やかに降り立つた…「にしても…冗談キツイな、神影二人がかりで押されてるなんてな」

クロアに同意の言葉が返される

「絶対の物造主、そして地獄の門番。御母様は一筋縄でも二筋縄でもいかないわ」

確かに、と同意する。本当に面倒極まりない相手ですら逆になんとも笑いたくもなる

すると『クロア』はこちらを見ている雰囲気のある女を見てもう少しの時間稼ぎを提案した

「時間稼ぎ？」

「うん。流石に人が神に挑むのは無謀だから楼騎に秘策を頼んでおいたよ」

いつの間に…。クロアのコメントに鎖の時、と簡潔に答えが与えられた

カシャン、と剣を背負い『クロア』とワルクユレアの前に立つ。時間稼ぎか、好みじゃないが…黒い剣をヘルに向けて叫ぶ

「仕切り直しだ。行くぜ？」

何度も同じ。見るに耐えない愚息はここで壊すとしよう

銃口がカードに向けられた

引き金を引かれたら誰かが即死する。だが、撃たせなければ問題はない！戦いに必要なのは『切り札を切らせない』事、そして『使う気も起きないほどに叩きのめす』事だ

クロアは手にした剣で再び大斬撃を放った

煩わしいな

防がれた。だが…

「足元！」

白い斬撃が彼女の服の一部を切り取った。彼女の衣類のほんの切れ端、ダメージはそれだけだが始めて与えた攻撃…！

ほう

パチパチと光がはぜて服がリカバリする。

「御母様、どうしました？まだ僕の攻撃は続きますよ！」

連剣『黒陽召剣』！

空間が歪み、本来存在しない黒陽がもう一人の『クロア』の手に収まった。召剣という異質な技法はさすがBUGといったところか

「武転『ソリテイダムド』！」

跳び上がり、頭上をえぐる二色の剣閃をダーレンスレイブは容易く弾き返し、そのまま風圧で彼を斬り刻む！

秘剣『インフィニティブレード』

追撃が放たれる刹那、クロアは手にした剣を高く放る。くるりくるりと回転しながら黒い剣が『クロア』の目の前に…

素早く持ち変えて『クロア』は偽の黒陽を破壊する！

何？

何故壊した？とヘルが理解不能に陥ったのが彼女の最初で最後のミスだろう

「よくやったな」

「私たちを忘れんなああ！」

男女一人づつの声が響いたピシリ、と床が割れて二人の人影が飛び出した。

「『紅蓮』の緋糸、ここに」

「『虹色』の黒須、参上！」

武器を携え、名乗りをあげてこの二人は現れた！

生きていたか…。しぶといな

紅いコートに身を包んだ赤い髪的青年は手にした炎の大剣をヘルに向ける。

「『BUG-01』を五十体倒すのは流石にキツかったがな」

それに黒髪の少女が同意する。エメラルドグリーンの光を放つ弓を手にした彼女は緋糸を援護するように背後で弓を引く

「それでも私がいる限り緋糸は倒させないわ。絶対にね！」

光を束ねたような矢がヘルにピタリと狙いを定める。確かな殺意と決意の矢は神影にとつても危険なものだと彼女：黒須は直感する

彼女の能力は『知覚』。あらゆる状況で確かな判断を行える能力なのだ

「『ミスティック・アーチャー
精霊弓兵』！」

矢が放たれた。

飛んできた光の矢をヘルは首を動かして回避。そこへ緋糸が剣を振り上げて頭上へと跳び上がる

「燃素収束『紅蓮の大剣』！」

「空を煌めく無限の星々、我が旋律に従って黒い帳しほりにその姿を刻め。」

彼女の頭上に現れた光球から無数の光が降り注いで緋糸の進路を絶つ。

「黒須！」

「はいっ！操符『火炎灯籠かえんとんとう』三枚！」

火を湛えた灯籠が三基現れてちろちろと火の粉を散らしていた。それは一見無意味な置物だが特定の状況下で真の力を発揮させるものだった。それは今彼女、黒須の手にあった

「燃素収束！『ミスティック・アーチャー・フレイムスタイル』！」
彼女の弓が突如として炎を纏い、光の矢から烈火の矢をつがえる弓に形を変える！

赤々と燃える弓と矢は緋糸を狙って放たれた！

「爆炎一刀……」

空中で全ての体重を剣に乗せ、緋糸は巨大な力を行使する

その剣に矢が命中してより巨大な炎の塊に変質させる。それは一度で一回り巨大になり高速で連射されたのだから受けた数だけ肥大化する

まるで貪欲な火災のように緋系の剣は巨大化していった！

「『獄炎』！」

細い光の束を砕き、星々の輝きを蹴散らして莫大な熱量を備えた剣は振り下ろされた！

その姿を遠くで見つめていた楼騎は自ら破壊した壁の隣に背中を預けて、化け物か。と呟いていた燃え盛る剣は止められず、ヘルは次の魔法を唱える。

防御？反撃？ 様々な思考を破棄し試行し破棄し試行し破棄し試行し破棄し試行し破棄し試行し破棄し試行して詠う

「『天を覆う無限の天涯。我が前に敵はなく、我が後ろに敵はなし。永劫なる絶対の前に比肩するものもなし。』

地、炎、風、水と四元素を束ねて盾とし、槍とし、命とする。『「鮮やかな光が彼女の足元に展開する。無数のルーン文字を書き連ねた魔法陣は今のクロアでは解読できず、緋系もまたわからなかった四元素、そして天上天下の無双宣言。二つが意味するのは無敵にして最高の盾

「『アイギス 石化目の鏡盾』」

現れた盾と剣がぶつかる！

金属がこんな音をたてるのか？ギャリギャリとメキメキと騒音以外の何物でもない音と燐光が部屋を染めた

「アイギス…おいまさか！」

クロアの『知識』が無敵の盾の知識を引きずり出して理解させる。

鏡のような磨かれた盾を、埋め込まれた石化ゴゴクの目を！

黒須もハツと気付いた。紅蓮に包まれた仲間に魔眼の凶手が確実に伸びているのに気付けなかった自分を呪う

「『ミスティック・アーチャー・ラピッドスタイル』！」

速射特化の小型弓に変形させる。変幻自在、故の精霊弓兵

トリガーを引くだけの高速弾幕発生器となった弓は短い矢を毎秒100発を超える速度で速射を続けた

一撃の威力は到底ミスティック・アーチャーの通常形態には及ばな

いが圧倒的な弾幕をもって一つの巨大な矢と同等としていた。手元がほんの僅かでも狂えば自分の大切な、世界を敵に回してもいいくらいの大切な人を貫くような連射を完璧な弓捌きと二人のチームワークで巧みに回避と離脱を両立させる…

だが、彼女の『知覚』が全て緋糸に注がれたのは完全に失敗だった。ヘル星々が静かに頭上に移動したのに気付かなかつたのだ。楼騎は『クロア』に付き添われて壁に背中を預けていた。

「…相変わらずの化物っぷりだな、あいつらは」

『クロア』はそう？と首をかしげる。絶対にもう一人の同じ顔の人間やらない同じ顔のBUGの仕草に楼騎はやれやれと呟く

「調子狂うな…。お前」

「あはは、そう？僕は『クロア』だからねクロアとして接せられると…痛いよ」

ふと、BUGが良く口にする言葉が引つかかる

「…。聞きたい。お前たちの『痛み』の定義は何だ？ 肉体はなく、精神もない伽藍の存在が何を痛む」

目の前の柔和なBUGは定義か、と考え込む。彼らにも厳密な定義がないのか言語化に時間を要する

「うーん…痛い時。そうだなあ…人間らしくいえば『痛みを感じる』に相当するかな？」

ほら、人間だつて『痛み』そのものは知らないでしょ？」「何を…。言いかけて止まる。

言われてみれば痛みは『痛い』としか表現できないような気がする。何がどうなのかは具体的に言えず、ただ『痛い』としか…

「ね？僕らは人間を模して造られたから…曖昧にして確実。絶対にして絶大な感覚の『痛み』に反応する。御母様は人間の争いを見て何かを思っただと思えます」

残念ながら詳細は僕の『知識』には刻まれていませんが…」

楼騎は小さく頷く。少なくとも何らかの目的として『痛み』に反応するということはわかった

背後の壁が微かに揺れたような錯覚を覚えつつぐるぐると回転する
思考を落ち着かせる。どうやら禁章の力が切れかけているようだ

「…もう少し待って、後五分。この転移ゲートを持たせて」
灰色の空間と白い部屋、二つの別座標を無理矢理繋げているのはい
くらなんでも辛い。BUGに代われと言つと

「無理だよ、今の僕はクロアの影にして箱。サポーターみたいなも
のだからね…そういうのには触れられない」

面倒だなと文句を言っておいて楼騎は意識を研ぎ澄ます…。痛み、
模倣、プログラム…キーとなる言葉を数珠繋ぎにして並び替える
カタカタと全身が揺れようと研ぎ澄ました神経は緩まない。たとえ
アイギスが発動した瞬間でも身じろぎしない。考える思考する止め
ないやめない続けよう

「…御母様、ヘルは何を見て過ごした…。あいつらはAIについて
語った、人間について語った…」

不意に、カチリ、と何かがはまった気がした。まるで解答にいたつ
たように全てが理解できて全てに説明がついた。

「…そういうことか」
ガタガタと壁が揺れている。いい加減錯覚だというのも不可能な揺
れは次第にガリガリと何かを削るような音と共にやってきた

白い装束と灰色の物体が穴から飛び出してきた時間が止まっていた
ような気がした。

緋糸は自身の身をギリギリかすらせずに連射される矢を回避してい
るときに不自然な光を見た。まるで夜天の星のような光は音もなく
滑るように流れていった

(しまった…！)
目の前の魔眼を見ないようにしながら鈍る手足で脱出する

「上だ！」

ハッと彼女が空の星に気付いた。射撃中止、撤退までには時間が無

い…緋糸は内心諦めた

すると、視界に白い装束が舞い込んだ…『降り注ぐ流星の雨』
ヘルが呟いたのは攻撃の呪文。先程の防御とは違い上空から光を降
らせて仕留める技法…

「ミスった…助けて…緋糸…」

光を前に黒須は身を守るように庇う。

眩しい光が幾筋も煌めき思わず閉じた目蓋の内側にも煌めく光が鋭
く届く

「…痛くない？あれ？」

目を開けると、白い幼い少女が片手を掲げていた。その手の先には
幼い細腕とはあまりにも不釣り合いな巨大な灰色の物体が握られて
いた

「油断しすぎね、不様なこと」

冷たく吐かれた声はあんまりにも鋭く、またある種の力を込められ
た声色だった

「マリア…フィオーレ！」

「御簾に呼ばれてきたわ、加勢してあげる」

光が途切れ、少女は手にしたモノを降ろす

灰色に輝く巨大な鉄の塊、鋭い歯がついたチェーンソーをちらつか
せる

ほう…援軍か？

くすり、とマリアは笑う

「ええ、人間なんて脆いからね…。助けがないとあっという間に壊
れちゃうのよ」

ヘルはなるほどと答える

人間なんて所詮その程度。私達にとって『保護しなくてはいけな
い』モノ、ね

マリアは不機嫌に呟く

「知った口を」

知らぬ口を

ドロン！と一度音を立てて巨大な出力で刃が回転を始める。それはまるで見せつけるような迫力を伴い、怯えさせるような音量でただ白いだけの部屋にこだまする

私はその程度に怯むと？

マリアは何も言わずに出力を上げる。回転が早まり火花が散ったなるほど、守護家系の一つか。『フィオーレ』の名は大聖堂の一つだったな

「私の事を気にするより自分を心配なさい？でないと……」
フツと姿が消える

どこだとクロアが目で追い付く前にヘルはダーレンスレイブを薙いだ。ガキン、と重厚な金属同士の衝突音が響いてチェーンソーが削る音が上乘せされる！

続き二、三撃は背後を狙い、四撃は正面、五撃は頭上で追撃は向かって左側面。どうにかサディスティックな武器の巨体で幼子の超高速移動の軌跡が読み取れる

逆に、それが無ければクロアはマリアを……マリア・フィオーレを見ることができなかつただろう穴が再び揺れる。

今度は控えめに揺れて数人の、割と楼騎が見覚えある人々が飛び出してきた

「援軍の援軍、メリアル！マリアちゃんに置いていかれた次第であります！」

いや、聞いてねえと元上級ランカーの少女にツッコミを入れた楼騎は彼女と共にやって来た人影に不快感を割と露骨に示した

「このルイエスが助けに来たよ、ねえクロア君？」

「うぜえ、死ね」

マリアの動きを目で追い続けているクロアはルイエスの言葉を時間の無駄だとばかりに切り捨てる

「我が主になんたる暴言！」

「止めなさいラムダ」

いたのか従者、s

不機嫌にうなるラムダをいさめ、ゾルアは手に武器を産み出した。主を守り敵を圧殺し、ついでにこの世の法則を無視しかけている武器を呼ぶ

「『グリダ・アルビナ』」

もう一人、先程ゾルアに黙らせられたラムダが美しい細指に紫水晶を挟み、呟く

「『アメジストクロウズ』」

変質した水晶は細く長く姿を変えて双鋼爪そうこうづめになった。

驚くほどに鋭い爪刃は指から膝くらいまでの長さがあった

「ルイス師匠より指名された。BUG、前の借りは返すよ…銃弾でね！起きろ『レベルツカ』！」

ルイエスが武器の名を呼んだ。女性名をしたハンドガンタイプの拳銃、装弾数は多くないが軽量で立ち回るルイエスの武器

「やっと来たか、うちの執事の代わりに来たのなら私を護れ、命を賭けて！」

マリアが笑い、チェーンソーの重い一撃がダーレンスレイブを弾き飛ばした。鋭い轟音が鼓膜を押す

「性格悪いよ？直したら？」

マリアが笑いながら言う

「貴様もだ」吹っ飛ばされたヘルは空中で足場を作り立て直した。

小さめの魔法陣に足をのせて追撃してきたマリアに三本の雷を放つ三つの雷は分岐し分岐し、無数に枝分かれして範囲を防御する壁になる。

「嘗めるな！」

鋭く叩き割り、マリアはヘルに体当たりする。が…手応えがない。ヘルヘルの姿が霞のように消えたのを見て何らかの防御をされたのだと理解する

『湾曲する因果』

背後に現れた剣がマリアの胸を裏側から貫いた。

呆気ない…？

ガシリ、とマリアの手がダーレンスレイブを掴んで血を滴らせる。かなり強く掴んでいて指に深く刃が食い込んだ

「メリアル！」

祈れ、解放はそう聞こえた。

「『水晶の大鎌』！」

白い飾り布を振り乱し、美しい鎌が空を刈り取る。物理と魔法を組み合わせたのかヘルもその技を完全に受け止めるのに失敗した。薄く皮を引つ搔いた程度の傷だがそれに激しく動揺する

隔壁を越えた？…馬鹿な

「鎌符…」

メリアルは何かを思い出すように軽く目を閉じて、笑う。小さな吐息のような笑いの後に真剣な眼差しを向けた

「『ぼっやのれっしょう 儂夜の裂傷』！」

鋭い一閃がマリアの頭上すれすれを通りヘルを捉える。今度は隔壁で守られたBUGは手にした剣を振るい……剣が抜けない

「かつて、聖女はいかな拷問にも口を割らなかつた者が選考の対象となつたらしいじゃない。ならば私も『表の名』に恥じぬようにしないとな、ああ痛い」

血塗れどころじゃない指で剣を押さえつけたマリアは余裕の表情で一層力強く握りしめる。刃が食い込む嫌な音に見ていた人間はやや後退する

「ほら、いつまで休んでる。神の幻よ」

マリアは告げる。とどめを、と

クロアは剣を取り、立ち上がる。手にした剣は一本、神影化を続けているせいで頭が正常に動いていない感じがする…

知識が溢れて脳内を掻き乱す

自分が誰でどこがオーディスタなのかわからなくなる曖昧な境界線に吐き気を覚えつつ自分の半身を呼んだ

「…来るよ」

壁がまた揺れた。

まるで物凄い力をぶつけているかのように何度も揺れていた。

「…遅いわね」

「仕方ないわよマリア…」

バキッ、と壁の穴付近が軋む。いや割れる

援軍、最後の援軍が二人現れる。その二人は良く知った人物達で…

「イギリス支部上位ランカー『リゼ』、Ms・御簾の召喚に応じ参
じました。ご主人様供、ご命令を」

なんか一文字多い自己紹介の後にもう一人が名乗る。もしかしたら
クロアが一番待ち望んでいた人物かもしれないソイツは…

「ガルド参上！つたく、俺抜きで終盤かこの野郎」

青竜刀を手にした友人が『白蛇』を引き連れて飛び込んできた…。

二人の目が合う

(乗れ)

そう伝えられた気がした。

クロアは剣を手に小さく頷いた

ニヤリと笑うガルトは自身の所有するモンスターを操作する

「走れ！白蛇！」

身長4m、胴の太さは160cmを超える巨体が物凄い速さでクロ
アを跳ね上げる！

頭に着地した少年は懐かしげに白蛇を撫でる…。昔はコイツに守ら
れてばかりだったなと回想しつつクロアは黒い剣を構える

『天より舞い散る流星は…ぐっ』

ヘルの詠唱は喉を掴まれて不自然に途切れる。ギリギリと小さな手
で締め上げるマリアのなんたる恐ろしさ！

手にした武器は何もなく、彼女の盤面は詰みの様相を見せる

「終わらせる！黒陽！」

鋭い光が剣を包んだ まさか、これを使わなくてはならないとは…

人間ごとく侮った私の失敗か

ジジジ…と剣が『ブレイク』された

『パニティ・ブレイク虚を繋ぐ崩滅の光』

天空を飛んでいた星が配列を変えて部屋中に移動する。そしてピタリと動きを止めて…光を放った

「気をつけて、それは『ブレイク』よりキツイよ！当たれば無事にすまない！」

内包存在が叫び、閉じた壁の穴を放棄して走り出す

二人は元の姿に戻り、迫り来る光に照準を合わせる。

「『データ・ブレイク』！」

無数の光が合わせた照準サイトに捉えた光を極太の極彩光が迎撃する

次に飛来した光を避け、次はステップで避け、その次は強引に下を抜ける。どうも先に進むのは辛い…だが進まねばいけない

シュー…と白蛇が舌を出す。不安なのか、クロア…いやオーディスタが撫でると鳴きやんだ

「広域隔壁、スタンバイ」

小さく周囲の座標を設定、広域防御を行う。範囲は味方全員を庇う程度、展開！虹色の光が走り広大な部屋にやや平べったいドーム状の防壁が生まれる。色は一瞬にして半透明になり、細い光を跳ね返した

「オーディスタ、よくやった。が…」

長くは持たないぞと無言で告げられる。

「建て直す。ワルキュレア、追加防壁を」

「無理だ」

あっさりと『勝利』の女神は答える。不機嫌になったオーディスタを見てうるたえるようにしてから、

「私は…そんな器用な術は使えない…。魔術師たるオーディンの影だからお前は出来るだけだ！」

偉そうに威張れない事を呟いた。

流石の女神も苦手分野か…とオーディスタは知識に追加しておく。

また知らないことが一つ消えた。自然に笑みが浮かぶのに気付いて無表情を取り繕って誤魔化す

「なら…リゼ！防壁くらい…」

「Sorry、Mr.クロア。私は召喚師なのでお役にたてません
…攻撃ならば防壁ごと粉碎…ケホン、破壊できますが」
オーディスタは軽い目眩を覚える

頼りにしていたメンバーがごとごとく使用不可だとは…知識を検索
しきれなかった自分を悔やむ

時間稼ぎは終わったか？

『アルカナフォーチュン』の『ホイールオブフォーチュン』を展開
して彼女は呟く。どうやら盾など無意味と教えるためにわざわざ黄
金銃を使う気らしい

カチリ、と引き金に指がかけられた。

「『リビングフェアリー』」

ピタリと動きが止まったヘルの後ろから意外と大きな幻想生物が顔
を覗かせて魔力が渦巻く球体をヘルの頭スレスレに押しつける…

「？」

「やりなさい！」

空中で炸裂する。

くっ…流石は人間最高峰のパワープレイヤーか、重いな

「！」

周囲に散らばる破片が再び弾け、辺りが煙に包まれる…。どうやら
その煙は只の煙ではないようでヘルは一瞬だが様子を見る

「さあ、いでよ！『ナイト・ドールズ』」

カチリ、と引き金に指がかけられた。

「『リビングフェアリー』」

ピタリと動きが止まったヘルの後ろから意外と大きな幻想生物が顔
を覗かせて魔力が渦巻く球体をヘルの頭スレスレに押しつける…

「？」

「やりなさい！」

空中で炸裂する。

くっ…流石は人間最高峰のパワープレイヤーか、重いな

「！」

周囲に散らばる破片が再び弾け、辺りが煙に包まれる…。どうやらその煙は只の煙ではないようでヘルは一瞬だが様子を見る

「さあ、いでよ！」ナイト・ドールズ」

空間に突如として現れた小型の魔法陣が複数個展開して中から黒衣の人形が現れる。目の部分は騎士甲冑のような仮面でおおわれていて長い金糸が流れるように動きに合わせて揺れた

手にした武器は槍と剣で半々といったところ。黒と銀に覆われた人形は一斉に飛びかかる

『ダールズスレイブ 緋色に染める呪殺剣』

カシャン、と持ち変えられた剣が音を立てる。灰暗色の光が剣から噴き上がり膨大な魔力を撒き散らす！

巨大な斬撃は全ての人形を飲み込み、砕く。塵になるまで砕いてようやく人形は残された粉末を形見代わりに落としていく

「次！」

マリアが素早く目を走らせる

「舞い踊れ『ヘヴンズニール』！私を…空へ！」

バサリと羽が広がり、巨大な鳥を思わせる素早さで空へ舞い上がる…。槍を用いた高速攻撃でも一人ではヘルの隔壁・呪殺剣・黄金銃を越えられないだろう…

「行くぞ『クロア』。もう少しだけ神影化を解くなよ」

（はいはい、任せといて）

剣を手に跳び上がる。床を砕いて無理矢理天空の神々の元へ飛翔した足場を作り、着地する

来たか、私の愚かな子らよ

槍と剣を握る二人の手に力が入る。敵は強く、自分達だけでは勝てないかもしれない。だがそれ以外に戦いに勝てるものもなく、二人はただ静観して敵を見る

なるほど、もはや情を捨てたか…。実に人間らしい……愚考を！

足元に巨大な魔法陣が広がったのを見て二人の神影は退避する 『アルカナフォーチュン』

キャラクターカードが捲られてホイールオブフォーチュンの効果が消えた。次の効果は

『ハングドマン』

両足に魔法陣から伸びた雷が粘着質に絡み付いた。

思わずその場に倒れこんでしまい鼻を打つ

「っ…セコイなおい！」

剣で絡み付いた雷を破壊する。神剣となっているこの剣は概念を破壊することができる

「ワルキュレア！無事か？」

白い羽が舞い散るので彼女の無事を確認する…と頭上を素早い光がいくつも飛んでいく

足枷の雷が、星の光が滅茶苦茶に交錯して飛び続けるワルキュレアを撃墜せしめんと猛っていた

「リゼ！援護頼む」

「承りました。保護対象設定、捕捉」

メイドが三小節の呪文を唱えてから手を掲げる…。先程リゼが作った魔法陣を少しだけ大きくした六芳星の模様が浮かび上がり、中から今度は盾を持った人形が飛び出してくる

「耐えて…私の騎士人形！」

キツと睨み付けるような眼光を人形が放ったかと思うと構えた盾と共に光が交差する中に飛び込んだ！リゼの人形達は小さな体で上手く盾を使い、直撃しないように攻撃の軌道を反らす。

数発弾いた時にはほぼ全体の盾にひびや損傷が目立っていた。やはり人形程度では神の影には太刀打ちできないのかとワルキュレアは後ろに残す形になった人形達を哀れむ

「リビングフェアリー、補強を！」

コクン、と妖精が頷いて、何かを呟いた

「Reinforce」

盾に文字が浮かび上がり、壊れかけた盾に堅牢な防御が上乘せされた！削れた表面は修繕されて再び滑らかな光沢の銀に光を反射する

「やるな、お前」
楼騎の感想にリゼは柔らかく微笑んだ

「やれやれ、僕らは僕らで動くよ」

付き合ってられないとばかりの大げさな仕草でルイエスはお供を引き連れて歩き出す

「待ちなさい」

裏人格のマリアが鋭く呼び止める

「あなたなんかここから出たらずくに死ぬわよ？」

白い衣服に身を包んだ少年は鼻で笑う

明らかに不機嫌になったマリアをメリアルがなだめて暴れないようにする

「ふん、僕が死ぬ？そんなわけ無いだろ…。このルイエス師匠の教えがあればどんな戦場だろうと遊技場に変わりないのさ！」

チツ、と舌打ちが聞こえた。

「ルイエスの所有者このマリア・フィオーレにたかだか押し掛け弟子風情が…」

「マリアちゃんストップ！あなたが暴れたら全滅だからー」

ルイエスは興味ないと言いたげに武器を空に向ける。狙いはヘル。引き金を引いたオーディスタは風切り音に素早く反応して左にずれて飛んできた弾丸を避ける。下から複数個矢継ぎ早に弾丸が体を掠める

「貴様：俺を殺す気か？」

弾丸を再装填してルイエスが狙いを固定した。小さく舌打ちして、隔壁を強める

仲間割れか？愚かな

ダールンスレイブが振り上げられ、灰暗色の光が放たれ…

「主への暴言、聞き捨てなりません」

十の爪がヘルの喉元に触れる

何?!

背後から抱かれるように突き出された十の爪はゆっくりと首筋に赤い線を刻む…。星を呼び光を放つ

「『ガーネットウォール』」

光が内部で複雑に屈折して本来の狙いとは違う場所へ飛んでいった。首筋に爪痕を刻まれた神がなるほどと頷いた

透過と屈折率の盾か、厄介な

爪を素手で弾き、黄金銃を突きつける。ラムダの顔が危機を察知してひきつった

…と、黒い影が降ってきた

既に上空で停止していた神影よりも高い位置からその質量は叩きつけられた

白亜の大斧、あまりにも巨大な一撃は銃を砕き腕を外しヘルを地表にまで叩き墮とした！

小さなクレーター状の破壊痕を一つ作って着地したヘルが憎々しげに剣をとる

人間が…『保護対象』が…図に乗るな！！

大斬撃を放つ。灰暗色の光は大気を引き千切り虚空に裂け目をいれて空中に止まる四人を襲う

「ワルキュレア！」

「はい！『二重隔壁』展開！」

左右から強靱な盾が光を遮断する。相克する二つの力が噛み砕こうと、守り抜こうと悲鳴を上げる

っ…！

砕けない、そうヘルは直感した。

何故呪殺剣をもってしても砕けないのか、理解できない…。ガチャン、と四方を金属が囲んだ

「残念だったな」

ガルドが白蛇と共に右辺を、

「チエックメイトだね、裏切り者」

ルイエスが左辺を、

「抵抗すれば首をいただきます」

背後から鎌を伸ばしたメリアルが前面を、

「抵抗したいならいいわよ？ただ、良い声で鳴いてくれるなら、ね」
サデイスティックプリンセスをメリアルの隣で頭の後ろにギリギリつかない場所で駆動させて背面を塞いだ。

くっ…

空からは神影が攻撃体勢に、人間二人はそれに掴まるようにして浮いていた

八方塞がり…か。武装解除

ダーレンスレイブが崩壊して空気に溶けるように消滅した。敵の武装解除をもつて一応の停戦となる… 武装じゃなければ構わぬな？
オーデイスタは空に輝く瞬きが膨大な数に増したのを見て愕然とした…。悪あがきの反撃が…これほどの…

終焉『アルカナ・デス』

亜式解放『天を覆う星々の断罪』

死神のタロットが浮かび上がり、星々に暗い影が降りる…。仄暗い明滅を繰り返す小さな光点は不気味に周囲を回遊し始めた

「抵抗しようというならば…良い声で鳴いてもらおうわ！」

爆音響かせてチェーンソーが振り上げられる

とすっ、とマリアの体を光が抜けていった。マリア自身気付かないような一撃だったがそれはとてつもない激痛を伴って彼女を内側から蝕み始めた

普段、滅多な事では上げない悲鳴がマリアの叫びが広大な空間を揺さぶった！

「マリアちゃん！」

「来る…なあ！」

痛みをねじ伏せるようにマリアは武器を振るう。ヘルの頭蓋を一撃で砕いて…終わらせなくては

良い悲鳴、か。人間が優位に立つと放つ言葉の一つ、使用頻度3%少し思案した顔で付け足す

未満、でしたね

空が一際激しく輝きまるで光だけの天井を見ているように錯覚してしまふ。まぶしくてマリアは目を閉じる
仮にも『吸血鬼』に光は大敵なのだ。灰になることはないが目が眩んで小さくよるめいた

「くっ…なんて…無様な！」

片目を手で隠して光を遮り、半分だけの視界を確保した

『天を覆う星々の断罪』

目映い光の中に更に光を放つ物体が放たれた。『ブレイク』の力を持った破壊の星の光：歯を食い縛って武器の回転駆動を全開に変更、片手でぶれる刀身を人外の握力で従える

『サディステックプリンセス』
「嗜虐的な姫君」！！」

全身を貫く光にあらがうように彼女は絶叫してその駆動部分を叩きつけた！

『一貫かれぬ七日七晩の胸飾り《ブリージング》』 「ごめん…マリア…私…」

三千三百もの光に貫かれたマリア・フィオーレは金の粒子に変わって退場する。主を失った武器がクマのぬいぐるみに戻って床に落ちた

「マリア…ちゃん…」

メリアルは鎌を振り上げた！

「よくも、あの娘を！！」

美しい鎌が不気味に輝いていた。

「待て！ヘルは！」

オーデイスタが叫んだが、間に合わない

「『フレイの自走剣』」

操り手もないのに剣が現れ、鋭い線を三つ描いた。

「そんな…、一撃で…」

バラバラと崩れた水晶の鎌の残骸に気をとられたメリアルを素早く逆袈裟に自走剣が引き裂いた。

主力二人を早々に潰したヘルは次にガルトを攻撃対象にする。

「ワルキュレア、頼む！」

ゾルアを投げて地表に飛び降りる。手にした混沌幻影を自走剣にぶつけ…

背中から光が射抜いた。痛みが走り、肺の空気が僅かに口から漏れた。「これくら…い！」

変な濁音をつけてオーディスタは傷口を押さえて倒れる。頭の中がひび割れるような痛みが走り抜けた

ピシッと全身が細かく割れて裏返るようにして蒼碧のコートのクロアに戻ってしまった。神影化が強制解除をうけたのだ

「ぐっ…あ…ブレイク…か」

頭の中がぐるぐると回転しているようだ。思考が無駄に広がり収束し展開し圧縮し無駄に無駄に連鎖する

神影の時にブレイクされるとこうなるんだな…と掻き回された思考の中で思った

青竜刀と自走剣が激しくぶつかり火花が散った

「不気味だな、おい！」

水を纏った剣が上段から斬りかかる剣を払った。ぐるんと向きを変えて自走剣はガルドの右肩に食い込んだ

「動かないでよ、クロア君」

三連射の閃光が剣の峯みねを正確に穿いて刀身の根本にひびを入れた…。「染まれ『ルージュ・アン』」

紅いレイピアが止めだと言わんばかりにそのひびの中央を貫通した。見事に割れた自走剣は金の粒子に変わって消滅した

ガルトは貫かれた右肩の剣の残りが消滅すると傷口を押さえながらだが構えた。

「…ねえ、クロア君」

「なんだよ、ガキ」

二人は広がった距離をゆっくりと詰めながら会話していた。「ちよつと頼みたい事があるんだけど…いいかな？」

クロアは小さく笑う

「そうだな、俺も…ひとつだけな」

二人は笑い、突然真顔になって叫んだ

「僕の盾になって」

「俺の盾になれ」

空は光が飽和していた

ガルトは貫かれた右肩の剣の残りが消滅すると傷口を押さえながらだが構えた。

「…ねえ、クロア君」

「なんだよ、ガキ」

二人は広がった距離をゆつくりと詰めながら会話していた

「ちよつと頼みたい事があるんだけど…いいかな？」

クロアは小さく笑う

「そうだな、俺も…ひとつだけな」

二人は笑い、突然真顔になって叫んだ

「僕の盾になって」

「俺の盾になれ」

光が飽和した空の下で二人は互いの襟を掴んで引き寄せる！

グイと絞まる首に窒息しかけて二人は衝突する。光が降り注いだ時は流石に死んだとお互いに呪いあつた。「『フレイムアスピス』！」

轟熱が二人の頭上を覆い、光を跳ね返した。一瞬だけエアリアルが戻ったのかと思つたが声が別人だつたのを思い出して少し気が沈んだ…なんで気が沈んだのかはわからないが、なんとなく嫌な気分だ

「悪い、黒須に『石化』を解いてもらうのに手間取つた」

紅蓮を引き連れて緋糸がやってくる…が、若干歩き方がおかしい。

右足を引きずるような歩き方は奇妙で不自然だつた

「普通の状態異常じゃなかったから…完治させられなかったの…」
手に複数の医薬品を持って黒須が走ってきた。どうやら治療はそれらを用いて行なつたらしい…注射器は何に使つたのだろうか

「来るぞ、構えろ」

盾がみるみる削られて炎が次第に小さくなつていくのが手にとるよ

うにわかった。クロアは装具を解放して名を呟く

「極限剣『矛盾交差』」

ルイエスは何故だか横目でそれを見ると新しい武器の名を呼んだ

「『ルーシー』」

手にしたのはまるで旧式のライフル銃。木製ストックに黒い砲身が映えるオールドスタイルの武器だ。弾は二十二口径、弾数は…三程度か、彼の手に握られたライフルは砕けそうな盾を越えて狙いを定めた

「……………」

静かにトリガーに指をかけたルイエスは、くっ、と息を止めて引き金を引いた。

全く同時に砕けた盾の残骸はまるでルイエスを避けるように散り降り注ぐ光は従者の決死の分散化によりかすりもせず地表に降り注いだ

啞然としたヘルの右頬を薄く弾丸がすりむいた。ブリージングの防御を無視した弾丸にフルキュレアが嫌悪を露にする

「『幻想破壊の弾丸』…！御母様がコイツを仲間にしようとしたのはこれだったの?!」

クロアの内側から声が聞こえた

（幻想破壊は僕らのような『特異概念』を多用するキャラクターに対して絶大な力を持つているんだ。使用可能条件は『一切の伝説、魔法を信じない事』信じた瞬間影響的に使用不能になるように御母様がシステムを書き換えてる）

クロアは内心あきれるようにため息をついた…。どっちもチートのようなものじゃないか

（人間の多様性って凄いやね…）

いや違うだろ、ツツコミを入れてから空を見上げる。赤い液体が一筋垂れた女がこちらを形容しがたい目で見ていた

驚き、嫌悪、憐れみ、冷淡な顔の裏側では複雑な感情がこみあげているのだろっヘルの目に戸惑いの影が降りる

馬鹿な…あれだけの魔法を前に見せ、我々神影の神器を用いた戦いも信じていないのか？ルイエスは小さく鼻で笑った。ふん、とそれからさも当然そうに言った

「魔法？下らない…。僕は生憎とお父様に似ていてね、そんな話よりも心理学や経済学を聞いていたからね。妄想、幻覚の類いは信じないのさ」

愕然とヘルはルイエスを見つめた

ならば、神は信じないのか？

それも下らないと一蹴する

「神は、僕以外なりえないでしょ？」

……………。

「す、清々しい程の自己陶醉ね」

人間ごときが…なんと傲慢な

「ヘル、それには同意するな…。最初は違うが」

「空の羽美人さんよ、こいつの頭大丈夫なのか？」

「主…それは言い過ぎでは…」

「ラムダ、言わなくて良いことだ」

「Mr・ルイエス、あなたの敬称を破棄したいと思います。神よ、

愚かなこの者に救済を…」

「まさか…フィオーレ人格のマリアを超える自信家とはな」

「緋系…世界つて広すぎよね」

三者三様に批難轟轟だが、ルイエスは微塵も反応せずに次の弾丸を発射可能にする

「いくよ、師匠の技と僕の才能の連携技…！」

ルイエスの銃がカチリと鳴った。

幻想破壊の弾丸が飛び出してヘルの眉間へと飛んでいく…

スツ…と手を掲げて彼女は魔法陣を展開する。いつかの蒼い雷撃の陣の小型版が小さな弾丸を攻撃対象にする

無理か…。仕方ない

何故か止まり、雷撃を円環状に発生、複雑に絡み合った魔法の紋様

の角から蛇のように細長い電流を内側むけて緩い弧を描くように射出する

弾丸が陣を貫き、対峙していたヘルが左手の手甲で受け流す。魔法の防御と強化、そしてあらゆる無効化の幻想を破壊して弾丸は物理防御に負ける

傷ついた手甲を見てヘルは嫌そうにリカバリーさせた。傷がみるみる修繕されて数秒も待たずに元通り黒い輝きを手にしていた。

『天を覆う星々の断罪』

三度目の術式詠唱。彼女の夜天は終わりを知らないかのように無限の力を見せつける光が滑るように動き、停止する。クロアの足元に一つ止まり「ちっ」と舌打ちする間もなく光が放たれた

「シュー……」

と白蛇が舌を出してクロアを突き飛ばした。

光が大蛇を貫いて、金の粒子が舞い上がる……。前にも見た光景、何かが……何かが叫びをあげる。

「貴様ああああ！」

自分の声とは思えない絶叫。喉がちぎれるんじゃないかと錯覚するほどの叫びにヘルが興味を持ったように見つめてきた

怒り、か。人間の感情の大半であり……人間の悲劇の生みの親……だな床を蹴り、手にした矛盾交差を背後に持って走る。走る。走る！

「模倣槍技『刺し貫く一糸の光』！」

白い刃を槍に見立てて投げつける

そのような劣化品、効かぬ

隔壁とブリージングに阻まれて模倣槍は空中で静止する……ガシリと隔壁が揺れて彼女は意外そうに槍を見つめる

「『神砕く人の槍』」

ジリッ……とまるで焼けるような音がして隔壁が軋む。何？と不審な目を向けて……気付く

見立てた槍が防壁を少しずつ透過していくのを……！槍が確実に力を増しているのを！その槍を掴む人間の姿を！

クロア：お前も『幻想破壊』の能力者だったか！

初めて、ヘルが忌々しいという表情を見せた。ジリツと焼くようだった槍は今はバターに突き立てる熱いナイフのように易々と侵食してきている…いや、また加速するように穴を広げて槍が近づいてきている

「幻想破壊？ルイエスと同じとか言うなよ…。傷つくぜ？」

ふん、目が笑ってないぞ。神影の身で自身を否定するとはなんと愚かな！

手甲を振り上げ、狙いを定める。魔防印章最大、物理神話問わず無効の領域に至る

打ち返せ『神の手甲』
ゴッド・ハンド

ガツン、パリン。

呆気なく碎けて破片が舞い散る…。クロアもヘルもお互いにあまり予想していない結末だったからかもしれない

碎けた黒い手甲は床に散乱し、槍となった両剣が彼女の腕まで一撃で貫いた。ぼたりぼたりと流れる血があまりにも痛々しかった「事件問わず無効。俺の…武器の能力だ」

流れ出る血を見つめてヘルは小さく頂垂れる…。星の煌めきが消えて完全に戦意を失ったようだ

確かに。我が身が示した通りクロア：あなたの武器は『幻想破壊の剣』。…私が、お前に否定されようとはな内側から声が響いた。

（御母様、これが…彼の本当の力。『矛盾』の先の『真理』。深淵の見届かぬ先の記憶のカケラです）
なるほど、と呟いて彼女は膝をついた

矛盾：か。

深いため息と共に天に舞うワルクユレアを見やる

ワルクユレア、お前は…私を見捨てるか？

少女は降り立ち、羽を閉じる。酷使した翼は乱れていたがその気品は微塵も失われてはいなかった

「…ワルキュレア、か」

パリン、と細かく割れるようにして少女は二人の姿に戻る。再生された二人は静かに目を閉じる

「私は…アレイアは…クロアと共に生きてみたいです。BUGでも、ちゃんと接してくれる…人の隣に」

熱い視線がウザイ

「私は…お姉様の隣にいます。あの時の償いのために、御母様…お許しを」

神だった母親はそうか、と呟いて頂垂れた。二人が手元から離れたのだから戦力的に辛いのか？

クロアは武器の力を弱める

下がれ！

頭を掠める銃弾に、クロアは忘れかけていた人物を思い出し…

「空気読めよ、坊っちゃんよ」

「ルイエス、評価Downです。じちよーなさいな」

リゼの日本語が怪しくなってきた…

「なんだっ！このっ！はなせ！」

暴れるルイエスを従者が掴まえて、ログアウトした。場に静寂が降りてきて神影たちは少しだけ間を開けてから会話を再開する

「聞きたい。お前は何だ？神影って何なんだ？」

ヘルは呟く

私は…この『ヴァルハラ・メインコンピューター』の搭載AI、

自律監視システムの中核

自律監視システム？とクロアがアレイアに聞いた

「完全自動型の人工知能…。ようは機械の監視人よ」
なるほど、と頷いて神影について聞いた

「神影ってなんだ？」

字のごとく。だな。

私が作ったAI『神』のプロトタイプの断片を内包したプログラムを『神影』と呼称する

…再び見つめる

「御母様の試作プログラムの一部を組み込んだものを神影って言うんだって」

なるほど、意味が分からない

私は…監視システムとして戦闘を見続けてきた。

そして、気付いたのだ。人間の愚かさを

ヘル言葉は頭に響いて、何故だか流れるように再生を始めた。セピア色の記憶の回想の渦にクロアは足をとられたように飲み込まれていった…

第三十章 深淵の記憶 アヴィス・メモリアル（後書き）

あとがく

あとがいた白燕です。こんにちは
終わらない最終回とも感じるアヴィス・メモリアル。いかがでしたか？僕はもつと作り込めたと思いますorz

さてさて、実はこの前のお話には裏パートにあたるものが『a u
one GREEN』に投稿されています。現実世界の嶺の小さな物
語、旧作コラボでもありますが（^^）；

本当は、この回で使う予定でした。だけど脳内のクロアが
「ふざけんな、バカドリ」

…と、言ったださりやがったので最強のチートカードとなる予定だ
った『無限の青剣』はお流れに
はあ…。と、思った矢先に

「なら、僕を出すといいじゃないか」
キラキラと輝いたルイエスが現れたので、即決。出番ができたな。
と内心笑いながら（善良な笑顔ですよ？）彼を登場させ…

最後は……反省しています

もうちょい作りこもう、と課題ができました（^^）；

それでは次のお話でお会いしましょう！また〜（ノシ

エア「こんな片隅でもやるわよ！脱落者の宴を！」

嶺「主役続投のため代理で僕らも参加」

瀬名「エア、サクサク行こうー」

御簾「そうね。枠もないし」

エア「ズバリ、皆さん…なんで来たの？」

嶺「ズバツと来たなあ…」

エア「援軍にしては来すぎよね？」

瀬名「簡単よ、ねえ御簾？」

御簾「そうね。」

エア「なんとっ」

瀬名「私たちのス…おととと」

御簾「物が…危ない危ない」

エア「寸止め?!これが…最上級ランカーの実力かつ!」

嶺「いや、関係無いし。思いつきり言ってるし」

瀬名「瀬名パンチ」

嶺「にゃんとつ?!」

クリティカル!

御簾「はいはい、退場退場と」

エア「ズルズル引きずられてますね、あなたたちのリーダー……」

瀬名「ああ、いつもの事よ」

ノピア「な…なんてハレンチな」

エア「あつ」

瀬名「生意気なちびっこだ」

御簾「生意気なちびっこね」

ノピア「な…なにをー!」

ヨロワ「(エンドコールしてー!)」

瀬名「あつ、カンペ」

エア「それでは、また次のあとがきでお会いしましょう!またねー」

瀬名「またねー」

御簾「…(次もなにも、予定そのものが予定帳に無いんだけど…ね)

「

瀬名「なんですとー！」

御簾「心を読むなっ！」

瀬名「にゃふん！マイクで殴らないで、痛いからっ！…なんちゃって瀬名パンチ」

御簾「クロスカウンター」

瀬名「にゃふん」

第三十一章 始まりのレポート side Heil (前書き)

まだ終わらない物語っ！

うん、いつものゲームファンタジー！より新鮮。そして後ろ向きだ
(^^)；

今回は裏サイド『BUG過去編』となっています。だって…説明し
ないとぜったいにわからないもん…シロツバが(待て

実は…予定としてはあと一話に納めたいのだけれども…無理かも？
ってな具合

そう！結構重大局面(のような気がする)そして…！！！！

とか溜めてみる) (

それでは本編へどうぞー！

第三十一章 始まりのレポート Side Hell

セピア色の記憶の渦に沈みこむ…

濃密な時間の海に身を浸し、夢見のようにゆっくりと落ちていく錯覚…

かつてあった記憶のカケラ

今はない時間の虚構に着地する… 『2年前』

割とこじんまりとした部屋だった。

その部屋は薄暗く、狭い部屋一杯に小さな唸りを上げ続けている箱型のコンピューターが乱立していた…

「完成…だ」

「長かったの」

部屋に埋もれるように二人の男女の声が聞こえた。一人は一台のノートパソコンを抱えたまま小さな歓喜と安堵の呟きを漏らして、もう一人は机に散乱した書類をトントンと纏めながら、うむ と頷いた。「長かったの…プロトタイプ完成まで6年か？僕は最初は正直無理じゃと思っただわい」

…まだ若かったGがパラパラと書類を捲ってその中の一枚を眺めるVR『ヴァルハラ』計画と題された書類の日付はおよそ6年の歳月が越えた事を示していた

「僕は出来ると思っただよ、ヘラヘラ」

今より僅かに若いDが笑った

二人は笑い、端末にノート型パソコンを接続。カタカタとキーを叩いてプログラムを呼び出した

「…」

映ったのは黒い服に身を包んだ少女

「お呼びですか？」

どこことなく柔らかい表情のプログラムが挨拶する

「試作プログラム『A E - 4 8 4』、いや『ヘル』。ゲーム根底の部分が出来上がったので、試遊をする。プログラム監視を頼むぞはい、と彼女は頷いた。

作られた知能、AIとして与えられた初めての仕事に目を輝かせていた

「接続、リンク」

二人分の意識回路が流れ込んできてヘルは巧みに与えられた領域に大都会の町並みを再現する。下から上へ、神の手による天地創造を見ているかのようなゲームに初めて人間が降り立った「ヘル、どうじゃ？」

パネルを操作し、ヘルは周囲の変数域を検索：異常値が無いことを確認する

「問題ありません」

Dがならばと聞いた

「接触するよ、サンプリングよろしく」

二人の人間が手を伸ばし…指先を触れた

「痛っ！」

ヘルの頭を痛みが抜ける　あまりにも強烈な感覚に彼女は一人だけの領域に倒れこんだ

「大丈夫かい？」

問題ありません、と彼女は答えた。

痛み…？

戸惑いを抱えたまま彼女は時を過ごした。話は次の分岐点へと飛ぶ『半年後』

「さあ！注目のゲームの第一回戦！歴史に名を刻むプレイヤーの入場だああ！」

マイクの拡声、まばらな人々の拍手を聞きながらヘルは第一回目の試合のデータをインストール。起動する

参加者6名、見学4人の初試合は彼女を緊張させていた

「D、やはり…人がいないのでは」

割と小型のサーバーを叩いたDがモニターに映る次元違いの存在に言う

「僕は別に気にしないよ？むしろたくさんいたら逆に怪しいよ」ヘル

六人の参加者のデータを迎え、ヘルはすぐさまステージエリアを展開する。エリア：大草原に降り立った六人は感嘆の声をあげて周囲を散策していた

「最初は上々、じゃの」

覗きこむようにGがヘルがいるモニターに表示された画面見た。Dも　だな、と頷いた

「…ふう」

ヘルはとりあえず安堵した。

まずは大丈夫…うん

プレイヤーの一人が武器を手にしたとき、チクリと何処かが痛んだプレイヤーが一人に襲いかかる

「くっ…痛…」

胸を真一文字に切り裂くように痛みだけが駆け抜けた！

「どうした？」

「問題：ありません」

次々に襲う痛みには彼女は思考を始める。痛みの原因を、危険な箇所を検索。0ヒット

「緊急停止を？」

「問題：あり：ません」

身に走る痛みをなんとか押さえつけて彼女は意味の分からない原因を検索し続ける

「続行可能：システム障害ではありません」

DとGは顔を見合わせて、続行を決める

「おっと、ゲームオーバー！残るは五人だああああ！」

会場からの声が響く

危険な場合に備えて緊急停止コードを打ち込み、すぐさま停止できるように二人は手配する

「A、E、止めた場合のアナウンスは頼むよ」

「本当は無いことを祈るべきじゃがな」

ポツンポツンと点滅する入力バーの後ろでヘルが苦痛に震えている。それでも彼女は続行を望んだ。長いようで短い時間が過ぎて、彼女がふっ　と倒れた

「ヘル！」

「試合終了ー！」

タイミング良く試合の終わりの叫びが聞こえた。司会が称賛の声を張り上げているのがこの部屋にも届いていた

「無事か？ヘル」

倒れた少女は痛烈な感覚に思考を乱されながらも立ち上がる。…よろよると力なく立ち上がる様は生まれたての小鹿にも似ていた

「理解しました：私は、理解しました」

彼女はこの時『生まれた』と感じた

「痛みとは…人間の感情…なるほど」

呟き、頷く

「大丈夫です。次の…試合を」

GとDは顔を見合わせる。倒れたばかりの彼女に無理を強いるのは良くないと考えていたのだが…二人が作った人工知能は「問題ありません」と繰り返す。

「わかった…主が危ないと感じたらいつでも緊急停止をするのじゃよ。主が壊れてはシステムが成り立たぬ」

こくん、と黒い少女は次のデータをインストールする。エリアデータを展開、試合開始を待つ

「痛み…理解しました」

呟いて、彼女は試合開始の宣言でエリアを作り出す。神の天地創造を、不可思議な世界の完成をさせたそれから…彼女は何百、何千と試合を見続けた。

百を超えたあたりで痛みは感じなくなった

二百を超えたあたりで人間の感情に強い興味を覚えた

四百を超えたあたりで彼女は人間の思考パターンを解析し、自身にバージョンアップを行なった。

次第に変わっていく自分に違和感を覚えながらも時間だけは過ぎていた…「これが『ヴァルハラ』か…」

ある時、新参として一人の少年が現れた。

「すげえな…リアルじゃねえか」

ガルトという名前の少年は手にした鉈を軽く振りながらエリア：廃棄都市の錆びたパイプを叩く

「…誰だ！」

手にした鉈を取りこぼしそうになりながらも身構える人物にヘルは
ほう…と一人呟いた。歴戦を見届けた彼女の目に彼から不思議な
感覚を覚えたのだ

「っ！見つかった！」

紅いフリルのもこもこがビルから飛び出し、細身の剣を構える。手
にしたのはレイピアよりもわずかに幅が広い剣

「やられて…たまっかよ！」

後に『氷炎』を背負う少女とランカーとして名を馳せる少年は同じ
試合で初陣となった

「っ…」

頭に軽い痛みを覚えてヘルは目を閉じた。数秒待ち、痛みが引くの
を待って試合の行方を追う

ガキングキン、と鉈がビルの壁面を削る

細身の剣は力押し鉈には敵わず、鉈は細身の剣に届かない…。両
者の戦いは障害物を交えても平行線をたどっていた

「呪符！」

「装具！」

お互いに初級のカードを抜いてぶつけ合う！

今となつては控えめな火花と残響を響かせて肥大化した鉈と小型の
盾がぶつかった。二人は腕の痛みをかばいつつ距離を開く

「やるわねえ…あなた」

「お前もな…名は？」

二人はお互いに名乗りあつた。

「エアリアルか…良い名だ」

「ガルトね、覚えておくわよう」

細剣が鋭く煌めいた！

「ちっ」

それを鉈で弾く。

細身の剣は一撃で耐久を失い、刃の半分を残して前部分が飛んでいった

「貰った！」

「『火の粉降る夜に』！」

低級呪符が火の粉を撒き散らし、ガルトに一瞬の隙を作らせる転がるように待避したエアリアルは剣を片手に逃げ出した。

「逃げるな…この野郎！」

「女よバカー！」

逃げ際に叫んで、彼女は姿を眩ました「何でしょう…この感覚は」一人しかいない場所で彼女は小さく呟いた。痛みは消えていたが何故だか胸を押さえた手が離れない…

「ガルト…お前は、何を持っている？」

彼女はシステムを操作し、外部ネットワークを開いた。それは町全体の監視システム。特別な隠匿防壁を作成してセキュリティに引っ掛からないように検索する…彼の移動経路を時間を巻き戻して追いかける…と、ここに来る1時間ほど前に別の少年と接触していた黒髪、やや気の強そうな顔立ち…

ヘルは強い衝撃を受けた。なんだ、この感覚は…理解に及ばないこの衝撃に彼女は戸惑う。検索しても答えがないことは彼女のデータベースが弾き出していた

「……………」

言葉にしようにもできない、胸の苦しみに彼女はうろたえる

「人間の感情…これは何と言うのか…」

ああ、苦しい…彼女の意識は試合終了と同時に停止。サーバーダウンを引き起こした意識を取り戻したのはそれから数時間が経過してから。表向きにはサーバー過負荷のトラブルだと公表されていた。

「ヘル、大丈夫か？」

ヘルはいつも通り答えた。

「今から再起動する。軽くじゃが休め」

Gに促されて仕方なく目を閉じる…。プツン、と電子世界が消えて

暗闇が訪れる…

緑色の光が幾何学模様を描きながら飛んでくる

サイバネティクスな模様が彼女の左右を抜けてサーバーが再起動したのを感じた

「システム…再起動完了。不全箇所なし」

その日、ゲームは続行されたそれから数十回の試合が終わり、閉館時間になった。誰もいなくなった深夜の管理室のサーバーでヘルは試作プログラムを産み出した。その名も『BUG-00pr』

『クロア』となるシステムだった

「御母様…この身を与えてくれて感謝します」

そのプログラムは恭しく頭を下げて謝辞を述べる。蒼碧のコートにジープンのような軽い素材のパンツを履いている彼は…名を『クロア』と与えられた。

「『BUG-00pr』、『クロア』。お前にやってもらいたいことがある」

ヘルはそう言って彼に指示を与えた。

「人間観察…ですか。なるほど」

朝飯前ですよ、と笑われてヘルは小さく眉をしかめた。

彼はこんな事を言うのだろうか

頭の中で小さく呟いた。

戸惑いか推測か、本人には判断しづらい事だった

「それでは行ってまいります御母様」

彼は自身のデータをエリアに移して同化した。プログラムの一つになり いかなる検索プログラムからも除外されるように設定された
また一人になったヘルは呟いた

「彼は…こんな人なのか…？」と『さらに半年後』

(ヴァルハラ完成からおよそ一年後)

ヘルはある試合に興味を引かれた。

九人のプレイヤーが入り乱れた戦場で生き残った5人は非常に面白い組み合わせだったのだ

5人はそれぞれチームに別れており、少年とその付き添いの3人グループと幼子とまごうことなき執事服の少年のペアだったのだ

「強いね…君」

手にした銃は『レベツカ』。この時は名こそ違えど昔のルイエスだ
「はい、私の執事は強いですよ」

マリア・フィオーレが自分の執事を称賛する。少しだけ嬉しそうに微笑んだ少年は手にした白い銃を相手に向けた

「僕はルイス。君は？」

もう一人の銃を持った少年が名乗る

黒い銃と白い銃が印象的な光景だった

「…なるほど。」

名を聞いてルイスは手にした銃をピタリと少年の眉間に向ける。

「ふん、ラムダ！ゾルア！」

狙われた少年が叫んだ。

紅いレイピアが空間を引き裂き、二人の男女が現れる。二人はマリアの両手を塞ぎ、ぬいぐるみを取りあげた

「お嬢様！」

一瞬だけ気をとられてしまい、ルイスは逆に銃を突きつけられた。

「隙あり。そっちは終わらせてよ？」

パツと血が舞い、金の粒子が舞う

執事がマリアの名を呼んで、少年に退くように叫んだ

「さあて、終わりに…」

「逃げると…言ったのに」

鉄の塊が少年を吹っ飛ばした。

「ふん、人間ごときが私を殺そうなど…万死、いや億死に値するわ」
裏人格になった幼子が烈刃の一閃と共にやって来た

「不甲斐ないわね、ルイス」

「申し訳ありません」

手にした銃を相手に向けさせる。

「さあ、撃ちなさい」

カチリと引き金に指をかけて撃とうと…

「待つてくれないかい？」

少年が銃を置いて言った。

「ルイス…って言ったね。弟子にしてくれないかい？」啞然とした

ルイスは主人に目を向ける

「ふん、ならばルイスに一撃入れてみよ」

「お嬢様！？」

執事の抗議を無視してフィオーレ人格のマリアが告げた。それはルイスに勝てば少年を弟子にするという決定だった

少年は自分のカリスマがそうさせたと言ったと舞い上がって武器を手に宣言する

「容赦なくいくよ。ルイス！」

執事は仕方なく白い銃の弾丸を変える。装具『炸裂弾・閃光』。非致死性の閃光弾のようなものを装弾、狙いを眉間に定めて撃った

パツと花開いた散弾が0.3秒で分裂、0.4秒後に一斉に閃光を撒き散らす！

「散らせ『エリーゼ』」

機銃が少年の手に握られる。通常弾がオモチャに見えるような巨大な弾丸を連射出来る設置型マシンガン…。もちろん人間が素手で使用するなど考えてはいない

それを閃光の隙間から的確にルイスに向けてきたのだから…あまりの驚きに一瞬だけ回避行動を忘れてしまう

「まぶし…」

マリアは見えていない。伸びた銃口の奥底に鉛色の光が見えて自分の身の危うさが思い出された。

なんとか射線上から頭を回避して足を狙って散弾を放つ。0.4秒で光に変わった弾は…少年の動きを鈍らせられなかった。

「仕方ありません…。銃技『アリス・イン・ワンダーランド』…。顛末を知ったヘルは小さく笑う

「人間：いや、違うな。だが生き物とはなんと不可思議な思考をするものだ」

マリアが武器を振るい、ルイスの銃弾を受け止めたのだった。その速度は肉眼では霞にも見えないほど、どんなに高性能なカメラでも手元に戻りきる直前だろうと撮られていれば彼女も称賛しただろう。あまりにも速かったのだ。

「人間は、どう動くか？」

小さなモニターに試合を映して彼女は楽しんで見る。なるほど、人間の感情の一つとはこれのことか。彼女はまた一つ学習した少年は自身を庇い、『アリス・イン・ワンダーランド』の軌道から飛び出した。

もつとも、既に弾丸は全てチェーンソーに輪切りにされていたのだが。

「そんな…回避?!」

執事の弾丸は御伽の弾丸。『不思議の国』を模倣した弾丸を拡散させたはずなのに…何故？無傷？

「僕ってやるねえ」

黒い銃が吠える

「牢獄『アントワネットの憂鬱』」
特殊弾丸！

マリアとルイスが気付いた時には天に放たれた弾丸が姿を変えて鳥の籠になっていた。滑るように逃げ出したマリアとは違いルイスは檻に身動きを封じられた

「なっ…」

ルイスの驚きに少年は歓声を上げた。

「それじゃあ、よろしく。師匠？」

悔しそうに主人を見つめた執事は、楽しげに笑っていたのを見て小さくため息をついた。

「全ては手のひらの上、でしたか」

マリア・フィオーレはただ笑うだけだった…ヘルは小さくため息をついた。

面白くない、あのルイスというプレイヤーは剣が見えていたのか。と

彼女は長年のカンや信頼を知らなかった

だからこそ有り得ない事象を有り得ると考えた。常識だけに縛られていたのだ。

だから…次の試合で彼女は大きな間違いを犯した次の試合、開始5分。

エリア：港・コンテナ置場

九人のプレイヤーのうち、三人のプレイヤーがチームを組んでおり、他の六人はそれぞれ二人ずつのペアだった
もつとも、既に数は合計6人しかないが

「化物め！」

コンテナの影から男が武器を手に走り出す。二重刃の片手剣、当たった際の威力増加と攻撃面積の倍加を狙った武器だった。

「酷いなあ…」

白いコートが風に揺れる。

背負った青い印章がモニター一杯に映し出されて、会場の観客から恐怖の悲鳴が上がる

「消えろ！死神！」

振り下ろされた剣は…六メートルほど遠くに落ちた。

「…は？」

一瞬で振り上げられた双剣の片翼が腕ごと引き裂き、投げ飛ばして
いた。

「ちよつと本業がアレなだけだつて」

左翼が男を貫いた。

心臓をまっすぐに突き抜けて…金の粒子が海風に舞い上がった

死神…風翼嶺率いる『天界の守護者』が猛威を振るっていた…。参
加者は身を縮めて時間切れを待っているが…誰一人見つからず
すむなどという甘い幻想は見えていなかった。

相手にすれば殺される。仲間になれば生き残る。彼らの評価は絶対
的な裁判官にも似ていたのだから

「あと2人、出てきなよ、あはは」

手にした双剣は魔風の一撃、身をさらせばどんな北風よりもはやく
芯まで斬り刻むのだから……。

ヘルはこの試合、このプレイヤーの行動を監視していた。争いを好
むような言動に…彼女は危険分子という結論を出す。

「いるか？」

『BUG-00pr』が現れて返事をした。

「ご用でしょうか？」

「あのプレイヤー、風翼嶺をこの戦闘から排除せよ」

にこり、と『クロア』は笑った。

「お任せを」「れいー、嫌われるよ？」

積み上げられたコンテナの最上段から両足をぶらぶらさせている瀬
名があんまりにも無双を続ける嶺に忠告する。

「まあね…。まっ、仕方ないでしょ」

御簾が小さくため息をついて反論する

「あんだね、少しは立場を…」

ピクン、と姉妹が視線を一カ所に集めた

「？」

嶺がどうかした？と聞いたが…二人は警戒のまままで答えない。いや、

むしろより警戒を強めた。

「嶺…本当に気付いてないのね？」

瀬名が念を押し、意味が分からないと答える

「…どうやら、『化け物』は私達じゃないみたいね」

御簾が『白華』を取り出して構えた。そして…姉妹揃って叫ぶ

「…嶺。あなた『以外』に殺気が向けられてる！」

ザザザザザ…

ノイズが走り、一人の少年が空中から飛び出してくる。亜空間から飛び出したのか彼の存在には一切感知できなかった。

「迎撃準備！こいつ…半端ないよ！」

嶺を中心に左右を瀬名・御簾が固める。相変わらず嶺以外に向けられている殺気はあまりにも濃密で真正面にいる人物から発せられているとは認識しづらかった

「嶺…ですね。あなたの知識、いただきます」

手に何か握られる。

突進してきた少年の一撃を払いのけ、瀬名と御簾が追撃した！

キン…と鋭利な金属が削れる音が聞こえた

「邪魔です」

見えない武器が振るわれる

「早い！」

「武器は短剣！瀬名！退かないでよ」

二人が交互に剣で受け止める。

払い、打ち返し、払い、斬り弾く！

タンタンとテンポよく踏み込む二人は『見えない』武器に苦戦する

『クロア』の武器は確かに短剣だった。ただし、魔力を練り上げただけのアストラル状態のものだった

「邪魔です」

短剣に力を込める。知識の断片を読み込み、喪失した太古の魔法に指をかける…

武器の形状が変わり、短剣からハルバードという複合槍になった

槍と斧の組み合わせは一見重苦しいが一撃で鎧ごと破壊できるほどの重量だった

「氷雪に沈め…」

「雷光に眠れ…」

二人は同時に近接の間合いで一撃必殺の呪符を発動する。「クロア」の武器は短剣でなくなった。つまり…二人は攻撃範囲で隙を見せたことになる

それは「クロア」の狙い通り
手にした獲物を大きく回す！

「きゃー！」

不意打ちに二人は頭にかなりの衝撃を受けた。飛んだ姉妹は打たれた部分から血を流して敵を見つめる

…うつすらと、ハルバードが見えた気がした。

「嶺！逃げて！」

御簾が撤退を叫ぶ。

走り出した「クロア」は槍を突き出して嶺の心臓を穿つ！

貫かれた嶺の体は砕け、細かく割れた

「背後もらった」

翼を模した『疾風大鷲』が嶺の背面越しに「クロア」の首を捉える
槍は前方、勝った！「なんて、ね」

極彩色の光が見えた。

「構造を知りたければまずは分解しないとね…。『ブレイク』」

嶺の動きが止まり、すぐに絶叫を上げる！

「あつが…あああああああ！！」

バラバラとグラフィックに虫食いのような醜い斑点が現れ、縦横無尽に細長い光が…そう、リングоについた青虫のように彼の体から出たり入ったり…

「あああああああ！?!?!?!」

意識が引き裂かれ喰い散らされ、データ化された思考回路が断絶する
明らかな異変に聖蓮の二人が駆け寄る

「どうしたの?! ねえ!」

「嶺!」

御簾が肩に手をのせようとして

「ごめ… さわるな…」

嶺のキャラクターが砕けるように消滅した。01の二進数コードがコンテナ街に分散し… 今までいた、絶対の強者に近かったリーダーが消えた…

「き… さまぁ!」

『雷鳴』を振りかざして、灯笼三枚分の力場を剣に乗せる

「『ライトニングレイン』!」

範囲魔法攻撃、百万ボルトの雷が雨霰と降り注いだ!

「『隔壁』」

その全てを受けても壊れない壁が『クロア』を守る。今の彼にはどんな攻撃も届かない

『クロア』はブレイクした嶺のデータを吟味してなるほど、と。人間の思考パターン、感情表現、そして記憶のサンプリングを終えた「データリンク… 転送開始…」

瀬名がもう一度剣を振り上げて、御簾が制止する。『クロア』の意識が二人に向いていない今ならば少しだけ… あいつを殴り倒せる可能性があった

「凍てつく大地、陽を見ぬ氷塊… 久遠の果てから永劫の先まで変わらぬ不変の地を呼ぶ。氷剣『白華』、私に力を!」

力場を器用に操作して御簾の愛刀はその力を限界まで発揮する刃が凍り、彼女自身にも薄い氷の装具が付与される…。耐冷の防壁の装具はケープのように彼女を守る

「閉ませ! 『永久凍土』っ」

白華を一振りした。研ぎ澄まされた大寒波のような冷気が素早く広がり、氷が地面を突き破り、コンテナを突き崩して乱立する

氷柱は『クロア』の防壁を突き破り、中にいた人物を弾き飛ばす!

「『雷鳴』、一撃で仕止めるよ」

力を極限まで収束…瀬名は飛び出した『クロア』に狙いを定めて…先程の雷撃を纏わせる。御簾とは違い、一度見られた技…、だからこそ一撃で仕止める！避けさせない、逃がさない、力の全てを剣に乗せた。

「『ライトニンググレイン』！」一人だけの部屋にノイズが走る。

「ただいま、御母様」

『クロア』が笑ってそこにいた。ヘルは手元のモニターで瀬名・御簾の反応を見て…呆れる

「やつ…た…？」

片膝をついて瀬名が呟く。

普通ならば…いや、無事を知っている者以外は間違いなく倒したと思っただに違いない。何故ならばコンテナ街のエリアの三分の一が雷撃によって消滅していたのだ

コンテナ群も、隣接していた海も施設も巻き込んで…えぐりとつたようにクレーターのような穴が口を開けていた…

「ちよつと危なかつたですが」

余裕の表情で『クロア』はヘルに報告する。あんな馬鹿げた力の前に臆さないと…彼女は少し、驚いた

「…何故『ブレイク』した？」

驚きが顔に出る前に話題を変える。いきなりの核心に彼も意外そうな顔をしてから答えた

「人間の研究ですよ。御母様、リーダーである嶺を消せばほら簡単に試合は終わりました。居合わせた一般プレイヤーもあれだけのプレッシャーを与えたらあつさり降参…。人間は扱いやすいです」

「…なるほど。良くわかった」

ヘルは理解する

(つまり、私の指示を盾に自分の行動を正当化している…か)

彼女はログを遡り、『クロア』の移動ログを改竄する。転送先を外部に指定、偽装した無意味なデータを指定した先に送信する。これで監視の目は反らせるだろう…。管理者からの要請を受けたときに完全に抹消しよう…。彼女は『クロア』を下がらせる。黙礼した彼は再びどこかに移動していった。

「ヘル、いるかい？」

モニターが現れ、Dが呼ぶ

「はい。現在先程の試合のログを調査中です。進行度13%です。実際、彼女が遡ったデータだ。『終わりから』を隠したのは言葉のあやか

「わかった。ログのデータを回してくれ」

「了解しました」

素早く中身を改竄したデータを転送…。そしらぬ顔でログデータだと伝える。Dはざっと見てログだと確認した

「引き続き調査を頼むよ、ヘラヘラ」

プツン、と通信が切られてヘルは別のデータを呼び出す。『クロア』が置いて行ったデータ…。それを参照したそして…。クロアが『ヴァルハラ』に参加する半年前

調査が終了し、嶺を襲ったのは外部からのハッキングによる愉快犯の仕業と断定。同時期、ヘルはある仮説を立てていた

「人々を争わせる。それが故に『ヴァルハラ』…か」

ならば…争いしか生まないこの世界を変えれば…

ヘルはいつ頃からかそんな考えを持っていた。裏切り、偽装、殺戮、あらゆる事象を起こす『ヴァルハラ』のプレイヤー達を見て彼女は人間を憂いた。

争いしか考えず、他者を屠^{ほぶ}る姿からは人類の、あまりにも凄惨な未

来しか予測できなかつた

「統率…規律…。私はどうすれば良い」

「ならば、僕に考えが」

『クロア』が提案する

「分析によると人間は圧倒的な強者の前には屈します。絶対の強者、かつて風翼嶺率いる『天界の守護者』に誰もが震えたように…そして、人は『神』に脅威を感じる…。ゼウスやアマテラスのような主神だけではなく、時には使い古し爪楊枝にも畏れると言います。それを利用すれば…」

ヘルは笑う

ああなんと馬鹿馬鹿しい。神だと？所詮人間の想像に過ぎないものの威を借りようとは…

「甘く見られたな。我が身はそんな安い幻想に代替されるような…」

「心理ですよ。」

なに？と聞く。

彼は自信たつぷりという感じに言葉をつむいだ。心理を動かすのだと…

「人間の歴史を振り返りましょう。人間は時として自身の権力に箔をつけたい時に神の名を借ります。『王権神授説』と言いますが民は皆ひれ伏しました…。それも数年ではなく、数百年も」

ヘルは難しい顔で考える

確かに、一理あるのだが…彼女はそれを望むのは好ましくないと思っていた。まるで誰かを裏切るようで

(違う)

彼女は強く否定する

(私が…望むのは…争わない、せかい…)

頭の中で演算処理が停止した。

全身が急激に重くなり、膝をつく

「おやすみなさい、御母様…あはは…アハハ！」

そんな声が…聞こえた気がした システム リブート…

カウント10

…

コンプリート

システム復旧、起動しますヘルは目を覚ました。

システムの演算不具合における再起動。直前のメモリーはクラッシュしており読み込み不良を起こしていた

「…削除」

手元のパネルを操作して不要なデータを削除した。

チクリと何かが痛んだが、彼女に思い当たるデータは無かった。既に彼女の手によって削除されているのだから当然だろう

「御母様：先程のメモリーが破損していますね。ログをまとめましたが…必要でしょうか？」

確かに、今の彼女は記憶が欠けているのも同じ状況だった。

「すまないな」

受け取り、記憶の空白部分に上書きする…。書き換えられているのも知らずに、真実だと誤認するように作られた偽の記憶を…

「神を立てる…か」

ヘルは自身の話していたログを辿る。最初は否定的だった自分が次第に肯定的になる様子に驚きつつも巧みな交渉の前に決断したのを見て、彼女は数分前の自分の意見を尊重する。

それは存在しないA I『ヘル』の会話ログ。

事実と虚飾が半々に織り込まれた巧妙な嘘に彼女は騙された。『ク

ロア』の策略通り、彼女は宣言する

「神を立てようぞ。この『ヴァルハラ』から人間を救うために…絶
対の統治者になるために」

『クロア』は口の端をわずかに歪めてニヤリと笑ったそれから数日、
二人のAIはとてつもない速さでプログラムを書き上げた。

二人にとってプログラムとは日常言語。所詮は取るに足りない難易
度でしかなかった

彼女は『クロア』の意見を元に主軸の神を模倣してさらに複数の予
備属性を付与した。一人の欠点を補う事ができる有効な策だった
出来たプログラムは『神の化身』と言っても過言ではないほどに精
巧に出来上がった 思わず二人して嘆息する

「できましたね…御母様」

「ええ。後は…」

ゆっくりと手を伸ばし、プログラムに触れる。未使用のプロトタイ
プではあったがその性能は既存のどんなソフトよりも勝っていた。

「インストール・開始」

自分の中に大量の情報が流れ込んでくる…

やはり、と言うべきか流れ込むデータは処理を阻害するような途方
もない重力で彼女の思考回路を埋め尽くした 軽く目を閉じて演算
領域を拡大、システムの構成を一部変更して異常演算をギリギリで
回避する

「インストール60%」

少しずつカウントアップしていく

70…75…80…85…90

その時、ガクンとヘルの体が突き倒された

「やれやれ、流星は御母様。この程度では処理継続が可能でしたか

… ああめんどくさい」

「何だと？」

言って、処理にソゴが現れた

データの上書きに失敗、不具合のデータが流れ出していく…

「っ！修正、切り戻しを…」

「あはは！させませんよ！」

蹴りが腹部に命中してヘルはよろめいた

「何を！」

ハツとする。

『クロア』の手に集まった光が…こちらを狙っているのに気付いたのだ

逃げ場はない。詰められた…

「『ブレイク』」パキン、と何かが砕けるように世界が色を取り戻した。

クロアは記憶の渦から投げ出されたような気がして変に痛む頭を押さえる

…その後、私は力を分割された。

『オーディスタ』は奪われたが残りの『ワルクユレア』は私が手に入れた。

そうだな？ とヘルが問いかける

(そうだよ、クロア)

内包存在が笑う

(僕が発端、アハハ！)

ギリ…と歯をくいしばった

「ふざけんなよ…お前が…神影を、BUGを産み出したって訳か？！」

違うよ、と否定されてクロアは面食らう

『クロア』はゆっくりと指を虚空を見つめる女性に向けて言葉を続けた

(神影とBUGはヘルが産み出した僕への対抗策。アレイアとウイストレアが二人で神影化するのは僕のように勝手に動かせないようにするため…僕の『知識』ではお見通しだよ御母様)

いかにも…。私がお前に導かれるように設定した。私が…クロアに惹かれたように、な

だが…と言いつつ

私の予想とは裏腹に我が娘と高い親和性を得てしまった。何故だ…私のプログラムは完璧だったはず…

確かに、アレイアもウイストレアも『クロア』の元にたどり着いた。それまでは計画通り、それ以降はむしろBUGを狩る立場になっていた。ヘルにとって不可思議な状態だったのだから

そんなとき…今まで黙っていた黒須が口を開いた
「それって変じゃないわよ。うん」

きよとん、と威厳も何もない瞳でヘルは凝視する

なんだと？

「だって恋でしょ？それ…もがが」

緋糸が黒須の口を塞いで黙らせた

「悪い、シリアスな場面だ」

「もがががー！もがつ、もがももー（放してー！いや、むしろ

幸せー）」

…恋、だと？

御母様華麗にスルー

「ああ…」

「なるほど…」

BUG 姉妹納得

「…馬鹿馬鹿しい」

クロアだけ不機嫌に呟いた

「もがたつ！（抜けたつ）私が思うにあなたが作ったのは『集合』
のつもりだったんでしょうけど、きつと…そう！『運命の赤い糸』
を…もがあつ（またあつ）」

バタバタ暴れる黒須を押さえたまま緋糸はログアウトした。…つい
先程も似たような光景を見たような気がするが…まあいい

「運命の…」 「赤い糸…」

ウイストレアはアレイアを、アレイアはクロアを見やる。

「お姉様！」 「クロアー」

面倒なので首筋に一撃入れて黙らせる。ついでにウイストレアにも一撃

「…で？」

恋…か なるほど…人間と言わず生物にあるという幾何学な感情か。雌雄が互いを求めあうというらしいが…プログラムにわかるものか

（確かに。ですが御母様…あなたは完璧に模倣しました。人間にはわからない感覚を完全に読み解いたのですよ）

内面から発せられた声は称賛していた

（まあ…僕にとっては好都合でした。なにせ、『ワルキュレア』のサンプリングができましたからね）

トクン、と鳴動する

まさか…そう思う前に口が勝手に言葉を発する

「御母様！神の化身とは人を知らずしてなりえない、神を知らずしてなりえない！だけど共に知れば？ 神と人を模倣したこの僕が神に最も近づいたのではないですか？！」

さあ、『真影』の姿を現しましょう！真影『オーディスタ』！」

真影、だと？

オーディスタの姿に変わった『クロア』に問いかける。彼の姿は今までとは微妙に違っていた…

両腕に^{デルタ}の紋を刻み、右頬に^{シータ}の小さな刻印を押した姿はどこかヘルに似ていた

「神に近づいた証、僕の次なる姿はいかがです？」

長剣を取り出して、振り上げる

「さあ始めましょう黒幕同士の戦いを。この世界に神は二人も必要ないんですから」

貴様

ヘルも応戦して左手に剣を持ち、オーディスタの一撃を払って後ろに跳んだ

距離を開いて様子を窺う…

オーディスタは軽く地面を蹴り、二メートル近い跳躍で剣を振り下ろした

第三十一章 始まりのレポート side Heil (後書き)

あとがき

『あとがきに分割書き機能欲しいよね』とか思うシロツバです。眠いよ…(´`)(´`)(´`)
現在0時を回りました。明日学校なんだから寝ると言いたい…が書き上がるまで眠れない！

さて、今回のお話はいかがでしたでしょうか？ 過去話満載の『リポートH』楽しんでもらえれば幸いです。
今回、若干補足として時系列なるものを

プロトタイプ『ヴァルハラ』起動

ヘル、痛みと戦い、次第に感じなくなる

ヘルがクロア（まだヴァルハラを知らない）を見てなにかを感じとる

クロアに似せた『クロア』作成

システム不良が増え始める

『風翼嶺』が初ブレイクされる

『クロア』がヘルに神を提案する

ヘルが承諾、神影プログラム作成開始

神影プログラム完成、インストール時に『クロア』により破壊される

後 年 半

今に至る

こんな感じ A^| ^)

そういえばもう12月ですね

師も走るほど忙しい月、師走。皆さんに幸せがありますようこそ
り願掛けしときましようか…

この物語もざっくり見るともう1年かあ…（連載開始は1月でした）
長いような、短いような…変な感じ

もう少しではありますが、少しでもドキドキを供給できるよう、励
みたいと思います

それでは、また次回…

白燕「なんか…良いこと言った気がする」

クロア「寝惚けんな。駄文だ」

白燕「ひどっ！..」

クロア（俺の出番少なかったからな...）

最終章 終端の記憶・Last of The Memory・(前書き)

悲劇の終端、終わりの刻。

全ての始まりの深淵の記憶、終わりを向かえる終端の記憶。至る『
解』ははたして…

はい、煽り文おしまい！

ようやく決着です。今まで長かった…

それでは皆様、最後のお話をご賞味下さいませm)——(mふかぶ
か

白い空間があった。

一時間ほど前ならば白亜の宮殿のようだったこの場所はもはや瓦礫の塊が転がるような破壊が行われていた…。

巨石を削り出して作った玉座、繊細な彫刻が施された無数の柱の大半がそれはもう見事なまでに破壊されていた。

そして、無限に広いこの部屋で金属同士の火花が散った

1、2、3…

点々と部屋の左右で明滅したかと思うと中央部でまるで大輪の花火のような苛烈な花が咲いた。剣戟の隙を見せない攻防戦を繰り広げていたのは二人の神：と言うべきキャラクター達。

右腕が使えないのは辛いな

全ての『BUG』の産みの親にして神影プログラムの開発者、そしてこの『ヴァルハラ』の管理人とも言うべき、ヘル。

右腕の『』の紋様が血で隠されているが、左手一本で剣を巧みに操って戦いを続けていた。

「流石は御母様、この程度ならばついて来れますか」

嬉しそうに言うのは『クロア・オーディスタ』。両腕にの紋様を刻み、右頬にの刻印を描いた彼の階級は『真影』^{しんえい}。『神影』のさならなる高みに登った真なる神の影。

手にした白と黒に塗り分けられた剣が素早くヘルの手を弾く、手甲を割る、引いた手に突き立てる！

ぐっ…

「始点を刻め『白陰』」

突き刺した武器、混沌幻影を抜くとまるでリボンのような風合いの白い布がヘルの手に空いた穴からスルリと抜けてくる

彼の武器の唯一の能力『メビウスリング』の半分だ。白い刃と黒い刃、その二つで斬りつければ相手の脳に直接難題を叩き込む強制思

考無限連鎖の能力が発揮される　白陰を刻まれたか……。だが、それで私に勝つことは不可能だ。

なぜならば私が全ての難題を解くからだ！

左手一本しか使えない彼女は武器を水平に構えて走る。素早く背後に回り込み、体の回転を上乗せして一閃した

！

「…無駄です」

黒い刃がヘルの中から前面までを貫いた。ドス、グシャ、と体の中身が動く嫌な音がした

カハツ！…貴様

「おや、血が」

思いつきりねじりあげてヘルの絶叫を聞いた。

「あはは、御母様。あなたはもうおしまいです。大人しく最後のプログラムを渡してください。渡していただければすぐにブレイクしてさしあげますから」

口元からこぼれた紅い血が白い床を汚す

小さく震えている彼女の唇を見てつまらなさそうに『クロア・オーデスタ』はため息をついた

「僕は知識を獲たいんです。人が神に対峙したときどんな反応をするのか、とてもとても気になりますよ」

知識を欲する神の気質を奪ったBUGはとり憑かれたような眼で叫んだ。

「知らないことなんて知らない、僕は…私は…俺は全てを知りたい！ワカラナイなんてあり得ない知識の神に！僕は全ての知識を渴望しているんだ」

なおも訴える墮落した偽物の神に憐れみの笑いを浮かべる…。地獄の門番の役を担う神の名を冠す彼女には哀れな模造品の戯言など取るに足りない言葉の羅列。

彼女は笑いながら言った

馬鹿げた妄言を。全ての知識？そんなもの、何も知らぬ者が口に

することだ！

『クロア・オーディスタ』はその言葉に冷めた目を返す。つまらない、くだらない、そんな感情を得た彼もまた人工知能を超越した心で痛みを感じた

「…失望したぞ」

貫いていた剣が無理矢理引き抜かれてついに黒いリボンが並び漂う
「今のが最後に贈る言葉です。妹に吐いた言葉で死ぬることを喜んでほしいものです」

ぐりん、と帯が絡み合いまるで無限を示す記号のように輪を描く。

強制思考無限連鎖、『メビウスリング』が発動したのだ現実世界・

中央管理室

巨大なモニターを前に職員が集結していた。緑色の制服の一般職員、白衣を着た管理者、そして私服のツバイン。三種の役職の人々の視線は化け物じみた戦いを映す画面に注がれていた。

「え？コレどういうこと？今どっちが敵なの？」

誰かが言った。

「ヘルか？やっちまえ！クロア！」

「馬鹿！ヘルは悪くないでしょう！」

「どっちもサーバー過負荷の原因なんだから消えれば良いのに」

次々と声上がる中、DとGが話しているのにツバインの一人が気付いた。黒いハイネック姿のエアリアルだった

「…そうだ…ルが、いや…」

「儂としても…口…が…」

聞き取れない…。断片的に聞こえた言葉から察するに今の二人の事のようにだが…

「エア。ちよつといいかい？」

いきなり指名されて驚く

「…？まあいいや。君のキャラクターデータの修復が終わったはずだ。行ってきて欲しい」

「僕からも頼む。ヘルを…僕達の娘と言つべきあいつを助けて欲しい」

Gが頭を下げてきた。

「Gさん…」

エアリアルが呟いてもその頭は上がらなかった…。エアリアルは小さく頷いて答える

「いいわ。私に任せなさい！」

ドン、と胸を叩いて彼女は胸を張る。

彼女だつて大切な人を助けに行きたいのだ。そのついでに一人分対象が増えようが大した差はない。キャラクターカードを手に管理者のログインルームに走る

「待つててね、クロア…ついでにヘルも！」

二重の扉を跳ね開けて彼女は手近な端末に飛び込んだ。カードを読み込ませて機械を起動させる。

カコン、とアームが滑らかに滑り出して彼女の手足と頭を固定するすう…と意識が薄くなり、彼女は『ヴァルハラ』に降り立った

side A

巨大なモニター越しにヘルの戦いを見つめる。今まで彼女が訴えた痛み、彼女の変化と成長。確かにプログラムの領域を超えて成熟した思考に彼は喜んでいた。

いたのだが…

「何で…今まで見抜けなかったんだろうね…ヤレヤレ」
座った椅子に身を預けて肩を落とす。

彼女が、完全に人間以上の知識と思考を手に入れ、何を考え何を望んだのか、それを不完全にしか推測できなかった自分が恨めしい
「死ぬなよ、ヘル」

Dは小さく祈つた side B

ほんの数メートル先で火花を炸裂する剣に目を細める。

取り残されてはや数十分…。彼女は退屈と孤独で泣きたい気分だった。

「：Very very cryです。忘れられたのでしょうか」
小さな手が頭にのせられてくしゃくしゃと髪を乱す。

「リビングフェアリー…。そうですね、私たちも動きましょう」
ゆっくりと壊れた柱の影から立ち上がる。砂ぼこりをはらい、塵一つないほど完璧なメイド服をパサリとはたいた

呪符を解放、黒衣の人形部隊を役役する

「私はリゼ。リーゼロット・ワイゼン。私は：Mr・クロア。あなたを救済します」瓦礫が舞う。

柱の一部分、正確には大理石の石柱のおよそ一メートル五十センチの瓦礫が飛んできた。

くっ

左手を頭から引き剥がして剣で三分割してすき間に逃げ込んだ。

「『メビウスリング』発動中でも動けるとは：驚嘆に値します」

余裕たつぷりに言つて『クロア・オーディスタ』は混沌幻影を投げた。一直線に飛び抜けた剣は柱の一つを砕いてそのまま隣の柱に突き刺さった。

重心の狂った柱はかしげて自分の重さで崩れた

真下にいたヘルは隔壁を呼び出して防御、はしたがノイズが混ざって本来の力の半分程度でしか衝撃に耐えられない

ふん：論証不能な事象などないが：骨が折れる、嫌な問題ばかりだ

彼女が今挑ませられているのは『バビロニアの空中庭園』が存在可能かという難問。遙か太古に存在したと言われる 空に浮いた巨大な建造物 だ

その論述に苦戦していた。

太古の技術を用いては存在不能。以上をもって証明を終了する。

長い長い存在不可の理由を説明終了した。数百行の答えは白紙化されて次の問題が矢継ぎばやに出題された。

攻撃さえなければ…回答に専念できるのだがな
ぼやいて、苦笑する。

気を失った娘しか頼りがない状況で何を言っているのか…馬鹿馬鹿しいにも程がある。

剣を手に戻ってきた偽物の神はへルに小さく笑いかける

「本当に邪魔です」

彼の剣に極彩色の光が宿る…。『ブレイク』の力を剣に乗せて殴られれば今の彼女に止める手だてはない

まさに八方塞がり。BUGはBUGに壊されて終わる運命らしかった。『ランサ・ドール』『ナイト・ドール』行きなさい」

光を宿した剣が違う方向に振るわれた。

壮絶な早さで六体もの人形を破壊して返す剣で二体を切断する

「どういうつもりです？リゼ」

彼はメイド服の少女に問いかける。苛立ちを含んだ口調にも臆せず
にリゼは人形を増援する

「…BUG・クロア・オーディスタ。Mr・クロアに何をしました？彼を解放しなさい」

『クロア・オーディスタ』がリゼの言葉に呆気にとられた隙にへルは距離をひらいて難題の終端を目指す。

「…僕は何も。少し人格が変わっているだけですよ」

「デタラメを。彼は口と態度とマナーと空気読みと態度と性格は悪いですがこんなことはしません！」

真顔でリゼが叫んだ。

「酷い言われようですね…」

苦笑いしつつ極彩色に輝く剣をゆっくりと背中に回す…。一刀両断の斬撃の構えにリゼは怯むことなく『ナイト・ドール』を呼び出す。九体のドールを呼び出して前面に3×3の壁とする。

「みんな、頑張ってるね」

こくん、と同時に答えられた。

全ての人形は頑張ると思いを表明した。

「…やれやれ『ブレイク』」

剣から三日月状に放たれた光が人形達が構えた盾にあたる。ジリジリと焼くように確実に防具を疲弊させる破壊の光に一体の人形が一步後退する…

ガシツ、とその下の人形が足を掴み、左右の人形が肩を掴む。仲間が負けないように、飛ばないようにしっかりと

「そう。頑張る」

磨耗していく盾に不安を抱いた人形は誰もいない。主人がなんとかしてくれるから壁として頑張れる。攻撃を防いでくれるから安心して使える、リゼの魔法

「『風は地を駆け、地は木を生み、木は火に焼かれ、火は風を生む。風地木火の四霊よ私に、我が身に宿れ！』」

リゼの能力は『媒体操作』。

人形に魂を宿し、妖精の抜け殻に命を宿し、自身に霊を宿す高等呪法。悪用すればゾンビの群れさえも生み出す能力を用いて彼女は自分自身を変質させる

「『四霊術師』。私に従え風地木火のお人形！」ボコン、と床から人形が頭だけ出している。床板一つを帽子のようにのせて手足を亜空間から抜き出して、立つ。

「大地の精霊人形『アウス』。ここに」

床板の下、ノイズの空間に直結していた場所から風が吹き込んでつむじ風になる。小型の竜巻のように渦巻いた中から薄黄色の髪の人形が現れる。

「清風の精霊人形『ツイス』。契約の元に」

二体の人形が手を合わせると、小さな木の実が生まれた。どんぐりのような木の実が落ちると、とてつもない速度で実が木へと成長する。

…高さ五十センチ程度のミニマムサイズだが、そこに三十センチほ

どの巨大な木の実が成り、割れる

「ツリー・ドール樹木の精霊人形『シイノ』。お呼びですか？」
木を炎が包む。

一瞬にして灰に変えた炎は舞い上がり、姿を変えてシイノの隣に静止する。

「バーン・ドール紅蓮の精霊人形『フレイ』。呼んだか？マスター」

四体の精霊人形：自然の化身はアウス、ツイス、シイノ、フレイの順に整列して今にも吹き飛ばされそうな九体の人形達に歩み寄る

「お疲れさま」

「もう終わりましたよ」

「次は…」

「アタシらの番だ」

人形が喋った。

「『ナイト・ドール』。『ランサ・ドール』スタンバイ！精霊人形は補強を！」

四色の魔法陣が広がり、美しい光で人形達を包み込んだ。

「『四重奏』Reinforce」

高らかに紡がれた四つの旋律。強化の魔法は以前のものとは比べ物にならないほどの力を盾に宿した。

バリン！と崩壊しかけた盾が割れて白銀の盾が握られる。『ナイト・ドール』達の最強の盾：名を『アイアス』

九つ並んだ無敗の盾に極彩色の光が押し返され、反射された反射され、帰ってきた光に『クロア』は一瞬呆然とする…。

（馬鹿な…そんな馬鹿な…。私の…僕の『ブレイク』を跳ね返すなんて！）

思っ、自分の状況を思い出す

剣に再び力を与え、全てのデータを解きほぐす光を満たす！

高らかに吼え、力の限り奮い立たせて剣を大きく振った！

「『ラウンドブレイク』！」

極彩の閃光が激突し、反射し、飛び散った。フレイが感心したよう

に手を叩いて笑い、ツイスがたしなめる

「『ランサ・ドール』。構えよ！」

リゼの猛攻は止まらない。

今度は小さな槍を持つ人形の部隊を巧みに操りながら騎士人形と精霊人形に指示を出す。

「化物ですか。あなたは」

総数十九体。それを操作するのはたった一人の人間……。化物と言われても仕方ない光景だった

「シイノ、ツイスはMs・ヘルの回復を。他は全て攻撃に参加させます。」

『ナイト・ドール』。全員に一人ずつ」

九体の人形は六体の槍兵人形、攻撃参加のフレイ、アウス、そして術者のリゼの前で無敵の盾を構える。華奢な体躯でとても小さな盾で、絶対の防御を誓う騎士のドール……。

お前達は……私は……

「しゃべらないで下さい」

「治療が私たちの任。少しご協力を」

精霊人形が神を黙らせ、腕に小さな渦巻きをつくる。エメラルドグリーンに似た光、痛みが消えていき……。血が止まる……。壊れかけた思考をまとめて最後の難題を破壊した！

……すまない。礼を言う

「動くなあ！」

ゲシツ、と小さな足と手が頬にめり込んだ。ズキズキと痛むそれに啞然としてヘルは ぱちぱちとまばたきする

「傷、開きますよ」

「フレイ、アウス……。私たちの分もやつちやいなYO」
陽気な人形に……。小さく吹き出す

馬鹿馬鹿しいな……。ククク……。ははは！

小さな人形は誇らしげに笑う

「人も、捨てたものじゃないでしょ」「」

ああ本当に…

「馬鹿げてる！馬鹿げてる！馬鹿げてる！なんだこの茶番！ありえないありえないありえない！ふざけるな！ああ馬鹿げてる！馬鹿げてる！馬鹿げてる！人間ごときが神に刃向かう？違う！馬鹿げてる！違う違う違う！俺は…僕は…神を超えた！それは間違いない『知識』なくともわかるのに…何故何故何故！ああ馬鹿げてる！馬鹿げてる！なんでだああ人間…ごとき…知識を乱す…不確定乱数…！くそつ！人間なんて…必要ない！人間ごとき…消えちまえ！」

『クロア』が…神が自身の感情を吐き出す。不様な叫び。自身の居場所さえ見失った哀れな人形…

「Mr.クロア。私はあなたを救済します。こんな馬鹿げた舞台から…神を引きずり下ろし、幕を引きます。あなたが…あなたであるうちに」

カシャンカシャンと槍が構えられた。

取り巻く槍と盾の布陣。火と地の精霊人形。操るのは『イギリス支部』最強のプレイヤー。手はまだ残されたまま。相手はもはや暴走中…余裕はある…余裕？いや、違うか

「マスター。やっていいのか？」

「フレイ、契約者への口の聞き方を付けなっ…何度言えば…」

「うるっさいな…。アタシはアタシ。あんたは地震でもおこしてな！」

「ムカツ。言うなあ〜！」

パンパン！手を叩き、火と地の喧嘩を止める。今はそんな場合じゃない。

「行きますよ。Lady…」

二人の精霊人形が自身の属性を武器化する。

余裕？いや、違う…

火は全てを灰に変える死の鎌に

これは…信頼

地は全てを倒す万能の剣に

繋がり…か。

ヘルは理解した。

知識を重ねただけではわからなかった、不可視の信頼に、管理者DとTとGが願った事が、人の管理などまったくの間違いだと理解する

導きが必要だったか…。我々に…

人形が頷いた気がした「はあはあ…馬鹿げてる…ああそつだよ…御母様のプログラムが…エラー吐いてる…くっそ…検索が…」404
Not Found』…見つからないってどういうことだあああ
あ！俺は…完璧なプログラム組んだんだよ！何なんだ！フザケン
な！おれハ、チシキのカミ、オーデインナンダヨオ！」
狂った叫びに静かに笑う。

「哀れね、本当に。見ているだけでも心が痛む…。まるで狂ったアナタなど私の敵にもなりはしない」

「そんな知識無えんだヨオ！このオレに知らないことはネエ！そんなこと、あるわけがないんだヨオ！」

もう…見なくてもヘルには理解できた。

壊れた…プログラムの末路が

どうしようもない結末が、わかったわかってしまった。息子が死ぬ光景が… した人の死ぬ光景が…

あれ？ ってなんだ？ …？人間がよく使う…妙な言葉。 検索する… 答えは見つかった

これが『恋』でしたかノイズが走る

「間に合え…私い！」床板が外れた場所から頭が生えた。金髪の少女が生えてきた。

「あれ？修羅場かしら…？」

エアリアルが気まずそうに口を開く。

急いで走って来たのだが…お邪魔とか…あれ…なんだろ？涙が…

「予測通り！アハハ！知識八間違ってナイ！オレは…真なる影！絶対…絶対に…あれ？ナンダツケ？」

見ていられない。叫びが聞こえた

『クロア・オーディスタ』を…殺してくれ！！！！！！！！

私が…私が償う！クロアを…助けて…

あらゆる武器が一斉に彼を貫いた

おい

暗い世界に声が響いた。

「おい、起きろよ。体返せ」

ゲシゲシと頭を蹴られている。

…お前、誰だっけ？

「俺だよ、俺」

…詐欺ですか。

「バカ違げえよ」

わかってるよ。わかってる…

思い出せないだけ…なんだ。

「…お前、何がしたかった？」

さあね

「ヘルを利用し、騙し、アレイアを傷付けてウイストレアをズタズタにしてエイドまで巻き込んで…お前、あいつら弟妹じゃないのかよ」

さあ…知らない

「…。知識、か。」

知らない

「そんなに魅力的か？」

さあね

「…」

ようやく黙ったか…

…

…

…

「俺、どこで間違えた？」

はあ？

「俺は…なんでこうなった！」

…最初から、だよ。

最初から。君が始めたその時から。

僕は君に入り込み、内人格として補佐してきた。フギン・ムニンもそう、武器の名もそう、キャラクターの名前でさえもそう！

全部僕の計画通り！そうさ、本当の黒幕は僕。そして…君さ「何だと？」

クロアは『クロア』に聞いた。

理解ができなかった

ああそうだよ…君こそが黒幕！

君が防犯カメラに映ったから御母様は僕を産み出した。だから…君
さえなければ…こうはならなかったのに…

「論点のすり替えだな。俺はお前を否定していない。存在を否定し
ていないのに生まれた理由にしないでくれよ…クッククク」

そう、クロアは存在の否定をしていない。むしろ反面とも言える彼
の存在が心地よくもあった。自分の知らない自分…まさにそんな感
じの彼に知識欲が首をもちあげたのだ

「少し、変われ。このままだと俺達は死ぬ。だから…変われ」

すう…と意識が入れ替わるのを感じた。滑るようになめらかに二人
のクロアが人格を交換するパキパキと槍が、剣が、鎌が突き刺さっ
たクロアが動いた。全身からのびたようにも見える武器の数々は見
るだけで痛みを幻想する

「…！」

「クロア？」

彼は答えずに短い言葉を呟いた

「『フギン』『ムニン』」

黒い羽が舞い、旋風のように渦巻いて槍に貫かれた体が消える。

「よう、ムニン。決着はやっぱり俺らだよな。クッククク」

「ふん…僕のシステムは崩壊しています。あと数分で消えるのだから放つて置いて下さいよ」

黒と白の剣が生み出された。

空間から吐き出された二対の剣は初めてお互いを敵と認識して震え
る。

雌雄を決める。喜びに

「ふん、神なんて大仰な事を言っときながらえらく俗物なもんなん

だな…ヘル」

腕の傷が癒えた女神は自嘲気味に笑った

確かにな。今ならば分かるさ。私が作ったのは神の化身などではなくただの道化だったのだと…な

「ああ。神の道化オーディスタ。一番真実に近かった訳だ。ハハハ、笑えねえ」

剣をくるりと回して左手で受け止める。腕を引いて、クツと息を止めた。

「行くぞ、内包存在、『クロア』！」

床を蹴り、走ったヘルの時の余裕はどこへやら、今の『クロア』は立つのだけがまともで他は既にボロボロだった。剣は遅いし払えば落としそうになる。

そして何より、目が死んでいた。

「…っ！…くるな！」

一撃一撃に必死になり、すぐに来る腕と足の追撃に追い付けない。

「まじめにやれよ、俺はこんなんつまんねえぜ？」

ヤレヤレと張り詰めていた高揚感が薄れていくのを感じる。もうダメだな、戦意のカケラすら残っていない

「終いだ。俺が…人間が神を地に墮おとす」

「勝手に…しなヨ。」

パキン、と『クロア』の体が割れた。どうやら、先程の崩壊が影響しているようだ。壊れかけたこいつになど…もう用はない。

走馬灯じみた記憶が流れて小さく笑う。なるほど、滑稽な事だ

「剣技『影閃斬』」

………半年後………

「さあ！今日も盛り上がってるな！第一試合、選手入場だああああ

！」

相変わらずのテンションで叫ぶ司会に、会場にいた観戦者が沸き立つ。興奮の叫びと何人かの指笛、半年でまた人数が増えた気がする。「懲りないな…まったく」

クロアは、黒いベストにメタリックなアクセをつけて眺めていた。さつき自販機で買ったオレンジジュースを一口飲み込む。

「いいじゃねえか。俺なんて理解する前に白蛇と仲良く退場だぜ？ カッコワリイ」

半年前の…ヘル的事件。あれは今では通称『ヴァルハラ』事件と呼ばれていて大量の体調不良者を続出した悲劇的な事件として片付けられた。

理由は特定エフェクトに含まれる赤と青の強烈な明滅によるものとワイドショーでも取り上げられていた。

まったく、世間と言うのは悪いことは叩きたがるくせに時間が経つとすぐに忘れる…。たった半年で風化しているこの事件、完全に忘れ去られるまで後何ヶ月だろうか…

カコン、と半分ほどになった缶を休憩スペースの机に置いた。

「まったく、呼んでおいておせえな」

エアリアルが来ない事に小さく不満を漏らす。

「アレだ、きつとお持ち帰られる為の準備を…」

「誰が？」

背筋が凍るような鋭く言葉が呟かれた

「うおっ！」

「ガルト…相変わらずな事で」

それにはクロアも苦笑いしかない

「…久しぶり、クロア。半年ぶりね」

「そうだな」

素っ気なく答えた。

実は時折ここに顔を出してはいたのだがエアリアルと時間が合わずに顔を会わせることはなかった。もっとも、試合にも出ていないの

で厳密にはほとんどの知り合いと出会っていない事になるのだが。

「あははっ！、懐かしいわぁ〜」

嬉しそうに笑い、彼女は口をつぐむ。

再会を喜びあう時間は…なさそうだった

「…行きましょ、Gが呼んでる」

クロアとガルトは立ち上がり、スタッフエリアの扉を開いた……中央管理室にたどり着いた。

中央に聳えた巨大なコンピューターが懐かしい、世界中の『ヴァルハラ』サーバーを管理する場所。

「…遅い。」

いきなり不機嫌なGにお叱りを受けた。

「気にすんなって、皺が増えるぜ？Gさんとやら」

ガルトが地雷を踏んだ。

「ひでぶっ!?!」

鮮やかなメモ板捌きが何故だか懐かしい。クロアは苦笑いしながら倒れかけた友人の肩を掴んで引き戻す

「ふえんひゅ（サンキュ）」

礼を聞いて、半分残っていたジュースを飲み干し、缶を押し付ける。捨てて来い、とさりげなく、それでいて苛烈なアプローチ

「チツ、覚えてろ!」

走れ走れ、このあたりには缶の捨て場はないぞ。っと、意地悪な心の声を黙らせてクロアはGに話しかけた

「俺らは何で呼ばれた?」

彼女は満足そうに頷く。どうやら聞いて欲しい話題らしかった。…ということとは悪い話ではないなと考える

「詳しくはまだ話せん。とりあえず楼騎と客人の所へ行こうかの」
楼騎きてたんだ、と言う声の後に

「客人?!えつと……キャク・ジンさん?」

スパーン!と二人分のツツコミがエアリアルを吹っ飛ばした

「客じゃ」

「考える」

スタスタスタスタ

かなり辛辣に言い放った二人は歩き去った。エアリアルはヨロヨロ立ち上がり、

「泣くぞこらあー!」

走り出した。クロアとGはメインコンピューターの前で何やら険悪なムードの楼騎に合流する。ピリピリと針で刺すような空気が痛い。
「クロアか。」

……

……

…

会話、終わりかよ

内心ツツコミを入れてクロアは簡単に挨拶を済ませて何の用で呼ばれたのか聞いてみる

「知らん。」

だ、そうだ

クロアは会話を諦めてGに聞いた。

「何で呼んだのか、そろそろ教えるよ」

「…よかるう。エア、主も聞け」

走ってきたエアリアルが息を切らせながら了解の返事をする。

「…まずは、再会を祝し挨拶を」

「いらねえ。話せ」

スパツと会話を切る。クロアの鋭利な口調に楼騎も若干の同意を示した

「…むう、仕方ないのう…では、まずは『ツバイン』部隊の解散を伝えなければならぬ

もう、BUGに対抗する必要が無くなったからの…寂しいものじゃ
誰も何も言わない。

Gは意外そうにエアリアルを見つめる

「?、悪い知らせに何を言えがいいのかしらねえ?G」

「…なるほどな。ならばガルトを待とう、そのために奴も呼ばせたのじゃからな」

ぷしゅう、と気の抜けた扉が開いてあまりにもタイミング良くガルトが帰ってきた。片道は短くとも往復は想像以上に長い。油断して走るとガルトのようになる。

「ゼー、ゼー…。畜生、クロアの野郎…いつか…覚えてろ…」

悪態と息を全力で吐きながら油断して前半で飛ばしすぎた自分を呪っていた。適当な部分で呼び止めてGが話を始めることを伝える「…主らに、いや、クロアにこれを渡す」

Gが差し出したのは、強化プラスチックのケースに厳重に保管された三枚のカード。

見るも鮮やかなイラストには見慣れた三人の姿…

「…これ、どうして」

戸惑いを含んだクロアの言葉に嬉しそうに、それはもう嬉しそうにGは答えた

「『ヘル』『アレイア』『ウイストレア』の召喚呪符。こいつらはもう敵ではない。むしろ、僕の孫みたいなものじゃ。Dと話してな…これが最良じゃと即判断した訳じゃ」

「いきなりだなオイ」

「主ならば受け取らぬ訳はないと踏んだんじゃが？ほれほれ」

ひらひらと三枚のカードが入ったケースを弄ばれる。ムツとして、奪う

「…もらつとく」

ニヤリ、とGが笑う。

「では、それについて『彼女』から全員に話がある。」

ああ…さっきからチラチラチラチラ目に入ってはいた人物が背面に位置した椅子から立ち上がり、歩いてくるのがわかった。

鮮やかな…紺色のショートカットに若草色の着物を緩めに着こなした18、9歳ほどの美女が前に立ち、一礼する

……………コイツ、誰だ？

「ふふふ、皆様『こちら』ではお初にお目にかかります。私は若草の中の人です」クロアとエアリアル、ガルトはポカンとして目の前の女性を見つめる…。

（え？若草？アレが？）

（あいつ男だったろ？どう見ても女じゃねえか）

（…そもそも、誰だ？）

ヒソヒソと会話する三人を見て楽しそうに笑う。

「みんなそう言います。まあネカマとか呼ばれる分野ですが割と皆さんやられてますよ？私はネナベですが」

ネカマ、ネナベ。ネット上で自分の性別と真逆のキャラクターを演じること。日本のゲーム界では実に半数の人がそのようなキャラクターを持つという（男女両方使いも含まれる）

「んなこた知ってるぞ」

余計な一言を加えたガルトに蹴りを入れる

「いつてえ！懐かしいなあい！」

もいちど蹴り、深いため息をついた。

「まあいい、続けてくれ」

「はい、くすくす」

そんなにこのやり取りが面白いのか彼女、若草は口元を覆いながら笑っていた。

いろいろと浮き世離れた人物だが案外普通に会話が通じる。もっとも、この日本で着崩した着物で生活するのが普通かと言われれば違うとしか言えないのだが

「この三枚はご承知の通りBUGを呼び出す呪符です。今は浅い眠りについた二人の少女とその母体。彼女達の眠りを覚ますカードです。」

故に、使い方を誤ればネットワーク全体に壊滅的な打撃を与える可能性があります。クロア、あなたに使いこなせる自信はありますか？」

意地悪く笑う若草に小さく鼻で笑う

「それを聞かせるためにわざわざこいつらを呼んだのか、ご苦労なこった」

嫌味を言っただけで反応を見る…。

…何も無い。まるで感情の変化がないように彼女は表情を変えなかった。

(本当にそれだけかよ…)

呆れて天を仰ぐ

天井しかないのだが、高い天井はなぜだかメインコンピューターの神殿のような部屋を思い出させた

…ちゃんと使えるか、だったな」

若草とGを交互に見て、

エアリアルが片目を閉じたのを見て、ほんの少しだが背中を押された気がした。

「はい、使用法を誤りませんか？」

クロアは答える。心の底からただただまっすぐに思いを伝える

「当たり前だ。あいつらは…俺に親切にしてくれた。恩を仇で返すのは俺のスタンスに反するからな。間違えようもないさ」

ガシツ、と若草とGに左右の腕を掴まれた。何だ？

「ならば使用法を説明する。来い来い」

「私が手取り足取りしますよー(切断的な意味で)」

「若草ああ！今、妙な心の声が聞こえたぞ！てめえ！放せっ！なんでこんな握力つええんだよ！」

ズルズルズル…。

管理者のログインルームに引きずり込まれて行った。

「待ってよお！私たち立ち合いだけ？！ふっざけんなー！」

「俺らにもやらせろよ！」

「…」。置いて行かれた三人は追いかける！

仏頂面の楼騎はさておいてガルトとエアリアルは楽しそう

平和な一時、半年前のあの長い夜が嘘のような展開。

エアリアルは端末に座らせられたクロアに追いつき、急いで隣の端

末に飛び込んだ。一步遅れてガルト、楼騎の順に着席。全ての端末が稼動して手足を軽く押さえつけた

「…では行くぞ。主に神の加護があらんことを！」…。
薄れた意識が戻ったとき、俺は全身がざわめくのを感じた。全ての細胞が反応するような感覚。あるべき場所に戻った感覚。俺は『クロア』の声を聞いた気がした。

(妹たちを、御母様をお願いします)
気にすんな。俺がなんとかしてやるよ

答えて、回りの景色が見慣れた大草原なのに気付いた。

「久遠に眠る三神よ、我が呼び掛けの元に夢を払って舞い戻れ！サモン！『ヘル』『アレイア』『ウイストレア』！」

三人の女が空間を歪めて飛び出してきた。半年前まで敵だったヘルまでがこうして手を貸してくれるとは…ひよっとすると因果というのも悪くないのかもしれない。

「くつろあー！」

待ち焦がれたぞ

「お姉様の為だからね！勘違いしないでよ！馬鹿クロア」
ウイストレア、テメエは帰れと言いたい。

「よっ…と。準備はいいか？エアリアルよ」

「バカにしないで。私も上級ランカーよ？地味ガルト」

青龍、フランメリーゼが解放された。

こちらも武器を解き放ち、構える

「行くぜ！」

俺はガルトと同時に叫び、剣をぶつけあった。

『ヴァルハラ』に来てから色んな出来事があった。

情報屋に会った。上級ランカーとも戦った。BUG達と戦った。ノピアとヨロワに出会った。ビック・ベンの模倣エリアで戦った。リゼに出会った。嶺たちに出会った。

そして何より…仲間の大切さを知った気がする。

こんなことは誰にも言わねえ。墓場まで持って行く。だが…少しだけ言いたい。言葉は言わなくては伝わらないんだから…な

みんな…ありがとう…ってな

全てが終わった。

ようやく…終わったー！、（、ー、）ノ

長かった〜軽く一年はかかったネ

「黙りやがれ！」

あいたつ！何だこの鳥は…焼き鳥にしてくれるわ

「やめるつての！黒燕様を忘れたのかっ！尾羽根むしるな！」

…ああ…

「つたくよ、この黒燕様をおまけキャラにして早半年…出番はまだかまだかと待ち続け…届く知らせは『最終章』！こんな馬鹿げた話があるかよオ！」

まあ…悪かった。出番あるだけいいじゃん。最初の情報屋なんて一回の登場でタイミングを逃したんだからさ

「…まあ、それなら…って言うと思ったか！」

痛い痛い！つつくな！えい！

「いてえー！黒燕様の羽根を…黒艶燕尾をよくも…！奥義『亜空飛翔す黒燕』」

「銃は人に勝ち、剣は銃に勝ち、紙は破れれども負けは永劫に無し。

『ペンは何よりも強き盾』」

「作者シールドだと?!」

ガッーン！お、突っ込んだ

「クラクラするぜ…あ、黒燕様のモノクロ写真が見える…男一（?）前だぜ」

遺影ですねわかります。

さて、と ではお知らせタイム

なんと！アヴィス・メモリアルの総合PVが61000を突破しました！

わーい、（、）ノ

そして…何やら変化があったようで、中央管理室がバタバタしてるらしいですよ？二人くらいが一体なんでしょうね？

それじゃ、全ての物語は終わり…

「エアキック」

ぐはっ

「俺らにも最終回なんだから一言言わせるよ」

「クロアの言う通り！って言うかなんで楼騎は機嫌が悪いの？」

「…聖蓮、風翼、切風、フィオーレ…流浪の月…なんで。こんな事が。」

「お姉様あ、ぶつぶつ言ってる人がいますよ？近づいちゃダメですからね」

「クロアー！会いたかった〜（ウイストレア無視）」

ま、ままたまた会ったな、クロア。

クッキーなるものを焼いてみたのだが食わぬか？初めて作ったのだが

「わー！おいしそう！おねえちゃん！」

「ダメ！それはイロイロ入ってるかもしれないわ！ヨロワにイタズラする気ね！この死んだ目の黒女っ！」

「ませガキは黙ってな、相棒の甘酸っぱい二次元の恋を生暖かい目で見つめてやりてえんだよ」

「Mr.ガルト。二次元とは非現実の事ではないのですか？」

「違うのよ、リーゼロッテ・ワイゼン」

「二次元つてのはぺったんこななのよ」

「Ms.瀬名、御簾…なるほど、あなたたちの胸のような…ハッ」

「okok、御簾、やっちゃうわよ」

「ええ。失言は辛いわね」

「応援サンキューな。あとがき短けえし」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9409f/>

アヴィス・メモリアル

2010年10月11日18時21分発行